

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

## Introduction to The Linguistic Atlas of Japan : Interpretation of the Maps Vol.3

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-03-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 国立国語研究所, The National Language Research Institute メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/00001553">https://doi.org/10.15084/00001553</a>

# 日本言語地図解説

— 各図の説明 3 —

国立国語研究所

1968

## まえがき

本集に収めた各分布地図は、各調査項目に関する地理的な言語差の展望をおもな目的としている。したがって、この説明でも、各分布地図を理解するための作図の基準、凡例の補足的説明、地図の注目点、その他の参考事項などを簡単に述べた。

各項目を調査した際に使った質問文(および絵)は、各分布地図の左下の欄に示してあるので、原則として説明文中では触れない。実際の調査に際して使った調査票には、各質問について、被調査者に示す質問文のほかに、注意すべき点を補注の形式で加えたものがあった。これは、第1集の別冊『日本言語地図解説—方法—』103ページ以下に、調査票全文として示してある。

説明の中で、語形を表わす場合、とくに音声の詳細を示す必要のあるもののほかは、凡例にかかげた大文字のローマ字表記を使った。また、それらの語形のいくつかを同類と認めて一括して示す場合は、カタカナで表記した。

資料の整理、地図の編集一般に関する概略的な解説は、第1集の別冊『日本言語地図解説—方法—』31ページ以下に示した。詳しい解説は、第6集をもって『日本言語地図』が完結する際に、まとめる予定である。

この第3集から、名詞に関する項目をとりあげることになった。第3集では、人・人体・遊戯などに関する項目をとりあげた。以下、第4集では、家屋・道具・穀物・野菜など、第5集では、動物・植物など、第6集では、自然現象・日時などの項目をとりあげる予定である。

なお、各分布地図をいっそう深く理解するためには、見出し語形の各地点での具体的な内容や、調査者・被調査者などが各語形に加えた注記等を記録した『日本言語地図資料』、ないしは原資料(ともに国立国語研究所に保存してある)を参照することが必要となろう。また、語の歴史を推定するに当たっては、各種文献とのつき合わせも必要となろうが、この点については、今回多く触れることができなかった。いくつかの項目についての徹底的な言語地理学的解釈は、機会を改めて公表したいものと思う。さらに、全分布地図を展望した上での総合的研究も、今後に期待される。

この解説を執筆したのは、地方言語研究室の野元菊雄・徳川宗賢・加藤正信・高田誠である。

1968年3月

# 「日本語地図」第3集編集・作図・資料整理の関係者

国立国語研究所第一研究部長

大石初太郎

国立国語研究所地方言語研究室

野元菊雄(室長) 徳川宗賢 加藤正信 高田 誠

W・A・グロータース(非常勤) 白沢宏枝(研究補助員) 芥川豊子(同)

山本文子(同)

このほか、研究所以外の方々にも協力していただいた。仕事の内容や量はそれぞれ違うが、以下  
列記して(五十音順)感謝の意を表する。

伊藤千鶴子	稲葉洋子	井上史雄	井村克子	加藤貞子
河口宣子	北原佐嘉恵	小林純江	小林増子	佐藤正子
佐藤亮一	篠原京子	芹田律子	野崎洋子	比嘉成子
平野よう子	本堂 寛	安田悦子		

# 目 次

はじめに	1
101. あたま(頭)	2
102. つむじ(旋毛)	3
103. はげあたま(禿げ頭)	8
104. はげる(禿げる)	9
105. ふけ(雲脂)	10
106. かお(顔)	11
107. ほほ(頬)	13
108. あご(顎)——とがった部分	16
109. あご(顎)——全体	16
110. め(目)	18
111. まゆげ(眉毛)	19
112. ものもらい(麦粒腫)	23
113. はな(鼻)	29
114. みみ(耳)	30
115. くち(口)	30
116. くちびる(唇)	31
117. した(舌)	33
118. つば(唾)	34
119. よだれ(涎)	36
120. ベロの意味	36
121. おやゆび(親指)	37
122. ひとさしゆび(人差し指)	39
123. なかゆび(中指)	40
124. くすりゆび(薬指)	42
125. こゆび(小指)	44
126. ゆび(指)の総合図	45
127. しもやけ(凍傷)	47
128. くるぶし(踝)	49
129. かかと(踵)	53
130. みずおち(鳩尾)	56
131. あか(垢)	57

132. あざ(痣) .....	58
133. ほくろ(黒子)——小さいもの .....	60
134. ほくろ(黒子)——大きいもの .....	60
135. 「あざ」と「ほくろ」との総合図 .....	62
136. おとこ(男) .....	66
137. おんな(女) .....	68
138. おんな(女)——卑称 .....	68
139. ひまご(曾孫) .....	72
140. やしゃご(玄孫) .....	74
141. おじいさん(祖父) .....	78
142. ひいおじいさん(曾祖父) .....	80
143. たこ(凧) .....	83
144. たけりま(竹馬) .....	87
145. おてだま(お手玉) .....	90
146. おてだまあそび(お手玉遊び) .....	91
147. おにごっこ(鬼ごっこ) .....	93
148. かくれんぼ(隠れん坊) .....	98
149. かたぐるま(肩車)——一般的な名称 .....	103
150. かたぐるま(肩車)——特殊な名称 .....	103

## はじめに

▶この『日本語地図』第3集を見るにあたっては、まず本地図集巻頭の〈概説〉や、本『解説』の〈まえがき〉が参考になる。調査の方法などについて、さらに詳しく知りたい場合は、第1集付載の別冊『日本語地図解説—方法—』を見なければならない。

▶各図凡例の見出しに、〈概説〉に示したものを以外で、次のような表記を使う場合がある。

変母音は、İ, Ö のように示すことがある。

例：110 図 MĪ[mī]

125 図 KÖÖBI[kø:bi, kē:bi]

LĪ. 沖縄の宮古島に見られる音。

例：112 図 MIINALĪ[mi:na<sup>zi</sup>, mi:naʝ, etc.]

129 図 ADUPALĪ[ʔadupaf]

143 図 KABĪTULĪ[kabītulī, kabītuʝ,  
etc.]

鼻母音は、Ē, Ī のように示すことがある。

例：111 図 MAMIĒ[mamiē]

111 図 MAMĪĪ[mamī:, mamī]

語頭や形態素の頭に、子音の連続が現われることがある。

例：105 図 SSAGA[ssaga]

131 図 HHUSII[ΦΦusi:]

141 図 NMEE[ʔmme:], NNMEE [ʔm-  
mme:]

142 図 UHU'NMEE[ʔuΦuʔmme:]

語尾や形態素の末尾がN以外の子音で終わることがある。

例：125 図 KOYUP[ʔkojup]

108 図 AT[at]

130 図 MIT'OTOSI[miʔotoʃi]

105 図 IKK[ik'k]

121 図 OYAYUB[ojajub, ojajub, etc.]

136 図 BIKIDUM[bikidum]

106 図 CUR[tsur]

▶この『日本語地図』第3集には、120 図、126 図、135 図のように、別にこの集に収められている数枚の言語地図の内容(の一部)を、総合的にまとめて一覧できる

ようにした〈総合図〉が含まれている。また、138 図や150 図のように、137 図や149 図に盛りこめなかった見出しを、別図として分出した地図が含まれている。

▶『日本語地図』第3集以下、最終第6集までは、もっぱら名詞に関する項目の地図をとりあげるようになった。しかし、本集104 図(禿げる)だけは、動詞に関する項目である。これは第2集編集の時には割愛したものであったが、今回、103 図(禿げ頭)に関連して特にとりあげることとしたものである。この地図に関しては第2集別冊『日本語地図解説—各図の説明2—』の〈はじめに〉のうち表記の部分、〈動詞項目全体について〉の第2項、第4項をも参照する必要がある。

▶ある調査地点から2個(以上)の回答が得られた場合は、地図に2個(以上)の符号を並べて、∧印でくくって示した。このことは〈概説〉で示したとおりである。ただし、その2個以上の回答のうち一つが標準語形と一致し、しかもその語形に〈新しい言い方である・上品な表現・共通語的な言い方・まれにしか使わない〉などの注記がある場合は、その語形を地図から削った。この手続きを本解説の中で〈併用処理〉と言うことがある。これは、〈標準語形も上品な表現としてなら使う〉といった回答は、この種の報告のなかった地点でも、実はありうる、しかも全国的にありうると考えたためである。そのような回答が現実どこで得られたかは、国立国語研究所に保存されている『日本語地図資料』に記録してある。

▶凡例に「その他」と示したものは、その地点での回答が個別的で、地理的な意味を持たないと考えたものである。その内容は『日本語地図資料』に記録してある。なお、ある調査地点から2個の回答が得られ、一方が「その他」に繰り入れられるべき回答であった場合は、地図には1個の符号しか示さず、「その他」を示す符号は省略した。つまり、2個(以上)の符号を∧印でくくって示す場合、その中に「その他」を示す符号が含まれることはない。この場合の地図に示さなかった回答も、もちろん『日本語地図資料』には記録してある。

▶解説の中で具体的な地点番号を示す場合、以下に示す

左欄があった場合は右欄のように読み替えていただきたい。できるだけ正したつもりであるが、カード上の

誤	正
5558.08	5558.09
6389.32	6389.22
6389.66	6389.56
6434.62	6434.52
6539.50	6539.60

誤記がそのまま残っている場合があります。

誤	正
6613.87	6613.97
7303.28	7303.38
1148.57	1148.59
2068.28	2068.08
2095.62	2095.60

## 101. あたま(頭)

ATAMAは、標準語形であることもあって、九州南部・琉球列島を除いて、全国に分布している。-T-の有声化した形であるADAMAをこの図では示しておいた。茨城・栃木・福島・新潟・長野より北の地域に広く分布している。

このATAMAに卑語形を表わす接頭辞のDO-がついた形であるDOATAMAが兵庫にあり、起源的にはDOATAMAから出たと思われるDOTAMAが近畿地方と四国とに、ほとんど併用で分布している。ほとんど卑語として使われるものであるが、詳しくは、方言言語研究室に保存されている『日本言語地図資料』を参照。

注目すべき語形は、南九州に強い分布を示しているBINTAである。107図「頬」によれば、頬をあらわすBINTAはこの南九州の外縁にあまり強力ではないが分布している。つまり、熊本・福岡・長崎・奄美などである。どちらがこの語の原義であったかは、なかなか判定がむずかしい。この語は漢語「鬢」と関係があると思われる。-TAはよくわからないが、身体をあらわす語にはよく出てくる。今BINTAという語は、この107図の範囲を越えて、頬を平手で打つというときに、ビンタオトルなどの形で、おそらく一部は軍隊を通して広く全国に行なわれている。しかし、全部が軍隊による伝播とも考えられない。『全国方言辞典』によれば、鬢の意味で愛知、もみあげの意味で八重山、子どもののばしたもみあげの意味で山口、頬の意味で山梨・長崎・唐津・壱岐・熊本にある。このように、頬の意味の方が広く見られるので、BINTAはもと頬の意味であったが、南九州で「頭」の意味を持つようになって拡がったのであろう。なお、『全

国方言辞典』によれば、ビンタが頭の意味で愛知春日井郡にあるというが、この調査ではあらわれなかった。

このBINTAのほか、琉球列島を除けば、強力な分布を示す語形はない。しかし、あるまとまりを持つものを少しずつ見ていくことにしよう。

KUBIは、主として新潟に見出される。文化の中心地から伝播したものと見えないが、「首級」の意味のクビと考え方が通じている。

コオベ類は、近畿地方から東北の方へわずかではあるが分布しているので、中央からの伝播とも思われるが、全国に点々とあるカシラ類とともに、書きことば系の単語がしみ出したものとも考えられる。ノオ類もこれに準ずるものであろう。

五島のKAPPOはあるいは、オランダ語のkop[kɔp]「頭」と関係があろうか。『全国方言辞典』によれば、なお、平戸でカップウ、壱岐でカップオ、小値賀島でカップ、飛んで北秋田郡でカッペ、津軽でガッペという語形が見えている。コオベに通ずるものも含まれていようが、興味深い。なお、『全国方言辞典』には、「顎」を五島の三井楽でカップというという。

ドクロ類は四国の東北部にある。これは普通は頭蓋骨を意味する語である。この設問のとおり、ドクロが痛い、ドクロがいい、などというのであろうか。ちょっと不思議である。

ツムリ類は近畿地方を中心に、多くは併用で分布する。文献によれば、室町時代に使われはじめた表現のようである。

東京では「オツムがいい」という形がよく使われ、ATAMAに対する上品なことばや幼児語として内容・外形にかかわらず使すが、この調査では現われなかった。CUMURIは、関東およびその周辺・高知などにある。



近畿ではすべて、ていねいの接頭辞のO-がついている。沖繩本島を中心としたツブリ類もこれと関係があろうが、これは八丈島・山梨の奈良田にもあり、ツムリよりは古い語形と認められる。『沖繩語辞典』によれば、*çiburu* にはなお「ひょうたん」の意味がある。おそらく、頭の方が原義であろう。なお、『全国方言辞典』によれば、茨城に「頭髪」の意味のツブルがある。

北九州に CUMUZI があるが、これは普通は、102 図の頭の「旋毛」のことである。102 図の方ではこの近くに CUMUZI が 1 地点ある。なお、旋毛のツムジとこの頭を意味するツムリ類、ツブリ類との間には意味や語形の上で関連があると思われるので、なお 102 図を参照せよ。

緑で示したスコ類は、近畿の南や名古屋付近、富山などにあり、ある時代の中央での言い方の反映かと思われる。九州におけるこの類は、あるいはこれとは関係がないかも知れない。前田勇氏によれば、このスコはスコオベの略であって、文政の始めに用例があるという。SUKOTA や SUKOTAN の -TA, -TAN は身体名によくつくものであり(さきに BINTA のところでも述べた)、スコオベが SUKO と略されてから以後ついたということになる。

ZUKUNYUU は『大日本国語辞典』によれば、みみずくのように太ったにくにくしい僧体の男という意味がある。『俚言集覧』には、この語を土佐、加賀で頭の意味に使うと出ているが、この日本言語地図のための調査では、高知、石川あたりを見ても、この語形は見あたらなかった。

熊本を中心としてのゴオラ類、宮崎・山形のガンコ類はよくはわからないが、ガンコは、ガンクビのガンと関係があろうか。

奄美のカマチ類は、『今物語』に上下の顎の骨の意味で「輔」として出ている。これと関係があろう。山口の菘、対馬では、『全国方言辞典』によれば「顔」のことをカバチという。また「頭」の意味で和歌山南部・隠岐・対馬でカバチというところがあるが、これらはこの調査ではあらわれなかった。ただし、和歌山南部の SUKAPPACI は関係があろう。なお 106 図「顔」、107 図「頬」を参照。これと同色としたが、宮古諸島のカナマリ類は『竹取物語』の「<sup>かなまり</sup>鏡」(金属で作った碗)に関係があろうか。これは『靈異記』にも出ている。もし関係があれば、その形状からきたのであろう。

ナズキ類は痛いときよく使すが、また「額」を示すことが東北で多いようである。しかし残念ながら、「額」は今回の調査では取り上げなかった。

KAMI は「上」であろう。もしこの KAMI が「髪」であるとすれば、UKKAN, KARAZI, HURAZI などその意味をも持つ。なおカミで「頭」を意味する例は、『全国方言辞典』には石川・大分をあげている。

## 102. つむじ(旋毛)

「つむじ」を表わす方言形には、二つの要素から成るものが多いので、地図の符号も、それらの要素に注目して色と形とを与えてある。

まず、符号を与えた原則を述べる。色は、ツムジの類に草、ツジの類にぬりつぶしの緑、チリ・ツリの類には中ぬきの緑、マキ・マキマキ・マキメ等の類には赤、マイ・マイマイの類には橙、ギリ・ギリギリ等の類には空、サラの類には茶などをそれぞれ与えた。さらに、これらの類が二つ組み合わさった場合、後部分に注目して色を与え、前部分は、それが単独で現われる場合と、符号の形を一致させてその関係を示した。たとえば、CUZIMAKI は MAKI に注目して赤を与え、CUZI に注目して緑の CUZI と同形の符号を与えた。この原則は全体を通じておおむね守られている。ただし、この原則をつらぬくと CUZIMAKI は赤に、MAKICUZI は緑に含められ、符号の形も全く違ったものになってしまう。全体を一つの原則で通そうとしたためであるが、図を見るときには、注意して見てほしい。なお、アタマノツジのような限定の付いたものは、特に見出しを立てずツジの中にも含めることを原則とした。

草で示したツムジの類のうち、CUMUZI は、長野・山梨・静岡・神奈川・千葉に多く、関東中央部にも分布する。そのほか、小地域だが山形南部・岩手の三陸地方などにも分布する。CUMOZI は、CUMUZI の分布領域の外縁地域に多く見られ、おもに、長野・静岡・伊豆諸島・関東各地・福島に多く分布する。ツムジの類の分布の形で気をつくことは、長野・山梨の一連の分布と、関東の分布とが、あいだにある関東西部山地のマキメによってほぼ分断されていることである。CUMOZI-NOMAKIMAKI は、ツムジと併用されて静岡の西部にある。1 地点であるが、近くにマキマキが分布するの

で興味ある現象と言えよう。

凡例で, CUZI から MAICUZI までの緑で示したツジの類は, 分布領域全体としては必ずしも連続してはいないが, それぞれの小分布地域ではある程度まとまっている。CUZI は, 東海・近畿・四国におもに分布し, 新潟, 大分・宮崎, 福岡, 対馬, 屋久島に点在する。

このうち, 7500.66 ではアタマノツジ, 7323.17 ではアタマノトンツジであったが, 前に述べた原則によって CUZI に含めた。CIZI は青森, 山形, 京都北端, 奄美, 沖縄に点々とある。東北地方のものは, CUZI に含めることもできようが, 西日本にも分布するので, 別に見出しを立てた。凡例で MACUZI から MACINZI までは, 奄美・沖縄に現われる語形である。CUZI ないし CIZI という要素と MA という要素とから成る類と考えた。この考えとは別に, MACIZI を, MACI と ZI とに分割して考え, MACI をマキの類と考えることもできるが, 近くに CIZI が分布することから, 一応ツジの類と考えて緑にした。MAKICUZI, MAICUZI は, MAKI, MAI と符号の形を合わせた。MAKICUZI は北海道に1地点, MAICUZI は四国に多く分布する。

凡例で CUZIMAKI から ZIZYUMAKI までのツジマキの類は, マキの類との関連から赤を与えた。CUZI, CIZI などの前部分は, 緑のツジの類のそれらとそれぞれ符号の形を合わせた。CUZIMAKI は愛媛西部に分布し, 新潟北部にも1地点見られる。CUNZIMAKI は, 新潟北部粟島に1地点ある。この CUNZI は CUMUZI の変種と考えることもできよう。CYUZYUMAKI, ZYUZYUMAKI, CIZUMAKI, CIZYUMAKI, ZIZYUMAKI は, みな宮崎に分布する。CIZIMAKI は秋田南端, 愛媛, 彦岐, 宮崎にあるが, 緑で示した CIZI と語形の上では共通している。しかし, 分布は CUZI の近くにはあるが, CIZI とはあまり関連がない。CINZIMAKI は, 新潟北部に1地点ある。この CINZI も CUMUZI の変種と考えることができるかも知れない。

凡例の CURI から ZINZIRI までの緑の中ぬき符号で示したチリ, ツリの類は, 能登を中心に分布する。これらの地域以外にも CURU は淡路, CIRI は新潟にも1地点ずつ見られる。京都と大阪にある ZIRIZIRI も CIRI との類似から緑で示した。愛媛の ZIIZII, ZIZI

も, ZIRIZIRI との関係を考えてここに含めた。ZINZIRI は ZIRI に注目して緑にしたが, 後にふれるところがある。佐渡の ZINGIRI, 長野北部, 新潟西部の ZIN 等との関連も考えるべきである。ZIRIZIRI 以下は, また, 空のギリギリ, ギンギリ等との関連を同時に考えるべきであろう。

CIRIMAKI は, 彦岐にある。語形の上で関連のある能登の CIRI とは分布がはなれている。むしろ, 同島の CIZIMAKI との関連を見るべきものであろうか。凡例の CUZURIMAKI から ZIZIRUMAKI までは, みな, 新潟北部から秋田南部にかけての海岸沿いに分布する。後部分の MAKI に注目して赤を与えた。前部分は, ツジないしはチリの類(さらにはギリギリ・ギンギリ類)との関連が考えられよう。

赤の線符号で示した MAKI から MAKIMAKI-MAI までのマキ・マキマキの類は, 分布領域が広いわりには, 分布の密度はあまり高くない。MAKI は, 北海道・青森から 岐阜・滋賀にかけて点々と分布する。MAKI の見出しの中には, 東北地方に見られる K の有声化したものが含まれている。凡例に示した MAGI は入重山に見られるもので MAKI に対応するものかどうか確かでないで, 別に見出しを立てた。沖縄島を中心として見られる MACI・MACII 等の CI の部分はキに対応するものと見て, ここに配列した。実は, 分布の上からは, さきにのべた MACUZI, MACIZI などとも比較すべきものであり, その場合はツまたはチに対応するものと見ることになる。MAKIMAKI は, 岐阜・長野南部・静岡西部・愛知にまたがる地域に分布し, 愛媛, 福岡, 熊本にも1地点ずつある。

橙の線符号を与えたもののうち, MAI は四国中央部に分布する。MAIMAI は岐阜・愛知から滋賀, 四国, 中国南西部, 九州北部に至る地域に分布する。マイマイは, 赤のマキ類と岐阜, 九州北部で分布が接し, 近畿・中国ではあまり接していない。また, 語形の上では緑のない緑で示した CUZI と, 分布領域がほぼ類似している。なお, 6490.30 ではアタマノマイマイであった。

MAKIMAI は, 山形・宮城・岩手・青森・北海道に分布する。これは, 後にふれる MAKIME と深いつながりがあると考えられるので, 語末の -AI の部分の内わけを示しておく。[ai, av, aɛ, aẽ, ae, aê, æ:, ε:, e:, ε:, eæ]などの長母音, 二重母音の場合は AI と示した。

マキメの類は関東周辺部から北の地域に広く分布する。語末の E には、広い母音 [e, æ] 等も短母音である限り含まれている。

キョオマキの類(KYOOMAKI から KYOOMAGE まで)は、九州西部に集中的に分布し、甕島、宮崎・熊本県境にも二三見られる。これらのうち後部分マキの語末音節の母音の脱落したものが数地点にあったが、マキの見出しの中を含めた。

凡例で MAKIBOSI から MAICUBURI までは、MAKI, MAI が前部分になっているが、この場合は例外として赤で示した。いずれも東北地方に分布する。

NINANOMAI は山口南東部に、DENDENMAI は香川西端にそれぞれ見られる。

空を与えたものは、ギリ・ギリギリ、キジ・ギジギジの類、ないしはそれらを後部分に持つものである。GIRIMAKI から CUGURUMAI までと GIZIMAKI・KIZIMAKI とは、後部分に注目したため符号は赤または橙にしてあるが、前部分にギリという要素を含んでいることからここにならべてギリ類の中に入れて考えることにする。これらの類は、西日本に広い分布領域を占め、東海、北陸さらに新潟、青森、北海道にも分布する。凡例の GIRI から CUGURUMAI までは、GIRI ないし、それに似た形の要素に注目し大部分に円形の符号を与えた。GIRI と GIRIGIRI とは、この類のうちで最も広く分布し、両者はそれぞれの分布領域を維持しつつ、各地で接して分布する。GIRIGIT は、GIRIGIRI の語末音節の脱落によって生じたものとして、GIRIGIRI の中に含めてしまうこともできようが、GIRIGISU・GIRIGISI との関係も考えられるので一応見出しとして別に立てた。凡例で GHIGII から GIGIMO までは、鹿児島・宮崎・五島・山陰に見られるものであるが、GIRI の R が脱落してきてきた可能性を考えて、ここに並べた。GIRIZA は新潟西部(5611.74)にあるもので、アタマノギリザと報告されたものである。GIRIMAKI は新潟北部に見られる。MAKIGIRI は青森、北海道に多く、岩手、秋田にも見られる。MAKIGURI は、青森、北海道、岩手、栃木に、MAKIGARI は秋田北部にそれぞれ分布する。MAIGIRI, MAYUGIRI は島原、天草にそれぞれ見られる。先にふれた GIRIMAKI も同様なことが言えるが空のギリ・ギリギリなどの分布が北海道は別として主として西日本、東日本には佐渡あたりにまでしか及んでいない

のに、マキギリ(マキグリなども)がこれとかなりかけはなれて、それより北に分布することが注目される。ZIN-GIRI は佐渡に 2 地点見られる。対岸新潟のジンと関連があろう。凡例で、GINGIRI から KIRIBOSI まではみなギリ・ギリギリの分布領域内にある。凡例で GIZI から KIZIMAKI までは、いずれも北海道、新潟、北陸、近畿、東海、九州に点々と分布し、富山にとくに多い。

ウズの類のうち USU は近畿、四国にややまとまって分布する。UZUMAKI は UZU とは必ずしも分布領域が一致せず、岐阜・愛知・三重、関東周辺にやや多い。4619.63 (山形)ではアタマノウズマキであった。後部分に注目して空を与えた IZIGURI, IZIGURUGURU は愛知に見られる。ウズにしろウズマキにしろ「渦」の意味と考えられ、それぞれの地域で「つむじ」の意味領域へ拡がったのではないかとも考えられる。東海地方を中心に分布の見られるイジはウズの類かどうかはっきりとは分からない。似た形の符号を与えはしたがこの地方では u~i という音韻交替はないと思われるので、この地方で最近ウズから変化したものとは言えない。京都、北陸あたりに離れて見られるので、あるいは、ある時代に伝播したのかも知れない。しかし、それほど古い時代でもなかっただろうし、それほど強い伝播の力も持っていなかったと考えられる。なお、『全国方言辞典』によれば「蜘蛛の巣」のことを(くもの)エズという地方が、仙台(浜荻)、石巻、福島、栃木などにあるという。この凶のエズ(岩手)と分布は多少異なるが、「蜘蛛の巣」(調査項目番号 004, 地図未刊)との関係も考えるべきであろう。

サラの類には茶を与えた。SARA は、鹿児島に最も多く、熊本、宮崎、大分にも見られ、離れて富山にも分布する。橙で示した SARAMAI も SARA の近くに分布する。

見出しの ZIN から、ZINMAKI までは新潟西部、長野北部に分布する。これらのうち、5624.85 ではアタマノジン、5613.53 ではアタマノジンコであった。ZIN-KOO の語末長音は、5603.88 の [o:] 以外の 3 地点はみな [o:] と広い母音であった。これらジンの類と関連させるべきものに、ZINZIRI (大阪)、ZINGIRI (佐渡) などがある。大阪のものがこのジンと直接つながりがあるかどうかは別として、佐渡のものはジンの領域と接していることから、佐渡においてジンとギリとの混交が起り、ジンギリが生じたということが考えられよう。

PISU, PISYU 等は先島に見られるものである。へ

ソにあたる形かと考えられる。

その他としたものはさまざまであった。しかし、新潟中部に、スズ(4695.21)、スズズ(4685.88)、マエスズ(4695.87)があった程度で、とりたてて言うほどのものはなかった。

以上が各見出しおよびその分布の説明である。次に、「つむじ」にあたる語の変化の歴史を探ってみよう。合わせて考えるべきことさらに、「かたつむり」、「つむじかぜ」さらに、「十字路・頂上」(ツジ等)、「擬態語のギリ、キリ等」の分布などがある。「かたつむり」、「つむじかぜ」については『日本語語地図』でもいづれ第5集、第6集においてその全国分布が示される予定である。これらの図と「つむじ」の図との詳しい比較対照は、そのとき改めてなされよう。

分布を見てもまずめだつのは空のギリ類であろう。近畿から北陸、中国・九州へと延びているもっとも新しい拡がりと言えよう。ギリという部分については、他の類の語との間に語形の類似がほとんど見られない。このことから、ギリという語形の発生に際しては、他の類との歴史的なつながりがほとんどなかったと言いうことができよう。キリキリ、グルグル等の「回転」の意味を含んだ擬態語などとの関係をまず考えるべきなのであろう。

草で示した中部・関東のツムジは、赤のマキ類(マキマキ・マキメ等)を中部地方西部、関東周辺等に分断して分布するところから、マキの類が各地で独自に発生したのでないとするれば、赤の類よりは後に拡がったものということになろう。しかし、『和名抄』では「旋毛」に「都無之」の訓がある。ツムジの拡がったのはそれほど新しい時代ではないようである。山形南部のものは残存ではなく、旧藩時代に飛火したものではあるまいか。三陸海岸のものも残存ではなからう。神奈川でかろうじてつながっている関東と中部地方との2領域のうち、どちらの分布が古いものであるかの判断はむずかしい。関東のツムジが分断するマキ類はともにマキメであり、中部のものはマキメとマキマキである。少し質の異なるマキメとマキマキとの間に位置する中部のツムジに比べて、全く同じマキメを分断する関東のツムジは、より新しい拡がりであると考えることができようか。

ツジの類は語形の上からはツムジにもっとも近い。しかし、分布を見ると、ツムジは中部・関東に集中し、ツジは西日本(ツムジ以西)に見られる。文献に現われるツジは、節用集あたりが始まりらしく、それほど(ツムジ

ほど)古くはない。かつて中央にあったツムジが東日本に伝播して中部地方に領域を占める間に、近畿ではツムジ>ツジという変化が生じ、それが周囲に拡がっていったという歴史が推定される。その際「辻」、「先、頂上等」を意味するツジの存在も考慮に入れるべきであろう。『和名抄』(大言海)では「十字」に「都無之」という訓がある。ツジの方は「つむじ」の意味ではかなり後に現われるようであるが、「辻」の意味ではツムジとほぼ同時代に現われる。『全国方言辞典』によれば、「つじ」は「先、先端」の意味で島根、対馬に、「頂上、山頂」の意味で和歌山・香川・兵庫・岡山・石見・山口・大分・福岡・長崎・老岐等にそれぞれあると言う。この図のツジの分布と重なるのは和歌山と対馬くらいであるが現在の分布において関係がうすいからといって、それが歴史的に無関係だという証拠にはならない。とくに、中国、九州は新しい勢力のギリに席卷されたものと考えられるから、この地域にも「つむじ」の意味のツジがあったと考えることは無理ではない。しかし、「辻」の意味で先にツジがあって、その上へ「つむじ」の意味でツムジが一度拡がり、それが旧来のツジに影響されて、各地で(上にあげた「辻」の意味のツジがあると言われる地域で)ツムジ>ツジの変化が生じたのか、近畿あたりのどこか一か所ですのような変化ないしは旋毛も辻もともにツムジ>ツジにかわるといった変化が生じてそのツジが各地へ拡がったのかという点に関しては、どちらとも決めがたい。

分布を見ると、近畿一帯・香川あるいは対馬等で、ツジに直接接しているのはギリ類であると言えよう。このことから、ツジとギリとは歴史的に近接していて、ツジを追って拡がったのはギリと考えられる(奄美にマツジ、マチジなどツジの類の語が見られることは、ツジがギリより古いとすることを支持しよう)。もし元来「辻」の意味のツジのあったところへ、あとから「つむじ」の意味でのツジが発展してきたとするならば、そこで同音衝突が生ずることになる。現在のギリの発展の裏には、このような衝突を回避しようとする働きがあったのかもしれない。

能登のチリはツジと同色で示した。ツジの第2音節子音[s]が[r]と交替した結果であると考えたからである。そう考えるとちょうど、隣の富山にギリギリ〜ギジギジという[r]〜[s]の交替が見られるのと逆の現象があるということになる。

凡例で CUZURIMAKI 以下 ZIZIRUMAKI までは、東北地方の日本海側に見られる。これらのツズリ、

チジリの部分の形成については、例えば「ちぢれ毛」、「つづら折り」等の語に含まれるチジレ、ツズラ等の音（あるいは語）が一種の類音牽引のように働いたものと考えられる。

マキ類については、動詞マク(巻く)の存在を考慮する必要がある。マクは日本語の基本的な単語であろうからマキ・マキマキ等が各地で独自に発生する基盤がある。特に、中部のマキマキを東北地方のマキメと同列に考えて、ツムジよりもさらに古いとすることにはなお疑問が残る。さらに、愛媛西部、九州東部のツジマキ、ジュジュマキ等の生成についても同じことが考えられる。赤のツジマキ等の方が外側にあることから、もとマキがあってそこへツジが侵入してきてツジマキなどが生じたと考えるのがふつうであろうが、一方、それぞれの地域でマキという要素が独自にツジなどに結びつけてツジマキなどを生んだのであって、他の地域のマキとの間には特に関連もないという可能性も考えられる。また、沖縄のマチ等も分布からは奄美のマチジ等よりは新しそうに見える。以上のような点を考慮に入れた上でもなお、関東周辺から東北地方にかけて分布するマキメはツムジが侵入する以前から東日本に分布していた古いものと言うことができよう。関東北部・東部のマキメについては、本集111図「まゆげ」の分布とも比較されたい。111図のこの地域にはマギメが分布している。茨城南端ではこの図のマキメと111図のマギメとはほぼ相補的分布を示し、栃木北部などではマキメとマギメとが重なって分布しているところがある。この図のマキメの第2音節子音はほとんど[g]でありマギメの場合は[n]がほとんどであった。この二つの音はたしかに区別されるべきものである。しかし[g]と[n]とが近接していることはいなめない。言いかえれば、[g]と[n]という対立の持つ機能負担量(functional load)はかなり低いと考えられる。すなわち、この地図においてツムジが拡がる以前にはマキメがあったと考えられるから、その時代に111図にあるマギメが分布していたとしたらこの地域で同音衝突に似た現象があったと考えられる。それを回避するためにもツムジを急速にとりいれねばならない事情があったと考えてみるわけである。なお、栃木北部などでマキメ・マギメの2形が両存している現象は、そういう一種の治療がまだなされていないことを示しているのであろう。

宮城を中心に分布するマキマイは、周囲のマキメと深いつながりがある。マキマイの分布地域の近く、とく

に岩手南部にマキメのメの母音が、広い[e]となるところがあった。これは、いわばマキメとマキマイとの中間に位置するものであろう。これらの地域で[e]と[ε]とがたやすく混乱するかどうかは別として、マキメ[e]の一部がマキメ[ε]となり、それが一種の「誤った回帰」をして、マキメエ[e:]やマキマイと変化した可能性が考えられよう。その背後でマイあるいはマイマイ等が影響を及ぼしたかどうかは分布からは分からない。しかし、別の意味分野に、メエあるいはマイという語形があって牽引したという可能性も否定できない。さらに詳しい考察が必要であろう。

キョオマキの類は西北九州ばかりでなく、ギリ領域を越えた宮崎・熊本県境地帯にも数地点見られることから、ギリによって押込められた残存とすることができよう。しかし、キョウの部分は何を意味するかはよくわからない。

マキマキは長野南部・岐阜を中心に分布しこのマキマキの南北両側には空のギリ類があってマキマキに分断されているようにも見え、マキマキの方が新しいとする考え方もありうる。しかし、この二つに分かれているギリの地域は、北陸道・東海道という近畿から東方への重要な交通路の上にあるので、このギリは中央から両方へ分かれて拡がったもので、マキマキによって分断されたのではないと考えられる。マキマキは中部地方に分布するほか、愛媛と九州西部とに数地点見られる。これらが中部地方のものと歴史的につながりがあるかどうかは判断し兼ねる。

マキマキ等と語形の上でも分布の上からも近い関係にあるものに橙で示したマイ・マイマイ等がある。マイマイは分布が分断されていて残存のように見える。岐阜、四国西南端、九州北部のものはマキ類と接していて、歴史的にもほぼ同時代に拡がったものかとも考えられる。近畿から四国・中国にかけて分布するものは、赤の類よりむしろ緑のツジ、空のギリの類と広い地域で接している。まず、マイマイがギリ類に圧迫されてということではできよう。ツジとマイマイの新古については、この地域の分布から判断することはむずかしい。しかし、両者は歴史的にはかなり近接した時代に拡がったものであると言うことはできよう。

マイマイという語形からは「かたつむり」との関係が想起される。「かたつむり」(質問番号005)の図は後に第5集で示される予定なので、まだ詳しい分布図は作られて

いないが、柳田国男の『蝸牛考』の中の「蝸牛異名分布表」と比較してみると、この図のマイマイの分布と「かたつむり」のマイマイ領域とはあまり重なったり接したりしてはいないようである。分布に共域がないからといって歴史的に関係がないとは言えないが、とにかく「かたつむり」の図が示された後に、両者を対比しつつ考察すべきである。

茶で示したサラの類は、北陸と九州とに分かれて分布する。この両者は偶然に一致したものではなく、歴史的につながりがあるものと考えてよかろう。北陸のサラは、ギリ類の領域の周辺部に分布し、マキ・ツムジ等の領域内までには至っていない。中央から伝播したとするならばギリよりは古く、マキ・ツムジよりは新しいと言えよう。これに対して、九州の分布からはギリ類に圧迫されていることははっきり言えるが、マキ類との関係は二通りの考えかたができる。マキ類がサラを分断したか、あるいはその逆か。九州の分布からはどちらとも決めがたいが、北陸のものと照応させて考えれば、サラの方をマキより新しいとする方が説明がすっきりする。緑のツジ類と比べると、富山、九州南端でツジあるいはツリがサラのそばにあり、必ずしもどちらが古いともいえない。分布が接していることから、先ほどのツジとギリとを比較した際述べたギリが発展した原因と同じような事情によって、ツジをきらって、サラという語を、別な意味分野からとりいれたというようなことがあったのかもしれない。皿も、もし土器であれば粘土を渦のようにして使うことがあろうし、土器にしても木製にしても「ろくろ」を使うならば回転現象があって「つむじ」との関連を考えることができる。河童のさらというのも、実は「つむじ」のことかもしれない。

### 103. はげあたま(禿頭)

まず、凡例について述べておく。小文字で *atama* と書いてあるのは、ここに「頭」に関する語があることを示す。したがって、HAGE*atama* とある場合、HAGE-ATAMAだけでなく、HAGE-BINTAとか、HAGE-KAMACIなどを含んでいるわけである。～は「頭」をあらわす以外の語形がそこにあるのを省略したものである。ただし、たとえばHAGE～とあるときは HAGE-CYABIN, HAGEYAKANなど、凡例として他にあげてあるもの以外を示すものとする。なお、「頭」を省略し

たのは、これがほとんど101図と同じためである。

次に、「頭」がつくものとつかないものとで、地域的な傾向があるかどうかを見てみよう。この問題は、あるいは調査者の個人的な癖に由来することもあろうが、しかし、地理的傾向がないわけではない。まず、*atama* をつける傾向のあるものは、北海道、青森、宮城、福島、新潟・長野・山梨および関東地方の中仙道を除いた地帯、三重から京都にかけておよび福井の嶺南という一連の地帯、徳島・高知・愛媛・大分・福岡・南九州から南島という一連の地帯などである。しかし、これらに一定の歴史関係を見ることは容易ではない。南島および、南九州の「頭」をBINTAという地帯、および青森に「頭」のつく傾向があることは、この図の限りで、この方が古いことを示すとも考えられようが、確言はできない。併用の場合も、この青森と南九州・南島では「頭」のつかないものと併用がなくて、「頭」のつくものばかりであることは、「頭」のついた表現の方が古いことを支持する有力な根拠とはなろう。

「頭」に当たる語形のないものは多くは併用であられるが、岩手、富山・石川、中国地方特にその西部すなわち山口・島根・広島などでは併用でないことが多い。

「頭」の部分を除いて考えてみると、ハゲ類が全国に拡がっており、南島もこの系統なので、相当古くからの日本語であろうと推定できる。

緑で示したチャビン類は、大阪を中心に（京都北部・三重にはあまりないが）近畿に広まり、さらに瀬戸内海にのびており、HAGECYABINの形ではさらに東西にのびている。HAGE-という、いわば注つきでまず広まり、それがじゅうぶん語として確定すると、この注積の部分はなくとも通じるようになるものであろうか。

CYABINとYAKANとは同じ発想法によっているものであろう。近畿では「薬罐」のことをチャビンという。分布から見るとYAKANの方がCYABINより古く中央にあったように思われる（YAKANはCYABINの外側に多い。特に東海道筋を東にのびている）。古くヤカン類を使っていたのをあとからチャビン類に翻訳したものであろう。YAKANもCYABINと同様、「頭」があまりつかないといっていい。東海道筋や北陸筋を見ると、領域の先端部では「頭」がついている方が多い傾向にあるのも、やはりはじめは、「頭」のことについていうのだという注つきで示していたのが、やがて、頭についての注なしでも通じるようになるということを示すもの

であろう。

これより古いのがキンカ類であろう。ヤカン類が主として東にのびたのに対して、キンカ類は主として西にのびている。佐渡は例外的にキンカ類が多いが、これはどういうわけであろうか。青森・岩手県境にあるこの類もさらにこれからのびたものであるかもしれない。この類も、先端の九州北部では「頭」などのついたものが多いが、中国の本拠では単独のものが多くなっている。KINKAは、金革あるいは金柑と思われる、あるいは、キンカリと光の意味か、と前田勇氏の『近世上方語辞典』にある。貞享3年(1686)の『好色一代女』に「天窓はきんかなる人有」、宝永元年(1704)の『薩摩歌』に「きんかあたま」があり、享保15年(1730)の『蒲冠者藤戸合戦』に「きんかん頭」がある。なお『日葡辞書』は「キンカ」である。新しく天保年間(1830)には「やかん」が見えている。『守貞漫稿』に「老夫の頭の赤く禿たるを、江戸にてやかんあたま、京坂にては、はげちゃびんなど云り、昔はきんかあたまと云り」とあるという。これらの事実はKINKAが古いことを示しているようである。キンカ類が四国にあまりないのは、ハゲ類があとから盛り返したとも考えられるが、あまり残存地点がないのが、この考えの弱点である。

新潟のアメ類、北陸のズベ類は、ハゲ類よりは新しく、かつ、地方的な発生であろう。ただし、ズベ類は群馬にもあるので、あるいはもとはもっと拡がっていたのかも知れない。

「禿頭」を示すのには、非常に多くの変種がある。卑語や揶揄語を生みやすい内容の語だからであろう。その中のいくつかを参考のためあげておこう。表記はまちまちなので、ここではカタカナでないものもカタカナに直してあげる。詳しくは『日本言語地図資料』を見よ。

まず、HAGE~の中いくつかをあげると、ハゲペラ、ハゲブラ、ハゲッペラ、ハゲップラは北海道・青森に、ハゲントオ、ハゲットオ、ハゲチャンなどは関東の西部(ハゲチャン、ハゲチョンはなお九州西部にも)など。

~HAGEにはソウハゲなどが九州に、クサンハゲが青森にある。~PAGEはカップゲ、コップゲ、ガンパゲ、チョップゲなどが九州に、テンパゲが千葉に、ブルパゲが青森に、ブッパゲが秋田・山形にある。

CYABIN~はチャビンサンで大阪・兵庫・香川に1地点ずつ。~CYABINはドチャビンで大阪・奈良

に1地点ずつ。KINKA~と~KINKAとは上とほぼ同じ事情である。YAKAN~はヤカンス、ヤカンドオ、ヤカンテラなど。~YAKANはアカヤカン、オオヤカン。AME~はアメタンチョオ、アメテロ。

~BOOZUはテルテルー、ズー、スコクリー、テカテカー、ドー、キンキラー、グングルー、タイワンー、ツルツルーなどである。

~atamaはカンブー、デンキー、カンパー(新潟西部)、カンカンー、ヒカリンー、ツルツルー(埼玉、愛知)、ガマー、テンショオー、オピンズルー、ダエバズー、テレンパー、テレー、トクリー、ナマー、テラテラー、テレテレー。デンキーは全部で4地点であるが一定の領域は持っていない。

「その他」として、ツルツル、ツルツルテン、ツルテン(和歌山・岡山・徳島)、カブチャ、テッカン、トオピン、キンパツ、ランプなど。

以上の~atamaと「その他」は県名や注のないものはすべて1地点ずつである。

なお、併用で「その他」となるため図には地点も示されないもののうちおもしろいものは、上にすでにあげたもののほか、オピンズル、テンブラ、カンテラ、デンキヒャクショク、タイヨオ、オテントサマ、テリケエシ、ドビン、ビリケンなどあり種類が多い。ドビンはチャビンやヤカンと同工異曲のものであろう。詳しくは『日本言語地図資料』にあげる。

この質問では「病的なはげあたまについての特別の名はとらない」という調査者への指示によって、報告中明らかにそれと注したものは図にはあらわしていないし、この指示によって報告しなかったものも多そう。『全国方言辞典』によればカンパが岩手・宮城・茨城・新潟・長野にあるはずであるが、この図にないのは、主としてこの指示により切られたものであろう。報告のあったものは、『日本言語地図資料』には示される。

## 104. はげる(禿げる)

この項目は動詞であるから本来は第2集にのせるべきものであったが、103図「禿頭」と関連するところがあるので、ここにのせることにした。この質問番号231の項目は、質問番号033「禿頭」に関連させて、第3調査票以後で調査に加えたものであり、しかも、第3・4調査票で調査を打ち切る地点の指定があるものであるから

『日本言語地図解説一方法』16 ページ参照), 調査地点は少ない。

質問では、「病気によるはげではない。“はげになる” というような形ではなく、一つの動詞を求める」という注意を与えておいた。

図では、103 図と色および符号をできるだけ一致させた。

空でハゲル類を示した。このハゲルは、ハグとして『靈異記』にあらわれるのを古い例として、『落窪物語』『宇治拾遺物語』などに見えているから、おそらく、相当古くからの共通語であったろうと思われる。九州には現在の共通語形下一段動詞に対応する独得の形があらわれ、南島には独得の語尾があらわれ、かつ語頭にH-に対応するHW-やP-があらわれ、特にP-は先島にいちじるしい。

AMERU は103 図のアメ類と比べてみると、山形ではごくわずかであるが拡がり、なお福島にも2 地点分布していて、動詞としての形の方が勢力が強そうである。群馬でこの項目を途中で打ち切りにしたのは、この点を見るためには残念であった。これはハゲルよりも新しく地方的に発生したものであろう。なお、アメルは、食品などが「くさる」意味で、北海道・東北北部などで使われ、また佐渡では泥酔する意味で使われている(『全国方言辞典』による)。佐渡では「禿げる」意味にも地点によっては使うから、同音異義語となる可能性がある。群馬や淡路のNAMERU がこれと関係があるかどうかは確言できない。

テレルは山陰にあらわれるが、テレアタマのような名詞形が103 図にほとんど見えないのは(～atama 中にある)、この語が動詞専用語であることを示している。『全国方言辞典』によると、西瓜や顔が赤くなることを岡山で、灼熱すること、日がかげること山口でテレルというようである。禿頭の赤銅色の輝きという点では共通性があり、また地域もそう遠くないのは興味がある。

北陸のZUBERU が103 図のズベ類に比べてずっと勢力が弱いのが注目される。つまり、こんどは、主として名詞用の語となっている。ZURU は、このZUBERU と同色としたが関連はなかったかも知れない。ズリオチルなどのズレルと関係があろう。以上テレル・ズベルともに地域的なものであって、中央を支配したことはないと思われる。

以上は程度の差はあれ、動詞となりうる語であるのに

対して、チャビン・キンカ・ヤカン類は、それぞれ非常に名詞的な語であって、直ちに動詞化することができない。何とか動詞にするとすれば～ニナルの形であろうが、これを題意によって封じられているので、この図にはあまり現われなかった。にも拘わらず、どうしてもこの表現以外にはない(あるいはどうしてもこの表現をした)、というのが、この図にあらわれたものと考えられる。ハゲルの類と併用のものもあるが、キンカの類の単用の場合もある。はたしてそれぞれの地点でハゲルの類がないのかどうか、確実なところを知りたいものである。チャビンとかヤカンの類がこの地図で少ないのは、103 図で見ると、この類がハゲ類と併用の地帯が多かったために、ハゲル類で答えやすかったのであろう。この点で、この質問番号231 を103 図のチャビン類専用地帯の大阪およびヤカン類とハゲ類との併用地帯である静岡で打ち切ったのは残念であった。103 図によれば、中国地方はキンカ類の専用地帯が強固なところなので、これらに比べて、ハゲル類になる可能性が少なく、やむなく、キンカニナル類で答えたものが多かったのであろう。この地域では、ハゲルの類は病的なものの意味に限定されているのかも知れない。

## 105. ふけ(雲脂)

一部を除いて本土ではフケ類が多い。

HUGE を HUKERU から分出してみたが、これは関東東北に点在するものの、期待に反してあまり多くない。これは、この項目が音声に注目するものではなかったためもあるが、また、フケのフが無声となり次の子音が有声化しにくかったためであろう。

HUKERA は三宅島にある。ここでは魚鱗のことをKOKERA という。それとの混交形ではないかと思われる。なお、一般的に質問番号076の「鱗」とこの「ふけ」とは関係が深いものである。両項目の詳しい比較については「鱗」をとりあげるときに論じたい。なお、本図は131 図「あか(垢)」とも関連しているところがあるので見比べてほしい。

HOKE は高知に1 地点だけある。あるいはKOKE と関係があるかも知れないが、ここはK-がH-に対応する地域ではないので、フケの類の中に入れておいた。質問番号152 および153「湯気」に対する答えにはHOKEが多い。この地方について見ると、「湯気」のHOKEが



この地点を除いてかなり多く見出され、例外的にこの地点だけが YUGE といっている。この地点だけが同音異義語を避けていることになるが、これはあるいは被調査者個人の特別の現象であるかも知れない。

池間島の SSAHUKI の SSA-は「白」にあたる。

あとこの類では、HISYE が大分の西部に3地点あって、注目される。

コケ類は、特に西日本の辺地に分布している。この語形を考えるには 質問番号 077, 078「こけ(苔)」や 質問番号 079「きのこ(茸)」と関係するところが多いから、総合的な考察はそのときにゆずることにして、ここでは概略、主としてこの図に関することを述べておく。

KOKE は高知・熊本・宮崎に主として分布している。なお、屋久島に2地点 KOKE があるほか、宮崎・宮城に KOGE の形で1地点ずつある。KUKE は島根に一番多く、あと高知・飛騨に分布するほか、佐渡・神奈川に1地点ずつあり、KUGE の形で鳥取に1地点ある。KOKE の内側に分布している点から、この KUKE は KOKE から生まれて、ある短い間中央で行なわれていたものかと思われる。なお、この誕生には HUKU の存在も関係しているかも知れない。

ウロコ類が九州と東北にあるのは偶然とは考えにくい。「魚鱗」の意味では東北にはない語形である。なお、隠岐、山梨奈良田、伊豆大島などにあるのも、ある時期にこの語形が中央語の地位を占めていたことを暗示する。コケ類とどちらが中央で古かったかは微妙な問題であってにわかには決定できない。なお、宮崎で UROKO は「魚鱗」をも意味するから、二つの意味を語形では区別していないことになる。

宮崎と鹿児島に IROKO がある(宮崎北部は IRIKO)。この地方で「魚鱗」は主として UROKO であるから、両義を区別するために語形をちょっと変えたものとも考えられる。この地方独自にこのように変化したという考えもできるが、一方、『和名抄』に「一云以路古」とあるから、中央で行なわれていたものと関係があるかも知れない。

九州南部では IKO が非常に強い勢力を持っている。この地方では、魚鱗をも IKO というから、結局、上記の UROKO と合わせて、九州南部は両義を語形上区別しない傾向があることになる。八重山を除いた琉球列島でも区別していない。沖縄では IRIKI が IRIKI よりも新しい語形である。沖縄のイリキやイリチの類は

語形の類似から UROKO と同じ色で示しておいたが、この関係ははっきりしない。

なお、八重山でなぜ鱗と雲脂とを区別し、かつ「ふけ」の方にアカ類の語形を使っているのかは、興味ある話題である。

このアカ類は、『和名抄』にカシラノアカとある如く、訳語を無理につけるとい立場で言われたものかも知れない。特に本州のものはそうであろう。しかし、東北に点在する AGA を引用して中央では単独語形として勢力を得ていたものとするかどうかについては問題がある。つまり、雲脂は垢の範疇に中央でも入っていたことは確かであるが、単独で使われたかどうかはわからない。ただし少なくとも東北地方では雲脂をアカと言うことが相当強く行なわれていたであろうことを想像させる。九州で「魚鱗」と雲脂との区別がない事実と考え合わせると、昔は「ふけ」というものをはっきり意識しなかった時代があったのではないかも知れない。

アカ類には入れなかったが、石垣島の SSAGA は、アカではあるがそのうちの白いものということで「白」を示す SSA-をつけたものだったかも知れない。SSAGAN は「白頭」と関係があらうか。

山口と石見の KII は地域的なものではあろうが、相当固い分布を示している。どうしてこの語形が生じたのかはよくはわからないが、フケやコケのケ、イリキのキなどと関係があるものかも知れない。

他に地方的なものとして岩手に KOBI がある。これはコピリックなどのコビと関係があらうか。131 図「垢」には多く出ている表現である。宮城・茨城の KASU は、過去のある時期に両県をつなぐ大領域を持っていた語形と考えるより、それぞれの地域での個別発生ではなかろうか。

結局、「ふけ」にあたる、「ふけ」をはっきり他と区別し始めてからの古い語形は、HUKU ではなかったであらうか、ということになる。

なお、その他のものでは、MINBURUNUAGA は「頭の垢」であらう。SIRAKO は「白粉」と考えられる。KUSE, KUSYE は HUKU に対する HISYE と同じような関係で、KOKE に関係するものであったかも知れない。

## 106. かお(顔)

九州以南、東北を除いて、全国をほとんどカオがおおっ

ている。国の両端はツラである。この分布状況から、カオ類よりもツラ類の方が明らかに古いと考えられる。しかし、カオ類も、すでに『万葉集』に見えているから相当古いものであろう。九州南部、東北部では、この語は卑称としてではなく使っている。『時代別国語大辞典上代編』には「つら」は「(類)。ほお。あるいは顔全体をさすこともあったか」とあるが、顔全体を指していったことが、この辞典の扱っている時代はともかくとして、カオが使われるようになった時代の前にあったことは確かであろう。それが、中央にカオが出たときに、卑称などとなっていったものであろう。関東を中心として、卑称としてのツラ類とカオ類との併用が非常に多いのであるが、中部地方の中央以西、中・四国までは比較的併用が少ない。しかし、近畿にも多少はあるから、ツラは卑称としてはまだ相当生き残っているのではないかと思う。ただ、調査という場面ではあまり出なかったところがあったし、特に近畿地方では調査者によるかたよりがある可能性がある。

ツラは卑称としてでなく、『枕草子』にもあるから、卑称に沈んだのはもっとあとかも知れない。狂言ですでにツラは卑称として使われている。今も「上っ面」などという形では、卑称としてでなく使われている。「面汚し」などは境界的な位置にあるものであろう。

なお、**KAO**を<共>などとしてあったものは、一方のツラ類に<下>や<卑>という注がついたものであっても、この図では<併用処理の原則>によって削除してある。そこで、実は単用のように見え卑称でないと思われるものにも卑称的なものがある可能性があり、したがって、卑称としてのツラ類は見かけよりもっと多いであろうと考えられる。

以上のカオ・ツラ二つの類について、主な変種をあげてみよう。

**KAHO**は岩手と随岐にある。「かほ」の綴字発音かも知れない。**KABO**は「かほ」から変わったものであろう。富山に3地点ある。**KAWA**は案外多く、広島を中心にわりに強く分布している。二重母音を避けて[kawo]となりさらに母音を変えたとも見られるが、また**KABO**もこの[kawo]から子音が強まってできたと考えることもできる。語頭のKがHとなったのは奈良に1地点あるだけである。

**TURA**はツラの音の古いものを残しているものと思う。九州・奄美などに見える。**CYURA**は鹿児島に3

地点見えるが、福岡の**CYURAA**もここに入れていい。**CIRA**は琉球列島に多いが、先島は別類である。『沖縄語辞典』には、「**cira** 顔。文語や複合語には**kau**という形もある」とあるが、この**kau**にあたるものはこの調査には出てこなかった。

ツラ類のうち、山形を中心とした**CUSA**は珍しい語形である。**CURA**の-R-が変わったものであろうが、このあたりは、-R-はあまり安定しない場合がある。**CIRA**は東北にもわずかに見られる。いわゆるズーズー弁地域ではもう少し多いと考えられようが、報告された語形で[ɺ]を含んでいないものは[tsúra]はいりまでもなく、[tsira]などもすべて**CURA**へ統合したので、あまり多くはならなかったのである。沖縄の**CIRA**ともども、**CURA**から変化したものである。

**KAOCURA**は**KAO**と**CURA**との併用地帯の併用地点に現われていることに注意せよ。当然両勢力の抗争の結果生まれたと思われる。凡例の**SYACCURA**から**SACURA**までは、強勢の接頭辞がついている。静岡および南関東が主であって、この語形は卑称の程度の甚しいものをいう場合が多い。京都の**DONZURA**の**DON-**も卑称を示す接頭辞であろう。

**IKICURA**, **IKICURA**の**IKI-**, **NOKECURA**の**NOKE-**はよくわからない。前者は「イケズウズウシ・イケシャアシャアトシテイル」のイケと関連があるだろうか。**MUKACURA**の**MUKA-**は「向かう」のムカであろうか。ともあれ、いろいろなものを前につけるのは、東日本に多いようである。以上の、上に何かつくものは一つの例外もなく、併用として現われている。

**OMOTE**は「表・面」であろう。これは京都に1地点しかないが、これと同類と思われる**UMUTI**, **MUTI**は八重山諸島に現われている。本土でも**OMOTE**は「面をあげい」「必死の色を面に現わす」というようなときには使われているから、やや文語的、あるいは文章語的に潜在しているのであろう。『万葉集』などには「顔」の意味で「おも」や「おもて」(「て」は場所などを示す接尾辞)という語が使われている。その後「表裏」の「表」の方に意味の重心が移って、「顔」の方は薄れたのであろうか。

宮古・多良間に分布する**MIPANA**は「目鼻」であろう。顔立ちのことを目鼻立ちともいうから、本土にも多少用法は違いが使われていることばである。竹富の**MIHANANA**も同じである。**MEGAO**も関係があろう。

MINBA は、上のいろいろなものと関係があると思われるが、よくはわからない。MEN は「面」の音読み、MENCUの-CU は「もの」のような意味をあらわす接尾辞かと思われるが、「メンツをつぶされた」のような中国語からきたいわば外来語と、つながりをもつものであろうか。MENSOO は「面相」であろう。

KAMACI, KABACI は 101 図「頭」で、奄美にカマチ類があったことと考えあわせるべきである。この図では奄美にはなく、宮古(池間島)に KAMACI がありちょっと違っているが、関係はあろう。隠岐の KABACI は『全国方言辞典』で「頭」を意味する、とあるものであろう。しかし 101 図にはこの KABACI は現われていない。いささかの疑いは残るが、『全国方言辞典』の記述は正しくは「顔」のこととあるべきではなかったろうか。なお、この『全国方言辞典』によれば、山口萩、対馬で「顔」のことをカバチというところがあるが、この図では現われなかった。また、カバチは「頭」の意味では、対馬にもあるというが、101 図には現われていない。

BAKKI, IDO についてはよくわからない。BIN-CYAKU の BIN- は「鬢」と関係があろうか。

## 107. ほほ(頬)

紺で示したものは、HAATABURO を除いて、ホ(ホオ)およびその変種を語頭に持っていないものである。したがって、色は他に 6 色あって複雑なようであるが、大きく分ければすべてホ類と認めることもできる。この図では、HOO およびHOHO を標準語形と認めて併用処理をした。

まず、HOO およびHOHO は、関東と中・四国の一部を除くと、それほど強固な地域を持っていない。しかし、東北北部や琉球列島を除くと、全国に散在し、この語形が古いものとしての残存とともに、新しい標準語として進展する二面を持っていることを示すようである。九州南半および西部にもあまりこの語形はない。国の両端にあまり見られない点から、これらがあまり古くないという考え方もありうるが、『和名抄』『字類抄』ともにホホとあり、また天平 5 年(733 年)の古文書にもホホと見えるから、文献上残っている一番古い語形はホホとすべきであろう。古語のホホは、一般には語中の-H-が-W-を経て消失する傾向をたどり HOO となったと考えられる。したがって現存の HOHO は、古音の残存という

よりも、綴字発音によったものが多いのではなからうか。

語頭の H-が P-となっているものは本土にはないが、HW-となったものは、この HWO だけでなく他の類も加えれば山形にはかなり見られる。

ホの部分の発音が、後の部分はどのようであれ、どうなっているかを概略見ることにしよう。

まず、HO など短母音のものが、南九州および青森に強く分布している。これらの地方で、長短母音がともに一つの単位となっており、その結果長母音が短く発音されることの多い現象の反映であろう。

HOO などと長音であらわすのは、南部を除いた九州と中・四国、静岡・長野南部・岐阜・富山以西の中部地方(ただし福井の嶺南を除く)である。これが古いことは、近畿でも和歌山・奈良両県の山岳地帯および兵庫・京都両府県の北部が HOO 型であることと、大吠崎から福島北部までおよび三陸の太平洋岸に HOO 型があることから推定できる。

近畿の中心部および嶺南では HO 型が多い。これは、国の両端とは違って新しい傾向であろう。この地域は、一音節名詞をいわゆる長呼する地域(110 図「め」参照)と比較すると四国のところで大いにくいちがっている。故に、HOO と長いものが、他の一音節名詞と同じに扱われて複合のとき短くなったと考えることは、全面的には受け入れにくい。

この近畿の HO 型は、北陸の方向へ、富山まで、HOO 型の間を縫って伸びている。東北の山間部に少しある HO 型は、やはり東北方言の長音の短音化の現われであろうか。

HOT 型が関東(西部の山地を除く)、長野北部・新潟以北、秋田・岩手までおよび北海道に広まっている(前段ですでに他の語類が分布すると指摘した地域を除く)。青森でこの促音がないのは、この地方で、促音の音韻論的意味が、他地域と違っていることと関係があろう。近畿地方ではこの型は熊野灘沿いおよび和歌山の山間部にある。以上の分布から、あるいは中央における古い型の反映かと思えるが、中・四国には全くなく、九州に 2 地点あるだけである、というように、本土西部にあまり少なすぎて、この説の弱点となる。動詞の促音便形でもそうであるが、東日本は促音的(子音的)傾向が強いと言われている。これもその一つの現われであるとも考えられる。促音が入るためには、前の母音は短い方が発音に便

利である。この傾向は、東北的な長音の短音化と関連があるかも知れない。また、促音が現われるかどうかについては、後続要素の性質も考える必要のあることは言うまでもない。上に促音便のことを述べたが、このHOT型の分布域と促音便の分布域とは一致してはいないので、念のため加えておく。

三宅島以北の伊豆諸島、伊豆・山梨から関東西部北部、また関東東部にHOOT型がある。この分布域は関東の中心を囲んでいるから、HOT型より古く、HOO型からHOT型への移行の中間段階と認めることも可能であるが、HOO型からHO型が東北で生じ、これを基盤にHOT型ができたとき、HOO型とHOT型との中間地帯にHOOT型が出たという説明も可能であろう。岩手のHOO型とHOT型との境界地帯にこれがないことはいずれの場合にも都合の悪いことではあるが、いちおうここでは後者、つまり、HOO型とHOT型との交渉によってこの型が地域的にできたと考えておく。HOOT型をHOT型の必要な前駆とは見ないわけである。

なお、HOHO型には一定の地域的な特色はないようである。

次に各型のそれぞれについて見ていくことにしよう。

茶で示したものについては、H-の次の子音が-P-であるか-B-であるかに分けて、前者をぬきの符号、後者をべたの符号で表わした。

一見して、西日本から北陸にかけては-B-型が多く、東日本には-P-型が多いことがわかる。-P-のうち-PP-は全部ではないが、中に点のあるぬき符号で示した。これら茶で示した語形はすべて、多少違うものの、等しく新しく進展した類と思われる。九州、東北にも達しているから、相当古く中央で起こり、しかも、いささか俗語的な音感から、おもてむきのHOO類とともに根強く行なわれつづけたものであろう。東日本で-P-の主力が青森であるのに対して、-PP-が関東・長野北部・新潟に盛んであって、この地方の発音の傾向を示していることは上に述べた。-B-であるか-P-であるかは、歴史的な先後関係というよりも、発音の傾向の差と考えられる。

上に述べたHOOT型は、この類のHOOPPETAが大部分である。つまり、HOOT型は一般的な音の型というより、特定の表現にまつわる特定の型といえることができる。特に、山梨、静岡とその西はHOOTANが多い。HOOT型が、HOO型とHOT型の中間に

HOO型から出たのではなく、東の方のHOT型から出た、という上の説明は、この点からも支持されるであろう。

-PETAなり-BETAなりはどういう意味であろうか。もとよりはっきりはしないが、考えられる点としては、ここを叩いたときのベタベタという音と関係があるか、ということである。なお「尻ベタ」などとも比較すべきである。なお、「はし」「へり」を意味するヘタと関係があるかも知れない。このヘタは、『全国方言辞典』には沓岐・熊本葦北郡にあってごくわずかであるが、「海辺」の意味で「端」の原義をとどめているものはもっと広く、南島、佐渡、三重志摩、京都、長崎五島、熊本葦北郡にあるという。またベタ・ベタの-タは、次に述べる-T-・-タと比較すべきものかも知れない。

草は、H-の次の子音が-T-であるものを集めて示す。これは茶のホベ類より古いものではないかと思われる。これは、中国で主として山陰に押しやられ、九州でも福岡に上陸したホベ類によってその周辺に追いやられているところから推定する。しかし、静岡西部・愛知のこの類の存在はどう考えるべきか。ホベの類が北陸から東北地方に伸び、北から影響するとともに、江戸に直接近畿から渡り、中間のこの地方がとり残されたと見ることはできないであろうか。

なお、この類の内部を考えてみよう。HOTA、HOTTAなど、HO型、HOT型に属するものはわりに少数で、多くはHOO型に属する。HOOTAは宮城、福島、岐阜、愛知、中国(山口を除く)、口永良部島に計約40地点、HOOTAIは島根、広島、山口、大分に約12地点、HOOTANは富山、愛知、静岡、広島、山口、佐賀、長崎、対馬、大分、宮崎、熊本に約80地点、HOOTANEは長野、岐阜、愛知、静岡に約18地点などである。これは、主として、HOHOからの正統な変化であるHOO型の有勢な地域に見られる語形であることを示している(-TAについては101図「頭」のピント108図「顎」のアゴタなどと比較せよ)。

緑で示したものは、子音がおおむねH-T-B-またはその変種の順で出てくるものである。H-の次の母音Oが短いものは小さい符号、長いものは大きい符号で原則として示してある。四国、岐阜・愛知、房総半島南部、大吠崎以北東北地方南半の主として太平洋側に分布している。この分布から見て、草のホタ類より古いのではないかと思われる。東日本では短母音のものが比較的多く

なっており、特に北の方では HOTA 型となっている。

この縁の類の原形は「ほほたぶ」であって、これは他の「みみたぶ」「しりたぶ」でわかるように肉が豊かにあるところを示すものと思われる。なお、「余る程」という意味の「たぶやか」(『盛衰記』にある)、「たっぷり」「たぶたぶ」「だぶだぶ」とも関係があろう。なお、「しりたぶ」は「しりたぶら」ともいうという辞書の注によれば、その辞書にはないが「ほほたぶら」も当然ありうるし、この縁の類のうち、B の次の子音が R であるものは、その類のものとして認めてよかろう。

いちょうの形で示したものはカバチまたはカマチとそれの関係のものである。101 図の「あたま(頭)」ではこの類は奄美にあり、106 図「かお(顔)」では宮古と隠岐に見られる。ともに類縁のある意味内容と認められる。

ここでこのカバチなどと関係のあるものについて見てみよう。HOTANBACI(兵庫、高知)、HOTANBU-CI(兵庫)、HOOTANBACI(兵庫、岡山、高知)、HOTAKABACI(岡山、広島、香川)は分布が近接している。これらは H-T-B-とその変種という語形の類似からこの縁に入れたが、実は HOTAN、HOOTA、HOTAN にバチ類がついたものとして草とすべきであったかも知れない。足摺岬近くのものに別にするれば、草の方が縁より新しいとの説に不利なものはない。いずれも KA を HOOTAKABACI を除いて欠いているのはなぜかわからないが、今この類に入れておいた。

凡例の HOKAMAZU 以下の五つは、HO-または HOO-にカバチ類がついたものと思われるから橙であるべきかも知れないが、ここでは HO-の次の子音が-K-または-G-であるものおよびその他の空の中に入れておいた。HOKAMAZU、HOKKAMAZU は岩手に、HOOGAMACI は愛媛・高知に、HOOKABACI は島根・香川に、HOOKANBACI は岡山・香川にある。HO 型が東日本、HOO 型が西日本というのも、ここでもいえるようである。

HU-にカバチ類のついたものは鹿児島にある。

何も上につかないカバチ類は、凡例の KAMACI 以下の五つである。これは宮古・八重山に分布している。

以上の分布から見ると、カバチ類の語に、「頬」を意味することが「頭」「顔」よりも多く、かつ、古くは広く使われていたものと思われる。『大言海』では「かはち」「かまち」「つらがまち」があり、「かはち」には『字鏡』の「頬」を意味する「可波知」、『和名抄』の「顔」を意味する「加波知」

をあげ、「かまち」の項には『華嚴經私記音義』の「鬚、カマチ、ヒゲ」、『今物語』の「カマチヲ毆リテケリ」をあげ、いずれも、上下の顎の骨、頬骨の意味をつけているが、「頬」そのものと解してもこれらの例は通じるようである。『大日本国語辞典』もほぼ同様である。このカマチないしはカバチは、あるいは「かんばせ」などと関係があるかも知れないし、またカハ、カオのカと関係があるかも知れない。

さて、HOTA 類は、HOTABU 類の -BU が落ちてできたものとは考えられないであろうか。HOOTA-I、HOOTAN などは、発音を整えるために HOOTA に -I や -N をつけたと解することもできるが、むしろ名古屋を中心とした中部地方では HOOTA が HOOTAN や HOOTANE などに囲まれているから、HOOTA はこれらから N(E)を落としてきたとも思われる。山陰から大分にかけても、遠くの方から HOOTANE、HOOTAI、HOOTA という順に並んでいることもこの見解を支持する。なお HOOTAI は、頬が垂れたものとの意味で「ほほたり」といったのと関係があるとも考えることができる。

空で示したのはその他の HO の類である。まず H-の次の子音が-K-または-G-であるものをまとめてあげたが、これはさらに二つに分けて、ホカイ類とホケタ類とすべきであろう。

ホカイ類は岩手を中心に強い勢力を持っているが、そのほかは和歌山に2地点見られるだけである。この両地域が関係があるかどうかはよくわからない。岩手のものは中央との途中に一つも残存物がないから、個別の発生と考えられるが、しかし、もし-K-と-T-とが変換したとすれば、これらはホオタイ類と関係があり、中央から伸びたと考えることもできる。

ホケタの類は「ほほげた」が『一代女』『宗因千句』などにあるから、ある時代中央に行なわれたことがあるのではなからうか。西日本の各地にあるから、古い可能性は大きいだが、前述のうち、歴史的にどこにはいるかはよくわからない。頬そのものをさすというより、多少違う意味を持っていたようにも感じられる。

ホオダマの類は、中国地方の東端および京都北部に強固な分布を示している。隠岐を連続と考えるならば、他には全くない、ということになる。タマは「首ったま」のタマと同じで、身体の部位名につける一種の接尾語であろう。また、もし、ホオタンバ類やホオタカバチ類と

関係があるとすれば、分布は連続しさらに広がる。

HOGAO, HOOKKAO は、「頬」と「顔」とを結び合わせたもので、昔この二つが意味的に分離していなかったと考えるならば、その時代のことばの反映かとも思われる。HOZURAA, HOOZURA も同様であるが、愛媛の2地点は、106 図「かお(顔)」ではツラ類が全く出てこないところであって、おもしろい。

HU-ではじまるものは赤で表わした。形の方は今までのもと同じものを使っている。この赤は、九州、奄美、沖縄に大勢力を占めるほか、関東周辺部、東南北部に分布している。HOOPPETA と HUUPPETA が群馬のあたりで、HOOTAN と HUUTAN が宮崎・大分のあたりで、というように、同じ形のもの重なり合いましたは連続しているのはおもしろい。

HOHO が HOO になり、これが漸減的発音によって HOU となりさらに HUU になったものであろう。しかし、この中間段階の HOU で止まっているものはあまり存在しない。図では HOO に入れたが、広島に1地点あっただけである。HOO>HUU の変化には開音の HOO がどのような歴史をたどったかという事情も、あわせ考えたい。HU-ではじまる語形は昔中央で地歩を占めていたというよりは、むしろ九州と東国で上のように発音の進展がそれぞれに独立にあったのではなからうか。語頭の HU- がそのあとにつづく形として、今までの形をほとんど持っているということからもそれが伺われる。東国では他の新しい勢力が後に及んで、この類を周辺部に追いやったのに対して、九州では相当強く抵抗していることになる。琉球列島で本土の O に U が対応すると、同じ発音の傾向が九州に拡がっていたことの反映であるかも知れない。

HU-となつてはじめて出てきた語形には HUUTO, HUUTOO というのがある。長崎を中心にしてまわりには少しある。「頬」の意であろうか。

フウズラ類は沖縄本島を中心としている。先に HOGAO, HOOZURA などのところでも述べたことがここでもあてはまる。

奄美や八重山、それに沖縄本島にはツラ類がある。八重山は別として、106 図「かお(顔)」では、これらの地方はツラ類である。2枚の地図を比較すればわかるように、この地方では古くは「顔」と「頬」とを区別していなかったと思われる。この、区別しない、ということは、

あるいは日本の古語の姿を映しているものであろう。奄美や沖縄本島に無答の多いのもこの地方が元来「顔」と「頬」とを区別していなかったことのひとつの現われであろう。そこへ HUU という語が外来して、それと結びついて、フウズラ類あるいはチラフウ類となったものと思われる。

ビンタ類については、101 図「あたま(頭)」のところでも述べたが、そこで書いたように「頬」の方が原義であろう。

べづら類は福岡を中心とし佐賀にも分布するだけである。プのところは、HU-とあるいは関係があるかも知れない。そしてべはビンタとの関係も考えられる。しかし、分布から HU-とビンタ類と接しているという以外に積極的に証明できるものはない。

その他の語形では秋田に10地点見られる SOPPO が注目される。この地方で独自にはじまった言い方であろう。「そっぽを向く」という用法で、あらぬ方、横の方などを意味するから、頬は顔の横にあるということから使われたものかと思われる。「外方」であろうか。また「外頬」からきたとも考えられなくはない。

沖縄竹富島の MINTAI, 奄美徳之島の MINCYA-BU は「耳」と関係があろう。特に後者は「耳たぶ」を思わせる。なお、114 図「耳」と比較せよ。両地点とも「耳」は MIN である。「頬」は「耳」と近くにあるので、関係があると思われる。なお HOOTAI などの -TAI も思い合わされる。

## 108. 109. あご(顎)

質問番号 232では絵(『日本言語地図解説—方法—』128 ページ参照)と手振りで、大きく「あご」と見られる3か所を示してたずねている。すなわち、第1:口の下の側のとがったところ(あごが長い)、第2:耳の下の側のとがったところ(あごが張っている)、第3:下あご全体(あごがガクガクする)、である。このうち第2は、ウワアゴ、アゴノチョオツガイ、アゴボネ、ホオゲタ、ホオボネなど、他と違う語形が多く、かつ無答が他のものよりも多かったのも、ここでは割愛し、他の機会を待つことにした。すなわち、この集では、第1および第3について取り上げた。なお、この質問は第3調査票以後調査項目にはいったものである。

まず、108 図に第1の「口の下の側のとがったところ」を

何というかを示す。

アゴ類に限らず、凡例で-NG-で示したものは、たとえば[anŋo] [a<sup>ŋ</sup>o]のようにゴの部分の前に[n] [ŋ]があらわれたもので、[a~ŋo]のように軽い鼻音のはいると思われるものは-G-としてこれを無視した。-NG-の現われるのは、高知、島根・広島境界地帯のうち東部などである。なお、第1集所載の1図、2図を参照。

全国で一番多いのはアゴ類である。これは有力な語形の中では一番新しいものではないかと思われる。アゴという形は文献では古いものがないようである。

アゴ類という小さな空の点およびぬき符号であらわしたものと、アギ類というべた符号で示したものを比較すると、分布から見るとアギ類の方が古いのではなからうか。『和漢三才図会』や『倭訓栞』の筆者の言語感覚によれば、アゴの方が俗語的であつたらしい。アギは『和名抄』に「阿岐」と出ているが、なお鰓の意味では『字鏡』に「安支」とある。関係の深い語ではあるが、この調査では、魚のえらのことは調べていないので比較はできない。アギは『大言海』や『大日本国語辞典』では上顎のこのようであるが、ここでは題意によっても下顎のことを指した語として答えたことは疑いない。

アゲ類はアギ類の音変種ではあるまいか。アゲ類はアギ類の近くに分布することが多い。アゲ類のゲが、オトゲのゲと関係があるとも考えようが、青森では分布が近いが、他はそうでないので可能性が小さい。アグ類はアゴの音変種であろう。ただし対馬のアグ類の場合は近くにアゴ類があまり有力でない。

秋田のONGOはアゴ類として空で示したが、分布からしても、あるいはオトガイ類から変化したものかとも考えられる。

AGOTA, AGUTA, AGITA, AETAのように-**TA**のつくものは、AGITO, AGETOの-**TO**と関係があろうか。-**TO**は「処」の意味であろうか。-**TA**は107図「ほほ(頬)」のホオタのタ、この107図および101図「あたま(頭)」のピンタのタなどと関係があるかも知れない。文献では、アゴ以降に、アゴタが現われ、アギの出現以後にアギタが現われるから、これらのタがつくのは新しい傾向であるともとれる。近畿の中心部にAGOTAの多いのもこの見解を支持するようであるが、一方、東北の東北部、雲伯地方、九州中部などのAGOTAはこの形が古いことを示すようでもある。今この歴史的な先後関係は、にわかには決めがたい、といわざるを得ない。

オトガイは、文献的にはアギよりも古く『靈異記』に現われるが、これはアギの「上顎」に対して「下顎」のことであると古辞書では説明している。したがって、この題意にぴったりしているが、果して、上下の顎の名を判然と区別して使っていたかどうかには疑問がある。分布から見ると、オトガイ類は東北、中部山地、伊豆諸島、中国地方のおおむね北半、琉球列島などに分布し、一見古いようであるが、これまたAGOTAと同様、近畿の中心を占めて中国地方に連なっている点では新しい。つまり、アギとオトガイとは、おそらく語源的には関係があり、ある場合にははっきり区別して使っていたこともあるだろうが、大勢としてはどっちがどこを指すのかははっきりしないまま、2語使用の状態がつづき、あるとき、あるいはあるところでは一方に傾いて表面に現われているという状態が続いたのではなからうか。2語の関係は、かくして時代とともにあるいは地域ごとに流動し、こがして横断的に地図に表現しても、その流動の一面しか捉えられない場合が生じうる。それ故に、オトガイ類とアゴ類との歴史的先後関係は、はっきりいうことはむずかしいということになる、というよりはいまの段階では適当でないと言ったほうがいいであろう。

OTOGAIがOTOGEEとなるのは東国および兵庫北部・鳥取東部が主である。OTOGEのように短くなるのは青森であつて、これらの地方の発音の傾向を示している。UTUGAKUは沖縄本島南部に多い。文化の中心地の学問する人々の「髑、顎」という語源解釈が作用しての新しい表現かも知れない。凡例のUTOOI以下の五つの語形は石垣島を中心として使われるだけであり、オトガイ類の変化した形であろう。

この「あご」にも、101図「あたま」106図「かお」107図「ほほ」などと同様、カバチ類、カマチ類が現われている。「頭」「顔」「頬」「顎」といづれも近い関係にあり、この語が古くから存在し、顔をめぐっていろいろなものを指しながら生き残っていることを考えさせる。なお、カマチは『大言海』では「上下の顎骨」とある。この意味では、中国地方にKABACIが2地点、石垣島にKAMACIが1地点、沖縄本島と付近にKAMACIIとMEEGAMACIが1地点ずつ、奄美の加計呂麻島とその付近にKAWATIとKAATIが1地点ずつである。MEEGAMACIは「前がまち」であろうか。なお、『全国方言辞典』には「あご」の意味でのカバチが鳥取、広島の高田郡、山口の大島にあるとあるが、この調査では

現われなかった。消え失せつつあるのであろうか。「あご」とはどの部分を指すのであろうか。

カマゲタ類もカマチという語と関係があろうか。ゲタはホオゲタなどのゲタと同じものと思われる。この類は、青森・岩手の県境の太平洋岸にあり、また南に飛んで熊本にある。南北に分かれて見出されることはおもしろい。両地域とも、特に東北では、107図「頬」をケタと言うところとそう近くない。カマゲタ類をカマチ+ケタと考えるなら、凡例の一番上の KAMAGETA が一番原形に近く、それが南北に分かれていることになる。KAGAMETA はこの KAMAGETA の-G-と-M-とが入り代わってできた形であって、音転倒によるものと思われる。

カクチ類についてはよくわからない。この類は次の109図の方に多く現われる。SITAHAKOCI も同じ類と認めて同色とした。SITA-は「下」で-HAKOCI は「端口・歯口」などと意識されているかも知れない。実際はカクチのK-がH-に変わったものであろう。

HWAGUCI もこの「端口・歯口」と関係があるかも知れないが、「歯茎」と関係があるかも知れない。なお、「歯茎」は『入重山語彙』では pasasi, 『沖縄語辞典』では hasisi となっている。

鹿児島県の CYAIGO, CYANGII はそれぞれ AGO, AGI と関係があるかも知れない。これらは109図には現われない表現である。

次に109図として、第3の、下顎全体をどうかを求めた調査の結果を示す。一見してわかるように108図と大差はない。ここでは、ただ、両図の比較という点に重点を置いて述べることにする。

まず注目されるのは、オトガイ類が109図で勢力がやや弱くなっていることである。青森の東半分、宮城を中心とした地域、新潟、長野、三重、山口、鹿児島、沖縄本島付近などで退潮がいちじるしいが、なお、他の地域でも少なくなっている、といえよう。これはこの類が、元来は「下顎」を意味していたと注している諸辞書の記述と平行するものであろう。

無答の分布もまたおもしろい。108図で無答の多いのは関東周辺、新潟、愛知であり、109図で無答の多いのは青森、宮城、山形、兵庫、中・四国、九州、沖縄本島以北奄美までである。109図での無答が外側にある分布事実は、古くは全体よりとがったところに興味が集まっていた全体の名称には興味がなかったことを示すのかも知れない。これはさきほど述べた推定といくらかくいちがう

が、東北の109図の無答がオトガイ類を取り巻くように分布していることは、逆に全体を示す語としてのオトガイが周囲から崩壊しつつあることを示すものかも知れない。なお、下北半島先端部では108図の AGOTA, AGITA が109図で無答となっていて、これはこの地方の全体の名称への興味のなさを示すものと思われる。

109図で宮城の108図のオトガイのあとを埋めつつあるのは AGI である。この図は無答をへだててオトガイ類を追い北上しているように見える。まず全体を示す語としてのオトガイ類が崩壊し、空白になったところにあとからはいついっていったものであろう。

奈良・和歌山・三重3県の県境付近3地点で、108図 ANGI, 109図 ANGO と区別しているのが注目される。

鹿児島県の HUGAMAT 2地点については、近くに107図「頬」で HUGAMACI, HUGAMAT が計4地点あることに注意。HU-は「頬」と思われるが、この両地点では、107図「頬」では HUTAN であるから、題意をとり違えた誤答でないことは確かである。

最後の CAPPUU (鹿児島県の甑島)は、報告されてきたカードによれば [cappu:] とあったものである。あるいは KAPPUU とすべきものであったかも知れない。101図「頭」には KAPPO が五島にある。101図の説明を参照。

## 110. め(目)

基本的な単語であるせいか、この地図は比較的単純である。語種もすくない。そこで、音声の変種、たとえば MEE の長母音の長さの程度、MANAGO, MANAGU の G の部分が [g] であるか [ŋ] であるかなどを地図に示した。

橙の符号で示したもののうち、NME, NMII, MIN, MINCI 以外は、メに対応する各地の発音をそのまま示すものであろう。

NME は福岡に2か所、NMII は沖縄の東海岸(平安座)に1か所見られたが、ともに臨時的に現われた語形であったかも知れない。

MIN は、入重山諸島に2か所(白保と波照間)現われた。入重山諸島では一般に耳のことを MIN というので、この2か所では、いわゆる同音衝突が起こりうる。114図と比較されたい。MIN はメにそのまま対応する



語形とは思えない。耳との間に類音牽引がおこり生じた語形かも知れない。

MINCI は、同じく八重山(西表の租納)に1地点見られる。いったんMIN となって後、さらに耳と区別するために派生した語形ではあるまいか。

メに対応する諸語形のうち、中舌母音の現われる地域は奄美諸島であり、前舌狭母音の現われる地域が、沖縄・先島であるのは、いままでに言われてきた通りである。ただし、奄美にも前舌狭母音の現われる所があり、富山と伊豆諸島に各1か所同種の母音が現われる。

この地図でまず注目されるのは、MEE などの、長母音分布である。いわゆる一拍名詞(たとえば、血・葉・木)などの場合にもまったく同一分布が現われるかどうかこの地図からはわからないが、概略的には類似している。北陸から近畿・四国にかけての分布領域は、吉野・四国西南部が短母音であることを含めて、いわゆる京阪式アクセントの分布領域とほぼ一致して興味をそそられる。

ただし、半長母音も長母音の中にも含めるならば、北海道・東北・関東・中部・中国にもこれがわずかに現われ、九州西半から琉球列島にかけては、かなり顕著に現われることは注目しておく必要がある。一方、半長母音の中には、実際は[meʔ]などと区別されるべき特に長さを記録しなくてもいいゆるやかに終る母音を表記したものが含まれているかも知れない。もっとも、半長母音は、多く長母音に隣接して出現している。各調査地点からの報告のうち、特にカタカナで表記されたものを、長母音と認めるか半長母音と認めるかについては、いくらか迷った。メに続くエの文字の大きさが長さを象徴していると考えられる場合があったからである。

一音節名詞メを長母音によって実現するかどうかについては、当然アクセントとの関係を考慮する必要がある。しかし、かならずしも、アクセントとの関係が確認できない地方(たとえば熊本)にもこの現象は認められることは、問題がそう単純でないことを示していると考えられる。

紺で示したもののうち、MENAKO は三宅島に1地点、しかもME との併用で現われたにすぎない。

他の6種の語形は、弧の符号で示したマナコの類と、矢印で示したマナクの類に大別できよう。MANAG[g]O, MANAG[g]U は、すべていわゆるKの有声化地帯(28図など参照)に含まれる。MANAG[ŋ]O,

MANAG[ŋ]U は、音の対応という点からは奇妙に思えるが、地理的分布の観点からは数も少なく散在している個別音変化と考えられる。

マナクの類は、北海道・東北地方のほか、これに隣接する茨城・千葉・栃木・群馬・埼玉・東京・山梨・新潟にしか現われず、その分布領域が限られている。これに対して、マナコの類は、以上の地域のほか、わずかではあるが、全国に散在し、両者の語形の類似にもかかわらず、分布の観点から——たとえば、マナクはマナコの変化というように——すぐに結びつけることはできない(下北半島などに限ればMANAKU>MANAKO の変化も考えられる)。

この地図には現われなかったマナコ(文体的に異質なマナコ、多少意味の違いマナコなど)の存在も忘れることはできない。質問の際には、器官としての眼球にあたることばは採用しないこととしたが(第1集別冊『方法』107ページ)、これが成功したかどうかは不明である。

橙で示した類と紺で示した類とでは、現在、橙の方が優勢と認められる。地図からは割愛したが(本解説はじめに>参照)、橙(ME)と紺との併用で、橙の方が新しく、上品な、共通語的表現であるとする地点が60か所ほどあった。また、能登半島付近には、MANAKO の方が下品であるという地点がいくつかあった。さらに、地図では橙の単用となっているが、<親は[manago]と言った>式の注記をもつ報告が数地点あった(たとえば0737.94, 4676.39, 5613.80, 6628.64)。これらがその根拠である。

おそらく、一時代前に調査すれば、マナコの類は全国的にもうすこし多く、マナクの類は現在よりさらに広い領域に現われたのではあるまいか。

その他にしたものは、ガン・ヒトミ・メダマ・メンタマの諸語形である。ごくすくないし、はっきりした領域も認めえなかった。眼球を意味する語形が混入しているのかも知れない。

## 111. まゆげ(眉毛)

大別すれば全国的に分布する草で示したマユ・マユゲの類(ミーマユ、イトマユなどの派生形は紺で示した)、これもかなりの領域をもつ緑のマゲ・メゲの類、東北地方に非常に強固な、紺で示したコノケ・コオノケの類、関東・中部の赤で示したマミ・マミヤ・マミゲ(茨城・栃

木を中心とするマギメ、愛知などに分布するマイメなどを含む)の類、および、千葉に分布する空で示したヤマの類、主として東北・西日本に点在するマツゲの類、下北地方に見られるカミノケの類ということになろうか。また、草・緑を通じて近畿以西に現われ、この地図では大きな符号を与えた後部分がヒゲになる類がある。

凡例を順に追って見ることにしよう。

マユ・マユゲの中では、まず、紺で示した凡例 MII-MAYU から ITOMA までの派生形が分出されよう。このうち MIIMAYU から MIYOO までは、すべて琉球列島に現われ、MAYU, MAYO, MAI などに、なんらかの理由——別語(同音語)との区別のためか——によって、メ(110 図参照)にあたることばが冠せられたものと考えられる。ここでは、110 図で示したような、[mi, mi:, mi]などの区別を立てずに、MII に統一してある。四国西北部にのみ現われる ITOMAI などは、平行的にイトにあたることばが冠せられて生じたものであろう。ITOMA は、わずか1地点である。ITOMAI が発生した後、なんらかの理由——付近の MAHIGE の影響か——によって末尾の母音が切断されたものと思われる。

派生語形に分出した残りのマユ・マユゲの類(草符号)は、いちおう MAYU 以下 MAA までのケ(ヒゲ)が接続しない類と、MAYUNOKE 以下 MAEHIGE までのケ(ヒゲ)が接続する類に分けられるかも知れない。

前者は、富山・京都北部・島根・高知・九州(主として北部)・琉球列島などに分布して、ケ(ヒゲ)の接続する類より古いものと思われる。

これらのうち MAYO は、本土では石川にわずか2地点しか現われな。残りも琉球列島の奄美・八重山にわずか計12地点である(他に奄美の MIIMAYO, 与論の MIYOO, 徳島の MAYONOKE, 秋田・新潟・能登の MAYOGE, 能登の MAYOE も参考にすべきであろう)。しかし、琉球列島の -MAYU- の類の中には、本土の MAYO に対応するものがかかなり含まれている蓋然性もある。

MAYA(富山に3地点)は、この地図では草で示したが(別に、これも草で示した五島の MAYAGE, 能登の MEYAGE, 島原半島の MEYANKE などとも比較すべきであろう)、一方、付近の MAIYA, MAEYA, MAAYA(これはこの地図で赤で示した)との関係も考えるべきであろう。凡例では、すこしあとに現われ

る空の YAMA の類は、地理的にはこの MAYA から離れているが、MAYA を、その形状から山と見立てる語源意識が働いての音位転倒によって生じたものかも知れない。

MAI に分類したものには、[mja:, mɛ:]なども含まれている(MAIGE には [mæ:ge, mja:ge, mɛ:ge]などが含まれている)。原則として、[e:]などの長母音はすべて MAI に、二重母音で表記されている場合、狭ければ MAI に、やや広ければ MAE に分類した。MAE の内容は [mae] である(MAEGE の内容は [mæj̥e, ma-j̥e] なども)。しかしこの分類には問題がある。マエ(前)ということばがあるため、凡例では区別してみたのであるが、分類の不確かさを反映して符号には極めて類似したものを使った。たとえば、MAINOKE という見出しがあるが、実はこの中には [maenoke] 5569.99, 6476.92, 6495.88, 7418.07, 7430.15, [maenoki] 7417.27, 7418.33, 7427.90 が含まれている。これらは MAENOKKE とすべきものだった。このように一貫した方針をとることができなかった見出しもある。

MAA は、種子島に現われる。この島は AI 二重母音に対して AA の現われる地方であるから、これは MAI に当たるものであろう。岐阜・五島の MAAGE も、これに準じて考えられようか。富山の MAAYA, MAAME, 福島の MAAMEGE も似たものであるが、最後のものは、性格の違うものと考えておくべきであろう。

MA は岐阜南部にあり、前項の MAA との関係も考えられるが、付近に分布する MAGE, MAMEGE などから、MA という形態素を切り出すことができそうに見えることとも、関係があろう。MAYU : MAYUGE の対立に平行して MA : MAGE の対立も考えうるというわけである。

ケ(ヒゲ)の接続する類は、広い地域に分布し、中でも MAYUGE, MAIGE の勢力が強い。ここで -GE としたものの中には、MAYUGE [-y̥i] 6677.41, [-ギ] 0265.96, 0275.97, [-ギ] 6600.97, MAIGE [-ギャ] 7392.94, [-ギ] 1706.82, [-ケ] 6521.17, 7329.57, 7421.62, [-ギ] 1770.18, MAEGE [-ギ] 2608.90, 2741.46, 2750.43, 2751.10 などが含まれていることに注意。

ケでなく HIGE という形態素を持った語形(草・緑を通じて大符号で示した)の分布する地域は、地図でも

かなりはっきり現われるが、ケ対ヒゲの意味分野が、この地域では一般に他の地域と違っている可能性がある(調査がないので本当のところは不明である)。一方、中国・南近畿の分布は、近畿中心部でかつてこの言い方があったのではあるまいかと想像させる。九州での分布は、東からの伝播を推定させる。

なお、凡例に HIGE として示したのものの中には、次のようないろいろの音変種が含まれる。[çige, hige, çuge, jige, fige, fiege]。最後のものなど、MAEGE の EGE の部分に通ずる。

緑で示した類は、前部要素が MA または ME の類であるが、すでに触れた MAHIGE などのほか、千葉内部、中部地方西半、九州南部などにかなり広い領域を持っている。

もっとも、奈良に 2 地点、広島に 1 地点の MEHIGE の中には、MAIHIGE・MAEHIGE から変化した語形が含まれているかも知れない。もしそうなら、色を草に変える必要があるかも知れない。これは、MEGE(九州南部ほか北海道・愛知に各 1 地点)・MENOKE(九州南部ほか大分の国東半島に 2 地点)・MEGENKE(九州南部に 3 地点)についても言えることである。MA~の中にも、平行的に考えるべきものが含まれている可能性もある。

一方、MANGE(千葉 11 地点、岐阜 2 地点、滋賀 1 地点、大阪兵庫にかけて 4 地点)・MANGA(房総の南端に 1 地点)の中には、MAMIGE・\*MAMIGA と関係させるべきものが含まれているかも知れない。ここでは MEYANKE を MEYAGE と、MAMENGE を MAMEGE と対比させる考え方に平行してとりあつかったが、もしそうならこれらの色を赤に変えたほうがよかったかも知れない。もしそうすれば赤の勢力が拡がることになる。

なお、MANGA の GA は、後出の MAMEGA(長野地方に 1 地点)の GA とともに、白髪のカなどとの関係を考えるべきものであろう。

空の符号で示した YAMA の類については、前に、MAYA の音位転倒によって生じた語形ではないかという考えを出しておいた。もしそうでないとするならば、この地方独特の表現ということになる。

地図で赤の符号で示したもののうち、凡例で MAMI から MABUGE までは、第 2 音節に M あるいはそれに類する音の現われる類である。分布は、関東・中部の両地方を中心として、東北以北・近畿以西にはほとんど

現われない。

MAME は、MAMIE からの音変化で、MAMEE などとともに特に見出しとしなくてもいいものだったかも知れないが、MA + ME のように分割できそうなので、分出してみた。

この類のうち、MAIWAI 以下 MAAYA までは、第 2 音節に M(またはそれに準ずる音)が現われない。しかも地域は、富山・石川・京都・兵庫に限られ、赤の類としては中心からはずれていて、分類に問題がありそうである。

しかし、語形としては、第 3 音節に YA あるいはそれに準ずる音が現われること(赤の類の中にもみ共通性がある)、分布としては、わずかに 1 地点ではあるが、赤の類の中心である群馬に MAIYA があることから、凡例のように取り扱った。これらは、MAMIAI, MAMIYA など、MAI(-), MAE(-)などが衝突して生じた語形であろう。単なる M- の脱落ではあるまい。近畿地方の赤符号は孤立して見えるが、もしさきに述べた大阪・兵庫の MANGE が、MAMIGE からの変形形であるとすれば、付近にいくつかの通ずる形を持つことになる。

MAMIGE 以下 MABUGE までは、MAMI(およびそれに準ずる形)にケにあたる -GE が接続したものと見ることができよう。MAMEGE, MAMENGE, MAA-MEGEなどは、MA(A)+ME(N)GE という構成とも考えられようが、この地図では採らなかった。むしろ、語形としてはあまり近そうにも見えないが、分布の関係から、MAMUGE, MABUGE がマゲ・メゲの近くにあるので、符号を共通するものとした。

MAMIĚ[mamiĚ], MAMĪ[mamĪ; mamĪ]は、長野に現われる特殊のものである。末尾の鼻音は、[ŋ]にあたるものであろう。

MAMIYA, MAIYA などの YA は、MAMI と A-I との接触面にわたり音 Y が生じ、その後、末尾の母音 I が融合するなり脱落するなりして生じたものであろうか。神奈川・山梨・静岡あたりでは、MAMIAI と MAMIYA とが混在している。

マミは、元来は目もと、目つきの意味であったろう(万葉集など)。それが意味変化によって眉をさすようになつたり、また、マミゲ、マミアイのように別の形態素を接続することによって眉をさすようになつたりしたのであろう。マミエは、『大日本国語辞典』によれば目つき、

顔つきの意味があるというが(撰集抄)、地図に見える MAMIE の中には、マミアイやマミゲなどからの変化形もありそうに思われる。現在、マミ・マミゲの類は関東・中部の両地方にのみ顕著であるが、別の意味(目つきなど)を調べれば、他の地方にも出現するかも知れない。

MAGIME(ほとんどは[maŋime, maŋime], 1地点だけかたかな表記のマギメがあった)以下 MAAME までは、第3音節に ME の現われる類である。

このうち勢力の強い MAGIME は、茨城・栃木を中心に分布し、MAMIGE と混在している。音位転倒によって MAMIGE > MAGIME の変化が生じたのであろう。前に YAMA- の類は MAYA- が転倒して生じたものかも知れないと述べたが、もしそうだとすると2種の音位転倒が連続した地域で生じたことになり興味深い。なお、MAMIGE から MAGIME への変化には102図の「つむじ」における MAKIME との関連があったかも知れない。MAGUME は栃木に1地点のみ。MAMUGE に近く分布するとは言えないが、福井、長野に各1地点の MAGOME が MAMUGE[mamɯe], MABUGE との関連を思わせるもので、一括して扱った。

埼玉の MAIME は、MAMIE の音位転倒形と見ることができよう。北陸の MAIME は、埼玉のものと同系路によって生じたとも考えられるが、付近の MAIGE, MAIYA などと前部要素が一致することから、これらと MAME などが混交して形成されたものとも考えることもできよう。愛知を中心とする東海地方のもの、四国のものの発生はよくわからないが、北陸のものに準じて考えるべきであろう。石川の MAAME は、付近に MAME があって関連を思わせるが、MAIME との関係を考えるべきであろう。

MAYUME は、茨城・愛知に各1地点、埼玉に2地点現われるが、MAIME がさらに合理化された語形であろう。

茶の符号で表わしたものは(MĪMACĪGĪ だけは、前に説明した MIIMAYU などに準じて紺とした)、マツゲの類である。眉とまつげ(睫)とは、元来別物である。しかし、調査の際、往々にして混同することが多かった。また、現実と同類の名称を持つことも、ないわけではない。たとえば、2763.89, 2795.01, 3619.08, 4687.01 などでは眉とまつげを別語で言い分けないという。参考

のために、各調査地点からの報告中、好意的にまつげの名称を注記したものから、抜粋してみると次の通りである。

メゲ——7208.96, 7374.75, 7375.37, 7383.83

メエゲ(眉毛の意味なら、この地図では MAIGE の中に分類されている)——4697.92, 7357.30, 7386.63, 8316.20

メヒゲ——6377.11, 6415.78, 6472.05

マヒゲ——7349.86, 7349.91

マスゲ(眉毛の意味なら、この地図では MAHIGE に分類されたであろう)——6485.35

マミゲ——4687.01, 4697.92

地図によって点検すればわかるように、これらのうちほとんどは、眉とまつげとを別語によって区別しているが、4687.01のように両者ともにマミゲと言う地点も、現にある。まつげについて全地点の調査のないのは残念であるが、この地図で、マツゲの類を、単なる誤解として斥けなかった所以である。ただし、この地図におけるこの類は、分布もあまりはっきりしていない。このことから、在来の語形を標準語形にとりかえようとするとき、何らかの理由で行き違いが起り、そのまま定着したものが多いのではなかろうか、とは言えると思う。

KONOKE から KABUNOKE まで、紺で示した類は、多少の変種はあるが、同類と認めることができよう。凡例最後の KABUNOKE(実際の情報はカブヌケであった。凡例では他と並べるため KABUNOKE とした)だけが北海道であるが(この調査地点の被調査者の両親は青森県東津軽郡平館出身)、他は、地理的にすべて連続している。東北地方独自の語形と言うべく、国語史上の位置は、いま不明である。

これらの類のうち、KE の部分の音声はほとんど ge であり、ケに対応するものと認められるので、すべて KE とした。10地点ほど ne の表記もあったが、はっきりした分布が認められず、個別的なものとしてすべて KE にまとめた。

これらの語形のうち、KONOKE がもっとも優勢であるが、地域が連続し、もっとも新しい勢力と考えられる。KOONOKE, KANOKE は、ともに分布地域が分断され、KONOKE より古い形、KONOKE の祖先ともいべき語形と考えられる。KOONOKE と KANOKE の前後関係については、はっきりしない。しかし、岩手県海岸部では KOONOKE が分布領域を分

断されていることから、KOONOKEの方が先行するのではないかと思われる。北奥・飛島のKAONOKEは、KANOKE(青森のものはKONOKE?)から(民間語源を基礎として)変化したものであろうか。なお、106図「かお」の図でもわかるように、この地方はツラの勢力が強いことも注意しておきたい。青森にはKANOKE, KANNOKE, KAWANOKE, KAMONOKE, KAMINOKEなどこの地方独特の語形が現われるが、おそらく、この地方で独自に発生したものであろう。岩手にもKAMONOKE, KAMANOKEがあるが、これも青森のものに準じて考えるべきものと思われる。

## 112. ものもらい(麦粒腫)

ものもらい(麦粒腫)に関する各地の言い方は、きわめて多様であった。変種の統合も、かなり大幅に行なっている。作図にあたって、語形相互の関係が明白でなく、符号の色や形の配分に関して、かなり迷うことが多かった。

橙の符号で示したのは、乞食にあたる、あるいはそれに準ずる語形である。治療法の俗信とむすびつづくものが多からう。

MONOMORAIは現代標準語形であり、関東を中心に領域を持つとともに、山形およびその周辺、静岡・愛知付近、島根東部にまとまった領域を持ち、その他各地にわずかではあるが点在している。

この見出しの中には、静岡・愛知に点在するモノムライ、3761.21のモノモリ、5615.28のモノムネエ、4647.87のモノボレ、5605.70のモノモネ、6635.44のモノモライ、6557.36、6731.03、7324.96のモロモライ、6698.61のモロメダイが含まれている。なお、もらうという動詞については、『日本語地図』第2集76図を参照されたい。

MONOGURAIは、新潟西部に3地点、栃木北部に1地点だけであって、MONOMORAIの変種と扱ってよかったかも知れない。

MENOMORAIは、鳥取・島根県境付近にややまとまって分布するが、その他九州西北部ほか各地に点在する。そのうち6642.33のものはモノムライであり、秋田・愛知・三重に各1地点見られるものは、モノモリであった。富山のものは、メンモリである。MONOMORAIから、民間語源を基礎として<モ>メ変化したもの

であろうか。一方、あとで述べるINMORAI, IMORAIなどとの関係も考慮すべきであろう。なお、東北地方は110図でもわかるように目はマナクという地帯である。

MEMORAIは、北陸・淡路・九州に見られる。この見出しの中には、北陸から岐阜北部にかけてメモライと混在するメムライ、種子島のメモオラ、6448.23、6576.56のメモリ、5558.33のメエモリ、5520.16、5576.96、5586.70のメボライ、佐渡および淡路のメブリ[meburi, meburui]、7365.87のマモライが含まれている。MONOMORAI, MENOMORAIとの関係とともに、INMORAI, IMORAIなどとの関係も考慮すべき語形であろう。

MEMORAは、岡山南部・五島などに見られる。かなりの変種が含まれている。6454.88、6465.40のメモオラ、5579.79、7266.60、7274.57、7275.24のメムラ、6474.03、6475.32のメボラ、5595.89、7266.09、7284.16のメブラ、6464.90のマモオラ、7266.92のマブラ、7246.45、7380.26のメモリヤである。最後のものは、MEMORAIに含めるべきものだったかも知れないが、その関係はよくわからない。語形としてはIMORAに近いが、地図上の分布では近くない。

MEMOROは全国に6地点である(55のますに4地点、7351.09に1地点、7266.34[メエモロ]に1地点)。このあたりになると、乞食にあたる語形とは考えにくい。地域的にMEMORAI, MEMORAに隣接しているので、橙の符号を与えた。しかし、あとに出るMEMBORO(紺のY印)との関係も、当然考えるべきであろう。

MOROMEは、新潟北部にわずか1地点である。地域的にはMEMOROに隣接しないが、関係はあるに違いない。

MESIMORAIは、飯貫いを意味しよう。長崎に2地点、宮崎に4地点である。語形としては、MEMORAIとの親近関係を考えるべきであろう。ただし、どちらが古いものかよくわからない。地点数を根拠とすれば、MEMORAI>MESIMORAIということにならうか。一方、宮崎においては、意味的、地理的にIMORAI(飯貫い?)との関係も考えられる。

MORAIは、宮城・福島県境の2地点を除くと、あとはすべて九州西北部に分布する。変種としてここに入れたものには、福岡北部6地点のモライボ、7321.46の

モライモン, 天草 7390.71 のモライソオがあった。MONOMORAI その他が切断されて生まれた語形であらうか。

MOREMORE は, おそらく前項の疊語であろう。ところが, 地域的には MORAI の主領域と離れ, 山形から新潟北部にかけての地域に限られる。変種には, 4609.25 のモリモリ, 3695.55, 3699.25 のモネモネ [monemone], 4638.22 のメロメロがあった。

以上2項の使用地域で, 乞食のことをモライ(〜), モレモレと言うかどうかは不明である。

MONO は, 宮城・山形・宮崎に各1地点, MONO-MONOは, 新潟西部に1地点のみである。MONOMORAI の切断形か, あるいは抽象語モノ(物)または魔ものなどを表わすものが流用されたものか, よくわからない。元来 MONOMORAI のMONO-も, 実質的な物なのかどうか。魔もの・鬼神といったものだったかも知れない。

MONOME, MEMONO は, 前2項の MONO に ME が接続して誕生した語形であらうか。それとも MOROME, MEMORO などと関係のある語形であらうか。よくわからない。それぞれ, 宮崎・新潟に各1地点しか現われない。

MONOURI は, MONOMORAI に意味的に隣接している語形と考えられる。ただし 5613.48 はモノウリであったが, 7355.48 のものはウリモンであった。いくつかの表現が混在する中で誕生した語形であらう。

KOZIKI という形ですばりともものらいを表わすところは, 山梨・長野に各1地点, 岐阜に2地点しかなかった。多いのは MEKOZIKI であった。中部地方と紀伊半島南部に分布する。内部は大きく三つの類に分類できる。まず長野北部のメッコジキ, 次は静岡およびその周辺のメコンジキ, およびその他のメコジキである。5579.10 だけはメコジボという表現であった。付近のメチンボ(茶)と関係があらう。KOZIKIME は, 6633.33 わずか1地点であった。語形としては似ていないが, 意味的に MONOMORAI と関係が深いものと言わなければならない。MEKOZIKI は MEMORAI と平行する語形であらうか。

HOITO は, 秋田および中国地方に顕著である。秋田およびその周辺にホエドなどの変種が現われる。この地域では, またホイドコという表現もいくつかあった。中国地方およびその周辺では, ホイトよりむしろホイト

オのように語末に長音の現われることが多かった(『中国地方五県言語地図』242 図「乞食」参照)。両地域を通じて語頭に唇音の認められた地点は次の通り。[Φoédo]470 0.37, [Φedo] 3781.21, 3791.02, [Φedoko] 3780.65, [Φe:to] 岡山南部に6地点。

HOITA は鳥取に限られる。『全国方言辞典』『中国地方五県方言地図』などによれば, この地方では乞食をホイタと言うとのことである。

HORUTE は石川南部に1地点である。周囲に分布する語形との類似もなくよくわからないが, かりにここに分類した。

MEBOITO は中国地方に現われる。MEKOZIKI などと平行的に考えるべき語形である。島根東部(およびその周辺)以外では, メボイトオのように語末に長音の現われることが多かった。

MEBOITA は, HOITA が鳥取に限られたにもかかわらず, 島根東部にも現われる。なお, 6414.25 はメホイタ, 6424.20 はメボイタアであった。

HOITONROYADO は, 6462.52 ただ1地点であった。

以上, 地図で矢印の符号で示したホイトの類を比較すると, ME の接頭するものが ME の接頭しないものに取り囲まれており, 前者が新しい発生であることを思わせる。

KANZIN は天草に3地点(すべてクワンジン), MEKANZINは天草に2地点(ともにメクワンジン), 伊豆半島に2地点(メカンジン)である。ZENMON は天草に5地点(うち3地点はジェンモン), YAKKO は, 北海道に1地点, 秋田に2地点である。

KANZIN, ZENMON, YAKKO は, 『全国方言辞典』によればそれぞれの地域の乞食を意味する語形であり, MONOMORAI, KOZIKI, HOITO などとともに, 同一発想にもとづく語形と考えられる。

沖縄(伊良部島)の ĪKOYA [ʔi:koja] は, 飯(いい)乞う者を意味すると考えられ, KANZIN 以下に準じてよかろう。

緑の符号を与えたものの中には, いろいろのものが含まれている。IN- が語頭に来るもの, それに準ずるもの, および IYONOME, それに準ずるものなどである。これらを一括するには問題があるかも知れない。

INMORAI は, 前にふれた MONOMORAI, MEMORAI, MORAI などと, 語形として通ずるもので

ある。主として鹿児島に現われる。変種としては 5549.55 のエンモリ, 8333.92 のインモリン, 7384.16 のイヌモライ・イヌモリヤ, 6583.41, 6583.93 のイモモライなどがある。インモリンを除いた他は、鹿児島から離れ、またこの類で鹿児島から離れたものすべてである。奈良南部のイモモライは MESIMORAI と比較すべき語形とも考えられ、別種として扱うべきかも知れないが、付近に IMORA があり別見出しを立てることはひかえた。IN-の部分は、鹿児島各地で何と意識されているのであろうか。

IMORAI は、北陸その他各地に点在する。変種として 5518.71, 5527.15 のエムライ, 6437.07, 8354.14, 8363.51 のイモリ, 8341.94 のイモネ, 5558.33 のユウモリ, 8394.01, 9303.88 のイモオラア, 8393.69 のイイモオラアがある。最後の例を根拠として I- が飯(い)であると考えるなら、MESIMORAI と同一発想の語形ということになるが、どうであらうか。

IMORA は、MEMORAI に対して MEMORA があるのと平行的に、IMORAI に対する語形であらう。これも各地に見られる。変種としては 5620.30 のエボラ, 6424.47 のイモオラ, 7502.91 のイモダ, 6583.93 のイモジャがあった。富山西部のエボラは、いぼ(疣)がこの語形発生に関係しているかも知れない。

ENBORO は、橙の MEMORO に対して MEBORO を紺にしたのと同様に、紺の符号を与えるべきだったかも知れない。富山に 1 地点である。

INNOMONO は 8352.40 にわずかに 1 地点である。鹿児島に見られる、全国 1 地点の語形は、ほかに INNOKO(8331.98), INNOBEBE(8341.12), INNOCUBU(8300.87)などがあるが、ともに何を意味するかはっきりしない。ただし INNOMONO の -MONO の部分については、MONOMORAI の MONO- や MONO-(MONO), MEMONO, MONOME の MONO と関係がありそうである。

INNOME は、鹿児島(8360.39), 鳥取(6426.47)に各 1 地点である。INMORAI, IMORA などからの変形であらうか。語形としては INNOBEBE と通ずる。奄美諸島の INMI も同種のものであろう。

INNOCYONBO は、インノチョンボ(8320.98)とインノチンボ(7320.95)をまとめたものである。後出、茶符号の MECINBO, MECYONPO などと関連づけることができよう。INNOBEBE, INNOCUBU な

ども、意味的関連のあるものかも知れない。

INNOKUSO は九州各地に優勢である。それにもかかわらず、変種はわずかに 8239.31 のエンノクソ, 7312.83 のインモクソだけである。犬の糞を意味すると考えられているのであろう。次の見出し YOROKUSO は、8352.29 1 地点だけである。これは INNOKUSO の変種と見ることができかも知れない。IN-の類の中で、なぜ突然にクソが現われたものか、よくわからない。意味的には INNOCYONBO などと何か関係があるかも知れないが、ともかくこの語形が発生すると同時に、この地方の人たちに好まれ普及したものである。ものもらいはわずらわしいものである。犬の糞という命名が、邪魔ものに対してふさわしく感じられたのであろうか。

INDEE 以下 MIIBIRE までの諸語形は、すべて琉球列島に見られる語形である。相互に何らかの関係がありそうに思われるが、具体的にはわからない。各見出しに共通する MI-, MI-, MII-の部分は目にあたり、IN-(I-)の部分は南九州のそれに連絡するものであるとまでは、言えそうに思われる。ここでは諸語形を 11 個の見出しに分類したが、実はかなりの変種があった。MINDEE に含めたもの、ミンザイ(2095.60), ミンダニ(1251.98)。MIPIINDEE に含めたもの、ミヤンデエ(1148.59), ミヤンレエ(1169.84)。MINBEE に含めたもの、ミイベエ(1232.75, 1233.61)。MIPIINBEE に含めたもの、ミイウンベエ(1242.72)。IBIRI に含めたもの、イビレ(0265.96), イビル(0247.56), エビル(0238.55), イピリュ(0257.12), イピリン(0228.96)。IBIRAA に含めたもの、イブリヤア(1213.75), イブレエ(1223.91)などであった。134 図「(大きい)ほくろ」で、高知などにイピラが見られるが、関係のあるものが含まれている可能性もある。

INNUYAA は、沖縄八重山独特のことばである。HOITONUYADO(6462.52)などとの関係を考えてみたいが、あまりにも距離がある。

IYONOME 以下 NOGI までは、語形の観点からも、地理的分布の観点からも、相互に関係あるものと見るとは、問題がなからう。しかし、INMORAI 以下、INDEE 以下とともに同類とすることには、異見があるかも知れない。しかし、最初の IYONOME をとると、1 地点は青森(2795.01)であるが、もう 1 地点は熊本(イウノメ——8302.55)であり、語形的、意味的に関係のありそうな INNOME, INMI が鹿児島・奄美にある

ことから、まったく無縁のものとは言い切れない面がある(もともと、これらはいわゆる「うおのめ」との関係から各地で発生したものとも考えうる)。

さて、これら7種の見出しのうちもともと分布の広いものは NOME であり、これが諸語形の中核となっていると考えられる。NOME については、変種はあまりない。ノオメ(4762.04)、ノメコ(3785.42)だけである。NONME は福島南部と八丈島にだけ見られるが、八丈島のものは3地点ともヌンメであった。NOMI は、岩手東半部を主領域とし、別に、青森・秋田に各2地点、福岡に1地点現われた。秋田のうち1地点(3731.61)はノミコであった。NOGI は下北半島に2地点見られる変種である。以上 NONME 以下 NOGI までは、NOME と非常に近い関係にあるものと考えてよからう。

YONOME は、IYONOME と通ずるもので、ともに NOME の合理化語形であろうか(九州のIYONOME は INNOME との関係も考慮すべきである)。青森の津軽を中心にまとまった分布を持ち、新しい発生を暗示する。岩手のものはエノメであった。なお、2793.51のものはヨノメッコであった。

YOME は、YONOME からの変形であろう。分布からは YONOME より古いものかとも考えられるが、うち2782.16、3702.81がヨメコ(嫁コ?)であることなどから、後出の OHIMESAN、DANNASAN などと比較すべき一種の美化語形と考えておく。

この NOME の類は領域が広く、しかも各所で分断されており、東日本における古い表現と考えられる。『全国方言辞典』によれば尖っていること、尖端のことを茨城県猿島郡・埼玉県北葛飾郡・群馬でノメと言うそうであるが、関係があるであろうか。さらにもし九州の IYONOME、INNOME などと関係づけるならば、国語史上非常に古い表現ということになる。

次の紺で示した3種の見出しは、語形的に関連あるものとせざるをえない。中でもっとも優勢なのは沖縄宮古諸島を中心とする MIINALĪ で、目の果実(naʔi)を意味するのであろう。もともと MIINALĪ の中にもミマイ(2140.49)などの変種はあった。MENONAI は5538.88に1地点、MINAU は1211.69に1地点であった。後者は MIINALĪ に準ずべきものであろうが、前者はよくわからない。富山で NAI とは何を意味するのであろうか。あるいは、MONOMORAI の見出しの中にまとめたモノムネエ、モノムネなどの末尾部分と、関

係があるかも知れない。

BAKA 以下 MEGO までは、一種の擬人的な特殊な表現をまとめた。

BAKA は、北海道を除くと、ほとんど宮城を中心とする地域に分布している。岩手・山形のは、宮城からの侵入と考えられる。NOME の領域を分断しているところから、NOME より後に発生した表現であろう。バカ(馬鹿)という命名の理由は、このできものの性質(邪魔物である、あるいはじきに直るなど)にあるのであろうか。仙台では古く目まいのことをバカと言ったというが(『全国方言辞典』)何か関係があろうか。九州にもわずか2地点(7266.09、8342.35)ではあるが、この BAKA が見出される。これを根拠に BAKA の古さを主張する考え方もあろうが、ここでは平行発生と考えておく。

OHIMESAN は、福岡・熊本を中心に現われる。7311.68、7333.51、7364.34のオトヒメサンも含めてある。一般に、INNOKUSO との併用が目立つ。INNOKUSO があまりに汚いために、新しくそれにかわる表現として誕生したものかも知れない。あるいは、INNOKUSO についても同様であるが、タブー的なことがあって、特に穢れた名を与えたり美しい名を与えたりして、治療に役立たせようとしたものかも知れない。分布の様相からは、INNOKUSO より新しいものと考えられる。

DANNASAN は、擬人的な点では前項と一致するが、領域は、秋田南部である。カードを見ると、両地点とも上まぶたにできたものとの注があるが(下まぶたのものは両地点とも HOITO)、命名の事情は OHIMESAN と通ずるところがあろう。

OKYAKUSAN は、次の MAROOTO と意味的に通ずる。佐賀・長崎に5地点のほか、宮城北部に1地点ある。擬人的であって OHIMESAN・DANNASAN と共通するが、実はその点では橙の符号の乞食の類も同様であった。乞食の類をやわらかく表現したものと考えるべきかも知れない。MAROOTO は、中国中央部に5地点のほか、四国にも2地点現われる。マルオト(6422.77)、マルト(7431.08、7461.39)、マルプト(6443.00)を変種と認めた。

MEMARU は新潟西部に1地点である。MEMARA などと関係づけるべきものだったかも知れない。

MEKOZOO(6655.38は単にコゾオ)は、MEKOZI-



KI と語形の上で似ている。

NANASI は佐賀・熊本・鹿児島に現われる。変種はナラシ(8229.96), ナイワズ(7330.77, 7340.24, 7340.27, 7341.42), ナモタズ(8311.41), ナモタツ(8311.63)である。OHIMESAN の説明で述べたタブーの現象と関係があるか。本集 124 図「くすりゆび」に共通する名称がある。

MEGO(4761.07 の [meŋo] を除いて [meŋo]) は、「めごい」と関係がある。BAKA の中に対極的な表現が発生したものと思われる。ME- の部分に目の意識があるかどうかはよくわからないが、110 図などが参考になるか。

GOKINOZOKI は紀伊半島南端(7533.12 はゴケノゾキ)であり MEKAGO, MEKAIGO は群馬を中心とする地方である。同色を与えたのは、ともに椀・籠などの道具による命名だからである。治療に関する俗信が関係していよう。分布の上では、両者とも MEPPACU・MEBACIKO および MEKOZIKI と接しているが、その意味するところは汲みとりにくい。MEKA(I)GO は NOME の地域を分断しているから、新しい発生と考えられる。

茶の符号で示した MEHUGURI 以下は、何か性器に関する、あるいはそれに類する要素を持つ類である。中にははっきりしないものもあり、また、他の類に(たとえば INNOCYONBO などのように)関連のありそりなものもある。

MEHUGURI は、佐渡とその対岸、および和歌山の山間部に分布する。変種は 7501.68 のマフグリ、佐渡とその対岸は 4648.42 を除いてメフングリ、6591.57 はマフングリ。したがって見出し語形は MEHUNGURI とするほうがよかったかも知れない。

MENGURI は、佐渡のほか富山・岐阜の県境に 1 地点、遠く八重山に 1 地点である。佐渡は 4653.02 を除いてメグリ([me<sup>g</sup>uri, me<sup>g</sup>uri] を含む)、5558.33 はメエグリ、2074.69 はミングラアであった。以上 2 類は佐渡における地域の隣接・語形の類似から、関連のあるものと見るのが穏当であろう。西日本の古い表現と見ることが出来るかも知れない。MONOGURAI の -GUR- は、これと何か関係があるか。グリグリするといった擬態語との関係も考えたい。

MEHUGO は岡山南部に 2 地点である。語形の類似からここに配列したが、フゴはざるのことだということから

(『全国方言辞典』)、空の符号を与えたほうがよかったかも知れない。

MECINBO は、能登・富山・岐阜北部・長野・愛知に現われる。変種はメチンボ(5507.09, 5507.20, 5558.87), メツンボ(4588.98, 4598.33, 5548.58, 5558.09), メチン(4597.72)である。富山・岐阜付近では前述の MENGURI に隣接し、関連を思わせる。

MECINKE は、奄美諸島に 1 地点である。

MECYONPO は、能登のほか、新潟西部・佐渡に各 1 地点現われる。7229.50 のものはメチンボ、5611.39 のものはメチンゴであった。

MECYACYA は奈良に 1 地点、METOPPO は志摩の神島(メトンボ)、佐賀(メットンボ)、鹿児島に各 1 地点、METONGYO は長崎に 1 地点であった。後者の -TONGYO は、128 図「くるぶし」に現われる NAKUBESUTONGOO の後部分と何か共通性を感じさせる。

これらの諸語形は、どこまで共通性があるか不明であり、また分布の上でも散在といわざるをえないが、一方無関係とも言い難く、分布では西日本の周辺という点で統一的に見ることが可能らしく思われる。東北・関東に皆無であるという点も、消極的には共通点とすることが出来るかも知れない。

MEMARA は能登・福井に計 3 地点である。MECINBO との関係も考えるが、語形としては MEMORA との関係も考えねばなるまい。

MEGATANE は石川 4 地点、富山 1 地点である。『全国方言辞典』によるとカタネは腫物を意味するらしいから、凡例末尾のほうにある MEGASA, MENE BUTO などに準じて取り扱ったほうがよかったのかも知れない。

MEMANZYA は隠岐と出雲である。5471.51, 5472.31, 5472.34, 5472.91, 6401.89, 6411.33 はメマンジョ、5462.29, 5462.57, 5463.12, 5463.64, 5463.73 はメマンジャ、6402.53, 6402.94 はマンジャであった。

以上 3 項のうち、前 2 者は分布の点で他の茶符号に隣接しているが、最後のものは孤立している。わずかに MEHUGO に近いと言えようか。

以下の紺符号のものは、MEP-, MEB- の類、およびその他ということになるか。

MEPPA は、中部・関東・東北の各地方に点在するものの、主領域は北海道にあり、特色がある。中部・関

東・東北における MEPPA の分布は、この語形が中央日本から伝播していった(ある時代は発展性のある語形であった)ことを思わせるが、現在の東北方言の主力語形でない MEPPA が北海道に定着していった過程には興味を持たれる。変種はメンバ(3679.64), メンバア(6645.01), メバ(2762.61), ネバ(3712.15)である。

MEPPARI は、新潟西部に1地点である。MEPPA-ISYO は伊豆諸島に3地点(6677.41 はミッパイシヨオ, 6777.70 はメッパイチヨ, 6686.75 はメッパイシヨオ)である。MEPPAZIKI は群馬に1地点、MEBA は青森、DEBA は新潟北部、石川南部に各1地点である(MEBA 対 DEBA の関係は、後に出る MEBA-ICIKO 対 DEBACUKO と平行的である)。MEPPARI 以下 DEBA までは、語形の上からも分布の上からも、MEPPA の変種と考えられよう。

これらに対して MEPPACU は、新潟中南部を中心にかなりの領域を持っている。ほかに北海道に3地点(これらは 4695.33 とともにメッパチ)、岩手東部に2地点(3766.47 はメッパズ、3737.32 はメッパジ)、群馬に1地点(メッパチ)見られる。MEPPA から変化してできたものか、あるいは逆に MEPPACU > MEPPA の変化があったかよくはわからないが、おそらく前者であろう。

MEBACURI は福井に2地点、長野北部(メッパツレ)に1地点である。前項と関係がありそうに思われる。

MEBACIKO は、大阪を中心にひろがる領域を持っている。志摩・滋賀・香川のほか宮崎南部にもある。全語形の中で、もっとも新しいものうちのひとつであろう。宮崎のものは飢肥藩との関係を考えるべきである。変種にはメパチコ(6469.19)、メバツコ(多数)、メバツコ(6476.17, 6485.82)、メバツチヨ(6550.13)、メボツチヨ(6563.84)、メバツボ(6550.96)、メバツク(6571.63)、メバチ(点在)があった。

DEBACUKO は、兵庫・大阪・和歌山に現われる。前述の MEBA 対 DEBA の場合と同様に、MEBA-ICIKO と密接な関係があろう。分布の様相から MEBACIKO > DEBACUKO が考えられ、領域の中心でふたたび MEBACIKO が復活したものと思われる。変種にはデバチコ(7500.24)、かなり多いデバツク、デボツク(6560.40)があった。

以上の2項は、分布の様相から MEBO などと関係がありそうに思われるが、まばたきを意味するメバチ

(『全国方言辞典』)が関係があるかどうか不明である。-BACI-の部分をもとにするならば、あるいは GOKI-NOZOKI, MEKA(I)GO などに通ずるものかも知れない。

MEPPASU は新潟に5地点、MEBASU は紀伊半島に2地点である。両者とも、ハスという腫物(『全国方言辞典』)と関係があると思われるが、この語形のあることから、MEPPACU(新潟)と MEBACIKO(近畿)との関係が推定できるようになる。MEPPASU, MEBASU の近傍に、両地域とも MEHUGURI のあることは、何か意味があるのであろうか。

MEBO は次の MENBO(MEPPO—志摩・福岡に各1地点—と比較せよ)とともに近畿地方の周辺に分布し、西日本方面へも領域をのぼして、一時代前に隆盛であった表現と思われる。

MEBOCU は四国東部に5地点、MEBOCCI は三重に2地点(6546.73 はメボチとメボチンの併用)、奈良および広島に各1地点(メボイチ)あらわれる。両者は当然関係があり、また多分、ともに MEBACIKO と関係があると考えられる。MEBO と MEBACIKO との混交形かも知れない。また、メボイチは MEBO-ITO との関係もあるはずである。広島では両者が併用されている。

MEBORO は富山西部のほか、佐渡、北海道にも見られる(4672.19 はメブロ)。MEB-の類とすることは許されようが、一方、橙の MEMORO との関係も考える必要がある。MEMORAI などと MEBO との混交形であろうか。

MEIBO は、目疣であろう。7407.36などはメノイボであった。分布から見て、MEBO から民間語源を基礎として(あるいは MEBO の前要素が長音化することを介して)生まれたものであろう。MEBACIKO の誕生より一時代前のことであったと思われる。

MIIBU は琉球列島に現われる。MEIBO にあたるものであろう。

IBO は、全国に6地点である。MEIBO から ME の部分が切れてしまったものであろうが、疣をあらわすイボが混じているかも知れない。京都北部・三重・愛媛のものを除き、兵庫西部・奈良のものはイモと報告されている。

MEBOSI(山梨・静岡のほか、北海道・青森・岩手に点在、別に福井の5584.22)は、HOSI(北海道に2地

点、宮城・福島・長野に各1地点)とともに、別の眼病のことをさすかとも思われるが、併用の場合特にそれを証する注記はなかった。埼玉のMEBOSIは、本当はメボオンであった。伊豆半島のメコゾオなどと、意味的な関連を考えたほうがおもしろいかも知れない。

MEBOSOは、北海道・島根に各1地点である。語形の類似からMEBOSI, MEBASUなどとの関係も考慮すべきであろうが、あるいは目疱瘡と考えられているのかも知れない。別に、次のような別病名を持つものがあつた。

MEGASA——長野・京都(これはメカサ)・熊本・沖縄の宮古諸島。

MENEBUTO——静岡・岐阜の3地点以外は九州。静岡のものはメネブツ。8312.33はメネット。8342.35はメネヒト。8310.87はメネフトとメネツツの併用。8312.75はメネツツ、8323.59はメネツ。

MENEBU——これは前者の切断形であろうか。大分・宮崎。

NEBUSI——MENEBUTOとの関係があるかも知れない。地域は離れている。兵庫西部。

MEGASA以下、各地で独自に発生したものと見るべきであろう。次に掲げるものは、その他としてもよかつたかも知れないのである。

MENEGUMO——茨城・千葉の県境。5791.07はミネゴモ、5791.23はマナゴモ。

MEKUBO——三重と兵庫。

MEKUSARE——新潟北部・広島南部(これはメクスアリ)

MEKUSA——福井。前者の切断形?

MEKAGE——宮崎。目欠け?

YAME——高知。病み目?

MEHADAKO——伊豆半島。

「その他」(20地点ほど)に分類したものの中には、次のようなものがあつた。メナ(3727.21),メダンベ(5611.81),ナツムシ(6551.18),メッピイ(6665.25),ホトキサマ(7235.24),メバクロ(7514.21),ミイアアラア(1221.47),ミイナンベエラア(1242.00),ミイヌウトウグワア(1261.16),ミイシュウブ(1270.26)。メバクロのようにMEBACIKOと関係があるかも知れないもの、ホトキサマのようにOKYAKUSANと意味的に関連のありそうなものもあるが(あるいは「ひとみ」の意味の転化?),すべて各地で独自に発生したものと「見てきしつ

かえあるまい。

以上で凡例をひとつひとつ検討したことになるが、以下地図全体を巨視的に見渡した場合のことを記してみよう。

全国を見渡すと、緑の符号で示した類が国の両端に分布していることがわかる。古いものの残存としたいところであるが、東日本のもの、西日本のもの、琉球列島のものが別類かも知れないので速断はできない。しかし、東日本におけるNOMEはかなり古そうに思われる。西日本については、IN-が古そうに見える。ただし西日本では、茶の符号で示した類の方が古いものかも知れない。

中央の力を背景に全国域に勢力をのぼしたものは、橙の符号で示した乞食の類である。各地域独自の語形となっているが、治療法に関する俗信を基盤にして伝播したものと想像される。各地のINMORAIなどは、在来のIN-と乞食類の混交形であろうか。

MEB-, MEP-の類は、比較的新しい勢力と思われる。中ではMEPPA, MEBO (MENBO)などが古いものであろうが、前者は東に、後者は西に勢力がある。東のMEPPACU, 西のMEIBO, MEBACIKOは、それぞれそれらの後身と思われる。ある時期に国の中央ではMEIBOが勢力を持っていたが、後MEBACIKOがそれにかわつたのであろう。

各地で誕生し発展したと思われ、しかも広い領域を持つものには、東から見るとBAKA, MEKA(I)GO, INNOKUSO, OHIMESAN, MIINALIなどがある。

### 113. はな(鼻)

きわめて単純な地図である。そのため、見出し間の区別を表現するために、色の区別を利用しなかった。

ハナ類が、若干の音変種を持ちながら、全国的に分布している。ほか、紺で示したこれに接尾辞のついた語形が、わずかに認められる程度である。つまり、この地図には、まったく異なった類の表現はない。この地図で「その他」に分類したものは[hano]4653.84, [kana]4711.41であるが、ハナ類でないとは断定しがたい。

このような全国が同語類で覆われる項目は、単語の全国図として採り上げられることは一般にすくないが、実はこの種の語は日本語の中に他にもかなり多いはずで、注意を喚起する意味もこめてここに示した。

見出し最初の5項、即ちハナの音変種は、ほとんどが

その頭子音の音声の差による。すなわち、HW-は両唇摩擦音の〔Φ〕であって、秋田・奄美・沖縄に分布、P-は両唇破裂音の〔p〕であり、琉球列島に分布している。これらは規則的な音声現象の現われと思われるが、ハ行音全体がこれに従うというより、後続母音がAの場合における、という限定で考えた方が無難であろう。ヒの音声については、第1集の11図・12図に示してあるが、この113図と分布の傾向は似てはいても地点が必ずしも一致していない。なお、この現象は、国語史上の古音と言われている〔p〕〔Φ〕の音が辺境の地に残存しているものと考えられるが、琉球のものは、それがカ行子音を〔h〕に発音することと関連させて考えるべきものである〔h〕がすでにあれば〔p〕〔Φ〕は〔h〕になりにくい。

以下の見出しは、ハナに接尾辞がついたものと思われるが、このうち、福島県のHANADOが最も優勢である。この語形は「鼻処」に由来するのであろうか。ほとんど無アクセント地帯に含まれることは、「花」との区別にこの接尾辞が役立っているのかも知れない。HANADOとHANAを併用している地点では、HANADOが古いという注が多く見られている。

この項目は、地図左下に示したような質問文によって調査したものであって、鼻の先だけを言うとか、小鼻の名称などの注のある語形は図から除いてある。特に注がつけて報告されなかった語形は、鼻全体の名称と受け取って地図に載せておいた。

#### 114. みみ(耳)

全国のほとんどがミミ類の語であって、これの音変種と接尾辞などのついたものだけが、地域差として現われている。共通語化の速度が早かったと考えるより、古来、変化のほとんどなかったものと考えべきであろう。なお、将来刊行される「きのこ」(質問項目番号079)に関連する部分があるから比較されたい。

橙の符号で示したものはミミに相当する語形(音変種)で、全国的に分布している。このうちでもMIMIは圧倒的に多い。ただし、この見出しの中には東北・東関東・北陸の一部・山陰の一部に見られる中舌母音を持つ〔mī-mī〕が含まれているから注意されたい。この中舌母音の分布地域は115図「くち」においてチの音が-CĪ, -CUである地域にはほぼ一致しているから、それによって見当をつけてほしい。琉球に分布するMIMII, MIIMI,

MIIIMIなどに現われる長音は、この地方の音(アクセントを含む)の傾向を反映したものであろう。本土にも、九州のMIIMIが散見することは注目される。五島・鹿児島・奄美・沖縄に分布するMIN, MIINなどは、この地方で語末狭母音のIが弱まり脱落して、促音や撥音になる傾向を反映したものである。なお、この地方をとりまいてMIMが分布しているが、これは、MIMIからMINとなる途中の、母音が落ちただけで子音がまだMのまま保たれている段階を示すものであろうか。もっとも、記録者による音声表記の問題と考えるべきものも含まれていよう。東関東から東北にかけて分布するNMI, MEME, MEEMIなどは、これらの地方のIという母音の発音のあいまいさに由来するものであろうが、法則的なものではなく、語形として個別的に生じた形であろうといちおう考えておく。

紺で示したものはミミに接尾辞などのついた形であるが、これらは東北や沖縄に若干見られるだけである。もっとも、これらの接尾辞の中には、あるいは「耳たぶ」とか「耳という場所」という意味を持っているものも含まれている可能性がある。調査の際要求した意味内容は、聴覚器官としての「耳」を求めたものであるから(耳が遠いなどと言うときの耳)、注記などによって明らかに「耳たぶ」や「耳という場所」だけを示したと考えられる報告は、この地図で「その他」として扱った。ただし、注がないもの、および聴覚器官としての耳そのものを示すとの注があるものは、求める内容にありものとして、地図でその語形を取りあげておいた。

なお、沖縄八重山の大浜町白保(2076.99)および波照間島(2095.60)では「目」をMINと言うため(110図「目」を参照)、それと区別してMURUSUKUNUMIN(諸事を聞くMIN)・MISIKURUMINと言いつけているものと思われる。波照間については、『八重山語彙』には「ミシクル・ミー=物聴く孔の義」とある。

#### 115. くち(口)

全国的に、空や紺符号で示したクチ類が圧倒的に多く、方言量の非常に少ない項目である。言語地理学的にみて日本語語彙の中での、基本的なものを見ることができよう。橙の符号で示したYERA, KABACI, OCUMOなどが別系統の語であるが、それらの語もすべてクチ類との併用で現われており、クチ類のものとは少し異

なったニュアンスで用いられているようである。これらの見出しは101図「あたま」、106図「かお」、107図「ほほ」、108・109図「あご」などにも現われているから比較されたい。結局、「口」の方言は全国とも「クチ」であると言ってよからう。

したがって、この図ではクの音およびチの音に関する各地の音声現象の差異をやや詳しく示すことになる。

クの部分にあたる子音がH ([Φ][f][h])のものは紺の細線あるいはぬき符号で示したが、これは沖縄の先島地方にだけ見られる。クの母音についてはUが円唇か平唇か、無声母音であるかなどの問題もあるが、これについては第2集の説明ですでに触れたところがあるので省略する。

チの部分の音声には問題が多い。この子音が無声音のC ([ts][tʃ])のものは空(沖縄先島は除く)、有声音のZ ([dz]など)は紺のつぶし符号で示した。この有声音は、東北地方を中心に北海道南部・新潟北部・東関東に及んでいる。有声音の音声学的な度合は、[dz]([z][dʒ][ʒ]), [tʃ][ts][tʃ]などの表記が見えて一様ではないが、個人差、表記差、発話時による差などを考慮して地図にはまとめて示しておいた。この有声音が「くじ(籤)」などのジと区別されるものかどうかについては、そのための調査をしていないので言及しないでおく。なお、一般に、チの子音などが有声音となっている千葉東北端から栃木西部、新潟東北部を結ぶ線の東側の地域では、その圏内にはいと急にすべての地点で有声音が聞かれるというふうではないようである。この図の場合では、関東から宮城へと北進するにつれその密度が高くなり、山形・岩手・秋田などまでくると全域が有声音となっているが、これはクチのクの母音が関東や東北部では、無声化しやすいことと関係があるかと思われる。

チの母音については、子音の部分の有声・無声に関係なく、標準語と同じような母音である[i]はIと表示して極小符号を与え、中舌母音の[ɨ]はĪと表示して、ふつうの符号を与えた。この音声現象については、すでに第1集の16図「七月のチの音」に示してあり、この115図では比較的大まかに分類してあるが、Ī [ɨ]とU [u] [ü]とを分けた点においてはこの図のほうが詳しい。すなわち、この図によってUが岩手、宮城、山形と福島北部、新潟北部、富山、能登半島に分布することがわかる。これらの地域では「靴」などのツの音との間に区別がないものと思われる。Uの場合と違い、Īすなわち[ɨ]

については、音韻論的にみて2種類あると考えねばならない。すなわち、東北の大部分、北海道西南部、新潟の一部、山陰の一部などのĪは、ツにあたるものの母音も[ɨ]であって両者間に区別がなく、音韻論的にはUと同様の性格を持っている。これに対して福島南部、東関東、北陸などのものは、中舌のためツの母音に近くはなるが、区別のあるものと考えられる。しかし、各地でこのような音韻論的な詳しい調査をしていない現在、どの地点がどちらの種類に属するかは断定できない。沖縄先島地方のHUCĪ, HUCUについても同様なことが言える。なお、16図と比較すると、とくに福島や東関東ではこの図で[i]や[u] [ü]が多くなっているようであるが、直前の母音が16図の語例ではIであることが多いのに対して、この図ではUであるという音声的な環境が関係しているものと思われる。

チの部分がいわゆる促音化する(母音が脱落する)現象は、紺の中ぬき花形符号で示したが、この図では16図の[ʔ]より広く、鹿児島旧島津藩領のほぼ全域に見られている。16図は語中、この図は語末であるという、音声的環境の相違によるものかと思われる。

沖縄の-SIは、音韻法則的なものらしい。TII, TII-BUNIはKU > HUとなり、ついにクが脱落たし結果であろうか。

## 116. くちびる(唇)

全国を大観すると、桃・赤・橙などの符号で示したクチビルなどの類が本州・四国・北海道などに、紺の符号で示したクチバシ、クチバタなどの類が東北北部・静岡などに、緑の符号で示したツバ類が九州と奄美・沖縄などに分布しているということになる。

各類ともクチ〜にあたる部分の音声は、115図(くち)のクチ類の音変種とほとんど同じであったので、この図ではチにあたる部分の音の有声化や中舌母音などの現象を示すことは省略した。この部分の実際の音声については、115図によって見当をつけてもらいたい。クの子音がHであるかどうかだけは区別して示しておいたが、沖縄の先島に見られるだけである点、115図との間に矛盾がない。

桃・赤・橙などの符号で示したクチビルなどの類は、各語形ともピの部分の変種とルの部分の変種との組み合わせによって成り立っていると言えよう。現実には、こ

れらをピの部分の母音によって分類すること、ルの部分の母音によって分類することが可能であるが、前者によって描いた地図は、各語類の領域がはっきりと現われなかった。後者によって分類すると、比較的地域差が見えてくる分布となるので、本図はこれによって符号の色をきめることとした。すなわち、末尾の母音がUのもの(まれにI, 1語形だけE)には桃, Oのものには赤, Aのものには橙を与えることにした。以下, おのおのをクチビル類, クチピロ類, クチピラ類と呼ぶことにする。なお, ピの部分の変種は符号の形によって示した。すなわち, ~BI-は中ぬき符号(ただしKUCIBIRUだけは線符号), ~BE-はつぶし符号である。

クチビル類は、標準語と同じ形のせいか、地域性があまりはっきりしない分布を示すが、しいてその優勢な地域を指摘すれば、北海道と福島・栃木・新潟と山梨・長野・愛知、それに近畿中央部ということになる。このうち北海道と近畿中央部のものは、新しく標準語として広まったものと思われる。九州中南部・奄美・沖縄などに見られるクチビル類は、在来ツバ類の中に標準語形が広まりはじめたものと思われる。山陰のKUCIBURU, KUCIBURI等は、この地方で生じた変種であろう。西関東のクチピロの地帯をはさんで、その東西にクチビルの分布しているのは、クチビルがひと昔前に関東一円とその周辺に分布していたが、新しくクチピロが生じて勢力を得たために領域が分断された結果ではないかと思われる。しかし、クチビルは標準語形であるから関東西部にも根強く姿を見せている。すなわち、現在のクチビル類の中には、たしかに前代の残存と思われるものもあるが、一方、現代標準語形として新しく伸展しつつあるものも含まれている、ということになる。

クチピロは、青森・福島・関東・紀伊半島・中国・四国に分布している。クチピラ類は、近畿の中央部・北部から北陸、東北方面にもびている。この地図の分布だけから見ると、クチピロがある時期は全国的に分布していたところ、その後近畿地方でクチピラが発生し、それが近畿周辺部および北陸を経て東北に伝わったため、クチピロは前記のような地域に残存したと見ることもできよう。

ところが、この図におけるクチピロ類とクチピラ類の分布を、117図「舌」におけるピロ類とペラ類の分布に重ねてみると、クチピロ類の分布は「舌」のペロ類に似ており、クチペラ類の分布は「舌」のペラ、ヘラ類の分布と

通じるところがある。しかも、クチピロ類は「舌」においてペロ類が濃く分布している福島・関東・西中国ではKUCIBEROという語形で多く分布していて、母音までがまったく一致して驚かされる。これについては、120図「ペロの意味」において地点ごとに対照した結果を示してある。このことは、「舌」のペロと「唇」の~ペロとが何らかの関係のあることを示すものと言えよう。おそらく、「舌」のペロという語形が唇のクチビルに影響を及ぼし、類音牽引の現象によってKUCIBIRO, KUCIBEROが生じたものであろう。とすると、この過程が関東と中国の離れた地方で別々に同じく生じた可能性を考えることができるようになる。クチピラ類の語形は、クチピロ類ほど「舌」の場合の語形に一致していないので、類音牽引がどの程度あったか疑問ではあるが、何らかの類推は働いたと思われる。

以上によると、この両類の語形は発生・伝播の時期の新古とは別に、各地で舌の語形などとの関連により、おのおの変形のなされた面も考えねばならない。その場合、「舌」における諸語形の歴史が問題になるが、それは次の117図の解説において考えてみたいと思う。

クチバタ・クチベタ類は東北北部・長野北部・静岡など数地域に現われ、古いものの残存を思わせる。これらの語形は、唇という粘膜部分を取り出した語形というより、口のまわりという漠然とした把握をした語なのであろうか。青森のクチパンは、一地方だけの分布なので、この地方独自の発展した用法かと思われる。多分、付近に分布するクチバタ・クチベタと関連して生じたのであろう。

ツバ類は、九州・山口の一部、奄美・沖縄に分布している。この類の語形を示す符号の色および形は、118図「唾」の場合と比較できるようにしてある。両図を比較すると、九州地方を中心として「唇」と「唾」が同じ語形、あるいは似た語形である場合の多いのに気づかれ、興味深い。以下、それらの概略を対比して示す。

	唇	唾
福岡南部・熊本	CUBA	と CUBA
山口中部	KUCICUBA	と CUZU
山口西部・福岡 東北部	KUCICUBA など	と CUBA
対馬	KUCICUBA	と CUBAKI
佐賀	CUBA	と CUZU
長崎	CUBA	と CUZU・ CUBAKI

		唇		唾
大分		TUBA・ TUZU	と	CUZU
宮崎		KUCICUBA	と	TUZU・ CUBA
鹿児島・宮崎南部		SUBA	と	CUT・ CUBA

以上の対比からもわかるように、「唇」と「唾」とは何らかの関連がありそうである。対馬・北九州・宮崎の KUCICUBA は、付近に分布するクチビルなどの影響があって生じたものかも知れないが、前記のような「唾」と区別する必要から生じたものと考えてみることも大切である。八重山の HUCIノスバは「唇」であることを特に示すため、説明を加えた語形と思われる。

なお、凡例に —SUBA, —SIBA などとしたものは、「唇」を意味する SUBA・SIBA の前に「上」「下」などのついた「上唇」「下唇」という複合語形しか報告がない、すなわち「唇」を示す単独の語が現実には切り取られなかったらしいものであるが、整理の段階で「上」「下」に相当する部分を取り去って扱ったことを示す。117 図「舌」の図と比較すると、沖縄本島およびその周辺では、「舌」と「唇」とが語によって区別されていないことがわかる(なお詳しくは 117 図の説明参照)。

### 117. した(舌)

空の符号で示したシタ類が、近畿を中心にして、山陰方面へ、北陸道から東北北部にかけて、東海道を南関東まで、さらにとんで九州(主として西半)にと、大きな分布領域を持っている。一方、赤の符号で示したベロ類が、東北南部・関東と、中国・四国・九州に分布し、橙の符号で示したヘラ・ベラ類が中部地方にかなりまとまって分布するほか、四国にも見られる。そのほか、緑の符号で示したツバなどの類が、山口・奄美・沖縄に散在する。

シタ類の SITA の中には、東北などにみられる SI の中舌母音や、TA の子音の有声化しているものが含まれている。これらについては、115 図「口」の「チ」の中舌母音および有声化の分布などによって、おおよその見当をつけることができる。北陸・山梨の HETA は、付近に分布する HERA と SITA との混交によって生じたものかと思われるが、近畿西部・大分のものについては、分布から見て HITA からの変化かと思われる。山梨の HETA もあるいはそうかも知れない(107「類」の説明にヘタについて触れたところがあるので参照)。HITA は

西日本、および山梨・東京の一部に分布する。ここは第 1 集の 14 図にもあるとおり、シチを HICI とする傾向のあるところなので、それと通ずる音韻傾向があるのであろう。奄美の大部分と沖縄の一部には、シの部分脱落したと思われる語形がある。紀伊半島の SITANE、熊本の SITANOSAKI などには、「舌全体のことであり」と特に注がついていたので疑問があるかも知れないが採用した。

なお、符号の色は赤や橙を与えたが、SITABERO, SITABERA などのシタを含む語形までを入れれば(地図で四角形の符号をたどる)、シタの勢力が近畿を中心として、北は飛騨・北陸・佐渡から東北北部へ、東は東海道を連続して関東中心部へ、西へは瀬戸内海を経て九州へと広まっていった様子を地図から読みとることができる。おそらく、古い時代に全国がベロであったところへ、このようにシタが主要交通路ぞいに近畿から侵入して行った跡を示すものであろう。

ベロ類の語形は、この図のほかにも 116 図「唇」、118 図「唾」、119 図「涎」にも現われるので、語形の分類および符号の色と形を共通にしてあるから、比較されたい。なお、このベロという語形が、どの意味にどの地域で使われているかを示す総合地図は、べつに 120 図「ベロの意味」として作図した。ベロ類はほとんどが BERO という語形であるが、徳島・九州では BEERO も見られる。ベロ類は、前述のように古くは全国的に連続して分布していたが、のち近畿あたりからシタが四方へ広まって、東西に分断されて残存しているものと考えるのが言語地理学的には妥当な解釈ということになろう。しかし、古典などではベロはほとんど見あたらない。これは、擬音語的な俗語が書きことばとしてはしるされにくかった事情によるのであろうか。一方、言語地理学的には一見残存のように見えても、擬音語であるからこそ東西で同じベロという語形が別々に発生した、すなわち、ベロの方が新しいと考える道のあることも忘れてはならない。

シタとベロの接触地帯では、各地とも両者の併用地点がかなりの幅の地域を形作っている。そしてこれらの地点の多くで、ベロは「子供に向かって言うことば」との注があった。この表現は、2 形併用の場合の注記としてほかの図の場合あまり現われないもので、特色があり、注意しておく必要がある。このほか、「シタは正式なことば、ベロは俗なことば」との注もかなりあったが、この場合

は<併用処理規則>により、地図ではベロの単用としてある。西関東・伊豆半島などの SITABERO は、シタ類とベロ類の接触地帯であるから、両類の接触によって生じた複合形と考えてよからう。一方、116 図「唇」では、この地方はクチベロの分布しているところであるから、「唇」の方にはクチベロ、「舌」の方にはシタベロという平行的な説明意識が働いた結果とも考えられる。

ヘラ類のうち、中部地方の HERA と四国・山口・九州東端などの BERA とが歴史的に関係があるとすれば、方言圏論的に、全国的に、ベロ→ベラ(ヘラ)→シタというように外側ほど古いものということになるが、東西のヘラ類は語形が異なるので、これらはおのおの独自に発生した可能性の方が大きいようである。すなわち、東の HERA はうすい片状のもの一般を表わすものが舌に転用され、ある時期に、たとえば濃尾地方に発生して、東や北に広まったことが考えられる。そして、現在この HERA の分布している周囲、すなわちシタとヘラとの接触地帯に SITABERA の分布することは、さきに SITABERO の発生について述べたと同じく、両者の複合現象が生じたものと言えよう。そして、この SITABERA の付近に BERA が散見するのは SITABERA の前部分が脱落した結果と思われる。ところが四国などの BERA は、このような事情によって生じたという根拠が薄弱である。わずかに、大分南端に 1 地点だけ見られる HITABERA を、HERA から BERA への媒介物としてあげるのは無理があろうし、だいいち、現在西日本には HERA という語形がほとんど見出されていない。西日本の BERA は、BERO の中に分布していることから、BERO の変化したものと考えるのが穏当である。これが四国に生じて、九州東端にも伝播したのではあるまいか。山口の BERA は独自に発生したものか、これらと関係があるのか不明である。大分南端の HITABERA は、分布から見て、大分の HITA と宮崎の BERA が接触複合して生じた新しい形と思われる。

ツバ類のうち、CUBA が山口西端に分布しているが、このうち、地点によっては 118 図「唾」と区別のないところも見出される。奄美は、北半で「舌」が SUBA で、「唇」が KUCIBIRU、南半で「舌」が SYAA などで「唇」が SUBA などであって、地点別に対照すれば区別ははっきりしている。沖縄本島(主として南部)では、116 図「唇」の説明でもふれたように、SIBA(舌)と

—SIBA(唇)のような区別を持っているところがある。地点ごとに対照すると、「舌」と「唇」を完全に同語形で表現するところはないようであるが、上記の地方では、「舌」と「唇」の対立は、地理的にあるいは語形的に微妙であって興味深い。おそらく、古くは両者の区別があいまいであったものが、各地で何らかの方法により区別しようという努力がなされた結果、このようになったものかと思われる。『沖縄語辞典』によれば「舌」はふつうは *šiba*(スバに対応する)であり、*sica*(シタに対応する)は慣用句・比喩的用法の複合語の成分としてのみ用いるという。「唇」については特にそれをさす特定のことがなく、*ʔwašiba*(上唇)、*sicašiba*(下唇)、*šibaʔiru*(唇の色)などの複合語の成分として *šiba* が用いられるとある。この区別は、沖縄本島北部では SICYA(舌)対 KUCIBIRU(唇)、宮古・八重山では SITA(舌)対 ツバ類(唇)であって、これらの場合は、どちらかに標準語と同じ語形を用いて区別をしている。この事実も、この両項目を区別する傾向が新しいものであることを暗示しているよう。

アゴが、静岡および伊豆諸島に分布していて興味をひかれる。108・109 図「あご」を見ると、本土では調査がないため不明であるが、利島・新島あたりにオトガイ・オトゲエなどが分布していて、両者の区別は地点ごとにはあるとせねばならない。

## 118. つば(唾)

全国を大観すると、緑の符号で示したツバ類が広く分布し、これに似た草の符号のツズ類が西中国・九州・奄美・沖縄と紀伊半島に分布している。東北地方にはこれらの類が分布せず、北半には茶のヨダレ類・赤のベロ類・紺のタンペ類が、南半には空のシタキ類が分布している。

ツバ類は、この図のほか、116 図「唇」、117 図「舌」、119 図「涎」にも現われるので、各図とも語形の種類、符号の色・形を共通にしてある。すなわち、CUBA・CUBWAなどをぬりつぶし符号で、CUBAKIなどキのつくものはぬき符号で、CUBAKEなどケのつくものはぬきの中に点のある符号で示した。以下、ツバ類の中におけるこの3種は、それぞれ、ツバ・ツバキ・ツバケ類と呼ぶことにする。この3者の分布を比べると、東日本・北陸・山陰・西九州などにあるツバキが最も古く、



次にその内側の東山・近畿・四国・中国地方中部にあるツバケ、それからキヤケのとれたツバが最も新しいと考えられるかも知れない。しかし、文献によれば、ツバが古く、ツバキ・ツバケは俗な表現として新しく用いられるようになったものらしく、速断できない。近畿地方だけの分布を考えると、ツバからツバキ・ツバケになったと言えるようである。次のような推論も可能かと思われる。古くは身体の部分とそこから出る液体との区別が曖昧であり、ツのような語形があった（ツについては後にも触れる）。のちになって体液についての特称が求められ、「唾」であることも明確にするために「吐き」をつけて示すようになった。少なくとも西日本においてはこの可能性が強く、文献による歴史とも照合する。さらに、キが脱落した。しかし東日本などでは「舌」に対するシタキ(後述)との関係などがあり、ツバとキに分かれる意識も生じ、キの部分に意味が分担され、江戸時代以後は関東の俗語として文献などにも現われるほどの勢力を持った。近畿中央部のツバキ・ツバケについては、新たに復活したものか、現代標準語の浸透によるものなのかよくわからない。東日本のツバは、この地域でキが欠落したというより、東海道・中仙道ぞいに関東地方へ上方のツバが押し寄せたものと考えの方がよかろう。CUWAはCUBAからの音変化と思われ、西日本のものは比較的最近、近畿から広まったが、現在の京都・大阪では再び標準語のCUBAが優勢になったものであろう。茨城のものは、これらとは別個に同じ音変化を遂げたものであろうか。

以上、ツバ類の中に含まれる諸語形の関係について述べたが、さらに、「唇」や「舌」などの地図に現われるツバ類とあわせ、総合的に歴史を考える必要があろう。ツ>ツバキ>ツバ以外の歴史が浮かび上がってくる可能性もある。

この地図におけるツバ類全体と他の類との関係を地図によって見ると、この類は、東に接するシタキ類、西に接するツズ類を圧迫して侵入していることが分布の形により感じられる。

ツズ類は119図「涎」にも現われているので、語形の分類、符号の色と形をそれと共通にしてある。この九州方面における分布の様相は、ツバ類より古いと思われるが、これが全国的にツバの前に分布していたかどうかはわからない。もっとも、会津・紀伊半島のCU, CUUを考えると、ひと昔前には全国的に分布していたものの

残存ではないかと思われる。これらのCU, CUUをCUBAKIが成立した後-BAKI部分が脱落したものと考えることも可能であるが、一方、ツズをツの疊語とみる(ハツパ、オテテなど参照)ことも可能性がある。なお、紀伊半島のCUUは、119図「涎」の場合と区別がない。なお119図にはYODO, YOZUなどの、比較すべき見出しもあるので、そちらの説明も参照されたい。

シタキ類は、117図「舌」におけるシタ類と関連させて符号の形を決め、また、この図のツバ対ツバキにあわせてぬりつぶし符号か中ぬき符号かを与えた。この図の場合にはただSITAという語形がなく、すべてSITAKIなどのようにキがついているのは、ツバ類において東日本ではツバキが分布している、すなわち、この類の分布地域が〜キ地帯にはいつているためであろう。おそらく、ツバとツバキの両語形が接し、キに体液の意を持つ感覚が生じ、舌の部分の液体の意としてシタキという語を作ったのではあるまいか。この類は、現在ツバ類に圧迫されているが、そうかといって古く全国的に分布していたものの残存とは思えない。せいぜい新潟北部から東関東までを範囲として或る時期に広まったものと思われる。そして、関東ではSITAKIがKITAKI, KUTAKIなどと変化するとともに、一方ツバ類よっての侵略も行なわれたらしい。

ただ、ここで問題となるのは、このシタキ類の分布する地域が117図で「舌」をシタと言わずベロと言う地域にちょうど一致することであって、上述のシタ(舌)に対するシタキ(唾)という語形成の説明がそのままできないことである。この地域が、「舌」をシタと言っていたとすることは117図で行なった推定と矛盾する。両図の推定に再考の余地があって、容易に結論は出せない。

ベロ類の分布は、117図「舌」におけるベロの分布とは地域が異なる。しかし119図「涎」におけるベロの分布の中に含まれる地域である。すなわち、秋田南部と岩手・青森県境あたりでは、「唾」と「涎」の両方をベロと称して区別がないことになる。なお、ベロが何を意味するかの総合については、120図にゆずる。

ヨダレ類が、青森と秋田北部に分布する。これは119図「涎」におけるヨダレ類と符号は共通にしてあるが、分類がすこし大まかになっているので注意されたい。すなわち、[jondare]などは119図ではYONDAREとして立ててあるが、この図ではYODAREに含めて示している。このヨダレ類の現われる地域は119図では

ヨダレではなく、ピロ・ペロの分布しているところであって、「唾」と「涎」は区別されていることになる。この両者の区別については119図の解説でまとめて述べることにする。

タンペ類は、凡例でもわかる通り、いろいろな変種がある。新潟・秋田の TAN は「痰」との区別について興味を持たれるが、比較すべき材料を持ち合わせない。この類は、語末にペヤパのついた語形が多いが、痰や唾を吐き出すときの擬音に由来するものであろうか。ただし、岩手の TANPAKI, TANPAKE は「一吐き」であろうか。あるいは、TANPA に、ツバキ・シタキなどのキがついたものであろうか。

宮城から岩手にかけてネッペ類が見られるが、これらと隣接するタンペとの関係の有無は不明である。

### 119. よだれ(涎)

全国的に、茶の符号で示したヨダレ類が広く分布し、ほか、赤の符号で示したペロ・ピロ類が、北海道・東北北部に、草の符号で示したツ・ツズ類が山陰と紀伊半島の2地域に分布している。

ヨダレ類は、118図におけるものより分類をやや詳しくしてある。この類の中では、まず、YODARE などのように、YO~のものと、YUDARE などのように YU~のもの(縦線の符号と横線の符号)に一応区別され、それぞれの領域もほぼ地図上に指摘できる。すなわち、YU~は福島から関東にかけてかなり多く分布する。これは音韻法則によるものではなく、個別変化であろう。九州のものは音韻法則的な傾向の現われらしく、沖縄の場合は音韻法則によるものである。頭音がI~, E~になるものは中ぬき符号で示したもので、信越地方などに見られるものである。同種の現象は、126図「指の総合図」にも見られるが、両図を比較すると地域はややずれており、この図のほうがどちらかと言えば「雪」をイキなどという地域に通ずるようである(「雪」は質問項目番号125, 地図は未刊)。

語末が~RI となるものは、沖縄では音韻法則によるものであるが、北陸・東北など E の母音の狭い所では~RI となりやすい傾向があると思われる。

YOODARE は中国地方などにまとまってかなり分布しているが、新しいものと思われる。沖縄西端の与那国島では DUDAI となっているが、ここはヨが規則的

に DU になる所である。

YODO, EDO などは中部地方にまとまって分布して新しそであるが、鳥取にもあることを考えると、地方的に発生した新しいものとは断言はできない。新潟の YOZU, YOOZU もこれと比較すべきものであろう。これらはヨダレとツ(118図の説明も参照)との複合によってできた語形であろうか。

ペロ・ピロ類のうち、この図でピロの分布する地域は118図「唾」ではヨダレの分布している所であるから、唾との区別があるが、この図でペロの分布している所は、唾とは区別がないようである(街道沿いに新しく区別する体系が侵入しつつあるようでもある)。これについては120図でまとめて示す。

ツ・ツズ類のうち、和歌山のは数地点だけ118図「唾」との区別が認められない。この類は、分布から見て、古いものの現存と思われる。しかも前述のように YODO, YOZU などがヨダレとツとの複合に由来するとすれば、この類はかなり全国に広く分布していたことになる。草の符号を用いたが、UZU は別系統の語かとも思われる。

出雲の GOBOZU は、分布から見て、ツに接頭辞的なものがついたものと考えられる。なお、出雲の CI は音韻対応を考えれば CU とまったく同じ語である。

山形県庄内の GERO は、前述の「唾」における新潟北部・秋田の TAN と同様に、隣接意味分野との関連に興味を持たれる。

### 120. ペロの意味

以上述べた116図「唇」、117図「舌」、118図「唾」、119図「涎」の4項目は、内容的に互に関連しあっている面が濃く、それらの一部あるいは全部の項目にまたがって共通の語形が凡例に現われている。その語形はペロ類、ツ・ツバ類、ヨダレ類、シタ・シタキ類などである。このうち、最も多くの項目、すなわち、全項目に現われ、しかも全国的意味のある分布を示すペロ類の語形をとりあげ、その語が各地で前記4種の意味のどの分野を分担しているかを対照して地図上に示してみた。総合図と銘うってあるが、第1集・第2集に含まれている「Aという語形をXの意味で使うか」の地図と通ずる面もある。

まず、はじめにこの図でペロ類としてとりあげた語形について断わっておく。すなわち BERO・BIRO・BI-

RA・BERA・BIRU・HERO・PERO・HERA を対象とし、これらの前にほかの語形のついた複合語形も参考のためとりあげた。ただし、116 図「唇」の KUCIBIRU だけは標準語と同形で、全国にまんべんなく分布しており、図が煩雑になるので、原則とは違ってくるが、地図から省いた。

次に、凡例の説明をする。表中のある欄に位する符号は、その位置を左にたどると何という語形であるかが示るされており、真上にたどると、どの意味に使われているかが示るされている。符号の体系は、形が語形を示し、色が意味を示している(したがって、凡例の表で、横には同形の符号が並び、縦には同色の符号が並ぶことになる)。符号の形はできるだけ原図である 116 図～119 図と共通するよう心がけた。なお、複合語の一部分としてペロなどが含まれている語形はぬき符号となっている。符号の色は、赤系統が身体部分、青系統が分泌液となっている。

地点の見方について説明する。ここでとりあげた語形がどの地図にも現われていない地点には、この地図で符号をまったく示していない。該当語形がある場合は、その語形を示す形の符号をしるし、4 種の意味のどれであるかを示す色をその符号に与える。同一地点に該当語形が二つ以上の意味で使われている場合は、符号がアークなしに接して並べてある。すなわち、同一地点で一つの語形が二つ以上の意味にまたがって使われている(二つ以上の意味が語形によって区別されていない)場合は、まったく同じ形で色の異なる符号が横に接して並ぶことになる。なお、アーク印がないので、具体各地点の詳細について疑問が起りうる。その場合は各図によって確かめられたい。

次に地図を大観しよう。九州西部・奄美・沖縄を除いて、ペロがなんらかの意味で使われていることがわかる。このうち、北海道・東北北部では分泌液で使われる傾向が強く、他地域では身体部分を表わす傾向が顕著なことがわかる。ペロが分泌液を意味することが本来的なのか、身体部分を意味することが本来的なのか不明であるが、前者が意味分野の圧迫などの理由で新しく発生した可能性が強いようである。

区別の有無という点から見ると、東北北部・北海道では「唾」と「涎」とを共通の語形で表現する地点がかなりあり、岩手の一部・北海道ではこれらと「舌」との区別のない地点も目立っている。「唇」の場合は、全国的に複合語となるので、「舌」とは区別されるが、「唇」の後部分と

「舌」とが同じ語形である地域が、福島・関東・中国地方などに見られる。なお、中部地方には「唇」が KUCIBERA、「舌」が HERA の地点や地域がある。ペロ類がはじめ舌に用いられ、のち唇に用いることが、近畿から全国的に広まったかとも思われる。

なお、区別のありなしという観点をとる場合は、この説明冒頭に述べたツ・ツバ類・ヨダレ類・シタ・シタキ類などについて 116 図～119 図を比較した結果と対照しつつ考える必要がある。

ツ・ツズ類・ツバ類に注目すれば、九州・琉球で「唇」と「唾」、沖縄島で「唇」と「舌」、和歌山で「唾」と「涎」が区別されない事になり、結局 4 者の区別のはっきりしているところは近畿と四国くらいということになる。地点としては区別があっても、隣接地域では別の意味を表わす語形を、多分借用して区別をしているのではないかと思われる現象が東北北部(唾と涎)、東南北部・東関東(舌と唾)、琉球(唇と唾、唇と舌)などに認められる。

こうなってくると、これらの区別の比較的あいまいな現象が、古くは全国に分布していて、近畿など中央日本で区別をはっきりさせる傾向が発生し、それが周辺に及んで、一方、地方では何らかの手段で区別を受け入れようと努力している——というのが現状ということになるか。

なお、本集 131 図「垢」にも、大分の国東半島付近に 5 地点ペロが現われて注目される。一部に同音衝突が見られるようである。このほか、『全国方言辞典』によれば、ペロの見出しのもとに「あいなめ」「どろ(泥)」「乳児」「せいの高い人」の意味で使う地方が指摘されている。アクセントの点から同音語と認めることのできないものも含まれている可能性もあるが、併せて考えるべき問題である。

## 121. おやゆび(親指)

5 本の各指(121 図～125 図)を表わす諸語形において、語形の後半の「ゆび」にあたる部分についてどう言うかの結果は、総合的に 126 図に示しておいたので、「ゆび」部分の語形に関する説明はそちらにゆずる。ただし、この 121 図(以下 125 図までも同じ)でも、「ゆび」部分の語形までを符号の形の区別によって表現することにした。すなわち、「～ゆび」の「ゆ」の部分がユのものにはぬりつぶし符号を、ヨにはぬりつぶしの大符号を、イには中ぬき

符号を、エには中ぬきの大符号を、「ゆ」が直前の母音と融合したものや脱落したものには中ぬきの細符号を与えた。「び」の部分がべであるものにも一定の符号を与えた。さらに、奄美・沖縄などにある、ウビ、ウイビ、ウヤビなどにもそれぞれ一定の符号を用いた。「ゆび」部分のついていない語形には線符号を与えた。

なお、凡例における語形表示で、たとえば「親指」ならば、「おや」部分と「ゆび」部分との切れ目については、OYAYUBI, OYAUUBI, POIIBI などわかりやすいものが多かったこと、ODEBI など融合して分離できないものもあったことなどの理由により、形態論的な観点による切れ目表示を必ず入れて示すことはしなかった。ただし、切り方について誤解を起す恐れのある場合にだけ、'印を入れて切れ目を示した。これは、121図から125図までの各図共通の扱いである。'印を入れる場合を列挙すれば次のとおり。

- (1) 子音の直後に母音や半母音が続く場合、直前の子音と結合して音節を作るのではないことを示す(例 HITOSAT'IT, GOSUN'YUBI)。
- (2) 3個分の母音が続く場合、ふつうは切れ目があると予想される異母音連続に切れ目がなく、同母音連続に切れ目があることを示す(例 UPU'UIBI)。
- (3) 3個分の母音の全部が異母音連続、あるいは全部が同母音連続で、どの母音間に切れ目があるか見当のつきにくい場合に切れ目を示す(MINA'UIBI, CYUU-SAI'UIBI, UPU'UUBI)。

121図の分布を見ると、緑の符号を与えたオヤ類が全国に広く分布し、赤の符号を与えたオオ類が東北・佐渡・八丈・西九州・奄美・沖縄などの辺境の地に離れて分布し、空の符号を与えたオト類が東北北半と北海道南部にややまとまって分布している、と概略的に言うことができよう。

オヤ類は「ゆび」部分の変種のほか、特に問題はないが、香川の IYA~は「親」かどうか疑問も残る(徳島に祖谷という地名がある)。UYA~は奄美では規則的な音韻対応によりオヤにあたるものと考えられる。名古屋付近の OYEEDI は [ojæ:bi] であって、OYAIBI からの規則的な音変化によるものである。

オオ類は「大」にあたると思われるものをまとめて一類とした。東北北部の OYUBI, OIBI, OYOBI, OEBI, は古語の「および」に由来するというよりは、この地方で長音が発音されにくいという音韻の傾向を考えると、そ

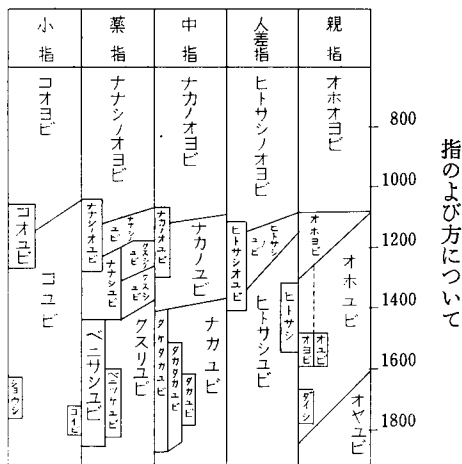
れぞれ OYUBI, OIBI, OYOBI, OEBI などにあたるものであろう。ただし、近畿に1地点だけある OYUBI は「および」すなわち「大」のつかない「指」だけにあたる語形であって、それを親指の場合にだけ使うという現象なのかも知れない。佐賀・長崎の UU~は、この地方の音韻の傾向から言ってオオにあたる。第1集17図によれば、「大きい」はこの地方では HUTOKA であるが、HUTOYUBI はこの121図にはまったく現われていない。このずれについて歴史的にいろいろ推定も可能であろうが、接頭語のオオと、形容詞形オオキイとの文法的相違にもとづく歴史上のずれについては、留意しておく必要がある。八丈島の BOO~, 沖縄の MAGI~は、ともに「大きい」の意味であることは17図によって明らかである。沖縄の BUBI, BUUBI もオオユビを意味する UPUUBI などからの変化形と考え赤の類に分類したが、ただ「指」だけを示す UIBI, WIIBI などからの変化形かも知れない。八重山では、W に対応して B が現われる。

以上、オオ類は音韻的にオオに対応するもののほか、意味的に「大」に対応するものをも含むことになる。後者はあるいは、前者の翻訳かも知れないという疑いがないわけではないが、とにかく、この類は辺境の地に離れて分布するところから、大局的にはオヤ類よりは古いものであろうと思われる。

中央語の文献によってこれを確かめるには、前田富禎氏「指のよび方について」(「文芸研究」56集・昭和42年7月)によるのが便利である。そこには5本の各指の名称について、各時代の文献の用例を調査した結果が載せられている。ここに同論文付載の一覧表を、筆者の許可を得て転載する。

親指については、奈良・平安から中世ごろまでオホユビであり、近世初期はまだオオユビが多いが、西鶴の作品あたりからオヤユビも出はじめ、以後オオユビとオヤユビの併用で、前者が正しい名称後者が俗なものというニュアンスがあったらしいとのことである。

この歴史は、さきの分布からの推定と矛盾しない。すなわち、古くは中央もオオ類であって、全国に連続して分布していたことになる。これが中央で「大」から「親」へ変化してそれが周辺に広まったのであろうが、その理由のひとつには、小指との対照がある。コユビのコが「小」から「子」に移行することとの平行関係を、考慮してみるわけである。また、オオとオヤとの音の類似、意味の関連



などもこの変化を助けたかとも思われる。

オト類は、東北北部から北海道にかけて分布しているが、この地方は語中のタ行子音が有聲化して [d] に発音されるので、実際は凡例のように、ほとんど ODO~ などの形をとっている。岩手北部から秋田東部にかけて分布する ODEEBI, ODEBI は、ODOIBI の連母音 OI が融合して EE となり、さらにこの地方は長音の短音化する傾向によって E となったりしたものと思われる。岩手には ODEYUBI, ODEIBI がかなりまとまった領域を持っているが、これは、前記の ODEEBI, ODEBI の前部分が ODE であると意識され、この形に、新たに「指」部分をつけて発展した語形ではないかと思われる。ODEEBI の EBI が YUBI に回帰したと説明することもできよう。ODEYUBI, ODEIBI などのまわりを ODEEBI, ODEBI などがとり囲む形で分布していることは、岩手にもひと時代前は ODEEBI, ODEBI があったことを物語るようである。

オト類は辺境に分布してはいるが、一地方だけ、しかもかなりまとまった分布をしているので、古いものの残存というよりは、東北北部で独自に発生した語形であろうと思われる。オトは中央の古い文献には見あたらないが、『全国方言辞典』には津軽で、また秋田・岩手の方言集にも、「年輩の男」「父親」の意に使っているとある。意味の上から考えると、オト類の発生は、オヤ類からそのうちの父親だけを示す語形に限定されたものかとも思われよう。しかし、それにしても、現在オヤ類とオト類の領域が地理的に接していず、しかもさきに推定したオオ > オヤの変化を採るとすれば、過去においてはオト類と

オヤ類の分布地域は現在よりさらに離れていたといわざるをえない。したがって、オヤからオトへの変化があったとは考えにくく、むしろ、これは「小指」との対において、「大」対「小」が「父」対「子」の意識に変わったか、あるいは、オユビが雄ユビなどと意識されることがこの地方であり、2本の指の対比が「夫」対「妻」とか、「男」対「女」を示していたため、オトユビという名称が生じたものかと思われる。オト類の分布地域の中に ODOGOYUBI (「男指」にあたる) が3地点あることは、この推定を支持するものであろうか。当然ここでは 125 図「こゆび」の地図との対比が必要となる。

八重山に見られる UYABI は、その近くに UBU'U-YABI という語形のあるところから、ただの「指」だけにあたる語形と思われる。

なお、HEBIKASIRA は、ユーモラスな表現というか、あだ名のようなものであるとの注があった。このようなニュアンスを持った呼び方を探れば、全国的にもっと出てくるかも知れない。

## 122. ひとさしゆび(人差し指)

「ゆび」部分の符号の方針、ならびに前部分と後部分の切れ目の表示法などは、121 図の説明で触れたとおりである。

全国を概観すると、縁および草の符号を与えたヒトサシ類が圧倒的に多く分布し、ほか、赤のサシ類、茶のヒトツキ類、橙のモノサシ類、空のイトサキ類などが少し分布するだけである。

ヒトサシ類は、指で人を差し示すことを基礎とした命名と考えられる。HITOSASI などのうち、~SI で示した部分には、東北地方などに現われる [sü] の音が含まれているから注意されたい。東北北部・山陰の HUTO~、東北・関東・北陸の SITO~などは、音韻的にヒト~に呼応するものと考えられる(第1集 11 図・12 図参照)。濃尾平野や中国等に点在する SITO~は規則的な音韻対応ではないらしいが、やはりヒト~にあたるものと考えてよかろう。琉球列島・宮古・八重山の PITU~は、音韻法則によってヒト~に対応するものであるし、奄美・沖縄の CYUU~も「人」の意である。『沖縄語辞典』には hwitu <文語>, Qcu <口語>とある。秋田と長野の HITOSAI~は、分布地点からみて、「差す」というサ行五段活用動詞の連用形のイ音便によるも

のとは思えないが、やはりヒトサシに由来するのであろうか。秋田のもの(3721.71)は[çitosaijũbi], 長野のもの(5623.27)は[çitosaiubi]と表記されていた。

このヒトサシ類には、「ゆび」部分を伴わない HITO-SASI だけの語形の分布することが目立つ。そしてこれは、岩手内陸部・北陸・九州の3か所に離れてはいる。しかし、いずれも交通路に沿って帯状に分布していることから、古い現象の残存というより、3地方でそれぞれ「ゆび」部分が脱落してそれが広まったものと考えべきであろう。このような指部分の〈脱落〉は、121 図「親指」と125 図「小指」にはほとんど見られない。124 図「薬指」においては、クスリ類の語形には〈脱落〉がないが、ベニサシ類(北陸と九州)に、これが認められる。123 図「中指」のうちのタカタカ・タカタロ・タカシロなどの類(岩手・北陸・九州)にもこの現象が見られる。これらを総合してみると、各指とも、この岩手・北陸・九州の3地帯で、もし前部分(指部分を除く部分)が4音節の場合、その語形の「ゆび」部分が〈脱落〉する、という傾向が指摘できそうである。音節数の増加を嫌ったためであろう。

草の符号で示したものは、ヒトサシ類かとも思われるが、音の対応などからみて疑問があったり、あるいは、かなりの変化や脱落の認められるものである。このうち、SITASASI~は「下差し」とも考えられようが、分布からみて、やはり「人差し」と解すべきであろうか。ITO-SASI~(6667.81)の頭音はHの有声化と思われる。秋田の HUTOIBI は、分布からみて、ヒトサシのサシが脱落したものであるが、沖縄の TUU (IIBI)すなわちヒトは、緑の符号で示したヒトサシとも、茶の符号で示したヒトツキとも分布が接しているので、そのどちらからの動詞部分の脱落か決めがたい。

ヒトツキ類は「人突き」にあたる形であり、CYUUSIKI~, CYUUHICI~などもこれにあたるものかと思われる。CYUUSAKI~は意味不明であるが、分布から考えて、あるいはヒトサシとヒトツキとの混交形かとも思われる。CYUUNUCI~は「人貫き」にあたる語形と思われ、『沖縄語辞典』には「指さすこと」とあり、命名法は「人差し」「人突き」に共通するようである。

ヒト部分のないサシ類は津軽地方を中心に分布するほか、福井山間部・飛騨・沖縄にも見られる。このように辺境に離れて分布することから、一見、残存的な分布のように思われようが、津軽におけるサシ類の分布は中心

平野部から広まって、ヒトサシ類を周囲に追いやっているように見え、新しい発展であると解釈される。中部山地と沖縄のものはあるいは古いものの残存かとも思われるが、また、ヒトサシのヒト部分の脱落ならば各地で同じ現象を生ずることも可能である。とくに、福井のものなどは、指部分のないヒトサシが付近にあることと併せて考えれば、前述のように音節数の多くなるのを嫌ってユビ部分を脱落させる代りに、語頭のヒト部分を脱落させるという方向に走ったものとも考えられる。前掲の前田氏の論文には、中央の文献にヒトサシ系の語を多くあげているが、サシの例は報告されていない。少なくとも、文献時代に、サシが国の中央を含んでかなり広い連続領域を持つ可能性は少ないようである。すなわち、上記の3地方(福井と飛騨を分ければ4地方)のサシ類は、各地でヒトサシのヒト部分の脱落という現象が起きて生じたものとするのが穏当であろう。この場合「さす」の意味は「指さす」の意味からすでに多少ずれているかも知れない。津軽のサシは、周囲にモノサシという語形を持っているので、上記のようにヒトサシから生じたとは言い切れない。このモノサシとサシとは、何らかの関係があろうとは言えそうであるが、先後関係その他については現在明らかでない。

中国地方の SANNYOO~は「算用」、GOSUN~は「五寸」であろう。前者は物を数えることを意味するのか、あるいは算盤を使う時の指ということなのであろうか。後者は掌をひろげて物の長さを測るときの、この指と親指との間の距離によるものであろうか。そうであるとすれば、東北のモノサシにも通ずる命名ということになる。

イトサキは「糸裂き」にあたると思われる。これはヒトサシを土合とし、音の類似からこの地域で生じたものであろう。徳島のベニサシ、ベニトリはふつう西日本では「薬指」を示す語形であるが(124 図参照)、もし、人差し指で口紅をつける習慣があれば、この語形を使用することもうなずける。

### 123. なかゆび(中指)

「ゆび」部分に関する符号、および凡例における切れ目の表示は121 図の説明の冒頭に述べたとおりである。

大観すると、緑の符号を与えたナカ類が東日本と九州・奄美・沖縄に、草の符号を与えたナカテ類が岩手

に、茶のナカタカ類が全国ところどころに、赤のタカタカ類が西日本・中部地方・東北地方などに、桃のタカ類・タカタロオ類が九州に、また橙のタケタカ・セイタカ類が北陸・山陰・岐阜東南部などに分布している。

各調査地点からの具体的な報告を類別する場合、まずナカの部分が意味上「中」か「長」かという問題につきあたる。見出しについては、音韻対応によって **NAKA** /naka/ (中) と、**NAGA** /naga/ (長) とを分ける方針をとった。すなわち、原資料の表記を基準として、カ行子音が有声化しガ行子音が鼻音である地域 (第1集1図・2図・28図などによる) のものは、音韻対応を考えて [k] [g] を **K** で表示し、カ行子音の有声化しない地域の [g] と全国の [ŋ] は、**G** で表示することにした。この分類の結果、**G** の表示、すなわち「長」と解される形は非常に勢力の弱いことがわかる。これらは、分布からみて、音の類似もあって、意味の類推が働き、おのおの地点で、「中」から散発的に生じたものと考えられる。そこで、「長」を「中」の類に対し色分けをせず、一応ナカ類として (すこし目立つ符号を与えはしたが)、緑で示しておくことにする。なお、沖縄などの **NAHAYUBI** の **H** は **K** に対応する音声であるが、そのまま **H** と表示した。これは、**NAHA** ~ と表示してもほかの意味にあたる語形であると誤解される恐れがなさそうだからである。**NAA** ~ は **NAHA** ~ がさらに変化した語形であろう。

青森と富山の **NAKANO** ~ は古い形の残存かと思われる。**NAKANAKA** ~ はタカタカ類からの類推で疊語形が生じたものであろう。岩手に1地点、**NAKA** とだけ言って、「ゆび」部分を持たない形がある。これは、地点としては異なるが、この付近では121図「親指」の場合にも **OYA** とだけしか言わないところが1地点あり、各指の名称を答えるとき「指」部分を臨時的に省略したのがそのまま記録されたか、あるいは、2音節でも「ゆび」部分を脱落させる一般傾向のある地域とすることができるとも知れない。この地域では、3音節でも124図「薬指」で **KUSURI** とだけ呼ぶ傾向の少しあることが指摘できよう。

この緑で示したナカ類は、分布から言って他の類より古いものであろうと思われる。

ナカテ類は、ナカ類から発生した語形と思われる。この地域は、121図「親指」において **ODEYUBI**、125図「小指」において **KODEYUBI** の分布しているところ

であるから、類推によって **NAKADEYUBI** が生じたのかも知れない。一方、「中手指」(中央の指・中ほどの指) という意識も働いているかと思われる。

ナカタカ類は、東北・新潟・富山・四国・北九州など各地に少しずつ見られ、しかも、ナカ類とタカタカ類 (またはタケタカ類) との接触地に分布していることから、両類の混交によって各地に新しく生じた形かと思われる。

タカタカ類は、西日本においては明らかに新しく広まった分布の様相を呈している。しかし、信越から東北地方にかけての分布は、ただ新しいとばかりは言えないようである。おそらく、東日本でもひと昔前は西日本と同じように、ナカ類の分布するところにタカタカ類が中央から侵入して広まったが、のちまた標準語のナカ類が勢力をもりかえして、海岸地帯などで勢力を得、タカタカ類を現在のような山間部に追いやったのではないかと思われる。

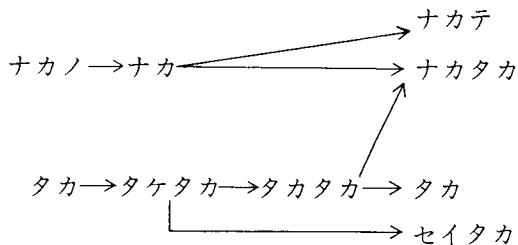
地図でわかるとおり、「高」の方は、くり返し語形であるタカタカが圧倒的であり、くり返しのないタカが少ない (それに対して、「中」の方ではナカナカが少なく、ほとんどがナカである)。「高」は形容詞の語幹と考えうるから (「中」とは異なって)、強調して形容するために、くり返し形の生じやすい条件下にある。そして、タカタカという連濁もほとんどなく、幼児語的な語感を伴うとも言えそうである。事実、併用の場合タカタカの方を俗語的とした注記がいくつか見出された。以上の考えを基礎にすれば、ナカ類の中にタカタカ類が侵入したものの、俗な表現という地位はまぬかれず、のちにはふたたびナカ類にとってかわられたという、さきの推定もうなずけよう。

くり返しのないタカ類は西日本各地に分散し、九州には比較的勢力が強いようである。分布から見てナカ類よりは新しく、タカタカ類よりは古いものと思われる。もっとも、逆に各地でタカタカ的一方が脱落して、タカが生じたと考えられないこともない。九州では、これにタロオ (太郎) をつけ、擬人化したタカタロオなどという親愛の情をこめた俗な言い方が発達したようである。**TAKASIRO** などは「高四郎」であろう。**TAKASO** は、**TAKASIRO** からの変換形であろうか (124図「くすりゆび」に **BENSO** が見られる。比較されたい)。なお、九州ではこのタロオがナカ類にもつぐほど優勢であり、ナカタロオという表現も見られる。各指を擬人化する童

歌や唱え言のようなものが、どの地方でどのように行なわれているか(いたか)を、調べてみる事が望まれる。

タケタカ類(TAKITAKAも含む)、セイタカ類はともに「背が高い」の意と考えられる。これらはタカタカ類の周辺に分布しているので、それより古い形かと思われる。これとタカ類との前後関係はよくわからない。

以上の推定をまとめて図示すると、次のようになる。



この推定を前掲の前田氏論文の一覧表(121図の説明参照)とつき合わせると、タカの古い方が文献に見られない点異なるだけとなる。ナカタカ、ナカテは地方で新しく発生したものであるから当然文献には見えず、セイタカもタケタカを特定地方で翻訳したものであるであろう。

なお、散発的ではあるが、ほかの指を表わすのがふつうである語形が、この指に用いられている地点のあることが指摘できる。これは、被調査者の個人的な思い違いとばかりは言えないようでもある。いま一応地図に示したが、解釈は控えておく。

## 124. くすりゆび(薬指)

「ゆび」部分に関する符号、および凡例における切れ目の表示は121図の説明の冒頭に述べたとおりである。

緑の符号を与えたクスリ類が東日本に、橙・赤・桃の符号を与えたベニ類・ベニサン類・ベニツケ類が西日本に、紺で示したナナシ類が沖縄に分布している。

クスリ類は、ほとんどがKUSURI~という語形であるが、九州ではRが脱落したと見られるKUSUI~が目立っている。秋田・山形・新潟・富山・島根などのKUSORI~は、KUSURI~からの変化と思われる。この地帯では比較的U>Oの傾向が多い。ただし、これらの地点で「薬」をKUSORIと言うかどうかは確かめていないから、別の語源意識が平行的に働いている可能性もある。会津・伊豆諸島・愛媛のKUSU~は、各地でそれぞれRIという音節が脱落したものであろうか。古い文献にある「くすし指」のシの脱落した形とも一応考え

られようが、現在の分布からは「くすし指」も現存せず、その可能性が小さいと思われる。なお、「薬」を意味するクスという語は、「薬玉」などの複合語はあっても、単独には『全国方言辞典』および、この地方の方言資料を見ても発見できない。おそらく、「指」と複合した場合に音節数の関係でRIの部分脱落したものであろう。新潟と三宅島にKUSO~が見られるが、これらは周囲の分布から考えてKUSU~からの変化であろう。この2地点とも、U>Oの傾向が多く単語に見られているところである。

静岡・長野県境のKUSURISASI~は「薬をつける」の意から発生したとも考えられるが、分布から考えて、ベニサン類との接触が、この語形形成に強く働いたことを考慮しなければならない。

ベニ類・ベニサン類・ベニツケ類は、たがいに分布地域が重なり合う様相を呈しているので、まず、この3類をまとめて、これらとクスリ類との関係を考えてみたい。このベニなどの類は西日本に広く分布するが、奄美がクスリ~であることは注目される。また、東日本でもベニなどの類は、日本海側を新潟西部海岸・佐渡・津軽と北上し、北海道・三陸地方にまで至っており、太平洋側では伊豆半島や房総半島へと侵入した形跡を示している。すなわち、古くは全国的にクスリ類が分布していたところ、近畿でベニなどの類が広まり、これが西日本方面では九州まで達し、東日本方面では、中部山地等では進展がくいとめられたが、海岸沿いにはかなり東方まで侵入したということになろうか。

西日本のベニなどの類の分布地域でも、この類の分布の密度はそれほど濃くなく、クスリ類のかなり混入していることが、地図から感じられる。このことは、のちに広まったベニなどの類も、完全にはクスリ類を駆逐せず、何らかのニュアンスの差を分担しながら併存の状態であったことを思わせる。なお、分布図をこまかく見ると、西日本でも中国地方山地・四国山地・紀伊半島の辺地などに、クスリ類が比較的多いように見える。これは、ベニなどの類がまだ山間辺地までは十分浸透していない状態を示すものとする材料となろうか。ベニなどの類の分布しているところへクスリ類が後に侵入してきたと考えるより、可能性がある。なお、ベニなどの類の歴史を考えるには、口紅の使用、そのつけ方などに関する歴史や伝播をも参照することが必要となろう。

次に、ベニなどの類の中におけるこまかい語形につい



て説明しておく。ベニ類・ベニサン類・ベニツケ類に共通して BEN~は円弧の形の符号を与えてあるが、これは BENI からの変化と考えられる。おもな地域は、まず九州一帯であって、ここは NI の音が N になる傾向が強く、とくに南部では音韻法則として存在する。BE-N~となるもうひとつの地域は、近畿中央部から北陸にかけての地帯である。おそらく近畿で発生したものが伝播したのであろう。なお、122 図「人差し指」の説明でも触れたが、2 拍形のベニ類の場合は、濃尾平野の 2 地点を除く以外は、必ず「ゆび」部分がついているのに対して、4 拍形であるベニサン類とベニツケ類の場合は、「ゆび」部分のない形もかなり認められる。しかも、122 図の説明でも指摘したとおり、九州と北陸にこれらの傾向がいちじるしい。なお、岩手は 3 拍のクスリなので、「ゆび」部分脱落がほとんどない。

福岡の BENSO のソについては、123 図「中指」のタカソと地域的に一致する。当然関係があろう。福井の BENTAROO は、この地域に、ほかの指で~タロオの見られないところである。しかし、各地で、ある任意の指を擬人化して呼ぶことは自然なことと思われる。熊本の本ENSASIDON も擬人化の現われであろう。

ベニなどの三つの類どうしの歴史的関係を考えてみよう。ベニ類は、ベニサン類やベニツケ類より辺境に離れて分布しているので、3者の中で一番古いものの残存のようにも思われる。しかし、意味的にはベニサンやベニツケの方が、ただベニとだけ言うよりは古い形とするほうが自然のようにも思える。その後、~サンや~ツケの部分省略するという同じ傾向が辺境の各地に生じ、それが部分的に広まっていくことも十分考えられる。津軽のものは、この地方で脱落したというより、北陸方面からベニユビという語形で侵入したものと考えるべきであろう。前掲の前田氏論文でも、ベニユビという語形の報告はないので、この語形は、あるいは近畿地方ではついぞ姿を見せなかったものではないかとも思われる。なお、山口の BENSI の SI は「指」の音読みかと思われるが、BENSASI の SA の脱落とも考えられる。さきに触れた BENSO などとも比較すべきものかも知れない。

ベニサン類とベニツケ類の前後関係は、分布からでは何とも言えない。量の上ではベニサンが圧倒的であるが、近畿中央部・山陰・中国中央部・佐賀などには比較

的ベニツケが多く見られる。あるいは、これらの地点では、サスという動詞の意味がはっきりしなくなり、なじみの深いツケルに言いかえてベニツケが発生したかとも思われる。

紺の符号で示したもののうち、凡例の NANASINO-YUBI から NANINUBII までをナナシ類と呼ぼう。これらは「名無し」に由来する形と思われる。AZA~も「字」すなわち「名」にあたるものかと思われる。ナナシ類を大別すると、ナナシ・ナナイ、さらにナに何かの形がついたものの 3 種になり、それぞれに助詞の「の」がつくかどうかという分類になる。これらのほとんどが奄美・沖縄に分布するが、ナナシは本土にも見られる。

ナナシ類の分布は沖縄のほか、岩手の三陸・三宅島・岐阜・紀伊半島山地などに分布し、古い形の残存を思わせる。この類は「呼び名が無い」の意にあたる語形であるから、無回答として扱った報告にも通じる面がある。「無回答」が沖縄に多いことは、分布の上からもナナシと「無回答」の性格の近似性を暗示しているようである。沖縄以外で無回答の多い地帯を指摘すると、青森全県・岩手東部・北陸・岐阜・中国山地の東端および西端・四国東南部・大分南部・鹿児島西部など辺境が多い。すなわち、ナナシ類と「無回答」は、クスリ類よりも古いものの残存ということができよう。これは、121 図の説明に示した一覧表に照らし合わせても矛盾はない。さきに、クスリ類とベニなどの類との考察で中国地方山地・四国山地・紀伊半島の辺地などのクスリ類を残存と考えたが、実は、この地域は元来「無回答」地域であって、固有の形がないため標準語形を受け入れやすかったという考え方のあることを付記しておく。

中央の古い文献に見えるクスシユビについては、地図では 1 地点も見出すことができなかった。ただ、青森・岩手・宮城・栃木などのイシャ~の類がその言いかえかとも思われる。

KANE~, KANESASI~, KANECUKE~などは「鉄槩(かね)」に由来するものと思われる。さらに、KAN~も KANE~ から、KANSI も KANESASI からの変化と思われる。薬指を「環指」と言う術語があるようだが、おそらく無関係であろう。これらはすべて中国地方に点在し、ベニサンやベニツケの分布地域に含まれている。

## 125. こゆび(小指)

「ゆび」部分に関する符号、および凡例における切れ目表示は 121 図の説明の冒頭に述べたとおりである。

緑の符号で示したコユビ類が全国的に分布し、ほか、草の符号を与えたユビノコ類が沖縄に、茶のコヤユビ類が北陸と九州に、赤のヒコユビ類が東北と南関東に、橙のシリユビ類が岩手と能登半島と山陰に、空のコトユビ類が東北北部に、また、紺で示したりち、チユビが静岡、コンチユビが北陸に分布している。

コユビ類のうち、奄美・沖縄で KU~となっているのはコが規則的に音韻対応をしているものと考えられる。奄美の KA~, KWA~, KWAA~はコにあたる形であり、これは「小」というより「子」を意味するであろう。

草で示したものは、すべて、ユビノコ・ユビコにあたる形であって、~KWA の中には「子」を意味するものもあろうし、東北方言などの指小辞に通ずるものもあろうと思われる。~GWA は~KWA と同じ類である。~KAA は~KWA からの音変化であろう。~GAMA も~KWA・~GWA と同じ意味を持つものであろう。~MA は~GAMA の-MA と関係があろう。ただし、~GAMA, ~MA の項の中には、UIBINUKWAA などのような、ノにあたる助詞を介して接尾するものはない。~MA の接尾する直前はかならず長母音である。『八重山語彙』にはマを愛情を表わす接尾辞として、タルに接尾するタローマ、ナビに接尾するナペーマなどの例を挙げている。別にアーマという見出しもあるが(例はサラに接尾するサラーマなど)、実はマ・アーマと見るよりアマとして一括説明したほうがいいものかも知れない。

第1集の21図「小さい」における形容詞の語幹と通ずる形を持つものとしては、紺で示したりちの CIIBI, IMP'UIBI, IMP'UIBIGAMA, MINAGAMA'UIBI, MINA'UIBI などしかないが、「小」を意味する形態素のコは、コユビの中に含まれ全国的にあるものと思われる(17図「大きい」でフトイ類が分布する九州でも、121図でオオユビが「大指」にあたるのと同じような関係である)。しかし、コユビ類やユビ(ノ)コ類のコは、大小の小のほか親子の子の意味をも持ちうると考えられる。とくに、121図「親指」における語形の分布と対照させて考えると、現在は大小より親子の意識が優勢なのではないか、と思われる。元来は大指对小指の意識であったも

のが、のち親指対子指の意識が生じて、このような分布を呈するに至ったものかと思われる。

コヤ指は、2箇所離れて分布しているが、両地域で各々「親指」のオヤユビという語形からの類推でコヤユビを生じたものであろう。

ヒコ類は、親に対する「子」を更に強めたため生じたものであろう。この類の分布する地方は概して曾孫をヒコという地方であるが(139図参照)、正確に曾孫の意かどうか疑問もある。『和名抄』には「孫比古」とあるので、この類は、あるいは「孫指」の意に由来するかも知れない。この類は岩手と関東という離れた地域に分布しているが、古く連続領域があったと考えるより、それぞれの地域で、たとえばオヤが「祖」と考えられ、それに対するものとしてヒコが生まれたと考える方が穏当であろう。古く広い連続領域があったとは考えないとしたが、関東に限れば、房総・神奈川・東京西部・埼玉のものは、ひと昔前には分布が連続していたであろう。なお、関東でヒを[ji]と発音する地方の[jiko]は、音の対応と考えてHIKOと表示しておいた。ここは岩手と異なってシリコと分布が接していないので、シリコの音変化である恐れがないと思ったからである。

シリ類は、「後」の意によるものと思われる。ヒコ類ともとは何か関係があったものかも知れないが、よくわからない。岩手における両類の関係についてはあとで述べる。

山陰の SIRIKO~は、SIRI~に近隣して分布する KO~の KO がついてできたものであろう。能登のシリ類は KO~と分布がほとんど接していないので SIRIKO~という語形を生じなかったと説明されようか。能登に分布している SIRO~は「うしろ」の頭音の脱落したものと思われる。その南に接する SIRAYUBI, SIRAIIBI などは、上記の SIRO が「白」のように意識されたか、あるいはシロが複合語を構成する場合、交替してシラとなることの類推で生じたものであろう。出雲の SIKO は SIROKO~の音節脱落によるものと思われるが、岩手の SIKO は、そうとも考えられるほか、前述の赤で示したヒコ類に対応する語形なのかも知れない。シリ類は、岩手・能登・山陰という辺境の地に離れて分布することから、古いものの残存かと思われるが、前掲の前田氏の論文に見あたらないものであり、断言はできない。あるいは、文献時代よりもさらに古い時期に全国的に連続して分布していたものかも知れない。SIROKUYUBI が兵庫の北に見られるが、129図「か

かと」に SIROKU が現われ(島根), 何か関係があるかも知れない。

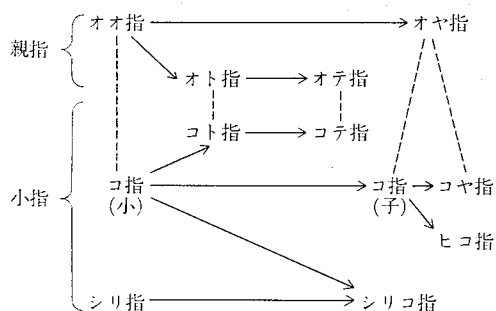
コト類すなわち KODOYUBI, KODEYUBI, KODEBI などは, 121 図「親指」におけるオト類, すなわち ODOYUBI, ODEYUBI, ODEBI などとまったく平行して分布している。これは「親指」の場合と平行的に KOTOYUBI > KOTOIBI > KOTEEBI > KOTEBI > KOTEYUBI という変化をたどったものであろう。ただし, 「親指」におけるオト類に比べて分布の密度の薄いことは, 「親指」におけるオト類の発生につれ, 類推によって「小指」にもコト類が付随的に生じた現象であることを物語るのであろう。小指が子指にかわる現象, コヤ指が生ずる現象を併せ考えると, 一般に小指の名は親指の名称につれて発展するようである。指ごとにそれぞれ名前はあるが, 重要度や頻度などについて差のあることを暗示しているのであろう。

静岡のチイビ, 北陸のコチビ, コイチビなどは「小さい」の意の形容詞語幹による造語であるが, 「親指」にオヤが分布している地方なので, ここでは大小という対称にはなっていない。これらは, コユビのコが「小」と意識されている時代に分岐発生したものであろう。

東北部の ONAGOYUBI, KAKAYUBI は, 同地方の「親指」がオトユビ, オトコユビなどであることと対をなすものである。KAKKOYUBI は KAKAYUBI の変化したものであろうか。

東北に多いカンユビなどは酒の「かん」を見るときにこの指を入れることからの命名と意識されているようである。その近くにサケワカシという語も分布している。「薬指」においてカネサシの分布していたのは中国方面だけであったから, 東北のカン～は「薬指」のカネサシ類とは関係ないと思われる。ただし山口の KANSI だけは分布からこのカネサシと関係の深いものと思われ, これは, 124 図の KANSI と同様である。なお, この地図には, クスリユビ・ベニサシユビ・ベニツケユビなどの語形がかなり見られ, 注目される。一般には薬指でなされる動作を, 小指でするために, その名称が小指につけられたのであろうか。

最後に, 「親指」と「小指」を関係づけた変化推定の図を試みに示しておく。



126. ゆび(指)の総合図

この 126 図は, 121 図「親指」・122 図「人差し指」・123 図「中指」・124 図「薬指」・125 図「小指」に現われる「指」にあたる部分の語形を総合して作成した地図である。具体的には, 各地点ごとに, 121 図から 125 図までの 5 本の指の名称のうち, 「指」にあたる部分を抽出して, たとえば, -YUBI が何回現われ, -IBI が何回現われたかを数えて, それらの回数を符号化したものである。したがって, この地図は各調査地点で「指」それ自体を何というかを直接表現したものではない。注意してほしい。

この地図の凡例で, 見出し語形の次に記した数字は, 5 本の指の名称について何回その語形が現われたかを示している。その数が多いほどその語形に与えた符号の色が濃く見えるよう, 符号のぬりつぶし方や, 中ぬきの仕方を工夫したつもりである。ただし, YUBI 5 だけは標準語と同じ現象であって全国的に多数分布しているので(原則からははずれているが), 地図を見やすくするため小さな符号を使った。

ある地点で 5 本の指の指部分の語形が全部一致していた場合, あるいは, 1 種類の語形のほかに無回答・指部分のない形・指部分不明などしかない場合は, 地図上に単一符号として示される。この地図では, 無回答・指部分のない形・指部分不明などは無視して, 計算には加えなかった。もし, ある地点で 5 本の指の指部分の内容の全体が, たとえば, -YUBI と -IBI とに分かれている場合は, この 2 個の符号をならべてへでくって示される。なお, 原地図の, ある 1 本の指について -IBI と -YUBI 両形が併用されている場合は, それらの語形を合計するさい, それぞれ 1 個分に数えて計算した。したがって, この場合, 1 地点にならべて示した符号の数字の合計は 5 を越すことが起こりうる。ただし, ある 1 本

の指について、たとえば OYAYUBI と OUYUBI とが併用されているような場合は、指部分に関してこの指は単用と認めて、-YUBI として1個分に数えた。いうまでもないが、1地点の符号の数字の合計が5に満たない場合がある。これは、何本かの指についてその表現中無回答・指部分のない形・指部分不明があったことを示す。また、1地点の2符号以上の合計が5であっても、5本の各指に分属されるとは限らないことにも注意したい。ある指は2形以上の併用であり、他の指で無回答、指部分がないあるいは指部分不明があった結果、合計が5であるといった場合もありうるからである。

指部分の音声をどのようにまとめて-YUBI, -IBI などに分けて各語形に所属させたかについては、原図である121図から125図までの指部分の場合とまったく同じにしてある。したがって、上記の5枚の原地図の凡例の表示と地図の符号とによれば、原理的にはこの126図を機械的に作ることができる。

指部分をどこで前部分と切り離すかについては、各地点とも、その地点における5本の指に関する原資料にもとづき、音声表記された語形を並べて、帰納的に結論を出した。原図で'印によって切れ目の表示をしていないものでも、すべて、このようにして形態素分析は行なった。ただし、たとえば、[ojæ:bi] [kø:bi] などのいわゆる融合形は、音韻対応を考えれば-IBIを抽出できるかも知れないが、「指部分不明」の扱いをして、-IBIなどの数に入れなかった。東北方言などで指小辞のついた KOYUBIKO の-KO は切り捨てて、YUBI に入れて合計した。沖縄などの IIBINGWAA のように、指部分が語頭にあるものも IIBI に入れて合計した。

このように、この図は、合計図すなわち「指」にあたる部分を各地点でどういう語形で呼ぶ傾向が強いかを見ようとしたものである。前にも述べたように、厳密な意味では、これをもって総称としての「指」という単語(単独語)の名称そのものの方言分布と見なすわけにはいかない。すなわち、この図のもととなった資料は、直前に種々の音が連なった場合を含んでいるから、その音との関係とか、あるいは一般的な意味で複合語の構成部分であるからとかの意味で、「指」単独の場合と異なっている可能性がある。

地図における分布に目を向けよう。紺で示したユビ類が全国的に分布する中に、赤で示したイビ類が近畿を中心として交通路沿いに東西へ、殊に西へは広く延びてい

る。この分布によれば、古くは全国的にユビ類が分布していたところへ、新しく近畿でイビ類が発生して、そこから東西の交通路にそって広まった、殊に西は瀬戸内海を経て遠く九州まで達したと解釈することができる。1650年刊の『かたこと』には「ゆび」をイビと言う指摘がある。

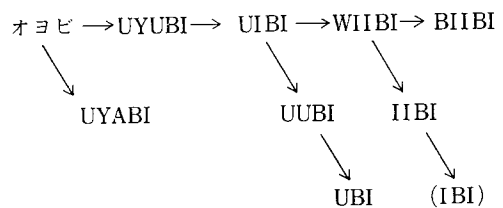
「指」のユを「雪」(質問番号125—地図未刊)のユの分布と比べると、「雪」のイキが限られた地方に認められるのに対して、「指」をイビという地域がこのように非常に広がっていて、両図の不一致が注目される。「指」の場合は単なる音韻変化というより、イビという語形が単語として各地に侵入したものと考えらるべきであろう。もっとも、「雪」が単独語なのに対して、これは複合語の構成部分であるという違いが反映している面があるかも知れない。

新潟・庄内に YOBI が分布するのは、ユが YO であるという規則的な音韻対応によるものと考えられる。新潟・北陸・山陰の EBI も、イが E であるという規則的な音韻対応によるものと思われる。宮城・福島の ZYUBI の頭音は [jɛ] とでも記されたような摩擦の強い [j] の音声であって、これは、この地方の /ju/ の頭音の音声の傾向によるものである。

九州には語末のビが ~B, ~P, ~T, ~HU となる音韻規則のある地点があり、それがこの「指」の場合にも反映している。

兵庫・山陰などの IBE・EBE・YUBE などのベ語尾の分布は、ユビのビをべという語形にする傾向が大坂か兵庫で発生し、周囲に広まった、かなり新しいものであることを推測させる。

奄美・沖縄の UBI, UYUBI, UYABI, UIBI, WIIBI, BIIBI などは、中央の文献でユビなどより古く使われていたオヨビにあたるものが変形して残存したものと思われる。すなわち、次のような変化が考えられる。



この地図では、共時的な現象そのものを分類して色分けをしているので、沖縄の IIBI・IBI は本土のイビ類

と同じ赤で示してあるが、歴史的には上図のようにUI-BI, WIIBI から変化したものと考えることもできる。もしその考えをとるならば、沖縄の全地点にオヨビの系統の語が分布することになり、地理的には非常にはつきりする。奄美大島・徳之島の IBI も、これに準じてIIBI の長母音が短音化したものと見るならば、本土の IBI と同符号が与えられてはいるが、由来の異なるものと考えることができよう。

## 127. しもやけ(凍傷)

しもやけを表わす方言形は、そのほとんどが前後二つの部分から成りたっている。符号をきめるにあたっては、前部分の類別を色で示し、それら各類の間の後部分の共通性を形で表わした。すなわち、前部分にシモを持つ類には空を、シミを持つものには緑を与え、以下、シンに紺、ユキに赤、カンに茶をそれぞれ与えた。後部分には、ヤケに円形符号、パレ・パレにたて長の三角形等々を与えた。

なお、この図では音声の変種もある程度まで示した。前部分については、ユキの類の第1音節のユがイとなる現象、第2音節子音の有声化等を取り出した。後部分については、ヤケの第2音節子音の有声化等を示した。

空の円形符号で示したシモヤケの類は、福島東部から関東全域・中部地方南半にかけての地域に、一つの広い領域を持ち、さらにこれと連続して、近畿中央部・兵庫南部・岡山・広島東半・四国・大分・福岡にかなりの分布を示している。そのほか、シモバレ、ユキヤケなどの類の領域内にも点々と分布が見られる。なお、〈併用処理の原則〉で処理した SIMOYAKE は、九州南部、和歌山のシモバレの領域、日本海沿岸・愛媛のユキヤケの領域に多かった。SIMOYAGE はこの原則には該当しないが、新潟・福島・山形などのユキヤケとの接触地帯で、〈新しい、共通語的だ〉等の注の付けられているものが多かった。

空の三角形で示したシモバレは、近畿南部から兵庫南端・徳島・高知にかけての地域、九州、それに山形北部と、それぞれに分布領域を持ち、富山・北海道にも見られる。そのほか、SIMOPARE は岩手に、SIMUHWARI は奄美喜界島に1地点ずつある。SIMOBAE, SIMOBAI もこの類と考えられ、鹿児島、佐賀におのおの分布する。

シモブクレは岡山・広島・四国北東部に分布し、福岡、福島、北海道にも点在する。

緑を与えたシミの類のうち、SIMIYAGE は岩手に2地点である。三角形の符号を与えたシミバレの類は、岩手・秋田北部・青森に一領域、岐阜・石川に小領域を持ち、北海道にも見られる。東北地方の領域では SIMIPARE の方が多い。

シンバレの類はシミバレの類とほぼ同地域に分布する。SINBARE, SINBARI の見出しには N の部分で一拍を形成すると認められる表記のもののみ含め、B の直前にわたり鼻音を持つものは、SIBARE, SIBARI の中に分属させた。そのシバレは、道南・青森に数地点分布する。

赤の円形符号で示したユキヤケの類は、本州の日本海岸のほぼ全域にわたって分布し、東北地方ではさらに広い地域を占めている。そのほか、福岡、愛媛、北海道にも見られる。YUGIYAGE 等、第2あるいは第3音節の子音が有声音となるものは、東北地方に多く分布する。ユキのユが ZYU と示したような有聲の摩擦音となるものは、福島・山形・宮城に見られた。ユキの YU が I となるものは、山陰地方、岐阜、北陸、新潟、岩手、秋田等に多く分布する。これらの I の中には、[e] などをも含めてある(この YU ~ I ~ ZYU の問題については126図「ゆびの総合図」を参照)。そのほか、後部分にカケあるいはガケを持つものは、北陸から新潟にかけて多く分布し、山陰にもある。

茶の円形符号を与えたカンヤケはもっぱら山口に分布し、カンバレは山口・広島に見られ、さらに熊本、大分、千葉にもある。

SIMOYAKERU 以下、動詞形で示したものは、それぞれの連用形のところへ分属させてもよかったかとも思うが、北海道、岐阜のシバレルが注目されたので、別見出しとした。シバレルは先のシバレとも関連するが、第2集96図・97図で現われるシバレルとも関係するので、比較されたい。なお、八丈、琉球には無回答が多かった点は注目される。これらの地域の温暖な気候と関係があろう。

つぎに、この図の分布から「しもやけ」にあたる語の変化の歴史をたどってみよう。

はじめにも述べたように、この図に現われる語形のほとんどは、前後二つの部分から成立している。この図を解釈するとき、各部分の分布も同時に考慮する必要があ

る。

後部分のヤケとハレ(バレ・バレ等)とを比べると、ハレの方が東北地方、九州南半、その他と比較的辺境の地域に分布する。したがって、後半分については、ヤケよりハレの方が古いと言うことができよう。

シモバレとシモヤケとを比べると、少なくとも、西日本では、シモバレの方が古いと言えよう。現在の西日本におけるシモヤケの領域にも、以前はシモバレが分布していたと考えられる。関東・中部に広く拡がるシモヤケ領域にも、かつてシモバレがあったかどうかは、現在の分布から判断することはむずかしい。しかし、西日本でシモバレ>シモヤケという変化が考えられることと、後にユキヤケの解釈のところで述べるが、関東・中部にはユキヤケは分布しなかったと考えられることから、東日本のシモヤケの領域においても、もとはシモバレが分布していたと考えておく。

ユキヤケとシミバレ(シミバレ・シミバレ・シンバレ等をまとめてシミバレとする)とを比較すると、東北地方のシミバレは、ユキヤケよりも外がわに分布し、ユキヤケよりも古いものと思われる。後部分を切り出してその歴史を考える観点に立っても、ハレを持つシミバレの方が古いと考えられるのではなからうか。ユキヤケをシミバレより新しいとすると、岐阜北部・石川南部のシミバレが問題となる。分布がユキヤケを分断していて新しい拡がりのように見えるからである。しかし、これを新しいとすると、おそらく関連のあったと考えられる東北地方のシミバレとの関係が必ずしも合理的に説明できない。一度ユキヤケが拡がったあと、どこかに残存していたシミバレが再び勢力をもりかえたものと考えすることはできないだろうか。岐阜北部のものは残存と考えても無理はあるまい。

このように考えるよりどころの一つとして、第2集96図・97図「こおる」の図を挙げることができる。この両図にはシミルが広く分布し、その領域が本図のユキヤケとシミバレの両領域にほぼ重なることが注目される。シミルとシミバレのシミとは同根であり、シミバレという語が、シミルを後だてに生じ、存立ないしは潜伏していたことは、十分考えられる。シミバレは、このシミルの分布を背景として、かつては、現在のシミルの領域、すなわち、この図のユキヤケの分布領域に広く分布していたのではないだろうか。

つぎに、ユキヤケとシモヤケとの関係はどうであろう

か。一つの仮定として、中央で旧来のシモバレと新しいユキヤケとが混交して、シモヤケが生じたということが考えられる。しかし、この考えかたには、次の2点で多少難がある。一つは、もしそのような変化が中央で起きたとすれば、そこには前部分においてシモ→ユキ→シモというように一度衰退したシモが再び勢力をもりかえしたとせざるをえないことになる。このことは、あまり自然な現象ではない。さらに、分布を見ると、シモバレとシモヤケは広い地域で接しているから、両者は歴史的にも連続していた可能性が強く、これに対して、ユキヤケとシモバレとは、一部を除いてほとんど分布が接していないから、この両者の間の歴史的連続性ははるすいように見える。上の二つの点から、シモバレの後に生じた語形がユキヤケであったという可能性は非常にすいことになる。

もしそうならば、必然的に、ユキヤケはシモヤケより新しいということになる。さきほどのシミバレとユキヤケの比較のところで、現在のユキヤケの領域には、もとシミバレが分布していたとした。そうだとすると、現在のシモヤケの領域でシモバレを追ってシモヤケが拡がったときには、日本海沿いの地域にはシミバレが分布していて、そのシミバレの背景には「こおる」の意味のシミルが存在していたということになる。そしてユキヤケはその後、シミバレを追って拡がったということになる。ユキヤケが生じ、拡がる要因について考えられることに、次のことがある。

さきほど、ユキヤケとシミバレを比較したときに、シミバレは古くは96図・97図に見られる「こおる」の意味のシミルを背景にしたシミルーシミバレという連合作用の上に立って広く分布していたと考えた。96図・97図のシミルの分布を見ると、近畿北半ではシミルはイテルによって分布が断たれている。両図の解説にもあるように、かつてはこの地域にもシミルが分布していたと考えられる。近畿北半でシミルが分布していた間は、シミバレと密接な関係のあると思われるシモバレは、語形は違っていてもやはりシミルという後だてを持っていたであろう。ところが、シミルが他の語形に追われて消滅してしまった後には、北畿北半のシモバレは、その存在の後だてを失い、新しい語を生み出すか、他から別語を取り入れるかする基盤ができていたということができる。そのとき、ユキヤケという語が生まれ、近畿北半を中心として拡がったと考えることができる。後部分にヤケを用

いたのは、すでにすぐ南の地域に拡がっていたシモヤケのヤケに影響されたものとすることができよう。そしてユキヤケは、その後も、シミルがまだ分布し、シミルーシミバレ(シモバレ)という組み合わせのある地域のシミバレ(シモバレ)をも追って、拡がったと考えられる。

シモヤケがとり入れられずユキヤケが新しく誕生し、そして発展した理由の一つとして挙げられるのが、「冬の根雪期間25日以上」の豪雪地帯とユキヤケの分布との一致である(柴田武「単語の全国分布図」人類科学第15集, 1963参照)。豪雪地帯での「しもやけ」は、霜によると考えるより雪によって生じると考えた方が、日々の生活の感覚から、ふさわしい名称だったのであろう。

中国西部のカンバレ、カンヤケは新しくできた語形であろうが、カンバレがシモバレから生じたものかどうかは、よくわからない。ユキヤケの分布の内部にあり、先の推定からは、この地域にも、もとシミバレ(シモバレ)が分布していたことが考えられる。96図・97図を見ると「こおる」の意味で、シミルに連続してカンヅルが広島南部から九州北部にかけて見られる。すなわち、この地域には、カンという要素が存在する。以上から、シミルを後だてとして分布していたシミバレ(シモバレ)の領域内で、カンヅルのカンを背景にカンバレが生まれたものと考えられる。その後ユキヤケが東方から拡がってきたが、カンバレがさらにその上に拡がって、ユキヤケが四国に残ったのであろう。カンバレは、さらに西に進んでユキヤケの領域にはいって、カンヤケが生じたものと考えられる。熊本、千葉のカンバレについてはよくわからないといわざるをえない。それぞれシミバレ・シモバレなどのバレを基盤にシミ・シモなどの部分をカン(「寒」か)にとりかえて誕生した語形であろうか。

最後に、2語形以上が併用されている地域に見られた注記についてふれておく。シモヤケ・ユキヤケ併用の地帯で、ユキヤケはシモヤケよりも程度のひどいものとする注が、東北地方に限らず西日本にも各地に見られ、注目される。また、北海道にはシモヤケと併用されて、シバレルという語が多く見られた。極寒期のころの凍傷という注が多く、この地方の「しもやけ」のなみなみならぬことを示している。なお、北海道では、トオシヨオという回答が、他の表現と併用されて5地点ほどあった。たとえば1862.48ではシモヤケについては、冬のはじめになるもので「凍傷ではない」、ユキヤケは厳寒になるもので「凍傷である」と注記してあった。新しい知識としての

漢語と考えて、図には載せなかったが、この地方では、標準語とちょっと違うニュアンスで、トオシヨオという語が、日常の生活語として行きわたっていることを示しているであろう。

## 128. くるぶし(踝)

この項目は後期計画にはいって新しく加えられたものであるから、地点数が少ない。

内側のくるぶしと外側のくるぶしとを区別して、それぞれをウチクルブシとかソトクリブシなどとする回答があった。この地図では、それぞれ KURUBUSI・KURIBUSI の見出し内に含めてある。

なお、本図の内容には次の129図「かかと」と関係のある部分があるので比較されたい。

大観すれば、東日本においてやや単純であり、西日本において種々の表現が現われると言うことができる。

この地図で草の符号を与えたクルブシの類は、現在主として東日本に見られる。まず、見出しのうち KURUBUSI 以下 KUOBASI までを一群とすることができようが、このうち KURUBUSI, KUOBUSI, KUOBOSI 以外は多くて7地点, ASIKURUBUSI, GURUBUSI, KUOPPUSI, KURIBOSI, KURINBOSI, GURIBOSI, ASINOKUOBOSI, KUOBASI は、ただ1地点にしか見られない語形であった。

地点数の多い3種の語形のうち、KURUBUSI は当然あちこちに見られる語形であるが、福井を中心とする北陸地方、および新潟(佐渡を含む)に顕著であるほか、北海道に多く現われる。また、西日本に点在するものうちかなりは、この KURUBUSI である。なお、5676.52のものはクルンブシであった。別見出しとすべきものだったかも知れない。

KUOBUSI はあちこちに点在するが、福島西半にやや目立った領域を認めることができる。

KUOBOSI は、富山・石川を中心とする地域や関東から東海にかけて、および東北地方の日本海岸から青森にかけての地域に認められる表現である。本集133図に「(小さい)ほくろ」の地図があるが、その中で宮城から関東東部にかけて、ほくろをクロボシなどという地方があって注目される。しかし、128図と133図のクロボシは、地域的にほとんど重ならない。わずかに4742.37

(宮城郡宮城村上愛子字赤生木)において両者を KU-ROPOSI と行って、同音異義語を形成しているだけである。4752.11 では、くるぶしは KUROBOSI であり(カードには sotokurobosi, utsúkurobosi とある)ほくろは KUPOSI である。

KURUBUSI 以下 KUROBASI までを比較して、第2音節に RI の現われるもの、第1・第2音節が KO-RO となるもの、第1音節に GU が現われるもの、第3音節の子音が P であるものなどの共通性を抽象することができるが、わずかに第2音節に RI の現われるものが主として KURUBUSI の領域に隣接して出現するといったことが言えるくらいで、地点が少ないせいか、どれもまとまった領域を認めうるものはなかった。

KOBUSI, ASINOKOBUSI, KOOBUSI および KOBOSI を、次の一群として認めることができよう。4種のうち ASINOKOBUSI は5地点、KOOBUSI と KOBOSI は、それぞれ1地点にしか現われない。したがって主流となる語形は KOBUSI ということになるが、宮城を中心にややまとまった領域があるほか、西日本を含めて全国的に認められる語形である。

見出し KUROKOBUSI 以下 KOROKOBOSI まで(KOBOSI を除く)を次の一群と認めることにしよう。KURU-, KURO-, KURI-, KORO- と -KO-BUSI, -KOBOSI が結合したと思われる類である。領域は主として東北地方であるが(北海道にはほとんどない)、遠く愛知にもわずかの領域を認めることができる。この群の中で優勢なのは KUROKOBUSI と KUROKOBOSI であるが、その領域は錯綜しつつも、概略前者は太平洋岸、後者は秋田を中心とする日本海岸といえることができる。

さて草の類を総合的に比較すると、結局 KURU-, KURO- と -BUSI, -BOSI を含むものが大勢を占め、さらに、その接合点に -KO- を持つものと持たないものの2種に大別できると考えることができよう。

このうち、KURU- と KURO- の分布を比較すると、KURO- の領域が連続しているのに対して、KURU- の領域は分断されているといえよう。この点から KURU- は KURO- と比較して古い表現とすることができるかも知れない(ただし関節のことだから KURO- を合理化して KURU- に変える方向も考えうる)。

-BUSI と -BOSI の分布を比較すると、-BOSI の

領域が連続しているのに対して、-BUSI の領域は分断されている。このことから、-BUSI の方をより古い表現とすることができるかも知れない(ただし、この場合も関節のことだから、-BOSI を合理化して -BUSI に変える方向も考えうる)。

接合点に -KO- が現われるかどうかについては、-KO- の現われる表現の方が領域を分断されており、古い表現と見ることができよう。

かくて、分布の概略的考察によって、この類の中でもっとも古いと考えられる表現は、\*KURUKOBUSI (ただし現実にはない)ということになる。はたしてどうであろうか。以下に説明する CUNOKOBUSI, TORIKOBUSI などとも関係づけて考えなければならないのはもちろんであろう。さらに、あとで述べるように、キビスの類との関係も考えねばならない。

CUNOBUSI 以下、この地図で空の符号を与えた見出しは、語頭に CU- の現われる点と分布領域が連続する点では共通性があるが、実際はかなり相違する語形が含まれている。CUNO/KOBUSI, CU/KURIBUSI などのように見れば、草の類の下位分類と比較できる面もある。

この類に含まれるものは、いずれも地点数はあまり多くない。このうち、CUNOBUSI と CUNOBOSI だけは近畿の南北に見られ、各種の派生語形を生み出す基本となった語形らしく見える。いずれかが、ある時期に近畿の中心地域でも使われていたものではあるまいか。CUKURIBUSI 以下 CUBURIBUSI までは、近畿北部にのみ現われる語形であり、CUBOBUSI 以下は、近畿南部にのみ現われる語形である。前者はツノブシ類とクラブシ類の混交形およびその変種であろうか。また後者は、平安朝初期の辞書に見られる「豆夫不志・豆不々之」と関係のあるものかも知れない。なお、見出し CUBURIBUSI はツブリムシ・ツンブリブシ・ツンブルブシ・ツンブリムシをまとめたものであり(頭のツブリと関係があるかも知れない)、CUBOBUSI はツボブシ・ツボムシをまとめたものであった。なお、129図「かか」ともわずかに1地点ではあるが CUNBURIMUSI が現われた。

TORIKOBUSI 以下 TORIKO までは、西日本においてかなり勢力の強い類である。中で TORIKONOHUSI がもっとも強力であるが、点在する TORIKOBUSI から TORI-KOBUSI > TORIKO-BUSI > TORI-



KONO-HUSI のような過程によって発達したものはあるまいか。

先にあげたCU-の類とこのTO-の類の語頭は、何か通ずる点がありそうに思われるが、よくわからない。古いツブフシの語頭が [tu-] であったことと関係はないであろうか。トリ-となったきっかけには鶏の足のこぶが関係していたと考えることができよう。

なお、見出し TORINOKOBUSI にはトンノコブシ、トイノコブシが、TORIKONOHUSI にはトルコノフシ、トオコノフシ、トコノフシ、トイコノフシ、トリコノフシ、トリコンブシ、トイコンブシ、トンコンブシなどが含まれている。

KOBU 以下 KOBO までは、一般的なコブを表わす名詞が、このくるぶしをも表現するものとして流用されているのかとも考えられるが、全国にいくつかのまとまった領域を認めることができるので、見出しとして立てた。

HYAKUNICIKOBU は、島根中部にややまとまった領域がある。ただし 6349.80 では、内側のものをヒャクニチコブ、外側のものをセンニチコブという回答であった。また兵庫のものはヒャクニチコブではなくセンニチコブという回答であったが、ここにまとめた。地方独自の命名であろう。

KURUMI 以下 MOMO までは、木の実ないしは果実に関係のある名称という点から統一して橙の符号を与えたが、いろいろのものが含まれている。

もっとも目立つのは KURUMI であるが、新潟西部から関東西部・中部地方東部にかけて集中的に分布している。このほか、わずかではあるが、奈良・隠岐にもある。胡桃の実とくるぶしとの形状の類似から安定して使われているものであろうが、元来は、KURUBUSI > KURUNBUSI > KURUMIBUSI > KURUMI の過程を経て生じたものではあるまいか。その過程を暗示するように、一方ではさきに述べたように 5676.52 にはクルンブシがあり、KURUMIBOSI が長野南部と大阪の南部に見出される。奈良・三重の KURUBI, ASI-KURUBI は、KURUMI からさらに変化したものか KURUBUSI から KURUMI に至る過程で生じたものか不明である。

UMEKURUBUSI 以下 UMEGISI までの分布領域は、南近畿においてクルミ類と接しているほかは、クルミ類と無関係のように見える。ただし UMEKURU-

BUSI だけは、滋賀に1地点で、KURUBUSI の領域に接しているところから、おそらく混交形と考えられる。UMEGISI は京都に1地点のみ。

この類の中では UMEBOSI が最有力であるが、近畿地方においては、もっとも新しく誕生した語形のように見える。一方、これは九州にも分布している。領域が分断されているものとみて古く近畿と九州とを覆う地域に広く分布していたと考えるより、各地で、KURUBOSI, CUNOBOSI, TORIKOBOSI などをきっかけとして発生したものと考えてみたい。九州のものはそこだけにある MOMOBUSI との関係も考えるべきであろう。

MOMOBUSI が九州のみに発見されるのに対して、MOMOZANE は2か所の離れた領域を持っている。MOMOZANE とたとえば TORIKOBUSI が混交して MOMOBUSI が生じたと考えることはできないであろうか。もしそうだとすれば、MOMOZANE は TORIKOBUSI などが西進してくる前の、西日本における古い表現かも知れないと言えることになる。なお、MOMOGUI は 8360.39 に1地点、MOMO は九州に3地点の語形であった。

KUHUSI 以下の赤い符号を与えたものは、いろいろのものを含んでいるが、かかと、こむらなど、くるぶしではない人体部分をさすと、一見思われることばの類である。

KUHUSI 以下 GUIGWAA までは沖縄島南半にのみ見られる語形である。これらは特に人体の他の部分を表わすものとは言えないが、次の KIBISI 以下との関係を考えてここに示した。GUIGWAA は前4者とかかなり違うものと見られるが、分布の点からここにまとめた。『沖縄語辞典』には「guhusi 骨の丸くどがっているところ。くるぶしなど、手首・足首にあるもの」とある。

KIBISI 以下 KEEBUSI あたりまでは、いろいろの変種はあるが、129 図のキビス類と比較すべきものである。この地図では福島・茨城・栃木に KIBISU, KIBISI, KIBISYO の大きな領域が認められ、八丈島に KIIBUSI, KEEBUSI, KONSU があるほかは、主として西日本にわずかに点在するだけで、129 図のキビス類の分布地域とは、ほとんど重ならない。こまかく点検すると、わずかに 6503.73 の地点で、両図とも併用ではあるが、KIBISU が出現するだけで、その他、7313.

68で踝 KIBISYO, 踵 KIBISYA が現われたり, 6476.13で踝 KIBISINOKOBUTO, 踵 KIBISI という回答があったりしたぐらいである。宮崎の KIBISU も, 129 図ではアドの類の現われる地方だから, 領域は重ならない。以上のほかわずかに注目すべきは次の 3 地点であろう。6385.10 は本図では KIBISU であるが 129 図には KAGATO が現われる(付近, たとえば 6385.63 には 129 図にも KIBISU がある)。7323.02 は本図 KIBISYO (GURIGURI と併用) であるが, 129 図は KAKATO である(付近, たとえば 7322.79 には 129 図にも KIBISYO がある)。6560.40 は本図 KIKIBISO (UMEBOSI と併用) であるが, 129 図は KAGATO である(付近, たとえば 6469.77 には 129 図に KIKIBISU, KIKIBISO がある)。

両地図のキビス類を総合的に比較すると, 概略的には 129 図におけるキビス類の領域の外側に本図のキビス類が見出される。こう見るならば, これは九州南部の KIBISU に連続するものとみなすことになる。

129 図におけるキビスの類の領域はきわめてはっきりしているが, その表現が別の隣接した意味へいわば滲出して, かかとの場合には別語形存在(抵抗)によってはたせなかつた領域の拡張を行なつたと見るべきであろうか。ただし, 西日本においてはこの考えによってほぼ満足することができようが, 東日本においてはやや疑いが残る。かかどにおけるキビス類とくるぶしにおけるキビス類の領域が, かなり離れているからである。この場合 129 図の房総半島南端に見出される KURIBUSI などが, 残存として大きくクローズアップされてくるかも知れない。

こんなことから, 次のような考え方も可能となるかも知れない。古くは「くるぶし」と「かかど」との名称を区別しない時代があつて(地域は福島あたりから北九州までか), キビスあるいはそれに準ずる言い方が行なわれていた。時が移るにしたがつて西日本ではキビスは「かかど」に固定し, 一方, 福島から茨城にかけてと八丈では「くるぶし」に固定し, 両地域の間地域ではクル(コ)ブシと変形しながらも「くるぶし」に固定していった——という考え方である。しかし, 残念ながらよくわからないと言わざるをえない。急須を意味するキビシヨや虱の卵を意味するキビスなども比較しつつ考えるべきなのであろうが, いま適当な材料がない。

NAKIBISUBONE および NAKUBESUTON-

GOO は, 前に示したキビス類に通ずるところがある。前者は長崎(五島)と佐賀に, 後者は長崎に見られる。-TON-GOO の部分はトリコノフシの語頭部分と比較すべきものであろうか。112 図「ものもらい」に METONGYO という語形があるが, 何か共通性を感じさせる。NA-(KI~KU) の部分は, 古語ツブナキのナ(キ)の部分と関係があろうか。

KAGATO [kanato], AKUDO は, 前者は三重, 後者は北海道に見られるものであるが, すでに述べてきた「くるぶし」と「かかど」との交流が, ここにも現われたと見るべきものであろう。単なる誤答とはできない。三重のその付近では, 128 図・129 図ともさまざまな語形の混在する地域であり, 北海道は 129 図でカカト類とアクト類とが併用されている地方である。

SIROKUI は出雲に 1 地点。129 図においてこの類の現われる地方である。ただしこの 6401.89 では, 「かかど」は KAGATO だと答えている。元来この地方ではシロクイは「くるぶし」「かかど」の両意にあたる語であったが, 「かかど」について新語形が侵入してきた際に, この語形が「くるぶし」に固定していったものであろう。ちなみに, 本図 6402 のその他はアシノコトジメ, 6410 のそれはアシノイボであった。シロクイが「かかど」に固定したために「くるぶし」のほうに独自の語形が生じたものと考えられよう。6411 の無回答もこれに準じて考えよう。

SUWARIKOBU 以下の回答には, あるいは誤答が含まれているかも知れないが, 一般に人体名称はその部位を移す場合が多いのでここにまとめた。

SUWARIKOBU については三重にまとまった領域があり, 福岡北部には SUWARIDAKO と SUWARIZUME が隣接しているほか, 鳥取東部にも SUWARIKOBU と SUWARIDAKO が近接して見出される。

ASIKUBI は京都北部では, やや近接して現われている。

KOBURA, ASINOCUTO は「ふくらはぎ」を表すことのあることばであるが, 前者は各地に点在し, 後者は熊本にわずか 1 地点である。

HIZI は山口である。実際の回答はウチノヒジ・ソトノヒジであった。

PANNUSARAA は, 八重山に現われる。脚の皿とすれば膝蓋骨のことかとも思われるが, いかがであらう

か。なお、鳩間島での実際の回答はパンスサラーマであった。

MEKUGI は対馬に現われるもの、MENUKI は静岡西部に現われるものである。

GURUGURU 以下 GURIN までは、この骨の形状からの、あるいはここが関節の回転軸であると見たての命名であろう。北九州を中心にややまとまっているほか、伊勢湾周辺にも見出される。

KURUMA は石川に1地点、ASIKUBINKURUMA は大分に1地点である。

ISINAGO は千葉の東北部にまとまって分布している。この地方独自の発生であろうが、145 図「お手玉」における ISINAGO などと比較すべきであろう。ほとんどイシナゴであったが、6700.98 はイシナンゴ、6711.16 はイシナンゴであった。

TANABUSI は沖縄島北部を中心にする地域と八重山に認められる。TA-を手と見れば手首にあたる同種の骨のようにも思われるが、かなりまとまった領域を持っている。

GABU 以下は奄美諸島の独特の表現である。

その他に分類したものは、1地点にしか認められず、しかも他の見出しとの関係をつけにくいものであった。全部で40地点ほどである。いろいろ珍しい表現が含まれていたが『日本言語地図資料』にゆずって、ここには示さない。

無回答は、主として西日本にかたよって散在している。

## 129. かかと(踵)

日本における単語の全国分布地図は、この『日本言語地図』以前にはきわめて少ない。珍しい例として、この「かかと」には、『日本方言地図』(東条操先生古稀記念会編・昭和31年・吉川弘文館)の中に、大岩正仲氏作成の地図がある。

この129図は、大岩氏の地図と調査の時期・方法はことなるがよく似ており、それとの比較ができるように色を工夫してみた。なお、本図は128図「くるぶし」と関連するところがあるので、それとも比較されたい(両図間の関連的な説明は、128図の説明で触れた)。

茶で示したカカトの類は、関東を中心とする地域で専用されているほか、全国に点在する。いくつかの音変種

があるが(KAG[g]ATO には [kayato]—伊勢湾周辺と三宅島に計6地点、KAG[n]ATO には [kägato]—高知などに20地点以上、[kangato]—徳島西部に4地点、KAG[g]ADO には [kayado]—利根川河口付近に4地点、など)、ここで注目すべきは、関東以外で使われるカカト類のほとんどが、第2音節に濁音を持つことである。これらのうち千葉北部以北に現われる KAG[g]ATO、KAG[g]ADO の中には、もちろんカカトに対応するものが含まれようが、東北・北海道に見られる KAG[g]ATO、KAG[n]ATO、KAG[n]ADO や、新潟と伊豆とを結ぶ線以西の KAG[g]ATO、KAG[n]ATO のうち大部分は、現代標準語形に正確に対応するものではない。西日本の KAG[g]ATO などが、はたして標準語形と意識されているかどうかは、不明である。

関東のカカトは、その周辺をアクトに取り巻かれている。アクトが古くカカトは新しいのであろうが、この関東のカカトはもとはカガトであり、現在全国に散在するカガトは、関東がカガトであった時代の姿を伝えているのであろうか。もしそうであるならば、関東では孤立的にカガト>カカトの変化があったことになる。なお、カガトのカガの部分、動詞カガムと関係があるかも知れない。

KAHATO から KAATO までは KAKATO の変種であり、千葉南部および伊豆大島に現われる。KAATA は、KAATO から変じたものであろう。KARATO は福岡北部に唯一の語形であるが、KAKATO との関係はよくわからない。

線の符号で表わしたアクト類は、新潟と愛知とを結ぶ線以東、北海道まで広く使われている。東北・北海道の AKUDO、AG[g]UTO、AG[g]UDO は、アクトに対応する。

AKUTTO は長野南部にわずか1地点、AG[n]UTO は静岡西部に数地点見られるが、後者は愛知東部の AG[g]UTO と同じものであろう。この付近には AG[n]OTO、AG[n]UCU もあり、第2音節に濁音の現われる傾きがある。AG[n]UDO は岩手・宮城にわずか見られるが、おそらく個別的なものであろう。AHUTO は新潟西部から長野北部にかけて4地点である。KABUTO は新潟に1地点、分布の観点からここに並べたが、語形はかなり異質である。KA-の部分にはカカトの影響が考えられるかも知れない。AKOTO は静岡に1地点、AG[n]OTO は静岡に3地点である。

まとまった領域であると認められようか。AG[g]ODO は山形東部、AG[n]ODO は岩手西南部に各1地点である。以上はアクトの変種としてまとめることができよう。

T, Y, V の符号で示したアクトの類は、西関東と東海地方に見られる。このうち AKKUCU は長野東部に1地点、AG[n]UCU は静岡・愛知県境付近にのみ現われる語形であるが、後者についてはアクトの説明で指摘したように、第2音節に濁音の現われる地域である。AKOCU はアクト類の AKOTO, AGOTO などと通ずるところがあるが、個別的に発生したものであろう。

アクト類・アクト類は、ともに現在その領域をいくつかに分断されている。ともに、過去のある時期に、その領域は関東地方を介して連続していたと考えられるが、アクト類が古くアクト類が新しいものと思われる。方言辞典の類を見るとアクト・アクトには踵以外の意味を持つ場合があるようであるが、関連して考えるべきものであろう。

空の符号で示したアクトの類は、中部地方山地から伊豆諸島にかけて使われている。特にここで指摘すべき音変種はないが、AKKOI の内容はすべて [akkoĩ] であったから、見出しは AKKOĩ とすべきだったかも知れない。語形相互の関係は、分布状態をいれて考えれば、次のような図によって示すことができよう。

AKKUGI—AKKOI・AKKOGE

AKKUI・AKUI—AKKOI・AKOI—AKKO

AKKURI AKKEI・AKKE・AKKII

左にあるほど古いものと思われる。末尾音節が -GI・-GE となるものは、アクトなどに何らかの民間語源が働いて生じたものであろう。第2音節に -KO- (あるいはそれに準ずるもの) の現われる語形は、アクトに対するアクト、アクトに対するアクトと平行的に考えるべきものであろう。AKUBITO・AKUITO の位置は不明であるが、おそらくその分布する地方(岐阜・愛知県境付近)で独自にアクトとアクトの混交によって発生した語形であろう。かくて、この類の中では AKKUI・AKUI がもっとも古い表現ということになるが、この類は現在の領域よりは広く、中部地方から伊豆諸島にかけて、連続した分布領域を持っていたと思われる。

さて、アクト類とアクト類のいずれが新しい発展かという問題がある。これについては長野佐久地方の分布に疑問があるが、どちらかといえばアクト類の分布し

ている地域に東からアクト類が侵入し、後にさらにカクトが進出してきたものと考えられる。アクト類は、八丈島にまで広がっている。アクト類は、さらに古いものであろう。

次に赤で示したキビスの類を見ることにする。この類が特に 128 図と比較すべきものである。見出しのうち KIBISU 以下 ATOKIBISU までをキビス類、KIRIBISYA 以下をキリブサ類に分類できよう。

キビス類の中では、KIBISU がもっとも一般的であり、各地にはほぼ満遍なく認められる。KUBISU はあまり多くなく、まとまった領域は認められない。第1音節が KE- となる類は、北陸地方に限られる。第3音節が SI となる類は、近畿中央部にはまれであり、北陸・中国地方(主として鳥取・岡山)に認められる。第3音節の母音が A であるものは、鳥根・広島を中心とする中国地方、および北九州(佐賀・長崎)に領域が認められるが、例外として KEBESA だけは石川(能登)に現われる。これらの語の末尾部分はあるいは「ひざ」と関係があるかも知れない。第3音節が SYO となるものは北九州に多く、そのほかは三重・和歌山・広島に各1地点のみである。一方、第3音節が SO となるものは、岐阜北部、大阪から北和歌山にかけて、小豆島・鳥取北部に認められ、音声の類似にもかかわらず、-SYO の類と一致しない。

キリブサ類のほとんどは、四国に現われる。語末母音が A であるものが主流であるが、これは、前に説明したキビスの類の中の第3音節の母音が A であるものと関連づけられよう。中では KIRIBUSA がもっとも多い。KIRIHUSA は地点数が少ない。KIRIBISYA・KIRIBISA・KIBIRISA の類は、愛媛にわずかに認められるほかは、すべて香川に現われる。KIRIGUSA・KIRIKUSA の類は、四国西半にかたより、周防大島東端にもある。BIRIBUSA は愛媛南部、KIRIBUSI は香川であるが、KURIBUSI だけは遠く千葉南部であり、問題がある。語形は KIRIBUSI と極めて近く、千葉へは四国方面から伝播したとも考えられるが、なお「くるぶし」との関係も考えねばなるまい。ちなみに 128 図で KURIBUSI の出現するのは、北海道・佐渡・岐阜・三重・滋賀・京都である。KURISOBU (山口北部)はここに分類したが、分布上は問題がある。第2音節に -KI- の現われる類は、淡路島およびその周辺に限られる。音節数の点からここに並べたが、語末の母

音も各種あって、異色がある。

KOBUSI (岡山南部)は赤の色を与えるべきかどうか迷ったものであるが、子音の種類と配列がキビスと一致し、母音も KIRIBUSI などと通ずるところがあり、分布上からも赤の他の符号に取り巻かれている点に注目して、ここに並べた。128 図にも、地点は違うが KOBUSI が現われる。

キビス・キリブサの類は、当然古語の「くびす・くひひす」の子孫と考えられるが、他の語類とくらべると、そう古いものとは考えられない。いかにも近畿中央部から四方に放射したようにも見受けられるが、岐阜においては、赤の勢力は空の勢力に圧倒されているようにも思える。南近畿その他には別勢力があり（これら別勢力が古いものであるとすればそれを圧倒できず、新しいものであればその発生を許し）、九州東岸への伝播力もなく、それほど強力とは思えない。

南近畿のトモは、舟のトモと同じものであろうが、分布上、以前は(特に三重側で)もうすこし広い地域に使われていたものと思われる。

橙符号で示した OGOSI 以下 OGOISI までは、もっぱら奈良東部・三重中西部にかたまっているが、兵庫にも 1 地点認められおもしろい。近畿中央部でも過去のある時代、(別の意味であったにしても)この類が使われたことがあるのであろうか。

SIRIKUI 以下は、隠岐・島根東部に分布する。-KUI を持つ点では、前にのべた AKKUI などと通ずるところがある。これは、古語「くひひす」のくひ-にあたるかも知れない。なお、125 図「こゆび」に SIROKU という見出しがあり、比較すべきである。

KOBA は愛媛東部に認められる。KOO (中国・四国に 5 地点)・KOORA (千葉に 1 地点)は、あとに出るツト・ヒッカガミなどととも、足の他の部分をさすことばのようにも思われるが、誤解であると断定することはできない。

緑で示したアドの類は、九州から琉球列島にかけて使われるものである。ADO 以下 AADUU までの諸語形の中では ADO・ADU が主流であり、広い地域を持っている。AZO, ARO は大分に、ARU 以下は琉球列島に現われる変種である。

ASINOATO・PANNUATU は同内容を持つと考えられるが(PAN の部分はハギにあたり、足の意)、アドの類とすべきかどうかは疑問である。四国における分

布などがそれを示している。

九州南部の ATOZI(R)I・ASINOATOZURI・ADOZI(R)I は、当然相互に関係があるが、ATOZI(R)I>ADOZI(R)I なのか、ADO>ADOZI(R)I>ATOZI(R)I なのかかわからない。同じく九州南部の ATOGEN・ADOGEN・DOGEN・GENDO・ASINOGEN の中では、分布上 ADOGEN がもっとも古そうであり、ADO>ADOGEN の変化のあった後諸語形が発展したものであろう。

KADO と ADO との関係は、よくわからない。九州西岸の島を主とする分布からは KADO の古さが思われるが、四国にあること、琉球列島に皆無であることなどから、KADO>ADO と断言することはできない。KADO の KA-と KAKATO の KA-とは何か関係があるかも知れない。

CUTO(熊本)・ASINOCUTO(福岡)はふくらはぎのことかとも思われるが、両者とも併用であり、臨時的誤答とは思われない。HIKKAGAMI は山口と高知に各 1 地点である。

CUNBURIMUSI は京都に 1 地点である。この地域では「くるぶし」のことを同様に言う。この 5591.91 の地点について 128 図を見ると、見出し語形は CUBURIBUSI となっているが、実際の語形は「かかと」の場合と同様ツンブリムシであった。ここにも「かかと」と「くるぶし」の交渉がある。

その他としたものは、アシクビ (6398.42, 6520.79, 6533.31, 7318.04), ウシロスジ (6494.21, 7470.29, 7471.33), クワブクロ (7322.17), フミステ (7257.91) であった。

全国を大観すると、東日本のアクトと西日本のアドとは、現在たしかに異なった類を形成しているが、古い時代には何らかの関係があったのではないかと、想像される。AKUTO と ADO とは、語形に通じるところがある。さらに、この類にはカカト(カガト)を加えることもできよう。カカト(カガト)の語頭の K-は、あるいは KIBISU の K-と、関係があるかも知れない。想像をたくましくすれば、古くは AKUTO・ADO に通ずるある 1 種の語形が全国を覆っており、それが東では AKUTO, 西では ADO となり、さらに KIBISU が関係するかどうかは不明ながら KAKATO(KAGATO)が生じた……ということになろうが、現時点においては、それ以上深入りしないでおく。

### 130. みずおち(鳩尾)

「みずおち」にあたる方言形は、そのほとんどが前後二つの部分から成っており、前部分、後部分それぞれの内部の諸語形の間には共通するところが多く認められる。したがって、それらの関係を符号の上に反映させるよう工夫した。前部分には、ミズ・ミゾ、ムネ・ムナ、キモなどの要素が見られ、後部分からは、オチ、オテ、オトシ、ウチ、クチなどの部分が抽出される。前部分にミズ・ミゾを持つものは、後部分の違いを色で区別した。すなわち、オチ、オテを橙、オトシを赤、ウチ、クチを茶で示した。ムネ・ムナを前部分とするものには空を与え、それらの後部分はミズ・ミゾを前部分に持つ類の後部分と、できるだけ符号の形を一致させた。

橙で示したミズオチとミゾオチとは、その分布領域が明らかには分かれぬ。強いて言えば、近畿・中国東部にはミゾオチが多いと言えようか。本図では、標準語形は MIZUOCI と認めて、〈併用処理の原則〉を適用した。この地図では、ミズ・ミゾの第2音節が破裂音(ないしそれに近い音)となるものを取り出してみた。MIDUOCI および後の MIDUOTE の DU に含めた具体的な音声は [~du, ~dzu, du, dzu, dɯ] である。山梨([dɯ])と伊豆利島([dzu])以外、ほとんど高知に分布する。大分には1地点も見られない。ただ、MIDUOTE が日田から県境を越えた福岡側に1地点ある。四つ仮名の別についての、一つの資料とはなろう。MIDOOCCI および後の MIDOOTE, MIDOTE の第2音節 DO に含めた具体的な音声は、[do, dzo, ðo] である。近畿、山口、愛媛、大分、熊本に点々と見られる。[ðo] は大分(7366.91)にある。この DO が、後続母音との関係によって存立しているものであることは、ほぼ確かであろうが、ZO とならず DO となった道すじとして、かつてヅとズとの区別が失われていく過程でズとならずドとなった可能性を、考えてみる必要がある。

ミズオテ・ミゾオテの類は九州北・東部に分布する。ここでも前部分のミズ・ミゾは混在する。地点数としてはミゾの方が多い。MIZOTE は壱岐、福岡、大分に数地点、MIDOTE, MIROTE は大分にそれぞれ分布する。MIZUOTEDO は八丈にある。

赤で示したミズオトシ、ミゾオトシの類は、関東・東北と九州西・南部との二つの広い領域を持ち、伊豆・長

野・近畿北部にも数地点見られる。この類ではミズ・ミゾの対立は、やや明瞭に現われる。東の領域ではミズが圧倒的に多く、九州にはミゾが多い。MIZZYOTOSI, MIGGOTOSI, MIT'OTOSI および MIZOTOSI は鹿児島、宮崎西南部に見られる。MIZUOROSI は秋田東北部に2地点ある。

茶で示したものはミズウチ・ミゾウチの類およびミズグチ・ミゾグチの類である。MIZUUCI は福島・新潟・北陸にまとまって分布し、そのほか北海道、千葉、伊豆、香川、山陰に点在する。MIZOOCCI は MIZUUCI とほぼ同地域に分布するが、千葉、近畿、山陰にはやや多い。MIDUUCI は福島に1地点だけあるものであるが、ザ行のズと区別を持つ音かどうかはわからない。MIZUT は他とは飛び離れて対馬に1地点ある。MIZUGUCI は新潟、長野北部に4地点、MIZOGUCI は新潟、石川、隠岐に各1地点ずつある。

空を与えたもののうち、ムネオチ・ムナオチ、ムネオテ・ムナオテ、ムネオトシ・ムナオトシは、おおむね、それぞれ後部の対応するミズ・ミゾ類の領域内に分布する。MINAOCCI, MINAOOTE, MIN'OTOSI の前部分は、ムネの変種とも考えられるし、「水」の意味でのミ(ナ)との関連も考えられるのでミズ類の色を与えここに置いた。ミズ類とムネ類とを結ぶ語形であったかも知れない。凡例で、MUNIUTUSI から MINIUTUSI までは奄美にだけ見られるもので、本土のムネオトシに対応する形である。UTUSI, UTUSINUHUCI は八重山にある。MUNAUCI は千葉、近畿、四国に点在する。ほぼ茶のミズウチの類の分布領域内にあると言えよう。NNIGUCI から INIGUCI までは奄美・沖縄に分布し、前部分はムネに対応するものであろう。CIMUUCI から CIMUNUHUCI までは、沖縄および宮古に分布する。前部分はキモ(肝)に対応する形と考えられる。このキモは、五島にある KIMOSAKI, KIMOSACU の KIMO と、形の上では関連があるが、地理的、歴史的につながりがあるかどうかはわからない。そのほか、ムシノクチは広島を中心に分布する。

この図から「鳩尾」を表わす語の歴史をたどろうとするとき、前部分のミズ・ミゾについては、なんとも言えないと言わざるを得ない。そこで、後部分のオチ、オテ、オトシ等について考えてみる。東北地方と九州以南との二つの地域に分かれて分布するオトシは古いものの残存と言えよう。この2地域の間分布するものはオチで

ある。オトシもオチもともに「落」の意味の他動詞と自動詞で同類の語であるから、東北と九州とでオチからオトシが個別に発生した可能性も考えられるが、それぞれの分布が密でまとまっていること、国の東西に分かれていることなどから、ここではオトシを古形の残存と考えたい。

九州のオテの分布のについては、第2集95図「<雷が>おちる」をあわせて考えるべきであろう。両図を重ねてみると、おおまかに言って次のようになろう。「鳩尾」,「落ちる」ともにオテ,オテルとする地域が、壱岐,福岡,熊本北部,宮崎中・南部に帯のように分布する。オチ・オテルという組み合わせは福岡中・南部に多く、オチ・オツルは大分・宮崎北部に、オチ・オツルは福岡北部,大分および鹿児島・宮崎の一部にそれぞれまとまって分布する。全地点対照した地図を作ってみなければ正確なことは言えないが、オチ・オテの分布と、オチル・オテル・オツルの分布との間にかかなりのずれのあることがわかる。これらのずれは、おそらくこの「鳩尾」において、動詞の法則的語形が使われていない(他地域で発生した語形がそのまま輸入された)ことに一つの理由があるが、一方各地点で「落ちる」という動詞がいかにか活用するか詳しく調査しなければならない。その後この分布の歴史的な解釈へと進むべきであろう。これらの事からは、言語地理学的な語の分布と文法構造とのかわりあいという問題を提起していると言うことができよう。

ウチの類はオチの領域内に分布し、オトシの領域にはまったく見られない。このことから、ウチはオトシより新しいと言うことはできよう。しかし、ウチとオチとを比較して新古を言うことはむずかしい。ウチは、新潟・北陸,千葉,隠岐と分布は分断され、かつ、オチの領域の外縁にあることから、ウチはオチより古いとも考えられる。一方、ミズオチ,ミゾオチという語形をみると第2・第3音節には、UO, OO という連母音がある。これらを基盤としてそれぞれ、UO>UU, OO>OU という変化の生じることは、それほど無理なことではない。つまり、ミズオチ,ミゾオチからミズウチ,ミゾウチが個別に発生するというのも可能である。さらに、「打つ」という動詞の存在を考えれば、この変化が、民間語源によってささえられたとも考えられる。ミズグチ,ミゾグチのグチはウチの分布領域内に見られ、ウチからの変化であろう。このグチと琉球に広く分布するニイグチ,チムグチ等のグチと歴史的に関連があるかどうかは

今のところわからない。

前部分にムネ・ムナを持つ類についてその歴史をたどることはむずかしい。ミズオチ類の領域内にあるムナオチはそれほど古いものとは考えられず、むしろ、かなり新しいと言えそうであるが、九州西部のムネオトシは、奄美の MUNIUTUSI 等に連続し、前部分についてはさらに、沖縄の NNIGUCI 等との連続も認められるので、必ずしも新しいものとも考えられない。福井,島根,大分,五島に見られる前部分ミナ,ミンがミズとムネとをつなぐかけ橋かとも考えられるが、その考えを積極的に支持するほどの分布領域も見られない。

沖縄本島を中心に分布する CIMU-, KIMU- 等,キモ(肝~心臓)に対応する前部分は、沖縄における新しい拡がりのようである。これらが五島に2地点見られるキモと歴史的つながりがあるかどうかは、はっきり言えない。後部分のグチは沖縄本島に広く分布し、奄美や八重山のオトシ類より新しいものであろうか。

### 131. あか(垢)

全国大部分はアカ類でおおわれ、西日本に別の類があることは、105図「ふけ(雲脂)」と通ずる分布である。

AKA と AGA (AKA の子音 K の有声化したもの)とを分けてみた。例によって東日本の北部,いわゆる東北方言の行なわれる地域に AGA が多く分布している。AGU は宮城に3地点ある。AGA の地域的な変種と言えよう。AHA, AHAA は奄美および沖縄にあったが、母音間の -K- が -H- になったり脱落したりするとされる千葉には現われなかった。徳之島・沖永良部の AA はこの AHA の -H- が脱落して生じたものと解して、アカ類に含ませた。島根の AKACU の -CU は、コケ類の KOKECU の -CU とともに、「魚鱗」をあらわす五島の CU と関係があるのであろうか。ただし、確言するには分布が離れすぎている。

秋田,宮城,伊豆諸島,中部地方,近畿北部,瀬戸内海地方,中・四国西部から九州にかけて分布するコケ類は、分布から見てアカ類よりも古そうである。東日本で山の中や伊豆の島,東北の半島部に認められることなどがその理由である。しかし、一方、アカ類は底流としてありながら、一種の流行的表現としてコケがある時期に行なわれ、その流行後、「こけ(苔)」との衝突によって急速に衰えた、とも考えられる。瀬戸内海沿いに残ってい

るのは、この語の通り道となっていて、その南や北よりは長くこの語が残存する理由があったのかも知れない。

このコケ類でも、KOKE と KOGE (第2音節の子音の有声化したもの)とを分けた。KOGE は東北にしか現われていない。KOHE は伊豆の大島に1地点ある。-K-の-H-に変わるところである。KOKECU の-CU については上にも述べた。KOKE の内部に生じた新しい言い方であろう。KOKENTAN(KOKETAN 1地点 7365.25 を含む)が九州東部にあるが、この-TAN についてはよくわからない。-CU と関係があるかも知れない。

コビ類は「ふけ(雲脂)」の場合よりずっと広く分布している。「ふけ」では岩手にだけ見られたのであるが、この「あか(垢)」では、さらに長野・三重にもある。岩手では「ふけ」と区別しないのかも知れない。105 図「ふけ」の説明のところでも述べたように、これはコビリックのコビであろう。なお、飯の「こげ」の意味のコビは青森、秋田(鹿角)、岩手(上閉伊)、長野(下伊郡)にあると『全国方言辞典』に記述がある。これらの地域はこの131 図のコビ類の地域と重なるか近接していて、関係のあることを示している。ともにくつつくものである。一方は頭に、一方は鍋や釜に。さらに、1集の36 図「こげくさい」の、コゲクサイの分布をも参考にすることができる。36 図では、コビクサイ類は、秋田、岩手を中心とした、福島を除く東北地方、長野北部から三宅島に至る一線上の十数地点、三重、およびその他に分布しているから、『全国方言辞典』の記述より広く分布している。いずれにせよ、飯の「こげ」の方から、「あか」へ、ものに付着するという共通点を頼りにしみ出してきたものであろう。あるいは、コビリックということ一般から両方を言うようになったが、一方の「こげ」の方に主力が移った、とも考えられる。この場合は、この地図のコビはある意味の残存とすることができる。

ヨゴレ類は、九州の他には存在しない。したがって、これがある時代の中央語であったとは考えにくい。ただ九州地方では、これが他の汚れと同じものとして、コケ類やアカ類がはいつてくる前はもっと広く分布していたのではないかと思われる。

琉球列島で古い形がアカ類であったかどうかはよくわからない。ヒグル類が沖縄以北で非常に強固である。沖縄本島とその周辺はヒング類が多いが、「鍋墨」は『沖縄語辞典』によれば、naabinuhwingu である。『全国方

言辞典』によれば、ヘグロが九州で「鍋墨」を意味する。この hwingu と関係があるかも知れない。この場合のへは「釜」または「竈」、クロは「黒」であろうか。それはともあれ、これまたものに付着するものである。

先島には、このヒグル類がまったくなく、別種の語が使われている。宮古・多良間島では NABA, 石垣以西では波照間島、与那国島を除いてガバ類である。NABA と GABA とを一つにくくって同類とすることができるかどうかはわからないが、ここでは同色で表わしておいた。NABA については、質問番号 079「きのこ」(未刊)に NABA が多く出てくるが、それと関係があるかと思われる。

池間島や伊良部島にはフス類がある。『全国方言辞典』によれば、「あか(垢)」のことを新潟頸城地方でヒソというとする。その形そのものは現われなかったが、新潟に AKANOYORIBISO があり、山形に HWISO がある。この宮古群島のフス類と関係があるかどうか確言はできないが、語形の類似により同色の似た符号としておいた。133 図、134 図「ほくろ」のホソビ類、132 図「あざ」のフスベ類などと関係があるかも知れないという柳田国男の説がある。

大分に IRA が1地点ある。この地点あたりは「魚鱗」のことを IRA という。これも「鱗」が、魚のいわば皮膚の上に付着するもの、という点の類似性で共通して使われるようになったものであろう。

なお大分の BERO も注目すべき語形である。5地点あるが、うち2地点では117 図「舌」の意味と、アクセントまで同じかどうかはわからないが、重なる。この周囲にペロを118 図「つば」、119 図「よだれ」の意味で使う所があれば、分泌物という点で共通性があるが、それはない。「舌」になると「垢」との共通性は薄くなるのではなからうか。なお120 図「ペロの意味」を見よ。

高知に SASURI が3地点ある。さするとよって出てくるものだからであろうか。このほか YORE など、「よる」にもとづくと思われる語形が全国に散在する。これは、かつての中央語であったとするよりも、「さすり」と同様に、各地で個別に言いはじめたものではなからうか。

## 132. あざ(痣)

この132 図「痣」と、133 図「(小さい)黒子」・134 図「(大きい)黒子」とに現われる語形には、アザの類、ホクロの



類など共通するところが多いので、3図の間の符号の色と形とはできるだけ一致させて示した。この地図を見るにあたっては、他の2図も参照していただきたい。さらに、「痣」と「黒子」とを総合した地図を135図に示したので参照されたい。また、第2集80図「痣になる」の図も参照されたい。なお、質問に際しては、隣接する意味を持つ「そばかす」などとは区別して調査したことを付言しておく。

空で示したアザの類は広島・島根中部以東の本州及び北海道に強大な領域を持っている。その他、西日本、琉球にも点々と分布する。なお、この項目は第6年度以後、兵庫以東の地域では調査を打ち切った(第1集付録の『日本語地図解説—方法—』を参照)。したがって近畿以東では分布の密度が少し低い。AZAは、この類の中心をなすものではほぼ全領域に認められる。ADAは伊豆、山梨、近畿、中国南岸および奄美、先島に点々と分布する。AZYAは東北地方北半にまとまって分布し、そのほか、北海道、福島、山梨奈良田、石川、奄美、沖縄に点々と認められる。ATAは広島に、ARAは和歌山、大阪、兵庫、屋久、沖縄久高島に、AZEは岐阜に、AZZAは八丈に、それぞれ見られる。AZAA, ADAAはともに奄美に、AZZYAAは宮古に分布する。AZAKOは秋田に、AZYAKOは岩手に、それぞれ認められる。YOMIAZAは高知に、CIAZAは宮崎南部に見られる。YOMIAZAについては、『全国方言辞典』に、「そばかす」の意味でヨミアザが大分・熊本・福岡に、高知にはヨミアザがあるという。比較すべきであろう。

橙で示したホクロの類は、中国西部・九州にまとまって分布する。もっともHOKUROは、島根と愛媛とに2地点見られるのみである。HOOKUROは、島根東部に、HOOGUROは島根に認められる。この項の中でもっとも広い領域を占めるものは、HOGUROである。

緑で示したホヤケの類は、四国北半・中国西部から九州にかけて広い領域を持つ。大部分はHOYAKEであるが、そのほか凡例に沿って見ていくと、薩摩半島および甌島にHOYAGE、佐賀・長崎にBOYAKE、四国東北部、広島、甌島、種子島等にHOOYAKE、口永良部島にHOOYAKU、福岡北端にHOYAKA、鹿児島西部にHOZAKE、広島にSOYAKE、福岡・鹿児島にHAYAKE、長崎、宮崎にHOYA、長崎に

BOYAがそれぞれ分布する。最後の2形はホヤケとは別類かも知れないが、分布がホヤケの内部であることと、語形の類似からここにならべた。長崎に1地点見られるKUROBOは、KURO部分がホクロに近いとも言えようが、分布から、末尾のBOをHOYAKEのHOと関連させて考えここに置いた。このホヤケのホの語源を「火」の意味とするならばヤケとのつながりももうなずける。「ほほ(頬)」のホ・ホオとの関連もあるかも知れない。「ほほ(頬)」については107図参照。

草で示したノブヤケの類は四国の東と西とに2領域を持っている。このうちNOBUYAKEは愛媛にだけ見られる。NOBIYAKEは室戸半島南端、NOBUは愛媛と徳島南部とに分かれて分布する。NOBI, NOBEは東側の領域だけに認められる。このノブ、ノビなどは語源的に何を意味するのか不明である。

桃で示したコトヤケ・コチヤケの類も徳島と広島との2領域に分かれる。KOTOYAKEからKOTOまでは徳島にのみ分布し、KOCIYAKE, KOCIは広島にだけ認められる。両者は別類かとも考えられるが、語形の類似から一応同類と考えて1色にまとめた。

紺で示したもののうち、SIRUSIからSIISYAまでは同類と認められるが、分布は新潟・山形と琉球とに遠く離れている。SIRUSI, SYURUSIは、両地域に共通して認められるが、その他の語形はみな琉球に見られるものである。UMIZIRUSI, OMIZIRUSIは、もっぱら高知と愛媛西南部に分布する。前部要素UMIは、「産み」に通ずるものであろうか。HIIZIRUSIは沖永良部、KUHUSISSAは宮古にそれぞれ見られる。YEeku以下はほとんど積極的な分布の認められないものである。YEekuからYAKUGENMAIまでは奄美・沖縄に見られるものである。『沖縄語辞典』によれば、Yeekuは「胎児がものに感応して、何かの動物に似て畸形などに生まれること」とある。参照されたい。PAN等は先島に見られる。あるいは、「判」などという漢語に由来するものであろうか。佐渡のBUCITORUは、実は動詞であるが、近くにBUCIが何地点かあるのでここに置いた。シミ、ナマズなどは、別のものを意味しているのかも知れない。

これらの分布の歴史的な解釈は、135図「あざ」と「ほくろ」の総合図に譲る。

133. ほくろ(黒子)―小さいもの

134. ほくろ(黒子)―大きいもの

133 図「小さいほくろ」と 134 図「大きいほくろ」との分布は、全国にわたっておおむね一致している。したがって、分布の説明は 133 図について詳しく述べ、後 134 図で相違の見られるところを二、三つけ加えることにする。なお、「大きいほくろ」は、調査第 6 年度から調査を打ち切った項目である。この 2 枚の図と、先の 132 図「疔」とに現われる語形には、共通するものが多い。各図の符号の色と形をできるだけ一致させて示し、さらに、「あざ」と「ほくろ」とを総合した地図を 135 図に示した。このことは、132 図の説明の最初に述べたとおりである。

空で示したアザの類は、新潟北半、山形東北半、秋田、岩手以北、道南の 1 領域と、四国・中国西部以西、琉球の 1 領域との 2 領域に分かれて分布する。ほとんどは AZA である。ADA は中国西部、大分、琉球などに見られる。AZYA は東北地方北部、琉球にやや多く分布する。ARA は大分・屋久・沖縄久高島に、ASA は岩手、AZAA・ADAA・AZYAA・AZAN・HAZYA はみな琉球に、WADA は山口に、それぞれ認められる。AZYAGWAA は沖縄にあり、アザコに対応する形と考えられる。AZAKO・AZYAKO は秋田・岩手以北に点在する。GOMAAZA は秋田・岩手・石川に、GOMAAZYA は青森にある。SOKOAZA は青森に、ZIGOKUAZYA は青森に、BOCUBOCU-AZA は新潟に認められる。YOMIAZA は高知、福岡、長崎に数地点見られる。YUMIAZA は福岡に、YOMEAZA は福岡、熊本、宮崎に、YOMEHADA・YOMEARAI は福岡におのおの点在する。YOMEHADA と YOMEARAI をアザの類とすることには問題もあろうが、語形の類似と分布とからここに置いた。ヨメアザ・ヨミアザが『全国方言辞典』によれば「そばかす」の意味を持つことのあることは、132 図の説明で触れた。

橙を与えたホクロの類は、近畿を中心に北陸・中国東部の一地域と関東を中心とした一地域とに大きな領域を占め、そのほか、北海道・東北南部・中部・中国西部・九州北半にも散在する。HOKURO はこの類の中心をなすと考えられ、ほぼ全領域にわたって分布する。

HOGURO は道南・宮城・山形・福島・関東東部・新潟および、中国西部・九州に分布する。ただし HOGURO の分布には注意を要する。つまり、この地図で HOGURO としたものの実体は第 2 音節子音が [g] のものがほとんどであり、[ŋ] のものは、5628.23, 5793.20 の 2 地点のみであった。言いかえれば、いわゆる有声化地域の [g] は、東京などの [k] に対応すると考えられるので、この地域の HOGURO は、むしろ HOKURO に対応するものとして、その他西日本などの HOGURO とは区別することも考えられるからである。新潟の一部や伊豆大島などのものは、西日本の HOGURO と同類と考えてよからう。同様に 5628.23 と 5793.20 との 2 地点の HOGURO も、西日本のものと同類と考えられる。長野北部の HOGURO は、よくわからないが、HOKURO に対応するものとすべきであらうか。その他 HOGUROKO, HOOGURO, HOGORO, HUGURO の G も、奈良の HOOGURO 1 地点を除いて、みな [g] であった。ほとんど東京などの [k] に対応するものと考えてよからう。結局音韻の対応という観点に立てばホグロと認められるものは、東日本にはほとんどないと言することができる。HOKURU は千葉、群馬、山梨に、HOGUROKO は秋田に、それぞれ認められる。HOOKURO は中国東部、北陸にかなりまとまった分布を示し、近畿・関東にはほとんど見られない。HOOGURO は新潟・奈良に、HOKUROO は広島に、HOOKUROO は岡山に、HOKKUROO は近畿に、HOKORO は関東・石川・近畿に、HOGORO は関東東部に、HOOKORO は富山に、それぞれ点在する。HUKURO は北海道・山形・岐阜・近畿に見られる。HOGURO は福島・石川に、HUUKURO は能登に、HOKURE は大阪に、HOKURI は三重に、HOOKURE は能登に、HOOKURI は兵庫と能登・富山に、HOKKURI は近畿中央部にそれぞれ分布する。HAAKURO は静岡・山梨・群馬・長野に点在する。

ホヤケ類は 132 図に比較して、この図には非常に少ない。132 図では緑を与えたが、この図では紺で示した。HOYAKE が九州に数地点、HOYAKE が広島に見られる。HOYA は島根に 1 地点ある。島根のものは 132 図のホヤケ類の分布とは少々はなれている。BOYA は長崎に認められる。

四国に見られる NOBU, NOBE も 132 図に比較し

て少ない。しかも、後部分にヤケの付いた形は、一つも現われない。

赤で示したホソビ・フスベの類は、132 図では全然現われなかったものである。ホソビの類はもっぱら宮城・山形南半・福島・東関東に領域を占める。この類の中心は HOSOBIBI で、ほぼ全域に分布する。HOZOBIBI は茨城、HESOBIBI は山形・福島、HOSOBEBI・HOSUBEBI は新潟に分布する。後の二つは第 2、第 3 音節は、次のフスベと似ているし分布も次に述べるフスベの方に近い。むしろフスベの変種とすべきものだったかも知れない。なお、『全国方言辞典』によれば、鍋墨の意味ではヘソビが青森・秋田・山形・宮城・福島などで使われ、ヘスビは九州(日葡)・南部・仙台・静岡駿東郡などで使われているという。フスベの類は、中部・新潟・群馬に広く分布する。HUSUBEBI は、その中心に領域を占めている。HUUSUBEBI は愛知西端に見られる。KUSUBEBI は HUSUBEBI の南側・山梨・伊豆から愛知東半にかけて分布する。KUSUBIBI は、伊豆新島に認められる。KUHOBIBI は、山形に 1 地点見られるものである。第 2 音節の具体的な音声は [Φo] であり、あるいは KUHO は、クロに対応するものかとも考えられるが、一応ここに置いた。SUKUBEBI は群馬に 1 地点ある。近くの HUSUBEBI、あるいは KUSUBEBI に通ずるとも考えられ、ここにならべた。SUBEBI はいくつかに領域が分かれる。新潟西部の一地域、群馬・長野東端の一地域、それに長野西部・岐阜北部の一地域である。HOKUBEBI は長野、HUKUBEBI は愛知にそれぞれ見られる。

茶で示したホシの類も、132 図「あざ(痣)」には現われず、この「ほくろ」の地図にだけ現われる。HOSIBI は宮城・岐阜・鳥取に認められる。HOOSIBI は石川、HOSIHOSIBI は島根にそれぞれ現われる語形である。KUROBOSIBI から KOROPPOSIBI までは、宮城・山形・福島を中心にした地域にまとまって分布し、北海道・栃木・茨城・鳥取にも数地点見られる。このうち KUROBOSIBI、KUROPPOSIBI がやや多い。KOROPPO は宮城に 1 地点ある。ホシの類かどうかあやぶまれるが、分布と語形の類似からここに置いた。DANTOOSIBI は広島に、ZIGOKUBOSIBI は秋田・栃木・熊本に、GOKURAKUBOSIBI は青森下北に、それぞれ見られる。なお、クロボシ等については、本集 128 図「くるぶし」に比較すべき語形が現われ、しかも分布領域も関連がある。128 図の解説に触れているところがあるので、参照

されたい。

SOBAKASU 以下は、意味のある分布がほとんど認められないものである。また、これらには「そばかす」の意味と混交しているものもいくつか含まれているようである。文献によれば、「そばかす」の意味でオモクサ、オモカニ等が見られる。

なお、この図では無回答の分布にやや地域性を認めうる。青森付近、新潟中部、山陰、宮古諸島などである。

次に、134 図について、133 図との相違に注目しつつ、その概略の分布状況を説明する。アザの類には、分布の相違はほとんど見られない。ただ、沖縄宮古では、133 図では全地点無回答であったのに、134 図ではアザが現われている。そのほか、岩手の NUKEAZA、福岡の HOKUROAZA、大分の IBOAZA は、この図だけに現われるものである。ホクロの類には、多少のちがいが認められる。道南・東北地方と四国・九州で HOGURO がやや多くなっている。東北地方の HOGURO は、133 図の説明で述べたように第 2 音節子音がほとんど [g] であり、東京などの HOKURO に対応するものと考えられる。そのほか、島根の HOGUROO、群馬の HUKUROO、高知の KOKURO、兵庫の IBOBOKURO は、この図にだけ現われる語形である。ホヤケの類は熊本に、ノブは徳島にそれぞれわずかに見られる。ホソビの類は 133 図とほとんど変わらない。ただしこの図にだけ現われるものとして、山形の NUKEHOSOBIBI がある。前述の NUKEAZA と前部分で共通する。ホシの類もほとんど出入りがない。そのほかのものでは、高知に 1 地点ある UMIZIRUSIBI が注目される。132 図に多く現われた語形である。AMAZISIBI は、九州中部に認められる。また、イボの類がこの図では全国に散在する点 133 図と違っている。133 図で無回答に地域性があると述べたが、それらの地域は、134 図ではそれぞれしかるべき回答が認められた。

以上が 133 図、134 図の分布の説明である。これらの分布の歴史的な解釈は、135 図「あざ」と「ほくろ」の総合図に譲るが、それぞれの図の分布から考えられるいくつかの問題点についてふれておこう。まずホクロの類は、分布からかなり新しい扱がりともみることができよう。このうち、HOOKURO が北陸、中国東部に多く分布し、HOKURO は近畿に多い。おそらく HOKURO は HOOKURO から生まれた形と言えよう。関東に HOOKURO がほとんど見られず HOKURO が

多いことは、近畿で HOOKURO > HOKURO と変化した後、HOKURO が関東(江戸か)へ侵入したことを示すものであろう。HAAKURO は、文献からホクロの古形とされているハハクロに、直接つながるものであろう。「ほくろ」を表わす語として古い文献に現われるハハクソは、この図にはまったく見られない。ホソビ・フスベは、ホクロよりは古いものと考えられるが、文献によるとフスベは古くは「こぶ」を意味していたらしい。それが現在では中部地方で「ほくろ」を意味している。

### 135. 「あざ」と「ほくろ」との総合図

この地図は、132 図「あざ」と 133 図「ほくろ」(あとで述べる特別の場合には 134 図も援用した)とを各地点ごとに対照して作図したものである。ただし、兵庫以东の後期調査地点では、132 図の説明でも述べたように、「あざ」の調査を打ち切っているため、対照できない地点があった。

まず、凡例の説明をしよう。各符号の右側の二つの欄のうち左側には「あざ」にあたる語類、右欄には「ほくろ」にあたる語類をそれぞれ示した。各表記は具体的な語形を表わすのではなく、132 図、133 図に現われたものが、さらに大きな類としてまとめられている。大きくまとめた理由は、この地図は、各地点でこの両方の意味を区別しているか否かを第一に注目したことと、各地点の語形は、それぞれ 132 図、133 図に示されていることによる。「あざ」欄、「ほくろ」欄を通して、各見出し語類の内訳を述べると、AZA には、132 図 AZA から AZYAKO まで、133 図 AZA から AZYAKO までが含まれる。ただし、これらの類ではあっても、「あざ」と「ほくろ」で語形が多少とも異なる時、たとえば、AZA に対して AZYA、ADA に対して AZA、AZYA に対して AZYAKO のようなときは、133 図を仮に AZAKO として区別した。~AZA としたものは、132 図 CIAZA、133 図 GOMAAZA から BOCUBOCUAZA までである。YOMIAZA は 132 図 YOMIAZA、133 図 YOMIAZA から YOMEAZA までと、YOMEARAI を含む。YOMEHADA は 133 図にのみ現われるものである。HOYAKE は 132 図で緑とした類全部、133 図では、紺を与えた HOYAKE から BOYA まで、NOBUYAKE は 132 図で草を与えたもの全部、133 図では紺とした NOBU、NOBE の二つをそれぞれ

れまとめたものである。HOKURO は両図で橙としたものすべてである。KOTOYAKE は 132 図で桃にしたものすべてである。(~)SIRUSI としたものは、132 図に現われる SIRUSI から SIISYA までと HIIZIRUSI、KUHUSISSA とを一つにしたものである。UMIZIRUSI は 132 図の UMIZIRUSI、OMIZIRUSI の二つを含む。(~)HOSI は、133 図 HOSI から HOSIHOSI までと、DANTOOBOSI から GOKURAKUBOSI までを一つにまとめたものである。KUROPOSSI に含めたものは 133 図の KUROBOSI から KOROPPO までである。HOSOB I に含めたものは、133 図 HOSOB I から HESOB I までである。HUSUBE には 133 図の KUHOBI・HOKUBE を除く HUSUBE 以下 HUKUBE までである。KUHOBI は分布がかけはなれているので別類としてたてた。HOKUBO は 132 図に紺で示したものであるが、HOKURO との関連を考えてとり出した。other forms としたものは 132 図では YEEKU 以下その他まで、133 図でも SOBAKASU 以下 HOKUBO を除いてその他までである。なお、133 図でその他となっている地点では、134 図に現われる語形を代りに採用した。ただし、134 図で調査の行なわれなかった地点、無回答の地点では、その他のままとした。無回答も同様の扱いをした。132 図で無回答のものはみな「あざ」の欄に no response として示したが、133 図で無回答となっている地点では、134 図に現われた語形を代りに採用した。しかし、134 図でなお無回答あるいは、調査の行なわれなかった地点のものは no response とした。さらに、132 図・133 図で 2 形以上が併用されていた地点では、次の例のように処理した。たとえば 132 図で AZA、133 図で HOKURO と HOSOB I の併用となっている場合は、AZA と HOKURO、AZA と HOSOB I という二つの組合わせの併用とした。以上が本図の各見出しの内容であるが、各地点の詳細は、132・133 あるいは 134 の各図を見ていただきたい。

次に符号の与え方の原則および分布のあらましを説明しよう。

紺で示したものは「あざ」と「ほくろ」とを区別しないで同じ語を用いて表現する類、あるいはそれに準ずると解釈されるものである(以下分布の説明およびそれらの解釈をする場合、「あざ」、「ほくろ」にあたる語の組を、たとえば、AZA—HOKURO あるいはアザ—

ホクロのように、間にダッシュを入れて書き表わすことにする)。AZA—AZA として区別しないものは道南・東北地方から新潟北半にかけての地域に広く分布し、山陰、中国西部、四国、九州西・南部などにも、点々と見られ、奄美・沖縄にもかなり分布する。同じく区別しないものとしては、HOYAKE—HOYAKE が広島と熊本に各1地点あり、NOBUYAKE—NOBUYAKE が愛媛と室戸半島とに認められる。また HOKURO—HOKURO とする地点が島根西部、山口、熊本南部にある。AZA—AZAKO とした地点は東北地方のAZA—AZA の地域内に点々とあり、広島と宮古に各1地点見られる。これらのうち多くは、後項(「ほくろ」)の具体的な語形が AZAKO, AZYAKO であり区別のあるものであるが、その他は、両項の具体的な語形がそれぞれ AZYA 対 AZA (2649.79), AZA 対 AZYA (3744.33), ADA 対 AZA (6482.04), AZZYAA 対 AZA (2151.20)となっている。これらの対立については、それらが本質的なものか偶然的なものか十分には明らかでない。ここでは一応別にしたが、おそらく基本的には区別を持たないものなのであろう。AZA—~AZA は東北地方 AZA—AZA の地域内に分布する。本来は両方アザとして区別のなかったところに、一方のアザに何らかの限定を加えて区別しようとしたのであろう。アザ—アザから派生したものと認めて、紺の類に入れた。AZA—YOMIAZA から、~AZA—YOMIAZA まではみな高知と福岡とにある。これらは、上の AZA—~AZA の一種とも考えられるものであるが、分布がまとまっていることと、ヨメアザ等が「そばかす」の意味もあるらしいので別に立ててみた。

空で示した類は標準語の体系とは逆に「あざ」の方にホクロの現われるもの、あるいは「ほくろ」をアザ類の語で表現するもの、および、これらに準ずると解釈されるものである。この類は四国・中国西部以西九州に密度の高い分布を示し、沖縄・先島の分布にもつながる。さらに、佐渡・山形庄内にも見られる。HOKURO—AZA のように標準語と正反対の型が中国西部・九州東部に拡がり、その他の地域にも点々と分布する。HOKURO—YOMIAZA は宮崎に1地点見られる。HOYAKE—AZA は空の領域の分布の主力で、四国北辺・中国西部・九州に分布する。HOYAKE—YOMIAZA はこの領域内の九州北半に、3地点ある。NOBUYAKE—AZA, NOBUYAKE—YOMIAZA は愛媛西部と室

戸半島との2領域に見られる。KOTOYAKE—AZA は広島と四国東部との2地域に分かれて分布する。(~)SIRUSI—AZA は、山形北東部、佐渡と琉球とに分かれた分布が認められる。UMIZIRUSI—AZA, UMIZIRUSI—YOMIAZA はともに高知および愛媛西南部に領域を持つ。その他—AZA としたものは雑多なものを含む。分布地域は点々とし、山形・佐渡・西日本の空の領域内、琉球である。HOYAKE—(~)HOSI は熊本南部に見られるものである。この組合わせだけを見ると空を与える理由はないのであるが、併用されている後項に AZA があり、元来は、まわりの地点同様後項に AZA があつたものが、(~)HOSI という特殊な言い方に代わつたものと考え空の類に含めた。HOYAKE—その他から UMIZIRUSI—その他までも、表面的には空にする理由はない。しかし、後項が AZA であるものの分布領域内に見られ、もとは後項に AZA のあつたものが何らかの事情により AZA 以外の語をとり込もうとした結果と考えられ、空を与えることにした。HOKURO—(~)HOSI は島根東部と熊本南部に見られる。このうち熊本のものは空の類の領域内に分布するが、島根のもの分布は他の空の類の領域から離れているので、空の類かどうか怪しまれる。しかし、西隣に AZA—AZA が1地点あることからこの小地域にも紺あるいは空の型があると認められよう。HOKURO—その他は広島中部、赤の領域と空の領域との接する地域に分布する。AZA が両隣で正反対の意味を持つという混乱を拾取しようとしてさまざまな語(大部分は隣接する「そばかす」を意味する語)をとり込んだものであろう。その際、東隣の体系ではなく、西隣の体系の一部である「あざ」の意味の HOKURO を残したことは空の類の強い抵抗を示すものと言えよう。無回答—AZA は佐渡・四国・宮崎・鹿児島・琉球といずれも空の領域内に分布する。「あざ」の意味を表わす語を持たないと言うことは、言いかえれば、これらの地点では「あざ」と「ほくろ」を意味の上で区別していないと言うことにもなる。その観点からは、紺の類そのものと言うこともできよう。HOKURO—無回答は 7357.31 (大分)にあるが、この地点には後に述べる AZA—無回答もある。この地点でも上と同様、二つの意味を区別せず、HOKURO と AZA とが同じように両方の意味を表わしていると認められよう。

赤で示したものは標準語と同じ体系を持つ類、あるいはこれに準ずると解釈される類である。AZA—HOKU-

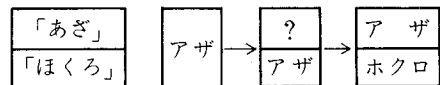
RO はもっとも広い分布を示し、関東および近畿・北陸・中国東半の2領域を持つ。それ以外の地域にも点々と分布する。YOMIAZA—HOKURO は高知に1地点ある。AZA—HOYAKE は島根・福岡・長崎に見られる。AZA—HOSOBHI は中部から新潟にかけて、AZA—HUSUBE は関東東部から山形南部・宮城にかけての地域にそれぞれ分布する。AZA—KUHOBHI は山形に1地点認められる。AZA—(～)HOSI は秋田・栃木・石川・島根・広島にわずかに見られる。AZA—KUROPOSSI は宮城を中心とした1領域を持つほか、北海道・栃木・茨木・島根にも数地点ある。AZA—その他としたものはほぼ全国に点在する。この中には種々雑多なものが含まれていて、一律に赤を与えるには問題があろう。東北地方北部の紺地域や、西日本の空地域の中に点在するものは、元来、AZA—AZA であったところに、「ほくろ」の方を何とか区別しようとしてさまざまな語をとり込んだ結果、現在のよな型になったという解釈を与えれば、紺に準ずるものとも考えられる。しかし、この地図では一応原則に従って皆赤で示した。その他—HUSUBE は新潟・長野・岐阜に各1地点見られるもので、どちらの項にも AZA, HOKURO という語を持たないものである。しかし後の2地点は前項を AZA とする型と併用されているので、赤の類に含めることに問題はなかろう。HOYAKE—HOKURO は空の HOYAKE—AZA 領域内あるいは周辺部に点々と分布する。また、多くの地点で、AZA—HOKURO とも接している。HOYAKE—AZA と AZA—HOKURO との衝突によって生じたものであろうか。NOBUYAKE—HOKURO, KOTOYAKE—HOKURO, (～)SIRUSI—HOKURO, UMIZIRUSI—HOKURO, UMIZIRUSI—HOKUBO もそれぞれ後項を AZA におきかえた形(空)の分布する地域付近に認められ、同時に、AZA—HOKURO とも近接している。このことから、それぞれ空の類と AZA—HOKURO との交渉によって生じたものと推定される。その他—HOKURO としたものは、北海道・関東・愛媛に数地点認められる。どちらもその他となるものは、栃木にある。同地点の内容を比べると両方異なる語形で言い分けているので紺とはせず、かりに赤とした。AZA—無回答としたものは、先の AZA—その他同様、赤でいかかどうかの疑問が残る。地域別に見ると北海道・岐阜・兵庫・島根東部のもの(隠岐は除く)は、その分布から赤としても

よかろうが、隠岐や島根西部に見られるものは、すぐ近くに AZA—AZA があること、大分のは、同地点に HOKURO—無回答が併用されていることをあわせ考えて、これらの地点では両項にそれぞれ別語形を持たない(区別を持たない)点を重視し、紺にすべきものであったかも知れない。しかしこの図では原則により一応赤の類に含めた。このほか、無回答—HOKURO が高知に、無回答—HUSUBE が群馬に、無回答—その他が新潟・沖縄に、無回答—無回答が青森にそれぞれ認められる。

以上が見出しおよびその分布の説明である。次にこの図から「あざ」「ほくろ」を表わす語の歴史の流れをたどってみよう。

第一に注目されることは、東北地方と琉球(主として奄美)とに大きく分断されている紺のアザーアザの存在である。この類は四国・中国西部・九州などにも点々とみられるが、これらをあわせて考えると、このアザーアザはこの図に現われるものうちもっとも古いものの残存とすることができよう。すなわち、日本の中央部、現在の赤あるいは空の地域にも、かつては、紺で示した「あざ」と「ほくろ」とをアザーアザとして区別しない型が分布していたと考えられる(この場合、「あざ」「ほくろ」のいずれかの方に名称アザが与えられ、他方は外周的な、不分明な意味範囲として、特に名称がなかった状態も考えうる)。それに対して、日本の中央部に大きな領域を占める赤の類、アザーホクロ、アザーフスベ、アザーホソビおよびアザーホシ等は、アザーアザよりは新しい拡がりと考えられる(これらは、アザが「あざ」に固定し、「ほくろ」に対して何か特別な名称を与えた結果と考えうる)。

この両類の地理的中間に位置するものが空の類である。2個の領域が認められ、それにはさまれて赤の類があることから、佐渡・山形の空類と、西日本の空類とが赤の分布する以前にはその領域を連続させていたとも考えられるが、この考え方には疑問がある。もしそうだとしたら、たとえば近畿で図示の変化が起こったことにな



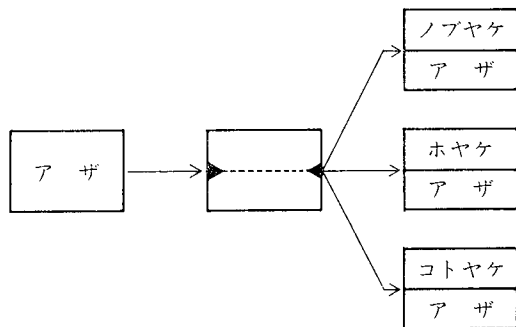
る。つまりアザはいったん「ほくろ」の意味になり、ついで「ほくろ」の意味をホクロにあげわたし、「あざ」の方へ再び変化したということになる。このような変化はちょっと考えにくいし、ありえたととしても、その場合、アザ

はその中間の段階(地図で言えば空の段階)では非常に不安定な位置を占めていたとせねばなるまい。それにしても、この地図における空の類の分布はかなりはっきりと赤から区別されていて、ほとんど入り乱れることはない。したがって上の図式の変化、すなわち地図での空の状態が赤の状態の母胎であるとする考え方は、ほとんどありえないということになる。

佐渡・山形の空類、その他アザ、シルシーアザは、分布の説明のところでも触れたとおり、周囲を紺のアザアザにとり囲まれていることから、これらは元来アザアザのように「あざ」と「ほくろ」とを区別していなかったものが、後に両者を区別しようとして「あざ」に対して独自に様々な語をとり込んだ結果生じたものと推定される。その際、アザが「あざ」「ほくろ」の両方の意味の一方を浸蝕されるとき、勢力が強いと思われる西隣の(地図で赤の)体系のアザと同意味の方が浸蝕され、逆の「ほくろ」を表わすアザの方を保ったということは注目される。あわせて考えるべきは、「あざ」の意味を持つ語形が、特殊なもの(132図参照)であることである。

琉球の空類についても同様のことが言える。点々と認められる紺のアザアザの存在および「あざ」を示す語形の内容を考えると、元来両方の意味の区別を持たなかった状態が前にあり、「あざ」と「ほくろ」とを区別しようとした際、「あざ」の方にいろいろの語をとり込んだ結果と考えられる。

このように考えれば、西日本にかなり勢力の強い空の類もこの地域で紺の体系から独自に発生した体系と考える可能性が生まれてくる。この地域では次のような変化が起こったのではなからうか。



HOKURO—AZA もあるが、これには後に触れることとして、その他のものについて考えてみよう。この図式で示した変化のうち、ホヤケーアザがもっとも広い領域を占める。ノブヤケーアザとコトヤケーアザは、それぞ

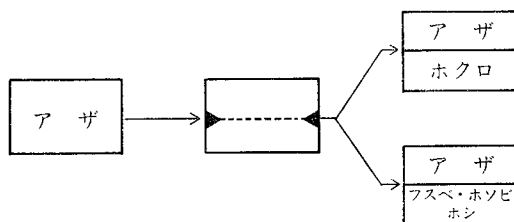
れ分布が分断されているので、古いものかとも思われるが、ホヤケーアザと、さしたる時代的へだたりを持つものではあるまい。

ウミジルシーアザもこれらと同趣であり、歴史的にも近似していると考えられる。このシルシは、佐渡・山形のもの、あるいは琉球のシルシと同一のものと考えられる。各地に同種のものがあることから関連を考えることもできなくはない。しかし、シルシという語は一般的なことばであって、生まれた子供に「あざ」があることに対して古代の日本人が何らかの解釈あるいは土俗信仰的な説明を加える際に、たがいに関係なく同じシルシあるいは、ウミジルシという語を「あざ」に与えることも自然と考えられる。おそらくそれぞれ独自の発生なのであろう。

空のホヤケーアザなどが独自に発生したということは、言いかえれば、アザアザと区別しなかった西日本で、「あざ」の意味に対してホヤケなどが忽然と発生したと言うことになる。それがどのあたりでどのような基盤から起こったかはよくわからない。瀬戸内海沿岸に見られるものは、西から東上したものかも知れない。ホヤケと赤の類のホクロとのかかわり合いについては後に別に触れるところがあるが、語形に共通点はあっても、関係はなからう。『全国方言辞典』に、岩手で「焦げる」ことをホヤケルと言うとあるが、関係があるろうか。また、妊婦が火事を見ると胎児に「あざ」ができるという俗信があるというが、こういう事実の分布なども、考えてみたいことである。

琉球には、この類はまったく見られない。このことから発生がそれほど古くないものと思われる。

次に赤の類について考えてみる。いろいろなものが含まれているが、紺は古いものである、空は各地で独自の発生したものである、とすれば、現在の赤の地域にも、もとは、紺のアザアザが分布していたことになる。そこでこの赤類の発生については、次のような図式が考えられよう。



つまり、近畿をとりあげれば、両方の意味をアザアザと

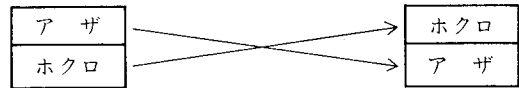
して区別していなかった状態が古くあり、あるとき区別する傾向が起こって、「ほくろ」に対してホクロ(文献によれば古くはハハクロ、さらにハハクソなどがもとの形らしい)が生じたということである。中部のアザーフスベについては、アザーホクロより古いものであるかどうかははっきりしない。文献によれば、フスベは古く「こぶ」を意味していたらしく、「ほくろ」を意味していたという記録はないようである。これに従えば、アザーフスベは中央から伝播してきたのではなく中部地方で発生したということになる。この地域にはそれ以前にはアザーアザがあったと考えられるが、西側から新しく拡がってきたアザーホクロという両方を区別する勢力に影響されて、「ほくろ」の部分に隣接する意味分野からフスベを借用し、この体系が成立したとも考えられる。もしそうであったなら、アザーフスベはアザーホクロより新しいということになろう。このとき、なぜ、新来のホクロをそのまま受け入れなかったのかという疑問が残るが、今は何とも答えることができない。なお、東関東から東北にかけてのAZA-HOSOBIも、AZA-HUSUBEと関連させて考えるべきものであろう。HOSOBIとHUSUBEとは元来同根であったにちがいない。東側と西側とで別方向に発展していったのであろう。

別に、フスベを「こぶ」ではなく別物と結びつける考え方もある。柳田国男によれば、フスベは元来、鍋壘を意味していて、幼児のひたいなどにそれを付け、人工のほくろを描き、ある種のタブーとした。以後、それがほくろの意味も持つようになったという。ホソビについては必ずしも詳しく述べられてはいないが、ホソビは「鍋壘」の意味で用いられるとある(『全国方言辞典』など参照)。

AZA-KUROPOSSIについてはよくわからない。クロッポシはホソビの領域内に分布するところから、新しい発生かも知れない。

以上を大づかみにまとめると、元来は全国的に「あざ」と「ほくろ」が区別されていなかったが、中央部ではホクロ、その東ではフスベ・ホソビとして「ほくろ」を分出し、西日本では逆にホヤケ等として「あざ」の方を分出する変化が生じ、それが徐々に領域を拡げ、現在の分布を示すに至った、ということになる。各地域で以上のような区別を生んでいった変化の要因は何であったのか、あるいはその要因こそが各地域を通じて共通であり、歴史的、地理的に連続するものであったのかどうかについてはさらに考えてみるべき問題である。

最後に、中国西部・九州などに見られる空のホクローアザについて触れておく。これは、東側に分布する赤のアザーホクロとは正反対の体系であって興味深い。このホクローアザについては東のアザーホクロが、どこかで、おのおのの担う意味をとり変えて、



のように転倒し、それが西へ侵入したとする説がある(柴田武:「言語地理学の方法と言語史の方法」国立国語研究所論集、『ことばの研究』2. 1965)。たしかに、このように語をとり変えることはありえないことではないが、単なる転倒とするより、何か媒体を考える方が現実的であろう。分布を見ると、ホクローアザはホヤケーアザの領域内にある。このことから、次のような考え方が可能となる。元来ホヤケーアザが広く分布していた。そこへ東から新勢力のアザーホクロが侵入してくる。在来のものと新来のものとを比較すると、たしかにアザの意味はずれている。しかし、新しく伝播してきた「語形」はホクロだけである。ホヤケーアザ地域の人々の間では、新来のホクロを単にアザに近接して対立するものという意味で、ホヤケと同価値を有するものと受け取るものが現われても不自然ではない。ホヤケとホクロとは語形としても通ずるところがある。そこで、ホヤケーアザの地域の一部で、ホヤケとホクロとの取り換えが起こった。その結果、ホクローアザという、一見標準語とは逆に見える体系が現出した、と考えるわけである(それに対して、ホクロが正当な位置、つまりホヤケーアザのアザととり変わって生じたものがホヤケーホクロではなかったらうか)。

### 136. おとこ(男)

質問番号080は「男」にあたる語形を聞いている。年齢に関係のないものを求めているので、題意によって、男児をさすことばとか、老爺にだけいり、というようなものは、報告されているものであってもこの図にはのせないことにした。報告のある限りは『日本言語地図資料』に記載するが、この『日本言語地図資料』を見るときは、現実には男児や老爺をさすことばがあっても、題意によって報告しなかった場合が多いことに注意しなければなら



ない。

奄美以南の琉球列島、八丈島を除いてはオトコ類が全国を占めており、この点ではおもしろみの少ない地図である。しかし、全国がほとんど一つの類であるということも重要なことであって、今までの方言語彙集などで無視されてきた事実をあらためて調査で確認したことには、もちろん価値がある。

OTOKO をぬき符号、語中の子音が有声化したものをべた符号で示した。べた符号はいわゆる東北方言の行なわれている地域に広く分布するが、なお薩摩半島の南端に見出されることは注意すべきである。ここには時に語中子音の有声化が現われる。

「男」は歴史的かなづかいでは「をとこ」であるが、本土で語頭に W- を持っているのは奄岐だけである。ここで音韻論的に WO と O とが対立しているかどうかはこの調査ではわからない。あるいは、これはこの地方の特色というよりも、1 地点だけであるから、被調査者個人の癖かとも思われる。また、これに準ずるものは他にもあって、ただ報告がないだけなのかも知れない。

OTOKOSI はもちろん「男衆」の意味であるが、下男の意味で「男衆」というのが必ずしも複数を意味しないのと同様、ここでも複数ではなく、男のことである（ただし、7503.11 は複数に限るといふ）。5646.71 では OTOKOSI は結婚後に限るといふ注記があったので、この図からは省いてある。

香川の OTOKODOKURO の DOKURO は何であろうか。頭蓋骨のことであろうか。〈下品な言い方〉という注がついている。101 図「あたま(頭)」によれば、この地方には「頭」の意味の DOKURO がある。

OTOHO が伊豆大島にある。これはこの島で語中の -K- が -H- となる現象の現われであろうが、他の所には見られない（なお、あとで述べる千葉の OTO, OTOO とも比較せよ）。熊本の OTOKU は語末の母音が消える一歩前であり、やはりこの地方の特色となるであろうが、これも 1 地点しかない。福岡の OTOKI も同じようなものでしょうか。OCUKO は新潟に主としてあり、あと三宅島と種子島に 1 地点ずつある。この -CU- が何であるかはよくわからないが、to>tu>tsu の変化の結果かも知れないし、オノコに対する、ノを示すツであるかも知れない。種子島のものはあるいは OKKO へ至る一段階とも考えられよう。その鹿児島島の OKKO は、OTOKO の -TO- が促音化したものである。OK-

KAI は北海道であって、これとは関係ないであろう。被調査者自身はあまり使わない卑語であるらしい。なお、「女」について MEKKAI があることに注意。OTO, OTOO は千葉南部にある。OTOKO の -K- が -H- となり、さらにこの -H- が弱まって落ちた形であろう。「お父さん」とは関係ないと思われる。福岡の OC-CYOO はよくわからない。

琉球列島では、北半にイキガ類、先島にビキドゥム類が分布している。この 2 類はここでは色を同じにし、形を変えて示した。この類と古語「わけ」(1 人称, 2 人称代名詞として使われたもの、また、姓氏に現われた「別」との関係は興味があるが、もちろんはっきりしたことはわからない。『おもろさうし』『混効験集』には「ゑくか」「ゑけが」とある。

沖縄本島では南部を中心に WIKIGA, その北に IKIGA が分布する。奄美諸島は INGA が主となっているが、これと同系と思われる。沖縄本島北部と与論島のウイガ類は WIKIGA の変化した形と考えられる。分布からすると、奄美の INGA 類はこのウイガ類から変化したことになるが、IKIGA から直接変化したものと見た方が -N- の挿入にはつごうがいいであろう。なお、『沖縄語辞典』の 'utuku はこの調査では現われなかった。本土の標準語形に対応するもので新しい文章語である。

先島では与那国の BINGA が注目される。これは、この先島にかつては INGA 類が分布していたことを示すのであろうか。語頭の B- は、WIKIGA などの W- に対応するものである。もしそうだとすれば、沖縄本島の WIKIGA が BIKIGA となり、一方で BINGA となり、大部分では -GA を DUMU (共か) に変えて、BIKIDUMU となったということになる。別の考え方もありうる。はじめ琉球全土に \*WIKI または \*BIKI があり、先島では -DUMU が接尾し、沖縄を中心としてはこれにオナゴのゴに対応するグがつき \*BIKIGU などができ、これに小さいもの、かわいいものなどを意味する接尾辞の -A がついて BIKIGA となったというように。

なお、『八重山語彙』にあってこの調査に現われなかったのは、小浜のビキンドゥン、竹富のビドー、波照間のビドゥヌ、新城のビヒドゥンなどである。

以上概説した以外の雑多な語形は、ほとんどが〈卑称〉〈卑語〉〈下品なことば〉などという注のあったも

のである。

ヤロ類はもちろん漢字を与えるとすれば「野郎」であろう。この類は東海道から関東およびその周辺部に多い。秋田に非常に多く、栃木にあまりないのは、おそらく調査者のこの種の語への関心の度を示すものであろう。和歌山に多いのもあるいは調査者と関係があるかも知れないが、近畿周辺部およびその外側にわずかに見られることにも注意しなければならない。この類は「この野郎」という罵言の形なら全国にあると思われるし、少なくとも全国での理解語ではあろう。にもかかわらず、西日本では、この「男」の意味にほとんどしみ出してこないことにも注目すべきである。この類はすべて併用として現われ、5781.72、5792.02を除くと単称などである。おそらく関東では昔は単称としてでなく使っていたことがあったと思われる。

YAROKKO 類は「男兒」を指す場合が多いが、この地図には、そのような注がないものだけが掲載されている。会津のZYAROOはこの地方でY-の摩擦が強いために生じたものである。

その他の語形では、北海道のANKOが目される。この地点は九州以北で八丈島以外にOTOKOにあたる語形の出なかった珍しいところである。というよりは珍しい被調査者である、というべきか。カードには注がないので、これ以上のことはわからないが、「兄こ」であろう。有名な伊豆大島のアンコは女性である。

ガキ類は和歌山に多い。その他にも点々とあるが、「子ども(男兒)」を指す用法であればもっと全国に広く、多く分布するであろう。チキシヨオ類とバカ類とは秋田に多い。「畜生」と「馬鹿」と思われるが、罵言としてなら全国にもっとあるであろう。これがここに報告されているのは、単称を掘り出すのに熱心だった調査者の努力によるものと考えられる。「乞食」を示すと思われるHOIDOが秋田にだけあるのもこれであろう。『全国方言辞典』によれば「乞食」のホイトオなどは東北をはじめ全国にある。

凡例のOSU以下の4語形は、動物の「牡・雄」一般を示す語と思われるが、これが「男」を表わす単称として現われている。関東西部、近畿中央部、瀬戸内海東部などである。この語形が現われていることと、質問文との関係はなかったであろうか。この質問文によって、当然出べき形を圧迫したことはなかったであろうか、反省させられる。

ONOKOは『古事記』『万葉集』をはじめ、『和名抄』などに現われるが、現代口語としては石川の白峯、山梨の奈良田に1地点ずつあるだけである。両地点とも隠れ里として知られている地点であることは興味深い。ONOKOGOは中国山地に1地点併用であるほか、八丈島にある。八丈島はオトコ類を使わない点珍しい地域である。以上は広島庄原市を除いて辺鄙なところである。

BOO以下の5形は「仏僧」「小僧」などと関係のあるもので、女性におけるアマ類に対比される。女性のアマ類に引かれて生じたものではあるまいか。

KUSOKEROのKUSO-は「糞」としても-KEROはよくわからないが、KEDOが近くにあり、これと関係があろう。もっともこのKEDOもよくわからない。DEKI、DECUはよくわからないが、「丁稚」からきていると思われるDECCIIと語形が類似しているの、似た符号を使った。秋田のIZYAREKESIは女性にも現われる。137図・138図の「女」のところで考察しよう。また秋田のIGECIKUSYOのIGE-は「いけすかない」「いけずうずうしい」などの「いけ」であろうか。次のIGEZARUはこの「いけ」に「猿」のついた語形であろうか、カードに注がないのでわからない。ZUBEは、「はげ」、ひいては「仏僧」の類と関係があろうか。しかし103図「はげあたま(禿頭)」、104図「はげる(禿げる)」ではこの地方はアメ、アメル類である。

### 137. おんな(女)

### 138. おんな(女)——単称

「女」については単称が非常に多いので、137図では普通称をまとめ、138図に単称をまとめて示すことにした。ここではこれを一括して説明する。なお、5集に載せる予定の「牝牛」「牝馬」などを参照のこと。

137図では空で示したオンナ類が沖縄本島以北で圧倒的に優勢である。136図の「男」で沖縄本島以北の琉球列島がオトコ類と全く別類の語を使っていたのと比べておもしろい。

本土では関東および中部地方(西部を除く)でONNAがあり、その北および西のONAGO地帯を両断しており、一見ONNAの方が関東で発生した新しい語のように見える。しかし、文献から見ると「をんな」またその原形としての「をみな」の方がずっと古い。ONAGO

は「をみなご」または「をんなご」からの転とされるから、新しい形であろう。文献では「をなご」は狂言に現われる。

ONNA から ONAGO が出てきたとき、2語併用で意味を分担し合ったとき ONNA の方が一般的な「女」の意味からはずれていったというような事情があったかとも思われる。たとえば、ONNA が「恋人」「情婦」の意味を分担したなど。そのために「女」の普通称を示すものとしての ONNA は沈下してしまったと考えるわけである。しかし、これについては各地における ONNA という音形式の意味、ないしは「恋人」「情婦」などを意味する語についての精密調査をした上でないと、確言することはできない。ONNA は九州では、ごく北部を除いてはほとんど現われず、ONNA はこの地方で完全に駆逐されたことを示している。他の地方の ONNA は、その地方で ONAGO という語形を追ってあとから活力をとりもどしたものであろう。特に分布の形、すなわち北陸で ONAGO が二つに断ち切られている形からいえるようである。このように古い語形が復活した理由としては、AMA 類という語が、もとは「女」を意味していたにもかかわらず、後、意味の下落を生じ、いわば戦線から脱落した点をあげることもできよう。つまり、他の地方のように ONNA の意味が下落しなかったのである。北海道における半島部以外の ONNA は、新しく標準語としてはいったものと思われる。

138 図によれば、ONAGO を卑語とする地点が点々とある。これらの地点では、一つの例外もなく、卑語でない普通称の形は ONNA である。新しくはいった標準語が一般称のために使われ、在来のものを卑語に移す現象は、広く一般に認められるところである。ONNA を卑語であるとしたのは、兵庫に1地点あるだけである。これらの点は、上に述べた ONNA が悪い方の意味を分担したとする説にはつごうの悪いものである。

ONAGOSYUU, ONAGOSI は元来は複数的なものであったろうが、今その意味でなく使われている。紀伊半島、四国中央部山地に、特に ONAGOSI が多いのは、この語形がかなり古いことを示しているようである。

ONNAGO は、ONNA から ONAGO への過渡期を表わすという説がある。「男」の ONOKOGO ときれいに対応する八丈島のものは、あるいはこの過渡期のものであろうか。宮城北部や岩手の東南海岸部のものもそうであるかも知れない。しかし、ONNA の周辺の

ONAGO の中に分布するそれらは、この二つの語形の衝突によって生じた中間的なものとも考えることもできよう。ONANGO もまた中間的な語形とすることができ、吉野川上流に多く見られる。

UNAGO は「牝牛」の UNAME と関係があるかも知れない。

凡例の UNAGU 以下 HUNAT までは、奄美から沖縄本島とその属島までに分布する。ONAGO に対応するものおよびその変種と考えられ、この類は文献ではともあれ、相当古い歴史を持っていることを思わせる。

沖縄に多い WINAGU から YUNAGU までは、「をなご」に対応するものおよび UNAGU などから変化したものであろう。WINAGU が新しい傾向を示すものと思われる。『沖縄語辞典』によれば 'unna もある如くであるが、この調査では現われなかった。これは「男」の 'utuku と同様、新しい文章語なのであろう。『沖縄語辞典』で単称としている 'jumuwinagu ('jumu- は罵りの接頭辞)はこの調査では出てこなかった。この語に限らず、琉球列島では単称は一つも出てこなかった。注目すべきことであらう。

メロ類では MEROO が目立つ。この MEROO を「女等」の延とするのは『大言海』の説である。『大日本国語辞典』には「めらは(女童)」の転とある。いずれにしても ME- は「女」であって、この類のものを赤で示した。しかし、もっとも古い和語と思われる ME そのものはこの調査には現われなかった(あとで述べる琉球先島の MIDUMU などとも比較せよ)。

137 図では MERO 類は北陸に強い地盤を持っている。長崎は MERA で、北海道のものをこの北陸からの輸入と考えれば、狭い意味での MERO 類はここ以外にはないわけである。しかし、138 図の単称の方を見ると、全国に薄くではあるが拡がっていることがわかる。単称としては古くから広まったが、北陸で意味が上昇すると同時に強固に広まっていったと考える方が、その逆、つまり、普通称として昔拡がったものが、北陸を除いて各地で単称になったと考えるよりは自然であらう。もし後者ならば、他の地域に普通称を現わすこの類が多少とも残っているのが当然ではなからうか。なお、MERO 類は「若い女」の意味でなら使うという地点もあったが、題意により地図には取り上げなかった。

MERA は九州西部と鹿児島に分布している。これは MERO と語形は近いが、分布は非常に離れている。

『大言海』説は、この語形には適合しようか。

MESU, MEN, MENTA, MENDA など、「牝・雌」を示す語を主として卑称として使われ、地点では、「男」の方にも共通する傾向がある（なお136図の説明その部分参照）。MESUの両図計4地点は、すべて「男」にはOSUがあり、MENの2地点中1地点は「男」でON, MENTAの14地点中7地点がONTA, MENDAの1地点は「男」でもONDAというように比較的よく対応している。

多くは卑称ではあるが、このほかMENCU, MECCIなどの「牝・雌」を示すと思われる語形がある。しかし対応する「男」の言い方がないため、「牝・雌」であることは確言できない。MENCUは、一方が普通称、他方が卑称の違いはあるが、北海道と四国に1地点ずつあるし（北海道の被調査者の両親は大分県出身）、MENCUUは静岡3地点、山口1地点となっている。なお「女」の卑称としてはONCUUが山口にある。MENCUUに対して「牡・雄」のONCUUが考えられるが、これが「牝・雌」を示すことに転換したのかも知れない。地点は山口のMENCUUとそう近くはないが、遠くでもない。なお136図「男」にONCUUという語形はない。また(-)MECCU(U)は鹿児島にあり、MECCIは熊本にある。MECYOなどの-CYOは、AMACCYOなどの-CYOと同じであろうか。分布では非常に離れている(MECYO類は九州、AMACYO類は東海・関東)。ただし、MENCYA(A)の-CYAもこれと関係があるならば、これは計4地点静岡にあるから、東海地方で重なる。しかし、AMACYAというのではない。以上でわかるように、「男」「女」は「牡・雄」「牝・雌」とは密接な関係があるので、これらについても調査すべきであったと、いまは思う。

卑称のMETAは九州に主力があるが、なお青森にも1地点あり、METTA類になると青森が主力で、なお熊本に1地点あり注目される。MEETAはその中間として神奈川、埼玉に各1地点ある。これらがすべて関係あるものならば広い範囲に少しずつ分布していることになる。

MEKKAIおよびその変形MEKKEは青森以北北海道に現われる（秋田にもこの類はあるが）。特に普通称としては北海道にあるだけであって、これは北海道の特色といつていいであろう。もっとも、この北海道でも卑称の方が多い。北海道の半島部はMEKKE、その他

にMEKKAIが多いが、後者は標準発音的に直したものであろう。いずれにしても海岸部の語である。これに対応する「男」のOKKAIは北海道に1地点あるだけで有力ではない。おそらくOSU: MESUに類推してあとからできた語形であろう。この-KE, -KAIについてはよくはわからないが、あとで述べる-KESIと関係があるかも知れない。なお、これは「女の子」について言うという注のあるものが他に多かったが題意により図には示していない。

METACIは「女たち」であろう。

凡例のMIDUMU以下の赤は琉球先島に現われる。「女ども」の意であろう。ここにME-を持ったものが現われているのは、日本語のたどりうる最古のものを示すものかと思われる。「男」のBIKIDUMUなどと対応しMI-DUMUと切れる。この先島にも卑称は現われていない。『八重山語彙』にあって、この調査に現われなかったのは、ミドー（竹富）、ミドゥス（波照間）、ミドゥム（鳩間）、ミドゥン（小浜）である。

NESYOO類はもちろん「女性(にょしょう)」からきているであろう。分布から見ると、この類が一度中央の語形となったことを思わせるものがある。あとからできたONAGO類に圧倒されて今卑称を主とするようになりつつあるところである。その姿はたとえば佐渡に典型的である。全島おそらくNESYOOであったところに南西からONAGOが伸びてきて、前者を卑称に落とし、やがて消してしまふ過程であろうか。NYOSYOOという語形がないのもおもしろい。ナ行拗音の発音が日本人にとってむずかしかったころの語形であったと考えることができようか。

NYOOBOOの類もやはり一度は中央に地歩を占めたのではあるまいか。それがNESYOOの類よりあとであることは分布から推定できる。北陸へはNYOOBOの形で残り、中国地方では、中国山地でNYOOBO、北の日本海岸に近くなるとNYOOBAが多くなっている。この類は「女房」から出発しているので、表面的にはNYOOBO(O)がもとの形に近く、NYOOBAの方が変形であると考えの方が自然であろう。この自然さとこの中国地方の分布の姿は合わないようでもあるが、中国山地は交通不便であると見れば残存と考えてさしつかえないと思う。一方、NYOOBAのAを「にょうばう」の字音に関連させることも考えうる。なお、この類がほとんど卑称としては使われないことは、

その出自から考えて興味がある。すなわち「女房」から「一般の女」へと一度下落し、さらにもう一度下落するところまではまだ至っていないということになろう。NYOSYOO が現存しないで NESYOO その他に変化しているのに対して、ここではすべて NYOO が保たれている点にも注意したい。拗音も長母音でなら言いやすかったのか、前者よりもこの方が新しいことを示しているものであろうか。

以上の二つの類、NESYOO と NYOODOO は漢語系で、一部を除いて近畿からあまり遠くないところに分布しているのもおもしろい。

アマ類は中部地方・関東地方に、主として卑語として現われている。この中核となっている関東中央部の東西にわたる線上では、普通称としても使われている。三宅島で AMA が卑称で、AMAKKO が普通称であるというはおもしろい。アマ類が昔は普通称として使われ、のちに卑称に下落したものと思われる。「尼僧」の意味の、サンスクリット語を源とするのだろうか。なお、大阪南部から和歌山、三重に1地点、兵庫西部に2地点というように近畿周辺に主として卑称として現われているのも、この語がやはり中央で一時使われていたことを示すものであろう。AMANZYAKU は、AMA-の部分で共通するので、別語「あまのじゃく」からでも、語形および意味を転化したものであろうか。浜名湖付近に分布している。ABA は、日本海上の飛島にある。語形の類似でここに入れたが、「母」を意味する語などからの転用とも考えうる。

ビク類はやはり「尼僧」を意味するものとして、アマ類と同色の茶としたが、アマ類の丸符号に対して、三角符号で示すことにした。分布をアマ類と比べてみると、アマ類よりも辺鄙なところにあるから、「女」を示すようになったのは、アマ類よりは古いのではないかと思われる。BIKU は元来「男僧」を意味するサンスクリット語であるが、早くから「尼僧」と混用されていたらしく、この調査でも「女」の卑称として BIKUNI よりは多くの地点で現われている。ビクを女の卑称とした例は狂言にあると言う。

BIKKI 以下がビクと関係あるかどうかははっきりしないが、BIKKI と BICCI とは関係があるかも知れない。BIKKI は ONAGOBIKKI (空で示したが、次の ONAGOBITTA を茶にしたのと一貫しなかった)を含めて、下北半島に主として分布する。BICCI

は宮城にあるが、この地域では KI と CI とは混同されることが多い。「赤ん坊」のことをビッキと北奥で言うが、この地方では「蛙」をもまたビッキと言う。形状はそういえば似ているし、「女」を「蛙」のようだと言う考え方をする人も、この地方では珍しくないようである。

凡例の BITTA から BITA までも、ビク類の変化したものかどうか、よくわからない。岩手北半・秋田東部・青森南部と、一応の領域を弱いながら持っているようである。ほかに、BITTA は新潟西南部に、BINTAA は岐阜に、BIITA は神奈川に各1地点例外的に見出される。

BII 以下はますます語形が離れていく。山口に1地点 OBII があるほかは、BII, BIは岐阜に集まって、これもゆるい分布域を持つ。「牝牛」を表わすのに岐阜に BII があるようであるから、動物の「牝・雌」を表わすのに使うのであろう。BI-と ME(女)とも、何か関係があるかも知れない。凡例の BIDEE 以下 BIDAGURE までは宮城を中心にこれまたゆるい分布域を持ち、これと関係あるかどうかはわからないが BIDARI が下北半島にある。この BIDARI は「鬢垂り」で女は鬢の毛を垂らしていたから言う、とも考えられる。ONAGO-BINDARE と並べて置くべきであった。凡例の BETTA 以下は語頭に B- を持ち、語形が上のものと似ているのでここに置いておいた。

その他の語形では凡例では YARO だけを MERO とそろえて別の場所に示した。この YARO はじめ、CIKISYO 以下 BAGAKE まで、および ZYABE, ZYABEKUSARE などが秋田にある。これは「男」のところでも述べたように、調査者によるものであろう。このうち、いうまでもなく YARO は「野郎」、CIKISYO は「畜生」、YAKKO は「奴」で、秋田では「乞食」の意味、KUSARE は「腐れ」、ODAHUGU は「お多福」、HOIDO は「乞食」、BAGA は「馬鹿」であろうが、KUSAREKESI の -KESI はよくわからない。KAMADOKESI が「消し」とすれば、この -KESI も「消し」であろうか。または、この部分は報告によれば [-kæsi] なので「返し」の意味かも知れない。IZYAREKESI についても同様である。BAGAKE の -KE もよくわからないが、この -KESI と関係があるかも知れない。ZYABE も原義は不明である。IZYARE はあるいはこの ZYABE と関係があろうか。

SUBETA は「醜女」の意味では少なくとも理解語彙

としてもっと広く分布しているであろうが、近畿の西の方と東京の西北に分布し、都会地からやや意味をずらして伝わったことを思わせる。DAMA は被調査者によれば「牝馬」のことという。BASU も語源ははっきりしない。第2集91図「うそをつく一前部分」に秋田にBASU が現われるが、はたして関係があるろうか。この愛媛のBASU と和歌山のBASSAI、福井のBESA とが関係があるかどうかははっきりしない。BASU は娘の罵称として『全国方言辞典』には愛媛などのほか宮城登米郡を報じている。青森のMIDAKUNASI は「見たくない(みともない)」の意味で、「醜女」を経由し卑称となったのだろう。HENA は山形で相当有力であるが語源は不明である。被調査者の中には「難」と意識する人もいるようである。宮城のHENAKO も関係あるろう。兵庫のHENDA は、鳥取のHENNAGO を介して関係があるかも知れない。GAGI は「餓鬼」であろうか。GOGI がこれと関係あるかどうかかわからない。「小さな女の子」をさすGAGI は題意により図にのせなかった。NAAMENDO はONAME と関係があるかも知れない。BIRI、HIRACUKE の語源はわからない。

### 139. ひまご(曾孫)

以下142図までの曾孫・玄孫・祖父・曾祖父の4項目は、相互に関係があるので、地図・解説ともども比較されたい。各地図は、できるだけ符号の色や形についても関連させるよう工夫した。なお、この4項目は後期計画で加えた項目のために、地点数が少ない。

この地図では、HI(I)MAGO を標準語形と認めて、〈併用処理の原則〉を適用した。

大観すると、全国は大きく、東日本のヒコ(マゴ)、西日本のヒマゴ、琉球列島のマタマゴの3類に分割される。この図における東日本と西日本の境界は、29図「アカイを“明かるい”の意味で使うか」と比較できる。ヒコ(マゴ)とヒマゴの対立については、142図に平行的な対立があるので比較できるよう色を工夫した。また本集125図にヒコユビが現われるので比較されたい。

凡例を見ることにしよう。

この地図では、語頭のヒにあたる部分の音変種をやや詳しく示したが、これは第1集11図・12図と比較される。

HIKO の中には第2音節子音が有声化するものが、

わずかに含まれている。HWIKO は山形に多く、新潟および岩手にわずかに現われる。HUKO は、青森の下北半島にわずか1地点である。SIKO は、青森・新潟・富山・石川にかなり多く見られるほか、北海道・岩手・福島・八丈島にも見られる。SUKO は、能登に1地点である。

以上HIKO からSIKO までの類に対して、HIKOMAGO からSIKOMAGO までの円形の符号を与えた類は、本州では岩手・秋田を中心とする地域、千葉・埼玉・群馬・長野にかけての地域、岐阜北部にややまとまった領域を認めることができる。

HIKOMAGO の中には3774.44のヒッコマゴが含まれている。HWIKOMAGO は秋田と山形である。HUKOMAGO は下北半島に1地点、SIKOMAGO (3735.50のシッコマゴを含む。この語形には、尻こ孫とでもいう語源意識が働いているかも知れない)は、東北から関東にかけて10か所ほど認められる。

千葉南部には、緑で示したHIYOMAGO、HYOOMAGO が認められ、東日本においてはここだけにしかない。HIKOMAGO の音変種であるかも知れないと考えておく必要がある(49・59・51・59・90図など参照)。これらの語形がはたしてHIKOMAGO からの変種であるか、あるいは西日本の同種のものに通ずるものなのか、140図・142図などと比較しても確証を得られず、残念である。

MAGOHIKO は千葉にわずかに1地点である。「マゴヒコヤシャゴ」という慣用句と関連があるろうか。もうひとつの考え方は、あとで述べる。

緑の符号で示した見出しの中には、カッコを持つものがある。たとえばHI(I)MAGO としたものは、HIMAGO とHIIMAGO の両語形を併せたものと理解されたい。両語形を別見出しとすることは、この139図では可能であるが、比較すべき142図では不可能なので、このような取り扱いをした。

HI(I)MAGO のうちHIIMAGO の地域を概略的に示せば、東日本(点在する)・京都北部から兵庫北西部・鳥取・島根・岡山・広島・徳島・香川・愛媛東部にかけた地域、および関門から長崎にかけての北九州ということになるろうか。HWI(I)MAGO は岩手・山形・鳥取に見られる。鼠ヶ関のものだけはHWIMAGO であった。HIMANGO は大分に現われる。-MAGO と-MANGO の区別は140図では出さなかったし、

-MAGO に分類したものの中にも実は [çima<sup>o</sup>go] などが含まれているから、特別に見出しとしなくてもよかったかも知れない。HE(E)MAGO は島根東部を中心に現われる。HEMAGO は 6402.53 と 6403.60 のみ。HWEEMAGO は、HE(E)MAGO の領域の東に接して 2 地点認められる。

HUUMAGO は甌島である。142 図では HUUZII-SAN を HYUZIISAN に準じて扱ったが、ここでもそうしたほうがよかったのかも知れない。

SIIMAGO は長野・富山・福井に 1 地点ずつ見られる。HIMAGA・SI(I)MAGA は奄美大島に現われる。琉球列島では孫を MAGA ということが普通だから、これらは HIMAGO・SI(I)MAGO に対応することができる。

HI(I)NMAGO 以下 HYOOMAGO までは、後部形態素をウマゴとして理解することもできる類である。142 図にも、前部形態素が HYUU- などとなる類があるから比較されたい。もっとも HI(I)NMAGO だけは、その他のものの領域とかならずしも連続しないから、この類からはずしておいたほうが安全かも知れない。この類の領域を略記すれば、隠岐から広島東部・愛媛・山口・福岡・熊本・宮崎にかけての地域を中心とする、と言えようか。

HI(I)UMAGO は 3 地点であるが、HIUMAGO は 7248.49 のみであった。HYU(U)MAGO がこの類の主流である。ただし HYUMAGO は少ない。HYU-UMANGO は山口を中心に認められる。さきに述べた HIMANGO と同様、これも HYU(U)MAGO に含めてよかったものかも知れない。HYUUNMAGO は佐賀・長崎に各 1 地点である。HYUUMAGA は山口の見島である。この島で孫をマガと言いかどうか、問題になるが、140 図玄孫では CURUNOMAGO の回答を得ている。KYUUMAGO は鹿児島に 2 地点、実際の表記は [ejumago] であった。HIYOMAGO は広島北部、香川・愛媛の県境付近および千葉南部に認められる。HYOOMAGO は隠岐を含む島根東部に多く、ほかに香川・長崎(五島)および千葉に各 1 地点認められる。以上二つの見出しの千葉のものについては、すでに触れたところがある。

HIMOGO は宮城北部に 2 地点、紐子の意識が働いているかも知れないと考えて、特に見出し語としてみた。

紺の符号を与えたもののうち、MATAMAGO から

MATAHWAA までは、140 図・142 図にも比較すべき語形が見られる。符号の色について比較できるようにした。

このマタマゴの類はほとんどが琉球列島に現われるが、MATAMAGO のみは、本土(新潟・長野・広島・徳島)に認められる。ただし発想は琉球列島のものと同一であろう。MATAMAGU は与那国のみ(140 図ではこの地点を、その他として扱ってあるが、[dutçimaŋu] であり、四つ孫の意味であるという)、MATAMAGA は奄美と沖縄に 7 地点ほど、MATANMAGA は宮古の多良間島にもあるが、沖縄の主流語形である。実際の表記としては [mataŋmmaga] がもっとも多かった。『沖縄語辞典』の表記では mataŋnmaga となっている。この NMAGA の部分は、本土のウマゴの類と比較すべきものであろう。MATAMAAGA は徳之島および沖縄北部に現われる。MATAMAAGAA は伊平屋島、MATAMAHA は伊江島、MATAMAA は八重山に現われる。MATAHWAA は、石垣島北端(平久保)のみである(140 図では、この地点は無答となっている)。

以下 YASAGO, YASEEGO, DONDARE は、140 図に現われてしかるべきと考えられるものなので一括した。140 図と比較できるように、符号の形を工夫した。こころみに両図を対照すると

	(139 図)	(140 図)
2754.56	YASAGO	無答
4752.11	YASEEGO	ZINZIRAGO
5538.33	DONDARE	無答

となっている。なにか混線が起きているように見える。無答は 140 図と比較すると、概して少ない。

分布からの歴史推定は、分布が単純なだけにむづかしいが、文献をも考慮に入れてみると、次のようになりうか。『時代別国語大辞典上代編』などによると、上代ではウマゴ・ムマゴとヒコとは同義であり、ヒヒコが曾孫の意であったという。

コ——ウマゴ・ムマゴ(A)

コ———ヒコ———ヒヒコ(B)

もっとも、『皇極前紀』などを引いて、

コ——ウマゴ・ムマゴ——ヒコ・ヒヒコ(C)

という系列もあったように見える。ヒを一種の接頭辞と考えるならば、(C)よりも(B)のほうが整然としている。

現代の方言における系列を上準じて示すならば、概

略的に以下の3種を見出すことができる(コ—マゴの部分)は推定)。

コ—マゴ—ヒコ(D)

コ—マゴ—ヒマゴ(E)

コ—マゴ—マタマゴ(F)

(E)・(F)は、(B)とは無関係であるが、(A)の発展として、それなりに整然としていると考えられよう。東日本の(D)は、前掲(C)に近いが、これはおそらく在来の孫の意味のヒコが、新来の(ウ)マゴによって意味の移動を起こして(東京においてヤナアサツテが一日ずれたのと同じ)生じた系列と推定される。歴史時代の(A)・(B)・(C)の関係も同様に説明できよう。なお考えれば、ウマゴ自体が元来はコと同義語だったかも知れない。

千葉にわずかに1地点みられる MAGOHIKO は、あるいは、MAGO と HIKO が同義語であった時代に(KAO と CURA が併用され KAOCURA が生まれたように)融合して発生したものかも知れない。ヒコマゴの中にも同様の発生理由を考えうるものが含まれている可能性がある。いまは、孫についての地図を作ればよかったかとも考えているが、いまやどうすることもできない。なお、『全国方言辞典』には、孫の俚言はほとんどないことを付記しておこう。

#### 140. やしゃご(玄孫)

本集139図以下142図までは相互に関係が深いので、地図・解説とも比較しつつ見られることを希望する。

この玄孫の地図作成にあたっては、符号の決定にあたって次の原則を立てた。

イ. 色について

赤・橙—語頭に YA- という形態素を含むもの。

桃—上記の類と比較しうるもの。

橙・草・紺の一部—ひまご(139図)を表わす語形を基礎として派生したと見えるもの。

紺の一部—ひまごを表わすと見られる語形を、そのまま使うもの。

紺の一部—その他。

ロ. 大きさについて

小—後部要素にマゴを持つもの。

大—それ以外。

ハ. 形について

輪郭だけの符号は、後部要素にマゴ・ヒコ・コなどを

含まないものである。概略ひまごの図と比較できるようにした。ただし、139図では区別した-MAGO と -MANGO の区別は省略してある。MATA- を冠するものについては、142図(曾祖父)との関係も考える必要があったので、139図との間には一貫性を欠く点がある。沖縄に分布する語形は、139図・140図を通じて、後部要素に注目して符号をきめた。

地図を大観すると、大符号は東日本に、小符号は西日本に分布すると言うことができ、その境界は、ほとんど139図のヒコ版とヒマゴ版の境界と一致して注目される。このことは、139図の説明で指摘したように、孫を意味する(ウ)マゴが、ヒコに代わって勢力を得るにあたって、この玄孫の意味の複合語の後部要素としては東日本にまで発展することができなかったことを示すのであろう。139図に関することであるが、元来コとマゴとが別の概念であったとすれば、ヒコとヒマゴが同義である状態は奇妙とせねばなるまい。この140図にも同種の奇妙さが認められる。たとえば凡例を見ればわかるように YASYAGO と YASYAMAGO とか、YASYARAGO と YASYARAMAGO とかが並んでいる。地理的に同一地域にあるわけではないが、これらはもはや139図の説明のように、簡単に意味のずれによって生じた現象と説明することはむずかしい。ヒコとヒマゴとが同義となることを基礎として、ヒマゴが勢力を得ると同時に、ヤシャ(ラ)ゴがヤシャ(ラ)マゴに変じたと見るべきなのであろう。つまり以下のような(1)~(3)の過程があったと考えるわけである。

(1) コ—ヒコ—ヒヒコ—ヤシハゴ

(2) コ—(ウ)マゴ—ヒコ(ヒヒコ)—ヤシハゴ

(3) コ—(ウ)マゴ—ヒ(ウ)マゴ—ヤシハマゴ

さて、以上述べた符号の原則から具体的に凡例を見ると、橙の大符号はヤ—ヒコ、橙の小符号はヤ—ヒマゴの類ということになる。139図の知識を基準にすれば、前者は東日本に、後者は西日本に分布することが当然想像される。はたして、前者は能登と長野に、後者は九州一円に現われることがわかる。ヤ(弥)という形態素がそれぞれ接頭したものと考えるべきであろう。ただし139図・140図をもう少し詳しく対照すると、140図の見出しの中に、139図での HI- に対して、YA-(およびそれに準ずるもの)を冠する時、子音に S(Z)- の現われるものがかかなり多い。たとえば YASIMAGO・KASIMAGO (福岡)・YASINMAGO (長崎)・YASUMAGO (各



地)・YASYU(U)MAGO(宮崎)。第1集11図・12図を見ても九州にはHI>SIの変化が見られないから、単なる音変化と見ることはむずかしい。これについては(イ)形態素ヒのさらに古いものとしてシがあったが、これが中央語ヒに圧倒され、139図の場合には完全に制圧され、140図ではわずかに残存していると考えるか、(ロ)この地図で赤の符号を与えたものは、ヤに続いて一般に子音Sの見られる事が多いことと関連させ、類推が働いたと考えるかの、いずれかであろう。前者はシアサッテのシなどと比較するためには都合のいい考え方であるが、おそらく後者が正しかろう。

YAZIMAGO・YAZUMAGO はともに薩摩半島に1地点である。地域的な有声化(の残存?)と見ることができよう。

YACĪNMAGA・YACIMAA は、八重山諸島に現われ、139図と比較して特殊な系列であることがわかる。八重山では本土方言SIに対してCĪまたはCIの現われることもあるようだから、本土方言からの輸入語とも考えうるが、八(ヤツ)孫とでもいった独得の命名だったかも知れない。与那国では(この地図ではその他の語形となっているが)[dutjimaŋu]と言い四つ孫の意味だそうである。

赤の符号を持つ類は、主として東日本に分布し、西日本では九州西北部のほかはごくわずかである。語形からみれば内部を大きく3類にわけられようか。コ・マゴを除いた部分の末尾母音がOの類、Aの類、およびI~Eの類である。

Oの類はごくわずか、YASYOGOが秋田に1地点、YASIOが岐阜に1地点である。「やしほをり」の「やしほ」と関係がありそうにも思えるが、いかがであろうか。もっとも、このように考えるより次にのべるYASIWAのWがAに影響してOに変じたとする方が穏当なのであろう。

Aの類はきわめて強力であり、中でも全域に広いYASYAGO(島根西部にもある)、主として東北部に見えるYASAGOが有勢である。YASYOWAは富山西北端に1地点、YASYUWAMAGOは九州西北部に3地点、YASUWAは能登北端に1地点である。この3者は、次にのべるYASIWAのWがこんどは前のIに影響して生じた語形と考えるべきであろう。YASIWAMAGOおよびYASIWAは、九州西北部・岡山西南端・能登から名古屋にかけての地域、およ

び佐渡に見られる。この変種と見られるWASIWAMAGOは、対馬に1地点であるが、ともあれ、YASIWAMAGO(WASIWAMAGO)とYASIWAの領域がかけはなれていることは注目される。いったいに、この地図で輪郭だけの符号で示した語形が、富山・能登あたりから伊勢湾にかけて分布していることは興味深い。おそらく東の-GOの類と西の-MAGOの類とが接触して、このような後部要素切り捨ての現象が起こったのであろう。もしそうだとすれば、九州と中部地方のヤシワ類は、古い時代の表現の残存ということになる。シワの部分は何であろうか。皺とは関係がないであろうか。他のAの類のものも、これらのうちどれが古いかをこの地図から決定することはむずかしくとも、当然関係のある表現と考えられる。地点のすくないものの分布を指摘すれば次の通り。YASIYAGO(彦岐に1地点、以下同じ)、YAHYAGO(八丈島)、YASYANGO(新潟)、YACYAGO(埼玉)、YASSYAMAGO(対馬)、YASYANMAGO(長崎)、YASAMAGO(福岡)、YACYA(長野)。

I~Eの類は、YASEMAGO(屋久)、YAHEMAGO(薩摩半島)を除いて、主として山形・宮城・福島の地域に分布している。これらがどのような語源意識によって各地で受け入れられているか、興味を持たれる。jaja>jajæ>jasæ(・)>jase(:)&でもいう経過をたどって各地で発展したものではあるまいか。YASE(E)-GOという見出しの中には、たしかにjajægo, jasæno, jasæ:ŋo, jase:ŋo, jaseŋoなどが含まれている。YASIAGOという形を間において、音位転倒によって生じた形とも考えうる。九州南端には現在YASIWA-, YASYA-の類が付近に認められないが、さきに述べたYASIMAGOその他が現存しているから、それらと関連させるべきなのであろう。

桃の符号を与えたものは、いろいろである。YASYARAGO以下YASYARAまでは、赤の符号を与えた見出しのうちYASSYA-, YASYA-, YACYA-, YASA-(および橙のYASU-)にRA(まれにRE・RI)の加わったものと見ることが出来る。ただし、YASYARAGOが秋田・山形・愛知でYASYAGOに、YASARAGOが秋田でYASAGOに、YASYARAMAGOが五島でYASYAMAGOに、YASURAMAGOが南九州でYASUMAGOに、YASYARAが伊勢湾沿岸でYASYAGOに接してい

るほかは、主として近畿・中国・四国を中心に、独自の領域をもって分布している。つまり、両者は当然関係があると考えねばなるまいが、たとえば YASYARAMAGO と YASYAMAGO との関係は、かなり古い時代にさかのぼると言えよう。

RA(RE・RI)を持つものの領域はあちこちに分離しているが(秋田・五島・南九州など)、RA(RE・RI)のないものがさらに強力に、しかも領域を分断されて分布しているところから、前者は後者から派生したものではないか、と考えられる。派生の原因としては、YASIIWA が YASYA に変ずる時、音節数を整えようとして RA(RE・RI)が添加されたとか、サラ(更)の語源意識が働いたとかが考えられる。ある地域で派生が起こり、それが周囲に伝播した場合もあろうが、一方、各地で平行的な現象が起こった場合もあったろう。

凡例の SYASYAGO と SYASAGO は、わずかに群馬と三重に見られる語形である。両者とも、YASYAGO からの変化形と考えてよかろう。SYASYARAMAGO 以下 CYARARA までは、YASYAGO が SYASYAGO になったのと同じ道をたどって、YASYARAMAGO>SYASYARAMAGO といった経路をたどって生じたものと考えられる。分布を見ると、概してヤシラ類の近傍にこの類が見られ、この推定を裏付けるものと言えよう。SYAKUSIMAGO (島根と広島に各1地点)は、まったく別種の語かとも思われるが、SYASYARAMAGO から、なんらかの理由によって変化したものと考えて、桃の符号を与えた。SESERAMAGO は香川・徳島・高知・大分に、SESERIMAGO は徳島に見られるが、SYASYARAMAGO との関係は十分には理解できない。CYACYARAMAGO も YACYARAMAGO と地域を接していない。平行的な変化が、和歌山と香川とに起こったと見るべきであろう。CYARARA(香川)は、CYACYARAを通じてさらに変化をとげたものと思われる。

KUSYAGO 以下 YASYAGOKISYAGO までは、関東から中部北方にかけて分布する。最後のものを除いて、群馬・埼玉・長野の県境付近にかたまって分布している。ヤシゴの類から、なにか民間語源などが働いたため生じた変種と考えられる。最後のものなどが、その変化の中間段階を示すものかも知れない。

ZINZIRAGO 以下 DORYAA までは、大きく2類に分かつことができ、それぞれにいちおうの領域を指

摘することができる。どこまで桃の符号を与えられるべき性質を持っているか不明であるが、ヤシラ類に通ずる RA を持っているとして、ここに配列した。ZINZIRAGO 以下 İZİRİMAGO まではすべて各1地点であり、ZOZORAKO が滋賀であるほかは、北海道から東北地方の太平洋岸にかけて点在する。現在は、ヤシラ類と領域を接しているとは言えない。『新撰字鏡』に見える豆々子と関係があろうか。あるいはジジ(祖父一何段階か離れた直系親)の意識が働いているのかも知れない。分布も違い、意味も関連がなさそうに思われるが、SYASYARAGO などの S が有声化したものという考え方もあろうし、また 102 図つむじに類似する語形がいくつか見られる点も忘れることはできない。

DONDORAGO 以下 DORYAA までは、石川・富山・岐阜北部に見られ、当然相互関係を考えねばなるまいが、なにぶん地点数が少ない。石川に CYARARA があるほかは、ヤシラ類と地理的關係は見出しにくい。

さきにヤシラ類のラは音節数を調節するために添加されたものかも知れないと述べたが、この ZINZIRAGO の類、DONDORAGO の類も併せて考えると、なにか深い意味があるのかも知れない。ZINZIRAGO の類と DONDORAGO の類との関係は、よくわからないと言わざるをえない。

HIHIGO 以下 HUTAHIMAGO までは、139 図「ひまご」に現われる語形に、HI-あるいはそれに準ずる接頭辞がついて派生したものと思われる。西日本に分布するが、概して新しい発生のように見受けられる。ただ三重に1地点だけの HIHIGO は、古語「ひひこ」がヒコの意味のずれに伴って、曾孫の意味から玄孫の意味にずれてきたもの(の残存)とも考えられる。HYU(U)HYU(U)MAGO は、HYU(U)MAGO がもし HI-UMAGO であるとすれば、HI-HI-UMAGO>HI-HYU(U)MAGO とでもなってもらいたいところであるが、現実には仮説通りにはなっていない。HYUHYURAMAGO は宮崎南部に見られるが、HYU(U)HYU(U)MAGO と YASURAMAGO とが混交して誕生したものと考えられる。HYUUTANMAGO, HUUTANMAO は、天草から鹿児島西部にかけて見られる語形であるが、ここに入れるべきかどうか、確信はない。もっとも、付近に HYU(U)HYU(U)MAGO が多いことから、何か民間語源(後出ツルノマゴの類と比較せよ)が働いて生じたと見ることも、あながち無理ではあ

るまい。HUTAHIMAGO は、大分に見られる。ここ独自の発生であろう。

以上の 橙・赤・桃・草の符号を 与えた類を大観すると、赤の類がもっとも古いものを代表し（橙の中にもそれに準ずるものが含まれているかも知れない）、ヤサイ類はその変化、桃の類がこれにつき（桃の中ではヤシャ類が主流）、草の類がもっとも新しいものと考えられる。草の類は各地で独自に発生しうる性質も持っている。橙の類の位置づけはよくわからないが（ことに YAHIKO・YAH(I)MAGO）、概して草の類にならぶものであることは言えると思う。YAHIKO・YAH(I)MAGO の類は、ヤシャ類とヤシャラ類が過去において衝突し、その混乱を解消するために生じた語形だったかも知れない。

後部要素を中心に考えると、東日本の-KO~-GO の類が古く、西日本の-MAGO の類が新しく、その接触地帯では、-KO・-GO・-MAGO の接尾しない現象が現われている、ということになる。

CURUNOKO 以下 CURUNOMAGO までは、近畿から西方に延びる分布を示し、新しい語類と考えられる。西方へは、海上交通によって運ばれたものであろうか。『新勅撰和歌集』に「鶴の子」ということばがあるようだが、玄孫を意味するかどうかよくわからない。『大日本国語辞典』には古写本の節用集に、雲孫の意味でツルノコとあると出ているが、この雲孫はかならずしも八代の孫の意味ではなかったかも知れない。『全浙兵制考附日本風土記』(15~16C?)には玄孫としてツル(ノ)マゴとある。ツルの部分は、『和訓栞』にもあるように蔓の意味があったかも知れない。ただし 7309.37 では、玄孫の次をカメノマゴと言う注記があり、7313.34 では鶴の語源意識があったと報告されている。なお、6455.31 では、玄孫の次をシャシャラマゴと言うとのこと。ここでも意味のずれが起こっている。

HIKIMAGA 以下 PISIMAA までは、すべて琉球列島に現われる表現である。ヒキ(ウ)マゴにあたる表現である。

MATAHIKO 以下 MATAMAGA までは、語頭に MATA- のつく類である。最初の 3 者は、当然曾孫の延長であろう。MATAHIKO は福井、MATAHIMAGO は岐阜、MATAHYUUMAGO は岡山に見られる。MATAKO は福井であるが

(コ—マゴ)—ヒコ—マタコ

という系列も（付近にマタヒコがあればなおさら）、あって不自然というわけではない。MATAMAGO は南九州と徳島に見られる。この語形は 139 図にもそのまま現われるが、

(コ—マゴ)—ヒマゴ—マタマゴ

という系列もあってよさそうである。南九州のものについては、この系列の発生には、奄美にある曾孫の意味のマタマゴが関係していよう。徳島のものは、隣接地点(7408.25)では曾孫をマタマゴと言うから、複雑な葛藤がありそうである。ちなみに 7408.25 の系列を示せば、

(コ—マゴ)—マタマゴ—ヒマゴ

である。MATAMAGA は奄美大島。この地点では曾孫を HIMAGA と言う。新来の語形が在来の同義語を次の意味に追放した例に加えられよう。

HIKO 以下 HYUUMAGO までも、MATAMAGO、MATAMAGA などと同様、139 図に一致する見出しが現われる。これらの現われる地点はすべて 139 図では HI(I)MAGO となっており、HIKO などは MAGO・HI(I)MAGO に圧迫されて、ついに孫の位置から曾孫の位置にまで転落したと見ることができる。HIKOMAGO は 6 地点認められるが、すべて

(コ—マゴ)—ヒコ—ヒコマゴ

という系列であり、一種の原理を見出しうる。HWIKOMAGO(山形)、SIKOMAGO(富山)も、まったく平行的に考えうる。地域はすべてまとまりを持たず、各地で独自に発生したと考えてよかろう。ヒコマゴのずれである。それかあらぬか、3752.53 では玄孫の次をヤシャゴと言うとの注記があった。

HI(I)MAGO は全国に 17 地点見られる。しかし 139 図と 1 地点ずつつき合わせればわかるように、以下の 5 種類に分類できる。

- (A) (コ—マゴ)—ヒコ—ヒマゴ(8 地点)
- (B) (コ—マゴ)—ヒコマゴ—ヒマゴ(5 地点)
- (C) (コ—マゴ)—ヒコ—ウマゴ—ヒマゴ(1 地点)
- (D) (コ—マゴ)—マタマゴ—ヒマゴ(1 地点)
- (E) (コ—マゴ)—ヒマゴ—ヒマゴ(2 地点)

(A)は、それなりに内部に秩序がある。(B)(C)は系列としては理屈が合わないが、(A)(D)とともに、曾孫を意味する新来のヒマゴが、在来の語形が強固なために、次の意味のわくに仮に定着したものと考えてよかろう。(E)は一見曾孫と玄孫とが語によって区別されていないように思われるが、カードにあたると、6369.37、6521.20 ともに

曾孫はヒマゴ、玄孫はヒイマゴとあって、実際は区別のあることがわかる。そうするとヒイマゴとは実はヒマゴだという考えが成り立ち、ここでは、HI-とHII-とを区別すべきだった、ということになるかも知れない。ちなみに、ここで述べたうち、HI(I)MAGO 17地点のうち4599.31, 5536.78, 5615.61, 6368.60, 6538.02, 6594.19以外の11地点はヒイマゴであった。なおここで139図におけるHIMAGOとHIIMAGOについて概略を述べれば、前者は近畿(兵庫西半を除く)・高知・鹿児島を中心とする地域に分布し、他はほとんどHII-MAGOと言うことができようか。東日本ではHIMAGOとHIIMAGOが混在している。1音節語の母音の長さについては110図が参考となるが、MEとMEEの分布関係はHIとHIIとの分布関係と一致しない。むしろ逆と言ってもいいくらいである。

HIMAGAは奄美に1地点、新来の語形が在来のMATAMAGAが強固なために、正当な位置を得られなかったものと見るべきであろう。HYUUMAGOは3地点であるが、139図と対比すればわかるように、新来の語形HI(I)MAGOが在来のものを蹴落とした例に分類すべきである。

GOKOは石川・富山と八丈にのみ見られる語形である。139図と比較すればわかるように、明らかに

シ(四)コ——ゴ(五)コ

という語源意識が働いて生じた語形である。もっとも八丈のものは[gogo]であって、調査者は言い違いかも知れないと注記している。SOHIMAGOは佐賀に現われるが、この地点での独自の発生と考えられる。

その他としたものは全国で12地点であった。ダイマゴ(3761.22)、メンメエゴ(6650.70)、カナマンゴ(7326.41)、サジュスマゴ(7392.94)、ヨコズツマゴ(8325.03)、コッパマゴ(8334.25)、ドッチマゴ(2072.20)、ミイマア(2076.99)など珍しいものほかは、ヒコノコ・ヒマゴノコなどであった。ヨコズツマゴ[jokozutumago]のズツの部分、さきに触れた『新撰字鏡』の豆々子と関係があらうか。ドッチマゴについてはすでに触れたところがあった。

無答もかなり多い。曾孫・玄孫の次は来孫・昆孫・仍孫・雲孫とでも続くのであろうが、これらを順次たずねていけば当然無答が圧倒的に多くなろう。玄孫においてすでにその傾向が現われたと見るべきである。

## 141. おじいさん(祖父)

139図以下142図は、相互に、特にこの地図は142図(曾祖父)との関係が深いので、図・解説とも比較されたい。なお、141図・142図の2項目に関しては、呼び名でなく名称を求めていることに注意されたい。親族語彙に関する項目はごくわずかであって、せめて親・父・祖母などの項目も比較のため加えるべきだったかといまは思うが、いたしかたがない。

この図に関しては、ZII~OZII+SAN~SAMA~CYAN~CYAMAという形式を標準語形と認めて、〈併用処理の原則〉を適用した。

符号の与え方については、次のような原則を考えた。完全に一貫しているとはいえないが、色で大きな分類を、形で接尾形式を、同形内の変種でそれ以下の区別を示した。なお、ZIとZIIの区別は、別見出しとして立てることはしなかった。142図との関連を考えたためである。

色としては、一般語形に草を、MAGO-という接頭辞のつくものに橙を、その他に紺を与えた。

形としては、四角を接尾形式のつかないものに、三角を-SAMAに、円を-SANに、水滴形を-CYANにあてるなどした。その他、短いひげ(シッポ)の出ている符号はO-を接頭するものなど。

まず、色の区別によって図示した大分類についてみると、MAGO-類が主として東日本の海岸部に分布して、中央を発生し過去のある時代に伝播したのように見える。各地で例外的な独自発生があったにしても、ほとんどのものは相互に関連があったに違いない。139図・140図の解説で触れたように、マゴという語は東日本より西日本において有勢であると思われるのに、やや不思議な現象である。MAGO-という接頭辞は、老爺と祖父とを区別するために新しく添加されたものかと思われるが、なお、142図の解説に触れるところがある。MAGO-を除いた部分については、他の草の符号を与えたものと比較しつつ考えればよかろう。

MAGO-類のうち、最後のものはおもしろい命名である。日本海岸(隠岐にも)に、12か所所在する。

マゴオヤ——(オヤ——コ——マゴ)

という系列を作るのであろう。この語が祖父に限られるのか、祖母にも使えるのかは不明である。

紺の符号を与えたものを考察しよう。OYAZIZI (岩手)、OZIOYA(青森・新潟)は、語構成は逆順になっているが発想は同じある。オヤジは一般に父のことと思われやすいが、何か関係があるろうか。UBAZIZI は伊豆大島。BUYA, BUYAA, ABUZI, UBUZA, BUCCII, ACCI, ASA は、すべて八重山である。BUYA, BUYAA は大オヤにあたる語形であろう。UBUZA, BUCCII は、それぞれ大-ASA, 大-ACCI であろうか。OESAN (実際には[oisan]を含む) は、新潟・福井・大分に見られる。MAMA, AMA, ANMA は、すべて岩手の東北部に現われる(142図と比較せよ)。SYU-U 以下 TANMEE までは、すべて琉球列島に現われる表現である。『沖縄語辞典』と比較すると、sjuu は父<平民語>であるといひ、ʔuhusjuu は父方の一番上の伯父<平民語>であるという。また ʔnmee は祖母<土族語>だともある。祖父を示すことばとしては、tanmee<土族語>, ʔusjumee<平民語>, puupuu<農村語>とある。琉球語の親族語彙の成立の複雑さを思わせる。これらの語のうち、HU-, UPU-, PU-は大の意味、U-は大ないし御の意味、-MEE は尊敬の接尾語と考えられる(ʔajaamee<奥様>, ʔjacimee<坊っちゃん>など)。

最後の三つの見出しは、曾祖父を表わすかとも思われるものである。142図と比較すれば次の通り。

	141 図	142 図
6569.12	OOZISSAMA	無 答
6616.93	HIIOZII(SAN)	HIIOZII
6636.05	HIIOZII	SENZOSAN

6616.93のものは、調査時に確認したとあるから、臨時の誤解ではない。他の2地点の場合は、何らかの理由でずれが生じたのであろう。

無答は、質問の内容が玄孫と違って近親者であるせいとか、1地点(1893.01)のみであった(この地点142図でも無答)。

さて、草の符号にあたる諸語形(橙を与えたものの中核要素を含む)を見ると、O-の付かない形がまとまって分布していることがわかる。ZIの部分は当然父のチにあたり、それが有声化する原因としては前に何か(オホ?)が付いたことが考えられるが、分布の観点からは、現在のO-は語源的にはオホであっても、後に尊敬の接尾語として新しく添加されたものである可能性がある。国の両端で平行的にO-が脱落したと考えるより、妥当

な考えと思う。

次に、接頭語・接尾語を除いた部分が、ZIZI・ZIZZI・ZINZI・ZIZII・ZIIZIIのように疊語形式をとるかどうかの観点で見てもよい。繰り返しが主として現われる地域は、秋田・宮城・新潟(西部)・富山・石川・福井、島根東部から広島西部にかけて、九州西北部ということになるろうか。ZIZZIは新潟に1地点、ZINZIは秋田西南部から山形北部にかけて、および伊豆諸島・高知・五島である。草符号最後のZICCIの類をこれに加えるとすれば(2回目のZIが無声化したと見る)、福島東半がこれに加わる。領域が分断されているから、古いものの残存と言えるであろう。

次に、繰り返しのないもののうち-ZIN-の地域をさがしてみよう。宮崎がその中心である。接尾語としては、-CYA, -CYAN, -CAMA, -CANなどが有勢であるから、末尾の撥音と後続子音とは、当然関係があるとせねばならない。ZIN, OZINは九州に各1地点であるが、これはZISAN, OZISANのSAの脱落と見ることができるかも知れない。ZINMAは四国であるが、この撥音も後続子音の影響を考えるべきかも知れない。

次に、ZIとZIIの分布を見てみよう。この地図から十分にくみとすることはできないが、『日本言語地図資料』によって短母音の多く現われる地域をさがすと、北奥からまばらながら新潟・岐阜あたりまでと、島根東部から広島西部にかけて、および九州南半である。もっともこれらのうち、秋田に多いZICCYAやZIKKO、岐阜や長野のZISSAやZISSAMA、島根から広島にかけてのZICCANやOZICCANなど、促音を含む語形は、単純に短母音とすることはできないかも知れない。愛知のZISSAMAはZIISAMAの付近に、三重の神島のZICCYANはZIICYANのそばに、山陰の(O)ZICCYAN・(O)ZICCANは(O)ZIISANのそばに、九州でZICCYANはZIICYANの付近に分布すると見ることからである。

次に、おもな接尾語の分布を展望しよう。ただし非常に大まかであり、それぞれの分布はいりみだれ、ここに挙げる地域以外にその現象がないわけではないから、注意されたい。接尾語のないもの——青森、山梨・静岡・岐阜・北陸、南近畿から四国東半・山陰・西北九州。SAMA——岩手・秋田、福島南半、長野・岐阜・富山。CAMA——宮城。MA——岐阜北部。SAN——関東・中部地方南半・近畿以西。CAN——宮城・広島西部。

YAN—山梨西北部・大阪・小豆島・島根・九州北西部・宮崎北部。SA—秋田・新潟・岐阜・富山・石川。混在しながらもたしかに地域的特色が認められる。ただし歴史をたどるためには、まだ十分な材料とは言い難いようである。

最後に、地域の限られた見出しの分布する地域を指摘しておこう。ZIZIIME—八丈。ZINZYU—山形の飛鳥。ONZYU—宮崎・鹿児島。ZYOSAN—宮崎南部。SI(I)SAMA—岩手。ZIIKAMA—島根東部。ZINA—秋田東北部。ZIHAN—淡路。OZIIHAN—香川。ZIISYAN—大分。OZISYAN—佐賀。OZZYAN—大阪を中心に。ONZYAN—京都・淡路。OZYAN—奈良。ZI(I)KO, ZIKKO, MAGOZIKO—秋田を中心に。ZICCI(SA-N~YAN)—福島東半ほか岩手・秋田。

## 142. ひいおじいさん(曾祖父)

この地図を理解するためには、139図ないし141図、とくに139図「ひまご」、141図「おじいさん」、およびそれぞれ解説と比較することが必要となる。141図・142図の2項目に関しては、呼び名でなく名称を求めていることに注意されたい。

この地図は、139図ないし141図と比較して、第1に見出しの数が多。これは他図との比較のために、あえて統合をひかえたためでもあった。第2に各語類の領域がはっきりしていない。これは、この項目の使用率が他に比して低いことと関係があるかも知れない。

なお、この図ではHI(I)+ZI(I)~OZI(I)+SA-N~SAMA~CYAN~CYAMAと考うる形式、具体的には、HI(I)ZI(I)SAN・HI(I)ZI(I)SAMA・HI(I)ZIICYAN・HI(I)OZI(I)SANなどを標準語形と認めて、<併用処理の原則>を適用した。そのほかこの地図では、たとえばOOOZIISANとOZIIISANとの併用の地点では、両者の併用とせず、前者の単用として地図に示した。このような特別の扱いをしたのは、OZIIISANのようないわば汎称は、他の1語形しか報告のなかった地点においても、実は全国的に使われることがありうると考えたからである。

さて、符号の決定にあたっては、次の原則によった。

イ. 色について(前部要素に注目した)

緑—HI(I)-またはそれに準ずるもの。

茶—HIKO-またはそれに準ずるもの。

紺の一部—MATA-, OYA-など。

空—OO-, OOKII, UHU-など。

桃—TOSIYORI-など。

赤—HURU-, HURUI-およびHINE-など。

草・橙—祖父をあらわす語形と同じもの、およびそれに準ずるもの。

紺の一部—その他。

ロ. 基本形について

原則として141図と比較できるようにした。もっとも緑の符号の一部はそのままではあまりにも見にくくなるので、極小符号その他に変更した場合がある。

ハ. 付加要素について

HYU(U)などについては139図と共通の方針によった。空符号・赤符号の付点は、前部要素が形容詞形をとるものを示す。赤符号のうち横線のかかるものは前部要素がHINE-のもの。

以上を考慮しつつ全国を大観すれば、全国的に緑の類が多く、次いで空の類(近畿や中国西半に多いが、全国的に点在する)、赤の類(西日本はHURU-・HURUI-であり、関東・中部にかけてはHINE-)、桃の類(東北から東関東にかけて、鹿児島にも)、茶の類(東日本の日本海岸および東海地方)、橙の類(茶の類とほぼ領域を重ねる)が目立ち、草の類はわずか、ということになるか。

これらのうち、空の類は近畿を中心に発達したものが主流を占めると考えられるが、他方、各地で独自に発生したものもあろう。赤や桃の類は、それぞれの地域で発達したものではなかろうか。茶と橙の類については、141図(祖父)と比較すればわかるように、両図はたしかに関連がある。茶と橙との関係についてはあとで触れる。

見出しを追いつつ、注意すべき点を指摘していこう。

まず緑の類から。まず、ヒイにあたる部分がHI~HWI-のように短母音であるものはこの地図からはわからないが、まとまとった地域を形成するのは高知と南九州だけで、他は東北地方に10地点、近畿地方に3地点、西北九州に4地点点在する。

以下見出しごとに問題点をさぐってみる。HWIIZIIは岩手。HIONZYUは鹿児島。桃のTOSIONZYU・TOSINAKAONZYUと比較される。SIIZIISAMA

は長野 (SIIZIISAN は長野と千葉)。HIZINMA は高知東部。HEEZIISAN は島根東部。HINZIISAN 兵庫・岡山県境付近。HIZIYA 新潟。HIIZIICO 岩手。実際にはヒイジゴと表記されている。HIIZICISAN 福島。付近に TOSIYORIZICCI がある。OHIIZINCYAMA 以下 OPPI までは、宮城北半にかたまっている独特の表現である。HI(I)-という接続辞の独立性が、この地域では特に強いのであろうか。なお、4744.10 の OPPIISAN, 4723.14, 4726.80, 4736.63 の OPPISAN, 4745.27 の OPPII については、それぞれの語が、曾祖母についても使えるものだと注記があった。注記のなかった地点についても、同様のことがある可能性がある。なお、茶の類の OHIKOSAN も関係がある。

HYU(U)ZI(I) 以下 HYOOZIISAN までの前部要素については、特に 139 図「ひまご」と比較したい。ほとんど一致するが、広島西半では、この 142 図の方にこの類が現われることが多いようである。曾孫の場合は HI-UMAGO を源と考えたが、平行的に考えれば HI-OZIISAN などを源とせねばならない (141 図における OZIISAN などの分布を見よ)。しかし、曾孫でまず HYU(U)-などの接頭辞が成立し、それが曾祖父に転用されたという考え方も成り立つ。もしそうだとすれば、広島西半などに見られる両図間の不均衡は、曾孫のほうで早く HYU(U) > HI(I) の回帰(標準語の影響による)が起こったためと解釈される。HYU(U)ZYOSAN は宮崎南部。甕島の HUU- は 139 図の解説で触れたように、やはりこの類に加えたほうがよかろう。KYU-UZIISAN (キュージイサン) は、栃木東端である。139 図における KYUUMAGO (cju: mago) は鹿児島であった。この栃木のものと比較すべきものとして福島 (5702.07) に HYU(U)ZI(I)SAN がある。東国のものはこの地域で独自に発生したものと考えるのがよかろう。HIYOZIISAN 香川、HYOOZIISAN 島根であるが、後者は実際の表記 (ヒョオズウサン) からみると、HYOO-ZIISAN ではなく、すくなくとも現在は、HYOO-ZIISAN のようである。HIOTOOSAN はおもしろい表現である。ただしこの地点 (6511.49) では祖父は OZIISAN だから、何らかの混線があったのかも知れない。茶の符号の中の HIKO'OYA などとも比較すべき表現である。

茶の類について。SIKOZI 青森、HIKONZII 伊豆

大島、HIKOMAGONOZISAMA 下北半島、HWIKOZISAMA 山形、SIKOZISAMA 岩手であった。実際の表記は [çik'koʒisama] であったが、曾孫の SIKOMAGO の中に入ったシッコマゴと比較される。HIMAGOZISAN 福井 (6513.51)。この地点は 139 図 HIKO だから、HIKOZISAN でもよかつたろうにと思われる。SIKOZISA 新潟、HIKOMAGOZISA 新潟、SIKOZIKO 青森。HIKO'OYA は北海道・秋田・新潟であり、SIKO'OYA は青森であった。このうち北海道・秋田のものを除けば 141 図には MAGO'OYA が現われるから

ヒコオヤ——マゴオヤ——(オヤ—コ)……

という系列のあることがわかる。OHIKOSAN 岩手南部。特に曾祖母にも使えるという注記はなかったが、南接する緑の類の OPPI(I)SAN などと発想を同じくするものであろう。

紺(の一部)の類について。この中には、いろいろなものが含まれている。HYUUMAGO 広島。この地点で祖父は OZIISAN であった。MATAZISAMA 山形、MATAOZISAN 鹿児島、MATAZIICAN 福岡。これら 3 者は祖父にあたる語形に MATA を接頭したものであるが、鹿児島で 140 図の MATA- と関係がありそうに見えるほか、山形・福岡では 139 図・140 図の MATA- と地理的に関係がなさそうに見える。OYAZIISAN 隠岐、OYAZIISAA 山口。祖父を表わす語形に OYA- が接頭したものであろう。141 図にも OYAZIZI・OZIOYA という語形の現われたことは、その図の解説で述べた。OYA という要素は隠岐においては MAGO'OYA として祖父の地図に現われ、本図には別に、茶の類の中に HIKO'OYA・SIKO'OYA があるが、関係は不明である。OZIOZI 福井。祖父にあたる語形の繰り返しであるが、老祖父とでもいう意味かも知れない。

空の類について。この類の中には具体的には次のようなものが含まれているので注意されたい。

[eʔe:odʒi:san] (5772.60) → OOKHIOZIISAN  
 [eʔe:dʒittʃisama] (5731.29) → OOKHIZICISAMA  
 [dekadʒidʒi] (5516.59) → OOZI(I)ZI  
 [dekaidʒi:san] (4599.31)  
 [ʔutokaʒisan] (8342.69) } → OOKHIZI(I)SAN

ONZI 秋田。実際の表記は [ondzi] であった。141 図では [ōdʒi] などは OZI に統合したから、ここでも同様

に扱うべきだったかとも思われるが、この地点の祖父は [dzi] だったので、ここに配列した。UUOZI 佐賀、UUZI(I)SAN 佐賀・熊本・大分・宮崎、UUZIYAN 宮崎。

UIBUYA 以下は琉球列島に現われる。語頭が「大」にあたりそうもないものについて説明する。UIBUYA <BUYA—カッコ内は同じ地点における祖父を表わす表現、以下同じ>は、「古い」BUYA または「上」BUYA である可能性がある。前者であれば桃の類とすべきである。HWAAHUZI <TANMEE 1211.69, 1221.47, USUMEE 1261.16>は『沖縄語辞典』によれば祖父母を意味するという。「大」を意味する接頭辞を含んでいるとも見えないが、次の見出しとの比較のため、ここに配列した。UMIAZA <AZA>の UMI-の語源は「思い」であり敬愛を意味する(『沖縄語辞典』)。GABASYUU <SYUU>の GABA は、『宮古諸島学術調査研究報告言語・文学編』によれば「古い」という意味らしい。したがって赤または桃の類に分類すべきだったのであろう。HAAKUUNMEE <NNMEE>の HAAKUUN-は「百」であろう。調査者もそう注記している。実際の表記は [ha : ku : ?mme : ] < [ ?mme : ] >であった。

桃の類について。TOSYOOZIISAN・TOSYOZII・TOSYOZIIYA・OOTOSYO 千葉、TOSIONZYO・TOSINAKAONZYO 鹿児島、TOSIZIYAN 長崎。

赤の類について。HURUIZIISAN という見出しの中には 7330.31 の [huruka<sup>d</sup>si : san] も含まれている。

草の類について。これらはすべて祖父と曾祖父とを表現しわけない類と考えられる。はたして、地点ごとに対照すると、141 図・142 図に同一符号の現われるところが多い。差のある例は次の通り。

ZINZI <ZII, ZIKKO 3731.61, 3782.38>

ZIIZII <OZI, OZIYAN 6580.06>

以上3地点については、紺の符号の OZIOZI のところで述べたように、老祖父と祖父が言い分けられているものと見るべきかも知れない。ただし、地理的な裏づけはない。

ZI(I)SAMA <ZICCA 4701.14, ZIICYAN 6385.10>

OZIISAN <ZIISAN 6534.37, OZII・OZII-CYAN 6542.27>

6534.37 での例は、O-によって「大」などの意味が担われ

ているのかも知れない。6542.27 という地点では、別に祖父について OZIISAN という答えもあった。ただし敬称であるとの注記があったので、141 図には出ていない。ほかに、

OZINCAN <OZIZI 4750.76>

ZIKKO <ZI 3711.92>

なお、この類の取り扱いについては、この解説冒頭(第3段落の後半)に触れたところがある。

橙の類について。草の類に準じて、これらも凡例だけで判断すれば、祖父と曾祖父とを表現しわけない類のように思われる。しかし案に相違して、全地点(30地点)で祖父と曾祖父とが区別されている。このことはマゴジイサンをめぐって、

A. ヒコジイサン—マゴジイサン—(オヤ—コ)……

B. マゴジイサン—ジイサン—(オヤ—コ)……の2系列のあることを示し、実際にはこのほか

ヒコジイサン—ジイサン—(オヤ—コ)……の系列があるが、これはAないしはBの亜種と見ることができよう。Aの亜種と考えるのは、マゴジイサンの部分が標準語形に変じたとみるからであり、Bの亜種と考えるのは、139 図の説明で述べたように、マゴとかヒコとかが同義であったという推定にもとづく。おそらく前者であろう。A・Bをさらに整理すれば、

A. ヒコ—マゴ—(オヤ—コ—マゴ)—ヒコ

B. マゴ—ジイ—(オヤ—コ—マゴ)

となり、両系列とも左右相称となつてすじが通っている。Aの系列はオヤ—コの部分の中核になっており(さらに言えばオヤ—コの中に自己を位置づけるか)、Bの系列はジイ—オヤ—コの部分の中核になっている系列と見ることができる。

両者は当然関係があるが、いずれが古いタイプか。地理的分布からはどうも決しにくい状況である。系列の比較からみて、(甲)ジイサンが新しく発展してきて、在来のマゴジイサンの位置を占め、そのためにマゴジイサンは位置をずらした—すなわちBが新しい、とも考えられるが、(乙)在来のジイサンが、老翁との区別のためもとは曾祖父の意味だったマゴジイサンに変じたため、自動的に曾祖父はヒコジイサンとなった—すなわちAが新しいとも考えられ、いずれとも決しにくい。139 図の解説で述べたマゴという形式はどれも新しそうだという考え方も、判定に役立ちそうにない。Aのタイプを自己



中心型親族構造と見、それに対してBのタイプを家族構成世代型親族構造（祖父が孫に向かって自分の子である孫の親のことをオトオサンと呼ぶ構造・自分の嫁でなく自分の子の嫁であるにもかかわらずヨメと呼ぶ構造）とみることによってなんらかの糸口を見出すことができるかも知れないが、さらに考えたい問題である。

紺(の一部)の類について。MAMA から ANMA までは、すべて祖父の場合と同様、岩手北部に現われる表現である。両者を比較されたい。

HHHHIIZIISAN 以下 YASYARAZIISAN までは、一見、高祖父かとも思われる表現である。141 図と対照すると、

	曾 祖 父	祖 父
7302.66	} HHHIIZIISAN	ZIISAN
7323.84		
7351.68	HHHHIIZISA	OZISAN
7329.39	} HYUUZIIISAN YASYARAZIISAN }	} OZIISAN

となっていて、前段で触れた

ヒコジイサン——ジイサン——(オヤ——コ)……の系列と似ているが、地域も違うし、なぜこのようなことが起こるのか、よくわからない。

HACINOZII は三重南部。不明の語形である。入を意味するのであろうか。NOONO, NONO(SAN)は千葉である。生存する曾祖父についても使えるのか、曾祖父以外(たとえば曾祖母・高祖父母など)にも使えるのかかわからない。HAGU は、青森・岩手県境にかたまわって現われる。かなり固い独特の系列があるように思われるが、音声[hagw]であることから、さきに空の類のところで説明した HAAKUUNMEE の前部要素と何か関係があるのかも知れない。

その他としたものうち興味を持たれるものを列記すれば、次の通り。[sẽzo]6428.13, [sẽzosaN]6636.05, [sẽso]6349.80, [nikaizi:jaN]6542.71, [tʃiŋkodʒi:si]5507.20, [ʔunnadʒi:saN]8305.40。大部分を占めるのはジサマンウエンジサマとか、ジイサンノオヤ、ジヤンノトッチャアなどで、無答に準じてもいいものであった。現に無答とされているものの中にも、この種の答えならあったという地点もあったかも知れない。それならばこの地図で空の類・赤の類としたものもそれに類する、という考え方もあろうが、これらはわずかながら地域的特性が認められ、同一視することはできない。草の

類などは多少性質が違うが、あるいは無答なみに扱ってもよかつたものだったかも知れない。

無答は、曾孫に比較して玄孫の場合に多かつたのと同様、この142図では141図「祖父」の場合よりも多くなっている。

### 143. たこ(凧)

子どもの遊び道具としての「たこ」の名称を求めた。特殊な形状に対する特別の名称はなるべく除外して、報告があっても『日本言語地図資料』にゆずることにしたが、全国各地の「たこ」は実は種類も多く、形状のほか、目的・季節などの点からも、ひとしなみに地図化することには問題がある。各調査者たちも、この質問文と絵による調査法では、苦勞した場合があつたかも知れない。各地からの報告を用いて、そういう詳細についての情報を総括することは、いま難しい。わずかに1地点ではあるが3745.62(岩手県岩手郡岩手町川口字水無)では、この遊び道具を用いるものはない、との注記があつた。「たこをあげる」の動詞について、いまは調べておけばよかつたとは思ふが、調査しなかつた。

凡例を見ればわかるように、全国の「たこ」の異称はいくつかの類にわけられる。

空の符号はタコ類であり、凡例でその次に並べた紺は、トビ・タカ・タツの類である。以下赤はイカ類、茶はヨオズ類、緑はハタ類と言えよう。最後の紺の符号を与えた諸語形は、その他とも言うべきものである。

タコの類の中では TAKO がもっとも多く、しかも全国で使われている。第2音節の有声化したものも、ここに含めてある。北海道に2地点、茨城・千葉の県境付近に4地点[tano]があつた。また、千葉南部と伊豆大島に[taho]がある。TAKOO は淡路・北九州・天草に各1地点のほか、奄美・沖縄に各1地点である。TAKU は奄美・沖縄のみ、うち沖縄島北部には2地点[taʔu]という地点があつた。TAKUU は沖縄のみ、うち1241.49は[t'uk'u:]であつたが、便宜上ここに含めた。TAKKO は岩手と鳥取とに各1地点である。TAKOE は青森に1地点、実際の音声は[tagoe]であつた。

以上のものは、最後のものがなにかを接尾している疑いがあるほか、すべて地域的な音変種と見ることができよう。

KAKUDAKO 以下 BUUBUUDAKO までは、

タコに何かが前接している類である。形状その他について注記のある場合は、以下に示す。KAKUDAKO は徳島に1地点である。TAKO との併用であるが、注記によれば TAKO は「やっこだこ」をさすとあった。YAKKODAKO は岩手・静岡・京都に各1地点であった。岩手のものには「ヤッコダコは奴胤、テンバタは古い表現」との注記があった。静岡のものには「ヤッコダコは質問に対する回答、タコは自然会話中から採用したもの」との注記があった。京都のものには「イカは現在ほとんど使わない古い表現、タコは四角いもの、ヤッコダコは奴胤」とあった。YAKKODAKO の見出しは TAKO に含めて立てなくてもよかったかも知れなかった。YAKKO は徳島に3地点、さきに述べた KAKUDAKO と比較すべきものであろう。TAKO の部分がないが、ここに並べた。KAMIDAKO は広島に1地点。HARIDAKO は熊本南半に6地点かたまっている。ハッダコ・ハイダコ・ハルダコ・ハッジャコをまとめたものである。軟体動物と区別するため紙張りであることを強調した命名であろうか。以下にも、蛸と区別しようとする意識が働いているという点で、同種のものが、含まれている可能性がある。HANDAKO は三重に1地点である。PAITAKU は奄美の与論島に1地点、前述の HARIDAKO の変種であろう。MATTAKU は主として沖縄南部で使われている。マタクウ・マンタクウ・マツタクなどが含まれている。MATTARAA は沖縄南部に1地点。前項の変種であろう。BUUBUUDAKU も沖縄を中心に使われている。ブブダク・ブブンダク・ブウブウダクウ・ブンブンダクなどをまとめたものである。

TUBIDAKU は沖縄の久米島に1地点であるが、次の TOBI との関係を示すために紺の符号を与えた。

TOBI (トビ・トオビ・トンビ)は岩手に3地点、岡山南岸に2地点、五島・天草に各1地点で、ややまとまった地域を指摘できる。TUPIDAMA は八重山に1地点で、関連させることができるかどうかかわからないが、次の与那国の TAGANTUBYA をも含めて、鳥のとび(紙鳶という漢語がある)や、動詞「飛ぶ」との関係を考えねばなるまい。TAGANTUBYA は、以下のタカ類とも関係がある。

TAKA は九州西岸にややまとまっている(TAKAA は天草に1地点)ほか、福島・茨城の県境にも2地点認められる。HARIDAKA (実際の表記はハッダカ)は熊本に1地点、BUUBUUDAKA (ブウブウタカ、ブ

ウブウダアカアを含む)は沖縄南部に4地点であった。このタカ類は、HARIDAKA と BUUBUUDAKA については、タコ類に平行的な語形を持つ点があるにせよ、鳥のたかが意識されているのではあるまいか。タケは福島・岐阜・愛媛に発見される。タコからの変化であろうか。

TACU・TAACU・TAACI・TAT は、熊本に卓越する表現である。TAKO からの変化かとも思われるが、龍(たつ)の連想があるのであろうか。HARIDAKO・HARIDAKA と平行的に、このタツの類にも HARIDACU (実際の表記はハッダツ)が1地点見られた。

イカの類として、凡例で赤符号を与えたものの中には、IKANOBORI のように -NOBORI の部分を持つものが含まれ、NOBORI 以下 TAKANOBORI までは、イカの類とすることに問題のありそうな見出しもある。しかし、これらをイカ類に分類すると分布領域がはっきりし、新しくノボリ類を立てると分布領域がはっきりしない点を考慮して、赤を与えることとした。

IKANOBORI は、岐阜から福井にかけて(三重にもある)、さらに近畿西部から中国地方にかけて見られるとともに、大分にも現われる。イカ類の主流である IKA によって領域を分断されているところから、この類の中では古いものと推定される。IKANBO(O)RI は、岡山・広島県境付近にまとまって現われる。イカンボオル(6453.64)も含んでいるが、前項の変形であろう。IKANBO(O)も同じ地域に見られる。岐阜北部にも実際の発音はイッカンボという表現が見られるが、これも IKANOBORI と関係が深かろう(つぎに述べる YOOKANBOO とも比較すべきである)。兵庫の IKABON も同様のものであろう。岡山の IKANBEE も同じである(これもつぎに述べる YO(O)KANBE(E)と比較したい)。

YOOKANBOO は門司に1地点見られるものであり、YO(O)KANBE(E)は瀬戸内海沿岸から九州にかけて見られる表現である。YO(O)KA の部分がはたしてイカにあたるかどうかよくわからないが、門司のものと島原のもの以外はイカ類に地域を接しているので、赤符号とした。I>YO(O)の変化があったとすれば、その変化には当然この地図で茶を与えたヨオズ類との関連を考えねばなるまい。なお、6492.11, 6580.06 では YO(O)KANBE(E)は奴だこであるとし、6489.01 で

はその語形を特に人の形をしたものに言うとの注記があった。

NOBORI は、概して前述の IKANOBORI に接して各地に点在している。大阪南部と大分南部にややまとまった領域が認められるが、それぞれ岸和田藩や佐伯藩の領域と関係があろうか。IKANOBORI を生んだ古い語形と考えるより、IKANOBORI から生じたものとする方が穏当であろう。KAKUNOBORI は徳島に1地点、YAKKO との併用で現われる。TAKONOBORI は兵庫に1地点、TAKANOBORI は三重・兵庫・大分に各1地点である。前者は TAKO と (IKA)NOBORI との混交であろうか。後者は、どれも付近に TAKA の地点が認められないので、NOBORI にタカ(高~鷹)が接して、単なるのほり(幟)と区別すべく生じた語形と考えるべきものかも知れない。

IKA は IKANOBORI から発展したものかと思われるが、近畿を中核として、東西に進展したと見える分布を示している。[ika, eka, ega] などの音変種を含んでいる。IIKA は滋賀・京都・奈良に計4地点現われる。IKAGO は新潟に1地点である。IKADAKO は TAKOIKA とともに、IKA と TAKO との融合形であろう。前者は新潟・能登・兵庫に、後者は富山・京都に各1地点現われる。これらのうち4678.71では IKADAKO は尾が長いかの形をしたものとの注記があった。両語形の接触地点で単に融合したとみるより、何か特別のタコをさすために生じた語形と考えたほうがいいのかも知れない。IKANDA は和歌山に1地点、IKADAKO の KO が分離したものとして扱ってみたが、あるいは IKA と HATA との融合形かも知れない。SYOOZIKA は京都のみ、四角い型のものとの注記があった。同地点に TAMOTOIKA があるが、これは奴だこだという。ON' IKA は滋賀であるが、これも奴だこだと注記してあった。BUNBUIKA は佐渡、タコ類タカ類における BUUBUU-などを接頭するものはすべて沖縄だけであったが、発想を同じくする命名であろう。

「たこ」の異称の歴史を考えるにあたっては、「たこあげ」という行為の伝承(もしこの行為が古来からのものでないとすれば、かならずや行為の伝播があったはずである)との関連を考えねばならぬことは当然であるが、異称の地理的分布という観点からは、イカ類はタコ類より新しいと考えるのが妥当であろう。

茶の符号を与えたヨオズ類は、広島・山口を中心として、かなり明瞭な領域が認められる。九州西北部にもこの類と見られる一群がある。岡山・広島県境付近でイカ類の領域と接しているにもかかわらず、併用地点がほとんどないのは特徴的である。『全国方言辞典』によればヨオズには春風(または雨)の意味があるらしいが、地域的にはこの「たこ」の意味のヨオズとはほとんど重ならない。たこを意味する中国語に鶴子があるらしいが、関連があると思われる。YOOZUDAKO は島根・広島に各1地点、6367.09では YOOZUDAKO は奴だこのことだというが、YOOZU の語源と考える資料となるかも知れない(鶴子なるものの形は不明であるが、鳥の形をしているのではあるまいか)。YOOZU と TAKO との融合形とみる考え方もあろう。YOOZUN も YOODO も広島に各1地点、YOOGI は愛媛北端部に1地点であるが、ともに YOOZU の変種と見てよかろう。

YOOKYUU 以下 YOOCYO までは、九州西北部にかたまって分布する。上述のヨオズ類とどんな関連があるか不明である。YOOKYUU, YUUCYU は各1地点であった。

ハタの類は緑の符号で示した。東北地方(主として太平洋岸)・南近畿・九州西北部・奄美大島に見られる。もっとも、奄美大島のものは TOO だから(TOOBATA などとの関係を考えてみたのだが)、TAKO>TAO>TOO の変化を考えたらほうがいいのかも知れない。

HATA の中にはハダやハダアゲ(3744.33)が含まれている。国のいわば両端に分布するから、タコ類よりもいっそう古い表現であろう。HATAKO の中にはハダコと表記されているものも含まれている。岩手・秋田に見られるものであるが、HATA+KO であって、ハダゴがまったくないところから、HA+TAKO ではあるまい。TAKOBATA は、東北と九州のいずれにも現われる。在来の HATA と新来の TAKO との融合形と考えるのが普通であろうが、ハタ(旗)の一種であるところから特にタコ(蛸?)を接頭して生じた語形(そしてその TAKOBATA から TAKO が発生した)と考えることもできよう。TAKOBA は TAKOBATA の変種と見てよかろう。これは青森に限って見出され、実際の音声はほとんどタゴバであった。TAKABATA は九州(福岡)にのみ現われる。付近に TAKA が見あたらないところから、TAKA と HATA との融合形と断することはできない。ハタ(旗)の一種としてタカ(高~鷹)を接

頭したものと考える方がいいのかも知れない。もしそうだとすると、天草などの TAKA も、もとは TAKA-BATA であったのではないかと、との考えが浮かんでくる。

以下は TE(N)- が語頭にくる類である。東北と南近畿とに認められる。TENBATA は、宮城を中心にまとまって分布する。テンバタ・テンバタ・テンバダなどを含んでいる。TEBATA は 2 地点、TENOBATA・TENNOBATA は各 1 地点であった。それぞれ TENBATA の変種と見てよからう。TAKOTENBATA は、TAKO と TENBATA との融合形であろう。2 地点に見られる。TEGOBATA 以下 TENGURUMATA までの諸語形は、TENBATA の変種とみるには、分布の点からも語形の点からもやや難点がある。TEGOBATA は山形に 4 地点(テゴバダである)、TENKOBATA は三重に 2 地点、KOBATA は山形に 10 地点、TENGO(O)BATA は青森・岩手県境に 7 地点、TENGO は宮城に 1 地点、TENGUBATA は岩手に 1 地点、山形に 2 地点、TENGURIBATA は和歌山に、TENGURUMATA は三重に各 1 地点である。

語形から見ると TENKOBATA と KOBATA、TENKOBATA と TENGO(O)BATA、TEGOBATA と TENGO(O)BATA との間に縁がありそうに見えるが、分布上からはそう見えない。TENKOBATA と KOBATA と TEGOBATA はお互いに遠く離れているし、TEGOBATA はこの地方で新しく発生したように見える。TEGOBATA が新しいものとすれば、TENGO(O)BATA とは地域も離れているし、無関係とせざるを得ない。TENGO(O)BATA と TENGO とでさえ、その地域はかなり離れている。TENGUBATA と TENGURIBATA との関係にしても同様である。

古きある時代に、東北地方と南近畿とを結ぶ地域に、TENKOBATA あるいは TENGO(O)BATA、もしくは TENGU(RI)BATA の類が広く分布していたのであろうか。あるいは東北地方と南近畿との間に、「たこ」という道具、あるいはたこあげという行為について、何か特殊な連絡があったのであろうか、なお考えるべき話題であろう。本集 149 図「かたぐるま」には、南近畿に TENGUBATA と TENGURUMATA が現われ、何らかの類音牽引・同音衝突(7504.64 熊野市木本町では完全な同音衝突)の現象が起こっているようである。

TO(O)BATA と TOOZINBATA (長崎に 1 地点)

は、九州に現われるものである。ハタの中の特殊なものとして、おそらく中国本土を意味するトオが接頭したものであろう。TEN~などの T- と TOO- の T-とは関係がなかろう。TOO については、TAKO からの音変化である可能性のあることをさきに述べた。

SURUMEBATA は岩手に 2 地点、GUNGUNBATA も岩手であった。3774.44 では、GUNGUNBATA (実際はグングンハタ)は長方形で大きく尾が 2 本のもの、SURUMEBATA は菱形で小さく尾が 1 本のものとの注記があった。TEKIPATA は宮城に 1 地点であった。被調査者はテンバタの訛かと付言したむね注記されているが、あるいは TENKOBATA などと比較すべきものかも知れない。

PIKIDAMA・PIKIDAN・PIKIDAA は、もっぱら八重山に現われる表現である。PIKI や DAMA(DAMA については TUPIDAMA という表現もあった)とは何か、よくわからないのは残念である。『八重山語彙』では、PIKIDA は「引き板の義なるべし」、MA は「愛称なり」とあるが、如何なものであろうか。

HUURYO(O) は福岡に 2 地点。漢語に由来するものと思われるが、よくわからない。風龍であろうか。NANBA(N) は、これも福岡に見られるものだが、隣接する TO(O)BATA と同一発想の命名であろう。NANBANBATA という表現は現在見られないが、以前は存在したのかも知れない。TENGASOO は京都北部に 1 地点、南近畿に見られた TENGURIBATA などと語頭部分は共通するが、関係は不明である。-SOO の部分には「たこ」を意味する漢語「風箏」などとの関係があるかも知れない。KABĪTULĪ は紙鳥を意味する。宮古諸島独特の表現であるが、漢語の紙鳥と同一発想なのはおもしろい。KABABAI・HAABUYAA は、ともに沖縄島南部に各 1 地点見られる。蝙蝠の名を流用したものではあるまいか。『沖縄語辞典』には蝙蝠のことを kaabujaa とある。KUMOME・KUMOAGE は宮崎南部に 2 地点、GAKU は大分に 2 地点、KOBURE は島原に 1 地点見られる特殊な表現である。それぞれ何か特別のたこの名称が一般称に流用されたものかも知れない。特に GAKU など。

最後に全体を総括的に見た上で、たこの異称の歴史をまとめてみよう。この遊び道具またはこの遊び動具を操る行為が全国に伝播していく歴史・経路が明らかでない現在、結論的な表現はさしひかえるべきかも知れない

が、もし国の中央から四周に、単純に物も名前も放射したと考えるならば、ハタ類>タコ類>イカ類の順序がもっとも穏当であろう。タツ類・ヨオズ類などは、地方独自の発生であろう。ハタ類の中心は単純なハタがもっとも古く(その時代には鱸ないしは鳳と旗とが分化していない?)、何らかが接頭する表現がそれに次ぎ、TAKOBATAからTAKOが生まれ、さらにIKANOBORI・IKAと続く順序となろうか。ただしTAKO>IKAなら自然であるが、TAKO>IKANOBORI>IKAはやや不自然である。TAKOBATA>TAKONOBORI>IKANOBORIと考えた方が自然かも知れない。もしこの考えを採るなら、TAKOBATA・TAKONOBORIがほとんど現存しないことについては、標準語のTAKOが非常に強力であったために、全国的に後部要素が撲滅されたと考えねばなるまい。明暦二年(1656)正月六日の禁令に、「江戸町中にて子供たこのほり堅あげさせ申間敷候」とあるそうである。たこをあげるの「あげる」にあたる動詞表現にも地域差のあることが、『物類称呼』以来指摘されてきた。イカノボリなどの後部要素を考えるにあたって参考にするべきではあろうと思うが、いま材料が不足しているのは残念である。

#### 144. たけうま(竹馬)

「たけうま」を表わす方言形は、そのほとんどが前後二つの部分から成り立っており、前部分、後部分それぞれの内部において、独自の分布領域を持つ場合が多く認められる。そこで、それらの関係を、符号の色と形とで示すより工夫した。前部分の共通性を色で示し、タケ類に草、タカ類に空、キ類に緑、サギ類に橙、サンギ類に赤、ニキ類に茶、アシ類に紺をそれぞれ与えた。後部分の区別は符号の形を以って示した。ウマ類は線符号、アシ類は円形符号等々。なお、東北地方の語中の無声子音の有声化のように、対応関係の明らかなものは一つにまとめたが、その他の対応関係の必ずしも明確でないものは、別見出しを立てて示した。統一を欠いた部分があるかも知れない。なお、「竹」、「馬」ともこの言語地図の調査項目の中に含まれているので、後に出版される予定のそれらの地図を参照されたい。

タケウマ類のうち、TAKENMAは、TAKEUMAと表記することも考えられるが、調査結果を記したカードには-NMAとすべきものの方が多かったので、

TAKENMAとして見出しを立てた。同様に、他の-Uマ類も、-NMAと表記した。このタケウマ類の分布は近畿を中心に東西に帯のような拡がりを見せている。東へは北陸から新潟にかけての地帯、南側は愛知から静岡南部・千葉にかけての線、さらに、東京東部・埼玉・北関東・長野にかけての地帯(長野北部で第1の地帯に連続する)がある。西には、近畿から山陽・四国から宮崎、あるいは九州西北部にかけての帯がある。このほか北海道にも広く分布し、その他の地域にも点々と分布する。現在の標準語としての拡がりと言えよう。凡例でDAKINMAからTAINMAまでは琉球にあり、タケウマに対応するものとしてここに置いた。なお、タケウマが東北地方に少ないことは、竹馬を作る場合の竹(真竹か)そのものの植物地理学的分布とも関連があろうか。

タカウマの類のうち、TAKANMAは北海道、岩手南部・宮城、新潟中部、関東周辺部、広島、佐賀・長崎にいくらかまとまった分布を認めることができる。TAKAMAは岩手南部だけに見られる。タカ-の部分には一般には「高」と考えられるが、「竹」を擬することもできるかも知れない。

キウマの類のうち、KINMA、KIMAはおもに東日本に数地点見られるのみである。KIINMA、KIIMA-A、KIINUUMAは沖縄に数地点ある。

タケアシ、タカアシ、タカハシ、タカシの類は、いくつかの分布領域に分かれている。東北地方北部、東北地方南部から関東東部にかけての地域、関東西部・中部山地の帯、紀伊半島西南、中国山地・山陰の各地域にも分布するほか、各地に点々と見られる。これらの四つの類は、おおむね各地の分布領域で混在していると言えよう。このことは、これらの4類が、歴史的に互に近接していることを示している。しかし、これら四つがそれぞれどこからか連続的に伝播してきて現在の分布を示すに至ったのかどうかは、一概には言えない。分布は各地に分断されていて伝播・残存説を支持するように見えるが、一方、タカアシの中からタカハシ、タカシあるいはタケアシがそれぞれの地域で独自に発生したとも考えられる。梯子あるいは橋などのハシに引かれてタカアシをタカハシとしたり、タカアシの語中の連母音を嫌って短母音化してタカシを生み出したということなどが考えられる。なお、凡例の順序が前後するが、奄美のタカヒサ等の類もタカアシに意味的に対応するものと考えられ

る。琉球のヒサは、語源的には本土の「膝」に対応するもので、「足」を意味する語形と考えられるからである。この類のタカ～も、一般には「高」と考えられようが、「竹」を擬することも可能である(以下、他のタカ～についても同じ)。

タカチョの類は山形に多い。これと離れて長野にも1地点だけ TAKACCYO がある。これら2地域に分かれているものの間に、歴史的つながりがあるかどうかは決めがたい。両地域の近くにそれぞれ TAKACI があって残存のようにも思えるが、タカシなどからの個別発生もあり得る。後部分にアシダを持つ類のうち、タケアシダは長野、山形に数地点見られ、タカアシダは石川以北の日本海沿いの地域に点々と分布し、宮城、岩手、青森にもある。山形庄内のタカアシダと宮城西北端のタカアシダとの間に歴史的につながりがあると考えれば、その間に分布する先程のタカチョは新しい発生のように見える。宮城、熊本、長崎に1地点ずつあるタカゲタは、上のタカアシダと意味の上でつながりがある。また後の茶で示したユキゲタとも語形の上で関連がある。

橙で示したサギアシの類は、東北地方、九州にかなりの領域を占めるほか、小さなまとまりを持って各地に分布する。サギアシ類に形の上で類似する赤で示したサンゲンシ、サンゲンシ等の類もサギアシ類とほぼ同地域に分布している。これら二つの類の密接な歴史的関係をものがたるものと言えよう。これらは前部分 SAGI, SANGI 等と後部分 ASI 等との結びついたものと考えられるが、その結合に際して、前部分末尾母音と後部分頭母音との連母音にさまざまな変種が見られる。これらについては遡源的に対応関係を見つけて分類することをせず、それぞれ別に立てて示した。それらの変種の分布をおおまかに見よう。サギアシ、サゲアシは、ほぼ全領域に分布する。とりわけ、サギアシは東日本に多く、サゲアシは九州に多い。サガシは岐阜に多く、秋田、兵庫にも見られる。アシサゲは九州に多く、岩手にも1地点見られる。これは、前部分によってまず分類する原則を貫くならば、アシの類に入れるべきものであるが、サゲアシの前後部分の転倒したものと考えて橙を与え、ここに置いた。サギアシは九州に多く、兵庫に1地点ある。

赤の類の中では、橙の類の中もっとも広く分布するサギアシにいちばん近いと思われる SANGIASI は案外少なく、福島に1地点あるだけである。SANGEASI も福島の数地点ある以外には、まとまった分布がない。

しかし、いずれもサギアシ、サゲアシの近くに分布している。サンギシ、サンゲシは、九州南部に広い領域を占めている。SANGIT, SANGET 等末尾音節が促音となるものは、九州南部に数地点ある。サンガシは、長野、岐阜、富山、山陰東部、九州北部にそれぞれ領域を持つほか、秋田、熊本、屋久にも見られる。サンギアシは橙のサギアシに接して九州北部に分布するほか、静岡にもある。サンゲンシは長野に広く分布し、山をへだてた岐阜にも1地点ある。福島、山陰東部、熊本にも点在する。サンゲンアシは九州北部と宮崎との2領域を占める。北海道にも1地点ある。サンゲンチョオ、サンゲンボ、タンゲンアシ等もこの近くにあり、サンゲンアシとつながりを持つものであろう。サンヤシ、サンヨシは近畿地方に見られる。形の上からはサンギシとだいぶ離れているが、一応ここに置いた。

橙の類と赤の類とがともに似た分布領域を持つことは先に述べたが、これらの類内部の各変種も独自の分布領域を持つことはなく、各地の分布地域にそれぞれ同じように現われる。このことは、タカアシ・タカシ等の場合と同様、これらの類内部の各語形が各地でそれぞれ独自に発展したことを示すものではないだろうか。

茶を与えたものは前部分にユキを持つ類である。ユキアシは大分にまとまって分布するほか、千葉、静岡、近畿、四国、九州西部にも点々と分布する。ユキアシダは栃木に、ユキゲタは近畿、四国、五島に見られる。YUKUGUMI, YUGGUMI はともに対馬に現われる形であるが、これらの前部分ユキは「雪」と考えられ、分布からは雪とさほどの縁のなさそうな地域に多いのはおもしろい。

紺で示したもののうち円形符号を与えたものは、前部分にアシを持つ類である。アシ、アシコ、アシカは青森に領域を持つ。アシタカは高知東部のものを除いて、おおむね、タカアシの領域に接している。タカアシと関連させて見るべきものであろう。アシサゲをサゲアシと同類と認めたのと同様、これもタカアシと同色を与えることができたかも知れない。アシダは岐阜の東南端に見られ、タケアシダ、タカアシダなどと関連がある。

キアシは秋田に一領域を占める。沖繩のキイピサ・キイバギ等も、タカヒサがタカアシと意味的に対応するのと同じく、キアシに対応するものである。後部分ヒサ、バギ等は、それぞれ「足」を意味すると考えられる。キンマなどと共に語頭がキ(木?)となるものの領域を指摘することができる。

次に、これらの歴史的な解釈を試みよう。

分布を見る前に文献に残された「竹馬」を表わす語を捜してみると、タケウマは、古くはこの質問内容にあたる二本の棒に足を掛けて乗る道具のことではなく、葉の付いた竹などに跨って乗馬のまねをする遊び、あるいはその道具を意味していたらしいことがわかる。それに対して、二本の棒に乗る竹馬は、タカアシ、サギアシであったらしい。

分布を見ると、草のタケウマは近畿から帯のように東西に延びていて最も新しい拡がりであると考えられる。これに対して空のタカアシ、橙あるいは赤のサギアシ、サンゲシ等(以下ではサギアシとまとめて言う)は、分布が分断されておりタケウマよりは古いものの残存と言うことができる。つまり、分布からの推定は、文献によってたどることのできる歴史と、よく照応すると言えよう。しかし、厳密に言えば、この地図からは、現在、タカアシ、サギアシの地域で、二本棒の竹馬と乗馬のまねの竹馬とを語形の上で区別しているか、あるいは、タケウマの地域で、両者の区別をしているのかどうか、などについて、何もわからないと言わざるをえない。このような二様の遊びが、全国にわたって行なわれているのかどうか、どの地域でどのような言い分けが行なわれているかは、さらに知りたい問題である。

タカアシとサギアシとの歴史的先後関係については、次のように考える。まず概観すると、両類の分布がほぼ全国にわたって接していることが注目される。この事実、両類が歴史的に接していることを示すのであろう。次に、各地域の分布をこまかく見て行くと、まず秋田・山形・新潟・福島のサギアシは、おおむね、日本海側に分布し、同時に東側でタカアシに接し、南側あるいは西側でタケウマに接していることがわかる。これに対して、東北東側のタカアシは、タケウマに接していない。タケウマは最も新しいものと考えたのであるから、それに接するサギアシはタカアシよりは新しいとみなすことができる。長野北部・岐阜北部のサギアシは、飛騨山脈の麓にあって古いものの残存のようにも見えるが、最も新しいと思われるタケウマに北側で接しているので、やはりタケウマに連続するものと考えられ、タカアシよりは新しいと見られる。関東中央部のサギアシは、茨城と関東西部山地に分布しているタカアシの中間に位置するので、これもタカアシよりは新しいものと考えられる。そのほか、静岡、滋賀、山陰東部の分布も、タカアシよ

りは新しいことを示していると認められる。九州ではサギアシ類の分布が広く、とくに、南部の先端にまで行きわたっていることから、必ずしも新しい侵入とは見えないが、奄美のタカヒサを関連させて考えると、九州のサギアシはそう古いものではなさそうだ、ということになる。また、宮崎と長崎とにタカアシが分かれて分布することを考え合わせれば、ここでも、サギアシの方がタカアシより新しいとすることができる。以上を総合すると、タカアシが古く、サギアシがそれに続くものであるという歴史的順序が得られる。

その他の類の主なものについて考えよう。タカウマ類は、分布を見ると全国に分散して一見古そうにも思われるが、タカアシあるいはサギアシに前後して中央から伝播して行ったものかどうか、速断することはできない。タカアシのそばにあるもの、例えば、宮城・岩手のものなどは、タカアシの中から生まれたものとも考えられる。そのとき、ウマという後部分をどこから持って来たかは、よくわからない。広島や長崎のものは、タケウマとタカアシとの混交かとも思われるが、宮城・岩手のものはタケウマの領域には接していないからである。この地域に見られるタケウマは、標準語の侵入とも考えられるが、在来のタカウマを介しての標準語化とも考えられ、ともあれタカウマが生まれる以前から根強くあったものとは思えない。竹に跨る乗馬のまねの竹馬の意味などで、ウマという部分が底流にあったのかも知れないことを考えておく必要がある。

ユキアシの類は分布の東端が関東、西端が九州北部であること、タカアシ、サギアシの領域のへりに分布し、かつタケウマの分布に接していることなどから、サギアシ、タカアシよりは新しく、タケウマよりは古い時代に拡がったものと考えられる。ユキという命名は各地で独自に行なわれたものではなく、やはり中央からの伝播と考える方が妥当であろう。

秋田のキアシと沖縄のキイピサ、キイバギの類との関係はよくわからないと言わざるをえない。タカアシのタカの部分が竹と意識され(すなわちタカアシは竹足)、それがそれぞれの地域で木足のように翻訳されたものかも知れない。秋田のキアシはおもに海岸部の一地域にのみ見られ、分布からは古いものの残存というより、むしろ新しい発生と考えられる。秋田と琉球とを結びつける積極的な理由もないので、一応両者は別々の発生と考えておく。

## 145. おてだま(お手玉)

調査にあたってはお手玉の道具の名称と、それを使ってする遊びの名称とを区別したが、実際の報告を比較すると全国各地で、両項目の語形が一致または類似している場合が多かった。そこで地図としては、まず道具の名称を145図として示し、遊びの名称については、道具との相違点だけを146図として示すことにした。なお、お手玉は、女兒の遊びに関することがらであるから、『日本語地図』の被調査者である男性の老人の知識や記憶が不確かな場合もあったという事情を、考慮しておく必要があろう。

この145図「お手玉」(道具)の分布は、全国的に語形が非常に多く、語類もかなりの数にのぼっている。すなわち、非常に粗く見ても、凡例の順に、オテダマ類、オジヤミ類、ナンゴ類、オヒトツ類、ザック類、ガエキ類、アヤ類、コンメ類、コブ類、アズキダマ類、チョロジョ類、オサライ類、その他となる。これらのうち、印刷の色数の都合で、ザック類、ガエキ類、コブ類を同じ茶の符号で、コンメ類、アズキダマ類、オサライ類を同じ草の符号で示した。凡例と地図を見て気づかれるように、多くの語形がおのおの小地域に分布していて、全国的な観点から分布を記述し、歴史を推定することは容易でない。以下、比較的全国的意義を持つと思われるおもな語形または類についてだけ、重点的に述べておくことにする。

緑の符号を与えた類のうち、標準語と同形の OTE-DAMA の分布が非常に弱いことにまず気づかれる。すなわち、東京付近のほかは、北海道の一部、長野東部、新潟西端、岐阜東部、岡山東北部、愛媛、九州北部、鹿児島南端ぐらしか指摘できない。東京付近に拡がっているものは東京語の伝播によるものと思われるが、その他の地域のものの中には在来土着の語として OTE-DAMA、または TEDAMA であったものが、標準語と一致するため勢力を持ったものもあろう。

木曾方面までを含めた岐阜付近の OTE-DAMA と、飛騨の OCYODAMA は、分布から見て、隣接する OZYAMI, ISIDAMA などより古そうであって、標準語の影響とばかりは言えないようである。長野・岐阜を中心とする「オテ～」という語形、群馬・山梨・静岡・福井の「オタマ」という語形、長野・南関東などの「タマ」

という語形などは、分布の面から見ても東京付近の OTE-DAMA と歴史的に関係があるものと思われる。愛媛・九州のものは標準語の影響によるものかどうか不明である。そのほか各地に孤立している OTE-DAMA は、標準語の影響によるものがほとんどであろう。利根川河口付近の OTAMA は OTE-DAMA からの変換形であろうか。

東北の DAMA, DAMAKO と中部の DAMA とは、道具の形状から考えると、各地でそれぞれ同じ命名が行なわれた結果とも考えうる。

橙の符号を与えたオジヤミ類は、ほとんどが OZYAMI という語形であって、これが全国的に見ても最も広い領域を持っている。しかも、その分布の様相は、近畿から北陸・東海道・中国方面・四国・九州へと進んでいることを示すようである。もっとも、近畿中央ではそれより新しいと思われる KONME, TENCYAN, OIKKO などが中央語としての地位を奪っているように見受けられる。青森南部に1地点だけある OZYAMI は、周囲に分布する ZYAGI, ZYAKKU などとの関係も考慮する必要がある。四国西南端に1地点だけ分布する GAZYAME は、橙の符号で示したが、あるいは別類とすべきものかも知れない。ほか、橙の符号で示した類はすべて歴史的に相互関係があり、おそらく OZYAMI や ZYAMI からの音転化と考えて大過なからう。この類の発生は擬音によるものであろうか。

赤の符号を与えて示したナンゴ類は、ただのナンゴとイシナンゴとチョオナゴとに分かれる。ナンゴ (NAAYO などを含む) は新潟中部から日本を横切って千葉まで帯状に分布している。また茨城から福島を浜通りへとたどることもできる。これは、分布から見て OTE-DAMA の発展するひと足さきに、江戸あたりから上州、越後方面、房総方面、東北方面へと広まったものかと思われる。これと、その周囲に散在するイシナンゴとの関係は不明であるが、イシナンゴのイシ部分が脱落してナンゴが生じたのであろうか。近畿・北陸・中国・四国・九州のイシナンゴは、分布からみて比較的古いものようである。この場合もその分布領域の中にところどころナンゴが含まれていて東日本におけるものと平行的に考えることができよう。イシナンゴは本来は石そのものを上に投げあげて受けとめる遊びであるかと思われるが(『守貞漫稿』など)、それから意義の転用が行なわれたのであろうか。また、お手玉の袋の中に小石を入れる地方では、石



のはいつているナンゴという意識で新たな造語が行なわれたものがあるかも知れない。山形などのチョーナゴは、テオナンゴの転化かと思われる。

空の符号を与えたオヒトツ類は、ぬりつぶし符号で示したヒトツなどと、ぬき符号で示したイチなどとに分かれるが、ともに数の「一」に関係すると考えて、同類と扱った。なお、OSITO～などは線符号で示してあるが、ヒをSIと言う地方は別として、その傾向のない西日本などにもこの語形のあることからヒトツに由来するものと速断することはできない。いま、かりにこのOSITO～などをオヒトツ類とするならば、この類はお手玉遊びをするとき、オヒトツ、オフタツとか、イッコ、ニコとか、イチ、ニとか数を数えるかけ声や歌の文句などを基礎として命名されたものと考えられよう。

茶のぬりつぶし符号で示したザック類は、種々の音変種があるが、お手玉の擬音による命名であろう。

茶の線符号で示したガエキ類も、あるいは擬音語に由来するかも知れる。

桃の符号のアヤ類はいくつかのかなりまとまった領域を認めることができるが、それらの領域を結んでみると、これは古くは東日本の日本海沿岸に広く分布していた表現かと思われる。なお、北海道全部に標準語と異なった特定語形の分布していることは珍しい。北海道共通語ともいうべきものであろうか。アヤ類の発生は、お手玉を投げあげるとき二つの玉をあや模様で交錯させる場合があるが、その動作にもとづく命名かと思われる。女兒の遊び「あやとり」との関係は不明である。

草の符号で示したうち、KONMEは滋賀にまとまった分布をしており、新しく発生したものと思われる。お手玉の袋の中に米を入れたことによる命名であろうか。なお、146図の説明も比較されたい。

茶の中ぬき符号で示したコブ類の中には、タマコブとイシコブなどの複合的なものがあり、前者は山陰の海岸部にあり、そのかなり近くにTAMAやOTEDAMAが分布しており、後者は、山陰の山間部および隠岐で、ISINANGOと地理的に連続している。

草の符号のうちアズキダマは、袋の中に小豆を入れていることからの命名と思われる。桃の符号で示したチョロジ類の語源は不明である。草の符号のうちオサライ類は、中国地方・鹿児島・沖縄などに見えるが、これは下に置いたお手玉を手でさらうとき「おさらい」と唱えることからの命名と思われる。

紺の符号には種々のものが含まれているが、それぞれの地方で独自に発生したものが多いようである。この紺の符号を持つ諸語形のうち、前掲の諸語形と何らかの関係があるかも知れないと思われるものは、符号の形を共通にしておいた。和歌山のナナコはあるいはナンゴ類と関係があるかも知れない。MAME～の見出しに含まれる具体的内容は、[mamenī, mameφurda, mameφu-kuro]などである。

沖縄に無回答の多いのは、このような遊びをしない、したがって道具もないためと思われる。無回答のそばに分布する標準語と同形のOTEDAMAは、無回答と似た性質を持つものと考えられる。

なお、このお手玉をあらわす語形の中には、「おはじき」など類似の遊びとの関連も併せて考えるべきものも含まれていると思われる。また、お手玉遊び自体の変遷・その伝播についての知識が関連してくる場合がありそうである。お手玉のしかたが地方によって少しずつ異なり、それが名称に反映している可能性、あるいは、お手玉の遊び方にいく種類かあって、その中のある遊びの名が道具の名に用いられたことも考えられる。すでにいくつかを指摘したが、遊びのとき唱える歌の一節とか、袋の中に何を入れるかなどということもお手玉の命名と関係があったであろう。このような点を注意すればさらに深い解釈に到達できたかも知れないが、はじめにも述べたように、被調査者は男性なので、各地点でくわしくそれらの情報を聞きとっては、おのずから限界がある。

分布の面から見ても、全国がばらばらでそれぞれの語形の分布領域は概して狭く、全国的な展望にもとづく解釈は難しい。この名称の歴史は、全国的規模での大きな動きというよりも、それぞれの地方での発生・伝播が部落から部落へと及んでいくといった、きめこまかい力によって行なわれたと考えざるをえない。その意味で、この種の項目の歴史を考えるにあたっては、全国的な展望地図のほか、前述の関連的な注目点に留意した地域の詳細図の作成が望ましい。今後、そのような調査・研究の結果が各地から報告されることを期待したい。

#### 146. おてだまあそび(お手玉遊び)

145図の説明でも述べたように、調査に際しては、お手玉遊び(質問番号084)とお手玉の道具(質問番号085)

とを別々に調査した。しかし全国的に見て、お手玉の道具を示す語形と、遊びを示す語形とが一致している場合が約半数を占めて目立ち、区別のある場合でも、遊びについては道具の名称と同形のものに遊びを示す部分（主として動名詞）が付加されただけの報告がほとんどであった。そこで、この146図では、お手玉の道具の名称とお手玉遊びの名称とを対比して、両項目に共通する形を持つ部分を切り落とし、「～遊び」にあたる部分(形態素)を抽出して、その分布だけを示すことにした。したがって、この項目についての回答が145図と一致する場合は地図上に符号を載せなかった。この「～遊び」部分の実質は、ほとんどが動詞を名詞化したものと思われる語形であり、そのほか、抽出された「～遊び」部分を動詞形(終止形がほとんど——補助動詞がついて連用形になっているものは終止形にもどして凡例に表示した。たとえばツイトルはツクに)で答えているものがあった。後者はこの項目の質問で求めたものに合わないとも考えられるが、他の回答との比較のために、中ぬきの符号または線符号で地図に示しておいた。この動詞形の答えの分布は、その動詞から転じた名詞形の答えの分布領域と大体一致しているが、必ずしもそうでない地方もある。

抽出された「～遊び」部分の分布を見てみよう。そのうち、草の符号を与えた～アソビ(～アソブ)、～スル、～ヤルなどの類は広く粗く分布していて固有の地理的領域が指摘できないようである。ただし、消極的にはあるがお手玉などの動作に特に選ばれた語かと思われる～ツキ、～トリなどの分布している東北方面には、比較的現われにくい傾向がある。そして、この～アソビ(～アソブ)、～スル、～ヤルなどの類の分布が、地図上に印のない地域中に含まれる傾向も指摘できそうであって、実際は無印と通ずる性格を持つものと考えていいようである。すなわち、これらの語をあとに付けるかどうかは、質問に答える際、道具と遊びとを区別しようとする度合に関する被調査者の受けとり方の差、場合によっては調査者の質問、記録方式の差などが反映している可能性もある。

赤・緑・橙・空・茶などの色で示した類は、お手玉の場合に特に選ばれた動詞の名詞化されたものが多いと思われる。このような類は概して東日本に多い。それらの語形を145図と対比すると、コンメとツキ、アヤとツキ、アヤとオリ、タマとトリ、チャックとクリなどの関係が指摘でき、名詞と動詞のつながりに何か意味を持つ

場合がありそうにも思われる。そのほか、オジャミは道具と遊びの語形が一致する(すなわちこの場合はこの地図では無印)場合の多いことも指摘できそうである。しかし、そのほかは大勢として、両者は関係なく、この146図は145図に対して、独自の分布相を呈していると言えよう。もし、質問に際して「お手玉遊びをする」という動詞形で結ぶ回答を求めれば、全国的に地点が埋まり、分布の境界もはっきりし、またアソビなどのうちかなりのものは消える可能性もあると思われる。そういう図ができたとき、その図とこの146図をつき合わせてはじめて「～遊び」部分の本格的な解釈も可能となると思われるので、今回はこの地図の歴史的推定は控えておく。

前述のように、この図は「～遊び」部分の抽出図であるから、「お手玉の道具」と「お手玉遊び」とで語形がまったく違う場合、すなわち、両者を対照しても語形上の共通部分がなく、その方言における「～遊び」にあたるものを抽出する資料のない場合は、凡例に「抽出不能」として一括して示した。この現象は比較的西日本に多く分布するようであるが、分布として意味があるかどうか疑問もある。詳細は『日本言語地図資料』について見られたい。ただ、このうち、道具をオジャミ、遊びをアヤ～と言っている地点を列挙すれば、

6442.80(b), 6453.64(e), 6475.27(b), 6495.88(a),  
6497.36(a, c), 6497.77(a), 6497.90(a), 6498.93  
(b), 7377.72(f), 7383.83(d), 7383.98(c), 7400.15  
(b), 7408.50(a), 7414.87(a), 7415.01(a), 7415.47  
(a), 7416.34(a), 7423.12(a), 7425.02(a), 7433.52  
(a), 7436.40(a), 7452.54(c)

である。～の部分、ほとんどがオリ(a)・オル(b)であったがトリ(c)・トッ(d)・トル(e)の地点もある。グリ(f)は1地点であった。このほか、遊びにアヤ～を用いて道具と区別している地点は(カッコ内～部分)、

1793.14(ゴ), 2811.01(コ), 5576.60(a), 5614.24(フリ),  
5623.85(a), 6443.88(e), 6456.57(c), 6466.16  
(～部分なし), 6498.61(a), 7338.48(フリ), 7382.93  
(c, ッリ), 7391.01(c), 7401.11(フリ), 7417.22  
(a), 7417.72(ホオリ), 7420.91(b), 7430.15(フル・ウル),  
7432.95(a), 7460.23(c),

である。これらの地点は、徳島・高知を中心に、山陽・九州に及ぶ比較的まとまった地域性を示している。そして、145図と比較すれば明らかであるが、この地方には道具の方にアヤ～を使っているところがほとんど見あたら

ない。すなわち、アヤ〜について隣接地域どうしで道具と遊びとに関する意味の入れかわりや混乱はまったく見られない。このことは、両者の区別のない語形どうしが地理的に衝突したため、一方の語が道具の意味を、他方の語が遊びの意を分担するようになった可能性のあることを示すと言えよう。ただし、宮崎南部 8335.48 (宮崎市内海) に両図で AYAKO [ajago] というところがある。これによるとあるいは古くは区別なくアヤと書いていたところ、道具を意味するオジャミが侵入して現状が形成された可能性も考えておかねばならない。一方、他地点の「抽出不能」は、たとえば

	道具	遊び
1706.82	アヤコ	オテダマ
2811.01	オテダマ	アヤコ
8341.46	イシナゴ	チョロジョ
8352.40	チョロジョ	フケゴ

などのように、近接した地点で語の意味が逆になったりして区別があるというよりは、実際はあまり区別をせず2語を併用しているものが、たまたま道具についての質問の答えに一方の語が得られ、遊びについての質問にもう一方の語が答えられたに過ぎないものも含まれている疑いもある。小地域での綿密な調査が期待される。

「無回答」と記した中には、両項目とも無回答であった場合と、道具には語形が得られたが遊びの場合だけ無回答であったものがある。この区別については地点ごとに145図と対照されたい。145図で何らかの語形があり146図で無回答であった場合は、この地図で符号のない地点、すなわち道具と遊びとを区別しないものと通ずると考えることができるかも知れない。また道具の場合無回答で、遊びの場合にだけ語形の得られた場合は「抽出不能」に入れてあるが、これも道具と遊びを区別しない(145図には符号があるがこの地図での取り扱いによってこの地図で符号のない)場合と性格が似ているかも知れない。詳細は『日本語地図資料』を見なければならぬ。なお、調査にあたって、「遊び」が質問番号084、「道具」が085であったことを注意しておこう。

#### 147. おにごっこ(鬼ごっこ)

「おにごっこ」にあたる方言形は複雑多様であり、それらの異形を細部にわたって凡例の上に反映することはむずかしく、かりに成功しても図が煩雑になる。そこで、

この地図で凡例に掲げた見出し語形には、かなりはば広い変種が含まれている。詳細は『日本語地図資料』に記録されている。この地図と比較すべき148図「かくれんぼ」についても、同じような趣旨で語形の変種をまとめた。両図の間には共通する形態素も多く、特にまとまった分布領域の指摘できるものは、符号の形をなるべく合わせた。参照されたい。また、解説も両図にわたって言及する部分が多いので、両図の解説を合わせて読んでいただきたい。

「おにごっこ」という遊びは、全国各地の状況を比較すれば、おそらくルールが多様で、ある特定の地点においてさえ何種類かの遊びが平行的に行なわれている可能性がある。したがって、1地点に、その呼び名が何種類か併用されている可能性がある。しかし、この質問では、細かいルールの違いによる差異は捨象して、地図の右下に示した質問文の範囲内で、いわば総称といったものを求めた。

凡例について、まず語形の変種のまとめかたの原則について述べる。形態素の切れ目と考えられる位置に現われる連濁現象や促音等は、いくつかの例外を除いてみな一つにまとめた。例えば、[onigura], [onikkura], [onikura] はともに ONIKURA の中に含めた。[oikake...] と [okkake...] は OIKAKE... にまとめた。この場合、一つの見出しに含めるべきことはわかっていても、変種が多くてどの形を見出しとすべきかはっきりしない場合は、最も地点数の多い語形を見出しとした。

ただし、例えば [oniko] と [onikko] とは ONIKO にまとめたが、[onigo] は特別に ONIGO とした。このような例外を設けたのは、主として「分布」の観点による。つまり、ONIKO と ONIGO のように東日本と西日本とにはば分かれて分布し、分布領域のはっきり分かれるものは、できるだけ別見出しとするように努めた。それと照応させるため、他のコ・ゴ (OWAEKO, OWAEKO など) の対立も、みな別見出しを立てることにした。なお、例えば ZYAADOI と ZYAATOIGOTO のように一方を DOI とし、他方を TOI としたのは、ZYAADOI にまとめた具体的報告の中に、ジャートイがなかったからである。

次に個々の見出しについて、問題を含むものの内容と分布をおおまかに説明する。

色の与え方については、まず、オニという要素を含む

もの、あるいはオニはなくともそれと密接な関係にあるものを、橙と赤とで示した。橙はオニゴッコ、オニコ、オニゴトの3類に与え、その他の類を赤で示した。ただし、例外もあり、例えばオニボイのように、後部要素に注目した方が分布の意味があると判断した場合には、橙ないし赤としなかったものもある。オニが後部分に来る場合も同様である。空で示したものは、オイ、オイカケ、ボイなど「追う」を意味すると思われる要素を含む類である。草はツカマエという要素を持つもの、緑の中ぬき符号はセメという要素を持つもの、ぬりつぶし符号はオサエという要素を持つものである。紺にはいくつかの類が含まれる。

各色の間に共通する形態素は、特徴ある分布の見られるものについて、符号の形によって示すよう工夫した。148図との対応は、色についてはできないが、形の上ではできるだけ共通のものを与えた。

橙で示したもののうち、オニゴッコは標準語形と考えられるが、関東一帯にかなりまとまった分布を示し、中部地方南半、近畿に散在するほかは、あまり強力な分布領域を持たない。ONIKOKKOは関東南部に散見する。ONIGOKUは岡山をはじめ兵庫、奈良に見られる。このGOKUは他の要素とも結合して近畿周辺に分布する形態素で、148図にも現われ、符号に一定の形を与えてあるので図の上で見たい。オニコは東北地方と中部地方とに広い領域を占め、その周辺地域あるいは西日本にも点在する。オニコにはオニッコとオニコとを含むが、中部地方の領域にはほとんどオニッコが分布し、東北地方の領域中岩手にはオニコが多く、秋田にはオニッコがやや多かった。ONKOは道南に広く分布するほか、青森にも見られる。オニコからの変化とも考えられる。ONKOの地域で、「おに(鬼)」のことをオンと言うことがあるか、あわせ調べてみる必要があろう。オニゴは中国地方南岸、九州西部にまとまった分布を見せる。東北地方に見られるオニゴは、第3音節子音が〔ŋ〕のもので西日本のオニゴに対応するものと考えられる。ONINGYOは熊本南部に見られる。このGYOの部分は、同地域に分布するONIZYOのZYOと関係があるかも知れない。オニゴトは福島・新潟を中心とする一地域、近畿一帯、中国、四国、九州北部にそれぞれ分布領域を持つ。

赤で示したものにはさまざまなものが含まれている。赤の内部の類別は、できる限り符号の形の区別をもって

示した。ONIは宮城、四国南半、九州東南部にややまとまって分布するほか、ほぼ全国にわたって点々と見られる。この見出しは、オニサン・オニサマのようにサマの付くもの、オニアソビなどのようにアソビの付くものまでを含んでいる。サマ、アソビに、特に意味のある分布が見られなかったからである。このサマ、アソビという要素は、147図・148図を通して、各見出し語形に付くものは全部省いた。ただし、省いた件数はごくわずかであり、また、二、三の例外もある。ONISANKOは、茨城、山梨、高知に見られ、ONISAGOは中国・四国に10地点見られる。これらの語形に含まれるSAN、SAは「様」にあたるもので、それぞれONIKO、ONIGOに分属させることも考えられなくはない。ONINANKOからONIKONANZYOまでは、語形の類似から一定の符号を与えた。東北地方北部、新潟、長野北端、九州にそれぞれ小領域を持つこのナンコ・ナンゴ等は、空のオイ・ボイの類にも現われ、分布も上の地域とほぼ重なる。ONNANGO、ONNANDA等のオンは、一応オニの変種と考えられるが、空のオニナンゴのオイとの関係も考えて、見出しを別に立てた。ONIDOKKOは関東、ONIDOCIは岐阜に見られる。ドコ、ドチ(ヲ)という疑問詞を付けたものであろうか。ONITORIからNIGEZYAADOIまでは同類と認めた。TORIは「取り」であろう。TOIは「問い」にあたるとも考えられるが、TORIのRが脱落したものと考えておく。これらの諸語形のうち、ONITORIは、山形庄内と宮崎とに一領域を持つほか全国に点々と見られ、ONIKO-TORIが東北地方と新潟とに4地点認められるほかは、みな九州に分布する。ZYAADOI以下はオニを含まないが、トイ、ドイを介してONDOI等とつながりがあると考え、ここに置いて赤を与えた。ONIBOKKOは宮城と伊豆とに見られ、ONIMOKKOは中部・北陸に数地点見られる。このボッコ、モッコは、148図にも現われる形態素であるが、両図を比較すると、富山を除いては分布地域が異なる。ONIMOOMOからMOOまでは、148図のカクレモド等(この図には現われていない)に関連させて考えた。九州地方に点々と見られ、岡山にも1地点認められる。『全国方言辞典』によれば、「もー」、「もーも」等はお化けの意味で各地にあるらしい。発想としてオニに通ずるものであろうか。ONIBUKUROからBUKURECYANKOまでは、岐阜に1地点あるほか、宮城を中心にほぼ一つの領域に分布する。BUKU-

REKKO 以下はオニを持たないが、分布と語形の類似とからここに置いた。『全国方言辞典』によれば、「追う」の意味で、「ぼくる」、「ぶくる」が東北一帯、岐阜にあると言う。あるいは、ONIBUKURO から BUKURECYA-NKO までは、空で示すべきであったかも知れない。ONIKURA から ONIKURAGO までは、「比べ」にあたると思われる要素を持つものであるが、分布にはほとんど積極的な意味は認められない。「駆けくら」などからクラの部分の切り離され、独立して各地で ONI に接続したものかも知れない。ONIZYO, ONIZYOKKO は語形は似ているが分布はかけはなれている。ONIZYO は九州に点々を見出され、ONIZYOKKO は青森に見られる。後部分のジョッコは、緑や茶の類にも見られ、東北地方に点在する。また、148 図でも他の前部分に付いて東北地方に分布する。ONIKAE から KABO まではカエ(「代え」か)という要素を持つと考えられるものである。北陸に一領域を持つほか、東北地方、長野、香川、九州に点々と見られる。ONKEGO(8301.19)の KE はカエの連母音にあたる短母音かと考えた。KAEB0 は ONIKAEBO の近くにある。KABO は薩摩半島に見られる。KAEB0 と関係があるかどうかかわからないが一応ここに置いた。ONIYAI, ONIYAIKO, ONIYOKKO は、点々としていて、まとまった領域は見られない。空の類では、ポイヤイ、ポイヤイコなど、後部分において共通するものが一定の拡がりを見せているが、それらとの関連も認めにくい。ONISARA は愛媛西南部と広島、福岡に見られる。サラは「更」あるいは、「攪う」などにあたるものであろうか。「更」ならば、オニカエなどと発想が似ているとも思える。ONIT0BI から TOBIKO までは、岩手と栃木とに認められる。ONIKIRI は徳島に、KIRIONI は千葉に各1地点見られ、キリという要素を共有する。KITTA・KETAONI は熊本にある。この類は148 図では熊本からは消えて、四国に KETTA が見出される。

空で示したものは、オイ、ポイ等「追う」にあたる要素を持つ類である。中ぬきの輪郭符号はオイ等の要素を持つもの、一部ぬりつぶした符号はオイカケ、オワエ等の要素を持つもの、全部ぬりつぶした符号はポイ、ボワレ等の要素を持つものを、それぞれ示す。空以下各色の類の中のオニを含む見出しは、赤の ONI の符号と同形の矢印をそれぞれの符号に組み合わせて示した。例えば、ONIOKKO は OKKO の符号と 矢印(ONI の符号)と

の組合わせ符号で示してある。

OIKO から UIGO までは同類と認めてよからう。OKKO は青森に見られ、同地域にある ONIOKKO と関連があろう。はじめに述べたような、オッカケをオイカケに含める原則からすると、この OKKO も OIKO とすべきだったかも知れないが、一方、橙の ONKO とともに、ONIKO との関係も考えられる。ONIKO > ONKO, OIKO > OKKO という単純な変化だけでなく、さらに錯綜した歴史があったのではないかという疑いから特に見出しを立ててみた。OINANGO は九州、OKKONANZY0 は青森にそれぞれ見られる。これらのナンゴ・ナンジョはそれぞれ赤のオニの類にも現われる。OIYAI は、滋賀・三重に4地点見られる。後で触れるオワエヤイ(コ)、ポイヤイ(コ)等とつながりがあろう。OYAGOKU は佐渡に1地点ある。この OYA は、ポイヤイにあたるものと考えた。ゴクは、他の類にもあられ、近畿一帯に分布する。

OIKAKE 以下 OBANGO までは、一部のものを除いて、まとまった分布領域が認められない。OIKAKE-GOKU は京都に、OIKAKENANGO は長崎に認められる。それぞれゴク、ナンゴの分布する地域内にある。OIKAKEBO から OIKAKERENBO までは近畿北部に数地点ある。BO, BON, BABA 等類似する形態素に注目したもので、分布も近接している。

オワエの類には多少まとまった分布領域が認められる。OWAEGOKU は佐渡、兵庫、香川に見られ、これもゴクの領域を形成する。OWAEGO は三宅島、愛媛、島根と飛び離れているが、OWAEGO は四国東北部に一領域を持ち、和歌山にも1地点見られる。OWAEGOTO は、近畿に7地点、北海道、佐渡に各1地点ずつ見られる。近畿のものはオニゴトの領域内にあり後部分ゴトを共有する。OWAEYAI, OWAEYAIKO は四国に領域を占める。ポイヤイ(コ)等とつながりがあろう。OWAEHOTA は三重南部に1地点ある。この地点には148 図にもカクレホタとしてホタが現われる。ホタは遊びに関する形態素であろうか。OYAEGO から OBANGO までは、ともに五島に認められるもので、前の二つのオヤエはオワエにあたる形であろう。OBAENKO は、オワエコにあたる形と判断した。なお、「追う」にあたる語がオワエルとなる地域は『全国方言辞典』に挙げられている。この図のオワエの分布と比較すべきであろう。

BOIGOKU から BOTAKURIONKO までは、「追う」にあたる動詞ボウ・ボル等を背景に持つ同類であると考えられる。『全国方言辞典』によれば、「追う」を「ぼう」と言うところは、東北各地、新潟、北陸、長野、岐阜、愛知、京都、兵庫、山陰、広島となっている。この図では、全体としては北海道、東日本の日本海岸側、北陸、東海、山陰とかなりまとまった分布が見られ、「ぼう」の分布とはほぼ重なる可言えよう。BOIKO は秋田を中心に領域を持ち、宮城、山形、愛知にも各1地点見られる。秋田のもの多くと愛知のものは、ポイッコであった。BOINANKO は秋田・青森県境に2地点あるが、青森のものはポイナコであった。このナンコは、同地域の ONINANKO, OKKONANZYU と共通するところがある。BOIYAI は3領域に分かれる。北陸、東海、山陰である。BOIYAIKO は山陰にかなり広い分布を示し、このほか北海道、愛知に計3地点見られる。このうち、山陰のものには、ポイヤコが多く、ポイヤイコは3地点しかなかった。北海道、愛知東部のものはポイヤッコであった。これらをまとめて BOIYAIKO とした。なお、BOIYAI, BOIYAIKO は各々連母音を2組ずつ含んでいるが、これが地域によりさまざまに変化したものが多かった。特に愛知の BOIYAI には変種が多かったが、いずれも当該地域の規則的な変化と認められるのでみな一つにまとめた。BOIZYAKKO は北海道、秋田、山形に10地点認められる。この ZYAKKO は近くにある ONIZYOKKO (赤), CUKAMAEZYOKKO (草)等の ZYOKKO と関連があると考えられる。BOIBAKKO は秋田男鹿半島に3地点認められる。この BAKKO は、赤の ONDOBAKKO (富山)に共通し、あるいは ONIBOKKO, ONIMOKKO などとのつながりも考えられよう。さらに、148図のカクレボッコ(男鹿半島・富山等)、カクレボッコ(秋田、富山等)、あるいは、カクレマッコ(岩手、福島等)なども通ずる。BORIGEEKO から BORINEKKO まで、および、ONIBORI 以下 BORONKO までは、他の語形のポイに対してボリの現われるもので、北海道、青森、秋田に分布する。これには「追う」にあたるボウがボルとなることが背景にあると考えられる。この地方ではワ行五段活用の動詞がラ行五段化する傾向があると言われている。例えば、『日本言語地図』第2集76図「もらう」の図における、モラル(岩手・秋田北端から青森にかけて)の分布からもうかがうことができる。BORIGEEKO は青森

に4地点見られる。この GEEKO の具体的音声は [ŋe-ko, gæko, ŋekko] であった。148図に現われるこの形態素には、広いエの長母音が何地点も見られ、見出しには GEEKO と表記したが、さらに考えを進めれば、あるいは、KAEEKO という見出しにして、オニカエ等のカエと同じものとして扱うべきだったかも知れない。BORIONKO は青森と北海道に見られる。橙のオンコとつながりがあるろう。BOROONI, BORONKO は、ともに北海道にある。BORIONI, BORIONKO からの変化と考えられる。

BOTAKURIONKO のボタクリについては『全国方言辞典』によれば、「追う」の意味で「ぼたぐる」が東北地方にあると言うから、空の類とすることに疑いはあるまい。OPPAIKO 以下の空類は、はたして「追う」にあたる語を持つものかどうかは確かではない。おもな分布を記しておこう。OPPAIKO (隠岐), ONMA・ONMAGOTO (富山), BAE~ONIBAE (宮城、新潟), GARIGOTO・GARIGOKURA (能登)。後の二つについては『全国方言辞典』によれば、能登で「追う」ことを「がる」と言うとある。

草で示したものは、ツカマエ、ツカミという要素を持つ類で、岩手、近畿、雲伯地方、九州、沖縄にややまとまって見られ、そのほか北海道、福島、長野等にも何地点かある。『沖縄語辞典』によれば [kaçimi=jun] は「つかむ、つかまえる」とあるので KACIMIYEE, KACIMINSOOREE は草の類とした。その他のものは、後部分を赤のオニの類のそれと比較できるよう符号の形を合わせてある。それらの形態素の分布も、今まであげたものの領域に、ほぼ一致する。CUKAMINAKKO の後部分は、他のものと一致させれば NANKO とすべきだが、1地点しかなかったために、あえて NANKO にはしなかった。

緑の輪郭符号で示した類は、セメという要素を持つもので、山形を中心に分布領域が認められる。伊豆大島に SAME がある。セメと関係があるかどうかはわからないが一応ここに置いた。『全国方言辞典』によれば、「捕える」の意味で「しめる」が庄内(浜藪)にあるという。また、「せめる」は、「暴れさわぐ」の意味で岩手九戸、「せきたてる」として秋田北秋田、「いじめる」として島根鹿足などに見られるようである。「おにごっこ」の意味で適当なのは「しめる」(捕える)であろうし、庄内にあるという記録もこの図の分布と近い。従って、見出し表記

は SIME とすべきだったかも知れない。しかし、この図のセメ類の第1音節の具体的音声は、[e]が8地点、[se]が1地点、[Φe, Φse]が2地点で、[i, si]は5地点、[sũ]が1地点であった。見出しとしては量の多い SEME の方を採用したが、SEMEKURAKO 以下の四つは [simekurakko], [simebottjo], [imeraɔ-ti], [imerapoppo] が具体的な内容であったから、SIME とすることもできた。

緑のぬりつぶし符号で示した類は、オサエという要素を持つもので、ツカマエ、セメと共通の発想によるものであろう。岩手と山形とにそれぞれ分布する。山形には OSAEKURA が多く、岩手には OSAEKO が多い。

紺で示した中には、種々のものが含まれている。KAKURENBO から KAKUNENBO までは、148 図にも現われる語形である。KAKURENBO は近畿・北陸に6地点見られる。148 図と比較すればわかるように、これらの地点では、「おにごっこ」と「かくれんぼ」を区別していないということになる。他のものも、148 図と対照してみると、ほとんど両図の回答が一致する。5517.90 の KAKUREGO は、148 図とは異なるようになっているが、具体的には [kakurenoi] であった。この図では KAKUREGO にまとめてしまったので、違って見えるが、実は一致するものである。カクレンボの類だけを注目すれば、「おにごっこ」・「かくれんぼ」を区別しない地域は、北陸に集中する。しかし他の類をも対照すれば、この2種の遊びを区別しない地域はさらに拡がる。MEKURA から MEKURAONI までは、メクラという要素を含むもので、山形、能登、鳥取、高知、宮崎、甌島に計10地点見られる。MEKURAMOYAA は甌島にあり、この地点は148 図では KAKUREMOOZYAA となっている。MEKANKO と MEK-KANGO は語形は似ているが、能登と佐賀に各1地点あるだけで、地理的つながりは薄い。MEKKO は新潟西部に見られる。『全国方言辞典』によれば、「めくら」を意味する「めっこ」がこの地方にあると言う。MAKURI から MAKURIBABA までは、同類と認められる。分布も岐阜北半にまとまり、長野にもあり計7地点見られる。『全国方言辞典』によれば、「まくる」は「疾走する」として和歌山日高、淡路に、「ころがす」の意味で長野・近畿・島根などに、「捨てる」として奈良吉野、愛媛にそれぞれあるらしい。これらと「おにごっこ」とがど

う結びつくかはよくわからないし、分布にもあまり共通性はないようであるが、「疾走する」などは、さほど遠い意味分野ではないとも言えよう。最後に、無回答の分布に地域性があるように思われる。青森、秋田北部、宮城、能登、山口、愛媛西部、九州西・南部、それに琉球の各地域である。これらの地域では、他の語形にも強い勢力の分布が見られず、種々多様なものが混在している。無回答の多いことと関連があろうか。

以上が見出しおよびその分布のあらましの説明である。次にこの図から問題となる点を拾い出してみよう。

まず、この項目の質問方法が、はじめのところにも述べたように、細かいルールの違いを無視して、「おにごっこ」の総称を求めたことを挙げられよう。ここに、この図の上に現われた分布を見る際の一つの問題点がある。この点については、前段最後にのべた「無回答」に地域性の認められることも関係してくる。各調査地点における回答が、真に比較すべき平等のものであったかどうかには、多少問題がある。

次に考えるべきことは、各語形とゴッコ、ゴト、コ、ヤイコ等の形態素との関係であろう。148 図と比較すると、同じような形態素が、同じような地域に現われる。形態素の分布にも地域性が認められるのである。このような問題を考慮しつつ、この図から得られる範囲での「おにごっこ」にあたる語の歴史を探ってみよう。

関東に一領域を持つオニゴッコは、新潟・福島に広く分布するオニゴト、西側に見られるオニコを圧迫して拡がった新しい勢力に見える。オニゴッコの領域内にも点々とオニコ、オニゴトが見られることから、関東にもオニゴッコが拡がる以前には、オニコあるいはオニゴトがあったらしく見える。あるいはオニコとオニゴトとの混交によってオニゴッコ (<\*オニゴトコ) が誕生したとも考えられる。一方、関東以西を見ると、オニゴッコは東海地方や中部南岸、近畿周辺に見られ、分布の上からは新しいものとは考えられない。むしろ、オニゴトの方が広い領域を占め近畿一帯にも分布し、新しいものと考えられる。こう考えると、関東周辺のオニゴッコ：オニゴトの先後関係と、近畿一帯のそれとは逆になってしまう。この点については、次のように考えておく。近畿のオニゴト・オニゴッコの分布は各地で入り混っていることから、オニゴッコが拡がったあと、オニゴトがこれを完全に駆逐する形で拡がったのではなく、ある程度の共存を許しながら拡がったと考える。同じように、近畿

で勢力を持ったオニゴトが関東へ伝わり、広く拡がったときにも、オニゴッコは完全にオニゴトに駆逐されないで関東に残っていて、それが新しく標準語として力を得て拡がった。別に、東海地方・中部南岸・近畿周辺その他のオニゴッコは標準語の侵入と見る（どちらかと言うと辺地では「おにごっこ」という遊びが確立して、標準語を受け入れやすい基礎がある。あるいは、語形の類似するオニゴトがあって、特にオニゴッコを受け入れやすかった……など）。近畿一帯でオニゴッコも新しいとする考え方もあろうが、ここでは採らない。このほか、全国に点々と見られるオニゴッコは、標準語として、学校教育などによって拡がった新しいものであろう。この考えをさらに深化させるためには、他の遊びにおけるゴトやゴッコという形態素の分布一般についての知識が必要になろう。オンコ、オニゴの類は、東日本にオニコ、西日本にオニゴと分布が分かれる。オニゴのゴを連濁によるものと考えれば、この両者は歴史的につながりがあり、あるとき、中央から拡がったものの残存とすることができる。中部と東北両地方のオニコは、先に述べたオニゴトが拡がる以前には連続していたものであろう。広島島のオニゴはオニゴトより古いとするには海岸に寄りすぎているが、九州のものはオニゴトより古いと言えよう。

空の類は、先にオニゴトの説明でも述べたように、近畿の周辺部に拡がり、東は佐渡・秋田・青森と点々としたつながりを見せる。オニゴトよりは外側、オニコ・オニゴよりは内側に分布すると言えよう。オニゴトより古く、オニコ・オニゴより新しい時代に近畿から四方へ拡がったものの残存ということができようか。しかし、必ずしも、現在分布する語形そのものがおのおの中央で発生し、他を完全に駆逐しながら伝播していったと考える必要はない。「追う」にあたる語形をその内部に含むという特性が伝播していったものと考えればよい。たとえば、秋田のボイコは、中央からボイコとして伝わったのではなく、「追う」にあたる語形が伝播し、先にあったコという形態素と結合して、ボイコという形を生んだと考えればよい。これに対して小さい正方形の符号を与えたボイヤイ、ボイヤイコ等ヤイ(コ)を持つものは、東海・北陸・山陰に近畿を取り囲むように分布している。これなどは、あるいは中央からこのままの形で伝播したことも考えうる。

草のツカマエ類以下の各類については、全国的な視野からは全くその位置付けはわからないと言うほかはな

い。ただ、ツカマエ、セメ、オサエ等は、はっきりした動詞部分を要素に持つという点で、オイ、ボイ等の空類と、名称の付けかたの発想、あるいは構造に共通点が認められる。このような点に着目すると、草、緑と空とはたがいに近接した地域に分布しているようにも見えてくる。かつて、「追う」にあたる語を用いるという命名法が拡がったとき、それと相前後して「捕える」という発想法が伝わったものであろうか。また、一方、「追う」という発想に引かれて「捕える」という発想が各地で独自に発生したという可能性も否定はできない。

これは、先に述べた「おにごっこ」のルールの地方差と関連することである。総称のみを地図に現わしただけでは、流動的な「おにごっこ」の名称の歴史は、十分に捕えることができない。古い時代の「おにごっこ」のルールの別、あるいはそれによる名称の別を文献によってのみたどることはむずかしかりうが、各地方でそれがどのようになっているかを知ることとは不可能ではない。それらが詳しく調査されてはじめて、真の解釈に至ることができると言えよう。

#### 148. かくれんぼ(隠れん坊)

この図を作るにあたっての基本的な考え方は、147図「おにごっこ」の場合と全く同じである。見出しの立て方に147図よりわずかに詳しいところがあるが、語形の変種のまとめ方の原則は、147図の場合とほぼ同じと考えてさしつかえない。147図の解説のはじめの2節を参照されたい。

ただし、具体的な見出し語形およびその分布状況は、当然のことながら148図とはかなり異なる。

はじめに、色の与え方について述べる。この図に現われた語形のほとんどがその内部にカクレ(あるいはカクレン)という要素を含んでいるので、カクレに注目して類を考えることはあまり意味がないと言える。したがって、カクレ以外の要素に着目して符号を与えた。まず、赤で示したもののうちカクレンボ、カクレボッチ等、カクレ(カクレン)の後にB(あるいはP)で始まる要素を持つものを、一つの類と考えた。凡例の最初からKA-KUREPPUCIまでである。線符号や輪郭符号を用いて、他の赤類と区別した(カクレやカクレンの後ろにB・Pで始まる要素を含むものでも、例外はある)。KAKU-RENKO以下の赤の類は、カクレンコ、カクレゴ等、



カクレやカクレンの後ろにKあるいはGで始まる要素を持つものをまとめた。ただし、それほどまとまった分布を持たず、まとまった領域を持つものとも関連のなさそうなもの(例えば、カクレクラ等)は、他の紺などで示したものもある。緑は、カクレの後にMで始まる要素を持つもの、あるいはこれに準ずると解釈されるものである。紺で示した KAKURESAGO 以下 KAKURE までは、上のもの以外でカクレという要素を持つ類である。茶で示したものは、カクネという要素を持つものである。空で示したものは、オニという要素を持つ類である。OINANGO から KAKUREBAE までは「追う」にあたりと考えられる要素を持つものである。草の類は、カガミ、カゴミという要素を持つものである。

次に、凡例の順序に従って、各見出しの分布等について、問題を含むものをおおまかに説明する。

KAKURENBO は、近畿を中心として一領域を持つ。そのほか全国に見られるが、東北地方、道南にやや少ない。KAKUREBO は東北地方、北陸、九州南部に数地点見られる。カクレンボは、この図に現われる諸語形のうちで、もっとも新しく拡がったものと考えられる。中国・四国以西のカクレンボも、近畿の広い分布を背景に東から浸透したものであろう。カクレンボは標準語と考えられるにもかかわらず、東日本、とくに関東一帯にあまり目立った分布が見られない。とりわけ、東京周辺には、カクレンボ以外の語形が勢力を張っている。カクレンボは、東京ではそれほど古くから勢力を持っていなかったものと考えられる。

KAKURENBOCCI から KAKUREBOCCYA までは、かなりまとまった分布を示す。秋田・山形を中心とする地域のほか、中部地方などにも見られる。これら、後部分にボッチ、ボッチョ、ボッチャという要素を持つ類は、ある時代に同じ源から生まれた結果であると考えられるが、西日本に1地点も見られないことから、近畿中央から拡がったものかどうかの確証はない。KAKUREBECYO, KAKUREBESO は、青森、佐渡、宮城に3地点認められる。KAKURENBOKKO, KAKUREBOKKO は秋田、宮城、富山、長野に、計5地点見られる。秋田、新潟、富山に3地点ある KAKUREBAKKO とともに、緑のカクレモッコ、カクレマッコと、後部分の語形の上からも分布の上からも、通ずるところがある。KAKURENBOOSI から KAKUREBOOZU までは福島、佐渡、島根に点在する。後部分は

「法師～坊主」にあたる形であろう。さきに示した KAKURENBOCCI ないし KAKUREBOCCYA までと関連することは当然であろうが、そのほか発想が共通するものに、宮崎、青森の KAKUREKOZOO, KAKUREHOOKO がある。『全国方言辞典』によれば、「人形」の意味で「ほーこ」が山口にあると言う。関連があろうか。

カクレコ、カクレゴの類はややまとまった分布を示している。KAKURENKO は東北地方の太平洋側に多く、KAKUREKO は秋田を中心とする地域と、長野・山梨・関東を中心とする一帯、山陰、高知などに分布が見られる。KAKUREKO はカクレコとカクレッコを一つにまとめたもので、秋田、中部・関東には概してカクレッコの方が多かった。KAKURENGO は中国地方にやや多く、九州西部、伊豆大島などにも認められる。KAKUREGO は中国・九州に広く分布するほか、奄美にも見られる。これらの後部分 KO・GO について147図と比較すると、この図の方が分布領域がやや広いと言えよう。KAKURENGYO は、熊本に3地点認められる。同地域に見られる KAKURENZYO, KAKUREONIZYO 等と、後部分について音の類似が認められる。147図の解説でオニコ、オニゴを同類と認めたように、ここでもカクレコ、カクレゴ等一つにまとめて考える。これらは近畿のカクレンボの両側にあり、古くはカクレンボの地域にもカクレコ、カクレゴが分布していたことを示すのであろう。KAKUREGOKKO はオニゴッコの場合と違って、東日本にやや多い程度で、目立った分布を示さない。KAKUREGOKU は岡山に3地点ある。後部分に GOKU を持つものは、このほか淡路に ONIGOKU が1地点あるだけで、147図と比較すると、その分布領域は狭い。『全国方言辞典』によれば、「はしりごく」が「走りっこ」の意味で、岐阜、滋賀、和歌山、大阪、京都、徳島、香川にあると言う。別な遊びではゴクは、ちがった分布を示すようである。KAKUREGO+KU と考えるべきものかも知れない。KAKUREGEEKO, KAKUREGEECYO は同類と考えられる。後者は宮城に1地点あるだけであるが、前者は青森・岩手・宮城にかなり見られる。これらの後部分の内容は、ゲエコ、ゲコ、ゲッコ、ゲエッコ等であったが、一つにまとめた。EEにあたる母音は、例外なく(長短のちがいはあっても)広い[e]あるいは[æ]であった。対応を求めれば、AIないしはAEにあたるも

のと考えられるが、見出しとしては **EE** とした。**KAKUREGAKKO** は、岩手・宮城・福島に見られる。**GAKKO** の部分は、ガッコ、ガアコ、ガコ等の変種をまとめたもので、ガッコが最も多かった。**GAKKO**、あるいは上の **GEEKO** の中に、数地点 **G** の部分の音が [g] であるものがあつた。**KAKUREKANKO** は、岩手、宮城、福島、千葉に散在する。**KAKUREKAKKO** は岩手・宮城に計 8 地点見られる。**KAKUREKANGO** は宮城に 1 地点見られるだけであるが、**KAKUREKAGO** は岩手、宮城、山形にかなりまとまって分布し、青森、北海道にもある。**KAKUREGE-EKO** から **KAKUREKAGO** までは、後部分に共通性が認められること、分布もだいたい同地域内にまとまっていることなどから、一つの類と考えることができ、歴史的にも近接した関係にあるものと考えられよう。他の地域に類似の形態素が見られないことから推して、この地方独特のものと考えられる。**KAKUREKANBO** (山形・福島)、**KAKUREKABO** (山形) は、上でひとまとまりと考えたものと、分布は近いが、語形の上では少しはなれよう。次の **KAKUREKONBO** (高知・大分)・**KAKUREKONBA** (兵庫) と、語形の上では共通性が認められる。

**KAKURENGOTO** から **KAKUREGOCYA** まではカクレゴトの類と考えられる。新潟、北陸、近畿南部、中国、九州北部等にややまとまって分布する。この後部分コトは、147 図ではオニゴトとしてかなり強い分布を示していたが、この図ではあまり多くない。**KAKUREGONCYOO** は新潟に、**KAKUREGITTA** は滋賀にそれぞれ見られる。カクレゴトは、分布が近畿のカクレンボの両側に分かれていることから、カクレンボの拡がる以前には、中央でも使われていた語と考えられる。しかし、一方、この後部分コトは 147 図でオニゴトという語形に含まれて、かなり広く分布する形態素であり、この図でコトの分布する地域は、147 図でオニゴトの分布する地域に含まれる。「おにごっこ」・「かくれんぼ」以外の語にもコトという形態素が力を持つことは当然考えられるが、カクレゴトという語形は、たとえばオニゴトのような勢力の強い遊びのコトの影響によって、各地でそれぞれ独自に生み出されたということも考えられる。

緑で示したものは、後部分が **M** で始まる点に着目して一色を与えたものである。したがって、音声的には、

さきに示した **B・P** ではじまる要素と、通ずる場合がありうる。まず、**KAKUREMON** から **KAKUREMAKKO** までをひとまとめとして考えた。**KAKUREMON** (長崎)、**KAKUREMONKO** (岩手)、**KAKUREMONGOO** (鹿児島) は各 1 地点であるが、**KAKUREMOKKO** は岩手、福島、新潟、富山、鹿児島に計 8 地点見られ、**KAKUREMAKKO** は岩手、福島に計 9 地点認められる。これらの後部分は、赤のポッコ、バッコ等と語形の上で相通ずるところがある。とくに、富山ではモッコ・ポッコ・マッコ・バッコ等が一地域に分布していて、これらが近い間柄にあることを示している。しかし、モッコ・マッコとポッコ・バッコとは、富山を除いて分布が接しているところが見出されず、これら両類の間に発生的につながりがあるかどうか確言できない。これらの後部分、とくにモッコは、いくつかの地域に分かれて分布する。分布からは、かつて中央でも用いられていたものの残存と一応考えられるが、確かなところはわからない。

**KAKUREMODOSI** から **KAKUREMOOZOI** までと **MODOKAKURE** から **MOOZOOKAKURE** までとは、語形の類似から同類と考えられる。**KAKUREMOTO** が富山に見られる以外は、九州東南部に集中して分布し、各語形間の相互の関係が近いことを示している。これらと語形の上からは、関連のうすいものであるが、**KAKUREMONZYO** が佐賀、熊本に、**KAKUREMOOZYAA** が甑島に、**KAKUREMOOMO** が長崎に、**MOOKAKURE** が鹿児島にそれぞれ見られる。このほか、**MOOYOO** が小豆島、**MOO** が熊本にある。『全国方言辞典』によれば、「お化け」を意味して、「もー」が東北、北陸、対馬等に、「もーも」、「もーもー」が富山、静岡に、「もーや」が香川にそれぞれあるという。これらとこの図に現われるものとは分布は必ずしも近くないが、語形の上では関連があるように見える。また、147 図にも、モオ・モオモなどを含む語形が同じような地域に現われる。比較すべきであろう。**MOZYANKO** (鹿児島) の **MOZYA** は、**KAKUREMOOZYAA** の **MOOZYAA** とつながりがあるだろうか。**KAKUREMAIDO** は三重に 1 地点見られる。この地点は 147 図ではただの **MAIDO** である。**KAKUREMADO** は大分に 1 地点ある。カクレマイトに語形の上では似ているが、分布からはむしろ、カクレモド等に近いものと思われる。**KAKUREMOCI** は新潟に 6 地点ある。この

後部分 MOCI は赤で示したカクレボッチの類の後部分 BOCCI と分布の上でも連続し、つながりがある。

KAKURESAGO 以下 KAKURE までは後部分がさまざまである。147 図と比較して共通する後部分については、両図で符号の形をなるべく合わせたので対照されたい。KAKURESAGO は、福島北部を中心に 8 地点、牡鹿半島に 1 地点ある。147 図オニサゴ等とは分布が重ならない。KAKURENANKO, KAKURENAKO は、秋田西北端、青森に見られる。KAKURENANGO は九州各地に 5 地点ある。これらナンコ、ナンゴ等の後部分は、147 図にも（地点は必ずしも一致しないが）、同地域に分布する。KAKUREKURA から KAKUREKORO までは、後部分に、クラ（「比べ」に由来するか）を持つ類と考えたが、分布は必ずしもまとまっていない。147 図に現われるクラとも分布の上からは、ほとんど関係がない。KAKURENZYO は熊本に 1 地点ある。この後部分 ZYO は隣接して分布する KAKURENGYO の GYO と、あるいは KAKUREONIZYO の ZYO などとも、形の上で通ずるところがある。KAKUREZYOKKO は青森、秋田に分布する。この後部分 ZYOKKO は 147 図では青森には少なく、岩手に数地点分布し、両図の間で分布領域のずれが見られる。KAKUREZYAKKO は山形に 1 地点ある。この ZYAKKO も 147 図では秋田に多くあり、両図の間で分布がずれる。この ZYAKKO は、さきに述べた赤のガッコ等とも通ずるところがある。KAKUREKANZYOO は神奈川南部伊豆に 4 地点、大分に 1 地点見られる。後部分 KANZYOO は「勘定」・「勧請」のいずれかにあたるものであろうか。遊び方あるいは遊びの起こりに由来する名称であろう（なお、「勘定」については、第 2 集 69 図「かぞえる」を参照）。KAKUREYAI（兵庫、種子）、KAKUREYAANO（老岐）、KAKUREYAIKO（兵庫、鳥取、島根、広島）は、語形の類似から形の似た符号を与えた。KAKUREYAIKO はややまとまった分布を示す。実際はカクレヤコというのが多かった。KAKURESYO は群馬に 1 地点ある。茶のカクネシヨと、後部分で共通する。KAKUREHOTA は三重南部にある。この地点は 147 図にも後部分に HOTA が現われる。

KWAKKWINTOORUU から PYOOMARI～までは、高知に 1 地点ある TOMEEKAKURE を除いて、みな奄美・沖縄に見られるものである。KWAKK-

WINTOORUU（沖縄本島）、TUUMIGAHHWI（宮古）、TUMEEGAKKUU（沖縄本島）は、この見出しに含めた具体的な語形の変種が少なかったが、他のものについては、かなり大まかにまとめた。それらの詳細については『日本言語地図資料』に記録されている。これらのうち、多くの語形の変種をまとめたものの内容をここに列挙しておく。

KAHHWIDUUMI : kaΦΦidu:mi (2068.08), ka-ΦΦidumi (2150.06), kaffidum (2151.67), kafidumi (2151.64), kafuri:du:mi (2150.07, 2150.17), kaffitu: (2140.96), kaΦΦimunu (2140.49)

KUMARI～ : kumarukkuna (2085.69), kumarukk'o: (2076.97), kumari'koi (2075.22)

PYOOMARI～ : pjo:marigokke: (2076.96), pjo:marukuna: (2076.96), pjō:renkotto (2086.03), p̄morikuna: (2076.99), p̄mariasipi (2095.60), pe:murigokko (2067.52), pe:maruguina: (2076.25), pe:muru'kuna: (2076.98)

KAKU(R)I～, KAKKI～, KAKKU～は、それぞれの前部分に「カクレ」にあたる要素を含むものをまとめたものである。後部分はさまざまで、他と比較すべきもの、あるいはまとまった分布のあるものがなかった。KAHHWIDUUMI, TUMEGAHHWI のカフフィも、カクレにあたる形と考えられる。『八重山語彙』によれば、「クマリックナイ」は「こもりくら（籠籠）」の義とある。同じく『八重山語彙』によれば、「かくれんぼ」にあたる「ピョーマリィ・ゴッケー」のピョーマリィは「ひそ（潜）まり」にあたる。これを参考にして見出し語形としては、PYOOMARI～を一応採用した。なお、『全国方言辞典』によれば、「とめる」が「たずねる・探す」の意味で、播磨・出雲・土佐・南島などにあるという。TOMEE, TUUMI などは、「たずねる」の意味を持つものと考えられる。

茶で示したものは、今まで諸語形のカクレにあたる部分がカクネとなる類である。後部分がカクレの類のそれと一致するものは、それぞれ符号の形を合わせた。ほとんどが関東に分布して、長野その他にも見られる。この地域独特のものであろう。このカクネという要素は、これらの地方で「隠す」をカクナス、「隠れる」をカクネルと言うことを基盤としてできあがったものと考えられる。そのような現象の分布する地域を詳しく知りたいものである。

空で示したものは、オニという形を含む類である。ONI から ONISARA までは 147 図にも現われる語形である。分布する地域は 147 図の場合とほぼ並行するが、全国的に見ると、ほとんどの語形はまとまった分布を見せない。ONIGOTO は新潟、近畿南部にややめだつ。ONIGASAGE は愛媛西部にあるが、147 図には現われない形であり、この地点は 147 図では無回答となっている。ONKODOI から ZYAANOKODOI までは、いずれも九州西部に見られ、分布する地点は 147 図のものとは完全に一致している。ONIMOKKO (富山・岐阜)、ONIBUKURI (山形)、ONIZYO (熊本)、ONISARA (愛媛) は、147 図のものとは必ずしも一致しないが、地域としてはほぼ重なる。KAKUREONI は、新潟、関東、島根、九州北半にやや多く見られる。KAKUREONKO は道南を中心に分布し、青森にも見られる。147 図では、道南にはただの ONKO が分布する。この図の KAKUREONKO は、これと対応しているわけである。KAKUREONIGO (九州)、KAKUREONIGOTO (新潟・和歌山・大分)、KAKUREONDOI (鹿児島)、KAKUREONIZYO (佐賀・長崎) 等の分布する地点でも、147 図には、ほとんどそれぞれ対応する ONIGO、ONDOI 等が分布する。これら空で示したオニを持つ類は、いくつかの地域に分布するが、これらがそれぞれ中央から伝播したものかどうかはよくわからない。147 図で強い勢力を持つオニという形態素が、この図の「かくれんぼ」の意味にまで影響を及ぼしてきたものかも知れない。

OINANGO から KAKUREBAE までは、「追い」にあたる形態を含むと考えられる。「かくれんぼ」の動作に追いかける部分があるのかどうかよくわからないが、OYAEKORO (五島)、BOIYAI (富山) は、147 図と一致する。OINANGO は鹿児島に 2 地点あるが、833L12 の地点は、147 図では無回答である。KAKUREOKKO は青森に 7 地点見られる。これらの地点では 147 図に必ずしもオッコが現われるわけではない。KAKUREOIMO (鹿児島)、KAKURENBOIYAI (愛知)、KAKUREBOIYAIKO (鳥取)、KAKUREBAE (新潟) の地点でも、147 図にカクレ部分を除いたオイモ、ボイヤイ等がそれぞれの地点にあり、両図の間に対応が見られる。

草で示した類は、カガミコ、カゴミコ等、カガミ、カゴミという要素を持つ点に注目してまとめたものである。

『全国方言辞典』によれば、「かがむ」・「かごむ」はこの図の当該地域では、「かくれる」を意味するらしい。KAGAMIKO から KANMEKOKKO までは、千葉に集中する。これらのうち、KANMI、KANME は、KAGAMI、KAGAME からの音変化の結果生じたものであろう。この地方では、語中の G は [ɣ] となる。母音間の k が脱落する現象と並行的に、この [ɣ] も摩擦が弱まり、KAAMI を経てその後 KANMI となったものであろう。KAGOMIKAGOMI から KAGONGOTO までは九州西北部に点在する。また、沖縄粟国に 1 地点 KAGAMEE がある。

伊豆新島の KAZIMINBO、KAZIMINGO の KAZIMI についてはよくわからない。『全国方言辞典』を見ると、「手足などをかがめる」意味で「かじめる」が淡路・高知・石見にあり、「かじむ」が「かじかむ」の意味で埼玉川越・高知にあるという。これらと関連させて考えれば、さきの草で示したカガミ、カゴミと通ずるところがあるか。MEKURANBO から MEKURONIGOTO まではメクラという要素を持つ類を集めたものであるが、分布の上には特徴的なものは見られない。147 図にも似たものが現われるが、地域的には関連がうすい。SEMERABOCCI は山形(4619.63)にある。147 図にも同じ語形が現われるが、少し北へ寄った 4609.54 であり、地点にずれが見られる。KETTA から KETTAN までは四国と長崎にあり、語形の類似如同類と考えられる。147 図にも似た語形(KITTA、KETTAONI)が現われるが、地域は重ならない。KAKKEGO (屋久)、KEEKKO (種子)、KAKUGORI (能登) は、それぞれカクレにあたる形を含むようにも思えるがよくわからない。能登のものは 147 図でも同地点に現われる。このゴリは 147 図に現われるガリゴト、ガリゴクラのガリ(「追い」にあたると考えられる)と関連のあるものではなかろうか。NABUREKO から MANDARIKO までは、八丈島に見られる。凡例最後の無回答についてみると、147 図と異なり、ほとんど現われず、地域性も見られなかった。

以上、各見出しの説明およびそれらの問題点を述べたわけであるが、最後に、両図を通しての問題を拾ってみよう。

ひとつは、両図を通して共通な形態素が同じような地域に分布するという点である。各地点にどのような形態素があるかについては、別に詳しい地図を作ってみる

必要があり、それは別の機会にゆずるが、例えば、ナンコ・ナンゴが、東北、新潟、九州に分布する。「おにごっこ」の意味で、オニナンコ・オインゴ等が中央からあるとき伝播し、他方、これと全く無関係に「かくれんぼ」の意味で、カクレナンコ・カクレナンゴ等が別のあるとき中央から伝播して、その結果、たまたま、東北、新潟、九州にナンコ・ナンゴの分布が見られるようになったということは、ちょっと考えられない。オニナンコとカクレナンコとの間には当然何らかのつながりがあったと考えるべきであろう。その場合、あるとき中央でオニナンコ・カクレナンコの2形が生じ、その二つが相伴い対となって伝播し東北にまでたどりついたと考えるか、「おにごっこ」「かくれんぼ」という遊びの伝わる以前からナンコ・ナンゴという形がこれらの地方にあり、そこへオニヤカクレという要素を持った語が伝わって、在来のナンコ・ナンゴと結びつき、それぞれの地方でオニナンコ、カクレナンゴ等の語を生んだと考えるか、あるいは、オニナンコ(またはカクレナンコ)という語形が中央から伝播し、そのナンコが、別の経路によって分布したカクレ(またはオニ)と結合して、各地でカクレナンコ(またはオニナンコ)という形を生んだと考えるかは、むずかしいところである。これら各地に見られる形態素が、それぞれの地域で、「おにごっこ」「かくれんぼ」以外の遊びの名付けにどのような力を持っているか、また、それがどのような分布になっているかを詳しく調べた上でないと、真実のところはわからないと言ふべきであろう。

次に、これも両図を各地点ごとに対照してみないと正確なところはわからないが、「おにごっこ」・「かくれんぼ」をどのような語で言いわけしているか、あるいは言いわけしていないかという問題がある。両図の分布の説明のところでもところどころふれたが、例えば、148図における空のオニ類、OINANGO等「追い」にあたる形態を持つ類などの中には、147図と語形が全く同じものがある。つまり、「おにごっこ」と「かくれんぼ」とを、語として区別しない地方がある。地域をたどれば、東北地方の一部、北陸、山陰、九州等に比較的多く見られる。東北の大部分、関東、中部、近畿、中国、四国等では、両者は区別されている。とくに、近畿一帯では、一方をオニゴト・オニゴッコ、他方をカクレンボと、共通部分の全くない二つの語で区別している。このことから、両者を区別しない言い方は古いものの残存と考えることがで

きるかも知れない。言いかえれば、古くは、今のような「おにごっこ」・「かくれんぼ」の区別は、それほど明確ではなかったものと推定される。あるいは、「おにごっこ」に無回答が多いことから、古くは「おにごっこ」にあたる遊びは無かったのではないとも考えられる。質問の順序は「おにごっこ」の方が先であった。「おにごっこ」の方を後で質問して無回答となったのなら、「おにごっこ」と「かくれんぼ」とを区別しないことを示すとも考えられるが、先に質問した方が無回答となっているのであるから、むしろ「おにごっこ」にあたる遊びが無い、あるいは名前を持つ段階に至っていないと考える方がいいであろう。さらに、このことは、147図の解説にも述べたように、これらの遊びのルールの変種、あるいはそれらの変種に対する名称の与え方の構造のちがいという問題とも関連してくることである。

#### 149. かたぐるま(肩車)—一般的な名称

#### 150. かたぐるま(肩車)—特殊な名称

この項目は、いわゆる方言量が多く、回答された語形が多様であり、また、1地点だけの孤立的な語形がかなりあった。そのため、1枚の地図にすべての見出し語形を記載すると、まとまった分布のない孤立的な語形については、その符号の位置を地図上に捜し出すことが困難になり、また、見出し数が非常に多くなるなどの障害が生ずるので、この項目については、その内容を149図と150図の2枚に分けて示した。149図には、比較的広い地域にわたってまとまった分布を示す類の語形をのせ、それ以外の比較的孤立的な語形は150図に記載した。

まず、149図について説明しよう。この図における色の与え方は、原則として、それぞれの語形の語頭の形によって行なった。たとえば、KATA(KKO)・KATA-UMA・KATAKUBI などには橙、KUBI(KO)・KUBIUMA などには空、BI(N)BI(N)KO・BE(N)BE(N)KO・BIBI(N)KUBI などには紺、UMA-NOKUBI などには赤、TENGURUMA・DEDEKATA などには緑、TANGURUMA・CYONNOKUBI などには草の色をそれぞれ与えた。それぞれの色を与えた語形のグループを、ここでは、カタ類、クビ類、ビビベベ類、ウマ類、テン・デン類、タン・チャン・チョン……類とよぶことにする。また ~UMA・~MA・~MAI・

～KUMA・～GURUMA など、各語形に共通にみられる後部分の形は、符号の形によって区別した。後部分の形と符号との関係のうち主なものについて説明すると次のとおりである。

～UMA・～MA・～MAI ……ジッポのついた正三角形

～KIUMA・～KIMA・～KIMAI ……ジッポのついた凹形

～KUNMA・～KUMA・～KUMAI ……ジッポのついた凹形

～KONMA・～KOMA・～KOMAI ……ジッポのついた正方形

以上のそれぞれについて

後部分が UMA・KIUMA・KUNMA・KONMA であるもの……ジッポが下向き

後部分が MA・KIMA・KUMA・KOMA であるもの……ジッポが左向き

語末が MAI であるもの……ジッポが右向き

～GURUMA ……円形またはその下に2本足のついた形

～GURUMAI ……円形の右側に2本足のついた形

～KOROBA・～GOROBA ……正方形の下に2本足のついた形

～KUBI ……Y字形

～KATA・～KACYA ……いちょう形

～BONBO ……小さい平行四辺形

～NORI・～AGE など、後部分が動詞から転じた形のもの……線符号

以上のほかにも、後部分について一定の形の符号を与えたものがあるが、それらの一つ一つについては凡例によってみられたい。

次に、それぞれの見出し語形の内容について記す。

KATO(O)MA・KATA(KKO) のように見出しにかっこ部分を含むものは、それぞれ、KATOMA と KATOOMA・KATA と KATAKKO とをまとめたものである。

KATAUMA・KATAKIUMA・KUBIUMA・UMA(KO) のように見出しを UMA としたものは、ウマ ([uma][uma][ūma] など) とンマ ([mma][<sup>m</sup>ma] など) とをまとめたものである。ただし、琉球に分布するものについては、表記が [‘ma][ma:] であるものも UMA の中にまとめている。KATAKUN-

MA・KUBIKINMA など、見出しを NMA としたものは、あるいは UMA としてもよかったのだが、内容が～ンマのみであり、～ウマが含まれていないので、この見出しとした。なお、KATAKUMA・KUBIUMA の中には末尾音節の子音が [b] のものも含まれている。なお、奄美における UMA(KO) の内容は [‘ma][‘ma’kwa][umaggwa] であり、同じく UMA(KO)-NORI の内容は [man’ka:nuri] [‘ma’kwa:nuri] [‘ma:nuji] などである。

KUBIKONMA・KUBITA(KO)・KUBITAMA(KKO) の中には KUBI の BI にあたる部分の音節が [pi] のものも含まれており、KUBI(KO)・KUBI(KO)NORI の中には BI にあたる部分が [bu, bo, pi, pu, n~ŋ] のいずれかであるもの、KU にあたる部分が [ko] のものなどを含んでいる。KUBI の BI にあたる部分が [pi] であるものは、岩手内陸部と宮城北部とに集中的に見られる。

なお、以上の諸点に関する具体的な詳細は、『日本語地図資料』を見なければならない。

この項目は標準語の「肩車」にあたる名詞形を求めたものであるが、回答の中にはカタクマニル・カタグルマスル・カタンノスックピコニノセルなど、名詞(助詞)+動詞の形がかなりあり、これらは、それぞれ名詞の部分のみをとりあげ、KATAKUMA・KATAGURUMA・KATA(KKO)・KUBI(KO) などの中を含めた。

BI(N)BI(N)KO はかなり多くの変種をまとめてあり、その中に、ビビ・ピンビ・ビビン・ピンピン・ビイビイ・ビビコ・ピンビコ・ビビンコ・ピンピンコ・ビイピンコ・ピンコなどのほか、ピンブク・ピンビク・ピンビキなど、BI にあたる音節が [bu] であるものや、末尾音節が [ku, ki] のものを含んでいる。ブンブクチャガマ(6356.98)もこの中に含めた。BE(N)BE(N)KO も同様に、ベンベ・ベベン・ベベコ・ベンベコ・ベベンコ・ベンペンコなどをまとめたものであるが、BI(N)BI(N)-KO の場合のような母音部分の変種は含まれていない。これらの変種の一つ一つについて見出しを立てることは、分布からみて妥当ではないと判断されたので、このように大まかなまとめ方をした。これらの詳細についても、具体的には『日本語地図資料』を見なければならない。

次に、各類およびそれぞれの類にまとめた見出し語形

のうち、主なものについて、その分布をみて、それぞれの歴史について検討してみよう。

クビ類(空)は、北海道海岸部・東北・中部・隠岐・四国南部から紀伊半島南部にかけてなど、周辺地域に多くみられ、本州と四国とを合わせた地域では、テン・デン類(緑)やカタ類(橙)よりも古そうである。しかし、東北に広くみられる KUBI(KO)NORI などは、主として長野以西に分布する KUBIUMA とは無関係に、独自に発生して拡がったものかも知れない。というのは、東北各地にみられる KUBI(KO)の中には、クビッコニノセル・クボコサノサル・クビサノルなど、その内容が～ノセル・～ノサル・～ノルであるものを多数含んでおり、それらが KUBI(KO)NORI の発生と密接な関係をもつものかも知れず、この種の発想は各地で独自に行なわれやすいとも考えられるからである。

しかし、福島などに分布のある KUBI(K)KOMA・KUBIKONMA などは後部分が KOMA・KONMA であり、西日本の KUBIUMA とつながるものかも知れない。福島は牡馬をコマまたはコンマという地域である。しかし、あるいは KUBIKO+UMA(または MA)であるかも知れない。少なくとも中部以西では KUBIUMA が KATAKUMA・KATAGURUMA・KATAUMA などのカタ類(橙)や TENGURUMA よりも古く、各地にみられる KUBIUMA は、中央から伝播したものの残存と考えられる。東日本に分布するものについてはまた、後に述べるところがある。

カタ類(橙)は北海道から琉球までの広い地域に分布しており、その中で、KATAUMA・KATAKUMA・KATAGURUMA などが比較的まとまった分布を各地でみせている。

KATAUMA は、栃木・千葉と茨城南部・長野北部・山梨と静岡・滋賀東部と岐阜南部から愛知にかけて・京都北部・三重の志摩半島・徳島東南部・長崎北部から佐賀にかけてなどに比較的まとまった分布を示し、本州では新潟北部を北限として、どちらかといえば、中央部よりも周辺部にみられる。分布からみて、カタ類の中で、KATAUMA は KATAKUMA や KATAGURUMA よりも古いものであろう。

KATAUMA と TENGURUMA とではどちらが古いであろうか。西日本では、この点についての判断を分布から求めることは困難である。東日本では、関東を中心にしてみると、東京・埼玉などに KATAGURUMA

が集中し、その外側に TENGURUMA が、さらにその外側に KATAUMA が分布するから、KATAUMA が TENGURUMA よりも古いと言えそうである。東西両地域における変化が相互に関係があるとするならば、西日本でも KATAUMA の方が古いといえることになる。中部以西において最も古いと考えた KUBIUMA が分布する地域のうち、岐阜および四国では、KUBIUMA のすぐ内側に KATAUMA が分布していることも、西日本で KUBIUMA の次に生まれたのは KATAUMA であることを意味しているのかも知れない。ただしこの地域の KATAUMA は、KUBIUMA と KATAGURUMA あるいは KATAKUMA とに挟まれて分布しているから、この中には、両者の混交の結果生まれたものが一部に含まれているかも知れない。

KATAKUMA はカタ類の中で最も勢力が大きく、近畿を中心に中国東部・四国北部へ拡がり、静岡と福岡とにも、それぞれまとまった分布がみられる。この分布からみて、KATAKUMA は、中央に発生し各地へ伝播したとみられる語形の中で、最も新しい勢力であると考えられる。静岡・福岡の KATAKUMA は、ある時期に直接中央からもたらされて拡がったものであろうか。なお KATAKUMA は『日葡辞書』に Catacuma としてみえており、室町末頃にはすでに中央で用いられていたようである。

KATAGURUMA は東京・埼玉に集中的にみられるほか、北海道内陸部・関東北部から東北にかけて・長野・静岡・愛知北部から岐阜南部にかけて・三重西部から奈良東部にかけて・和歌山東南部・岡山北部・愛媛西部などにややまとまった分布を示している。関東の KATAGURUMA は中央部に集中しており、東日本では最も新しい勢力とみられる。これらは KATAUMA と TENGURUMA との混交の結果生まれたとも考えられるが、あるいは西日本の KATAGURUMA がある時期に関東に移入され拡がったのかも知れない。北海道・東北のものは関東で発生した語が伝播したのであろう。近畿の KATAGURUMA は KATAKUMA をとりまく形で分布しており、KATAKUMA より古いものであると考えられる。中央に KATAUMA が用いられていた時期に TENGURUMA が発生し、両者の混交により KATAGURUMA が生まれたのであろうか。

KATAKIUMA・KATAKIMA・KATAKIMAI・

KATAKONMA・KATA(N)KOMA・KATAKUNMA・KATAKUMAIなどはKATAKUMAと語形が類似し、またKATAKUMAの近くに分布する場合が多い。KATA(N)KOMAの内容は、栃木に分布するものは4地点ともカタコンマであり、それ以外のもの、すなわち近畿のものは、すべてカタコマであった。近畿のカタコマはKATAKUMAの中に点々と分布しており、それぞれ独自にKATAKUMAから変化したとも考えられるが、あるいはKATAUMAから転じてカタコマとなったものもあるかも知れない。柳田国男「肩車考」や前田勇『上方語源辞典』では、カタクマはカタコマ(肩駒)から転じたものとの考えを示しているが、分布からみて、カタコマがKATAKUMAより古いとはかならずしもいえない。むしろ、兵庫・岡山・愛媛・徳島に計7地点みられるKATAKIUMAが、KATAKUMAの周辺に分布し、音声的にも類似するところから、これがKATAKUMAを生む母体であったかも知れない。栃木のカタコンマは福島はKUBI(K)KOMA・KUBIKONMAに隣接しており、これらとの関係も考慮すべきであろう。

TENGURUMAは、すでに述べたように、KUBIUMAやKATAUMAよりも新しく、KATAGURUMAやKATAKUMAよりも古いものと推定される。TENGURUMAは手車の転じたものと考えられ、手車とは2人あるいは数人の者が手を組み合わせその上に人をのせる遊びをいったらしい。狂言にその意味での手車の用例がみえ、現在でも、その意味でテングルマの語を用いる地域は各地にあるようである。したがって、中央でも、「肩車」の意味でTENGURUMAが用いられる以前に、別な意味ではこの語がすでに用いられていたのかも知れない。TENGURUMAは本州各地に大きな勢力をもっている。東日本についてみると、緑のぬりつぶし符号で示したデン類が、緑のぬき符号や半ぬきの符号で示したテン類をとりまく形で分布しており、デン類がテン類よりも古そうである。佐渡のTENGURUMAなどはデン類の外側にあるが、これらはある時期に関東から直接はいったものであろうか。デン類の中ではDENGURUMAの勢力が最も大きく、宮城南部、新潟から群馬・長野・富山にかけて、愛知から静岡・神奈川にかけての地域に分布する。DENDENGURUMAは宮城・福島の県境付近と愛知西部など、デン類の両端に集中的に分布するほか、新潟と茨城とに1地点ずつみら

れる。ODENGURUMAは宮城・山形・両県南部に、DENGURUMAIは新潟・佐渡・富山にそれぞれまとまった領域を持っている。そのほか、DENDEN(愛知)・DENDENKAGURA(新潟)・DENDENKAKKA(青森・岩手)などの語形がみられるが、これらの中には、祭りの囃子や、太鼓の音などへの連想によるものがあるかも知れない。いったいにこの項目にはこの種の擬声語的な表現が多くみられ、それらは擬声語の類として149図・150図を通して一定の符号を与えてある。

これらの分布から、東日本では次のような歴史が考えられる。ある時期に、DENDEN・DENDENKAKKAなどデン～の語形が分布していたところに西日本からKATAUMAがはいり、さらにTENGURUMAがはいってきて、各地でDENGURUMA・DENDENGURUMAなどの語形が生まれたが、TENGURUMAの勢力に押され、周辺部にはのみ残存した。すなわち、東日本ではデン～が最も古く、以下、KATAUMA、TENGURUMAの順に変化した。KATAGURUMAが東における最も新しい勢力とみなされることについてはすでに述べた。なお福島などに分布するKUBIKONMA・KUBI(K)KOMAが西のKUBIUMAと歴史的につながるものならば、東日本でもデン～のさらに以前にクビ類が分布していたことも考えられる。

草で示したタン・チャン・チョン……の類は、テン・デン類と音声的に近い関係にあり、地理的にも隣合う地域に分布しているので、両者には互いに類似する色を与えた。たとえば茨城のCYANGURUMAなどは、その周囲にあるTENGURUMAから変化したものであろう。しかし、草の類は凡例にみられるようにいろいろなものが含まれているから、この類に含まれる一つ一つの語形の最近性については問題もあろう。草を与えた語の一つ一つは、その大部分が限られた狭い範囲に分布するが、その中でCYOOSAは、宮城・石川・愛知・徳島・愛媛の各地に計7地点みられ、その分布範囲が広いので注目される。『全国方言辞典』によれば、香川で山車のことを「ちょーさ」というとあり、『総合日本民俗語彙』によれば、『出雲方言集』に「チョーサヤ」の語がみえ、これは「歳徳神の宮を昇き廻るときにいう掛け声」であるというから、祭りを媒介にして肩車の意味にもなったのであろうか。ただし宮城のものはその内容が[tjo:sae]であり、『全国方言辞典』に仙台などで水仕事を「水チョーサイ」といい、「取扱い」の意味で「ちょーさい」を用いる



とあるから、これは西日本のものと別の語であるかも知れない。

ビビ・ベベ類(紺)は、中国西部から九州にかけて分布する。これらはこの地域で独自に発生して拡がったものであろう。この類の中では BI(N)BI(N)KO が最も大きな勢力を占めているが、先に説明したように、これは多くの変種をまとめたものである。BI(N)BI(N)KO としてまとめた語形の中で、鹿児島と宮崎のものは大部分がビピンコであり、島根・山口のものはピンブク・ピンビク・ピンビキ・ピンビコなど、語頭がピンであるものが多かった。宮崎南部には BINBINSYANKO が集中的に分布しているが、柳田国男の「肩車考」によれば、この地方で肩車に乗ることをジャンコジャンコイクといい、このジャンコとかチャンコとかいうのは飾り馬につけた鈴の響きを写したものであるという。宮崎南部・鹿児島南部・熊本東部にみられる BIBINCYO(KO) や大分西部の BEBENCYO(KO) も、これに近いものであろうか。なお、柳田はビビ・ベベ類の語にみられるピンとは「鬢」の意であろうとしているが、これには別の考え方もあろう。101 図によれば南九州で頭をビンタとよぶが、このことも参考になろうか。

ウマ類(赤)は北海道から琉球の八重山まで、全国的に分布するが、その分布状態はまばらである。ただし、KUBIUMA・KATAUMA など、後部分にウマを含むものをもウマ類とあわせて考えるべきであらう。ウマ類としてまとめた語形の中では UMA(KO)NORI が最も多く、東北では KUBI(KO)NORI の中に見られるほか、北海道から奄美までの広い範囲に点々と分布している。奄美にはウマ類がまとまった分布をみせている。分布からみて、ウマ類は KUBIUMA や KATAUMA とともにかなり古いものであるとも考えられるが、肩車の姿からウマを連想することは各地で独自に行なわれうるかも知れないし、大人が四つんばいになって子を背中に乗せる場合などの名称の分布とも関係がある。

九州西北部には、ビビ・ベベ類のほかに、カタ類とテン類とが比較的多く分布している。これらのうち、福岡の KATAKUMA、佐賀および対島の TENGURUMA、長崎・佐賀の KATAUMA、さらに宮崎北部(延岡藩領)の TENGURUMA は、それぞれが中央で用いられていた時期に、中央から直接とり入れられて拡がったものであろう。長崎の五島にもビビ・ベベ類がみられ

るが、これらが九州東北部などの同類とつながるものならば、九州西北部にもかつてはビビ・ベベ類が分布していたことになる。現在の九州西北部における KATAKUMA・TENGURUMA・KATAUMA の分布は、中央におけるこれらの語の歴史を反映しているのであらうか。また、熊本および佐賀には KATA(KKO) および KACYA が集中的に分布するが、これらの内容は2地点がカタ(7360.47)またはカタッコ(6554.08)であることを除き、他はすべて後部分がカタンノスル・カチャノスルなどのように動詞形であった。このような地域では、肩車をよぶ特別の名詞がないことを意味するのかも知れない。また、これらは近くにみられる KATANOSE などの発生と密接な関係をもつものとも考えられ、すでに述べたように、東北の KUBI(KO) の内容が同様であることとあいまって注目される。このように「肩車」をよぶ名詞が存在しない地域が国の両端に分布することは、あるいはこれが最も古い姿であることを意味しているのかも知れない。

次に 150 図について説明しよう。この図にのせた各語形は、その大部分がほとんど分布の認められない孤立的なものであるので、この図について解釈をこころみることは不可能に近い。ただし、それぞれの語形の後部分については互いに共通の形をもつものもあり、また、149 図にのせた各語形と関連する部分を含むものもあった。「肩車」のような方言量の多い項目については、それぞれの地域で、より地点密度の高い調査を行なうことが有効であらう。

150 図における見出しの立て方は、149 図の場合といくつかの点で異なる。その第一は、各語形をいくつかの類に色分けすることをせず、すべての見出し語形に同一の色(紺)を与えたことである。また、見出し語形の配列は原則としてアルファベット順とし、特に琉球に分布するものについては、それらをまとめて凡例の後の方に並べた。もっとも、見出し語形の中には、語形の類似、発想の共通性、分布などの点から同じ類として扱った方が良いと判断されるものもあり、それらについては、互いに類似する形の符号を与え、また、それらの中から代表見出しを任意の一つ定めて、その見出しの頭文字をアルファベット順に並べる際の基準とし、同じ類として扱った語形のうち、代表見出し以外のものは、代表見出しのすぐ下に、それから一字分右にずらして配列した。たとえば、NANMANDABUCU・KANNAN-

DABUCU・NAMAIDA ……などは同じ類と認め、  
NANMANDABUCUを代表見出しとして、アルファ  
ベットの N の位置にまとめてある。また、語形の後部  
分に共通の形を含むものについては、149 図と 150 図を  
通して、共通の形の符号を与えるようにつとめた。

以下、各語形のうち、同じ類としてまとめたものや、  
いくらか分布が認められるものなどについて、その共通  
性および分布などを凡例の順序に説明しよう。

ABU(KO)の類は、ABU および TABU を前部分  
にもつものをまとめたもので、岐阜北部に集中的に分布  
する。64 図(第 2 集)によれば、岐阜などで「おんぶする  
(幼児を負う)」ことを OBU というから、これと ABU  
とは密接な関係をもつものであろう。最初は肩車に乗せ  
ることをも OBU とよんでいたが、両者を区別しようとし  
た結果、片方が ABU に変化したものであろうか。  
OBU と ABU とはいずれも動詞的な語形であるとも  
考えられるから、「肩車」の意味で用いられるときには  
ABI に変化するのが自然のような感じもするが、一方  
動詞 ONBU が ONBUSURU と名詞的に用いられ  
る例もあるから、ABU が動詞的であるとは必ずしもい  
えない。

なお、ABU(KO)の内容は、アブ(5569.36・5578.27)・  
オアブ(5559.51)・アブニノセル(5569.99)・アブコ  
(5597.26)・アブノコ(5579.10)である。また、SARUO-  
BI(6505.58)の OBI も OBU と関係があろう。

AOZYANZYAN の類には、かなり多くの見出し語  
形をまとめてあるが、これらはいずれも擬声語ないし擬  
態語を含むとみなされるもので、AOZYANZYAN を  
代表見出しとしてアルファベット順に並べた。ZYAN-  
ZYAN・DONDON・CYONCYON・KURUKU-  
RU など、くりかえし語形が多いことも、擬声語・擬  
態語としての特色を示すものであろう。これらは九州西  
部に集中的に分布していることが注目される。これらの  
語形が生れた理由は良くわからないが、149 図のデン〜  
と同じく、これらの中には、祭りの囃子や猿まわしの太  
鼓の音など、あるいは祭りなど儀式やその際に行なわれ  
た曲芸の動作などと関係があるものが含まれているかも  
知れない。

AOZYANZYAN の類としてまとめた各見出し語形  
のうち、ZYONZYONGATTAN が福岡南部に比較  
的まとまった分布をみせている。これらはジョンジョン  
ガッテンのほか、ジョンジョンガッコン、ジョンジョン

ガッテン、ジョンジョンガッコオなどをまとめたもので  
ある。これらの ZYONZYON の部分は、すでに説明  
した、149 図の BIBINSYANKO や BEBENCYO-  
(KO)の SYANKO や CYO(KO)などと、密接な関  
係があるかも知れない。150 図で東北北部にみられる  
SYONKO・ZYONKO などは擬声語の類には含めな  
かったが、あるいは、それらとも関係があるかも知れな  
い。

また、ZYONZYONGATTAN と併用で、あるい  
はそれに隣接する地域で、HYUUDONDON がま  
とまった分布をみせている。

熊本北部や福岡の計 3 地点にみられる PIIHYORO  
は、あるいは祭りの笛の音に由来するものかも知れない  
が、一方、PIIHYORO を鷹の啼き声と解すれば長崎の  
TONBII・TONBIIROORO との関係も考えられ  
る。TONPOPO(7375.30)の TON の部分もこれらと関  
係があろうか。兵庫北部(6428.13)の TOBIKUMA や、  
富山北東部(5620.80)の TONBEROBERO も、九州に  
分布する TONBII などと語形が類似するが、両者は互  
いに直接の関係はなく、それぞれ独自に発生した可能性  
もある。むしろ、兵庫の TOBIKUMA は近くに分布  
する TAKAKUMA(あとで述べる)などと、また、富  
山の TONBEROBERO は、149 図にのせた岐阜北  
部(5558.67)の TANBONBO などと関係があるの  
ではなかろうか。

AOZYANZYAN・ZYANKONKON・ZUSU-  
KANKAN・ZIKKANKAN などは熊本南部から鹿  
児島北部にかけてまとまって分布しており、語形が類似  
する点からも、互いに密接な関係をもつものと思われる。

CIRIBONBO の類には、後部分が BONBO のも  
のなど、「おんぶ(幼児を負うこと)」を意味する語と関係  
があると考えられるものをまとめた。64 図によれば、  
富山・石川で「おんぶする」ことを BONBOSURU、新  
潟などでは BUU・BARU といっており、CIRIBON-  
BO の類としてまとめた各語形と、その後部分につい  
ての分布がほぼ一致する。ただし、DEKUBONBO は  
新潟中部にもあるが、64 図にはこの地域に BONBO は  
なく(しかし、少し北寄りに BANBA がある)、KA-  
NKONBARI が、64 図に BARU が認められない福  
島にあるなど、両者の分布には多少のずれが認められ  
る。また、すでにのべた ABU(KO)の類、SARUKO  
の類としてまとめた SARU(KO)BONBO・SARU-

OBI・SARUKOBARE・SARUKOBAPPA など、他の類に含めた見出し語形の中にも「おんぶする」を意味する語形を含むと考えられるものがあり、それらには一定の形の符号(平行四辺形や小刀じるし)を与えた。なお、149図にのせた見出し語形の中にも後部分に BON-BO などを含むものがあるので、あわせて見てほしい。

DAEKWAN は新潟に2地点あるが、その内容は 5604.65, 5614.24 とともに、ダエクワンであり、5614.29 の注に、これは「代官」として被調査者が説明したとあった。

DOODOO の類には馬に対するかけ声と関係があるかと思われるもの、および、それに類似する語形のことをまとめた。

HITOGURUMA の類は、後部分が -GURUMA・-GURAMA のものをまとめてあり、149図と合わせてみると、これらはいずれも KATAGURUMA・TEN-GURUMA・DENGURUMA・DENGURUMA-I など、~GURUMA・~GURUMAI の近くに分布している。北海道の MATAGURUMA の場合は別として、他はいずれも 149図におけるクルマ類の領域の中心部ではなく、その周辺部、すなわち、クルマ類と他の類との接触する地域に分布することが注目される。DAI-GURUMA (5555.09)はその近くに分布する DENGURUMAI (または DENGURUMA) の変種と考えられ、GINGURAMA (6388.49)は TENGURUMA と BI(N)BIKUMA (または BINBI(NO)KURUMA) ないし BI(N)BI(N)KO とに挟まれた地域にあるから、両者を母体として生まれたと考えられる。北海道の MATAGURUMA (1862.48)は KATAGURUMA から個別に変化したのであろうか。KUBIMATA・TE-(N)GURUMATA・MATAGURANORI・SARUMATA など、MATA を含む語形が 149図・150図を通していくつかみられたが、これは「股」であって「肩車」に乗る側の姿勢からくるものであろう。TENGUBATA・DENDENMAKA (以上149図)・SARUMAKA・YOTAMAKA (以上150図)などのBATAやMAKA等も「股」と関係があろうか。TENGUBATA (7533.12)は TE(N)GURUMATA の近くに、SARUMAKA (6504.44)は SARUMATA と接して、また、YOTAMAKA (5574.84)は SARUMATA に挟まれた地域にそれぞれ分布している。なお143図によれば 7504.64 では TENGURUMATA が、7523.74 では TE-

NGURIBATA が、いずれも「尻」の意味で用いられており、この地域で同音衝突、類音牽引の現象がみられる。

KANERU (7309.37)・KARAU (7364.34)・KATAGURU (熊本に3地点)・NOSERU (0897.91)は、いずれも「のせる」「かつぐ」「背負う」などの意味の動詞と考えられる。ただし、7390.70 の KATAGURU の内容はカタグルスルであり、名詞化しているとみられる。これらは 64図~68図とも関連するので合わせて見てほしい。また、149図にのせた KATAGU (7400.11)も、動詞であると考えられここに合わせてのせるべきものかも知れない。

MANMANZAI の類には、見出し語形の内部に MANZAI またはそれに類する形を含むもの、さらに、SENDAIMANDAI の SENDAI の部分に類似する形をもつものをまとめた。MANZAI の意味は不明であるが、あるいは「万歳」であろうか。もしそうであるとすれば、これらは猿まわしを意味する語形とも関係があるかも知れない。KARAKOMANZAI (3760.58)の KARAKO は「唐子」であろう。これに類するものとして、地域はかけ離れているが、琉球(1242.72)に TOONUMANZYAIがある。KARIMANZYA (3740.29)は KARAKOMANZAI の比較的近くに分布している。また、MANZYUKAKKA (3727.81)は 149図にのせた DENDENKAKKA と分布が近い。SYANDANCUGI (7302.71)および HENDAROKU (7371.54, 7371.93)は SENDAIMANDAI (7380.26)と語形が類似し、HENDAROKU の場合にはさらに分布も近いので、これらを一応同じ類にまとめた。なお、MANMANZAI の類としてまとめた各語形は、東北北部・能登・九州の各地に分布し、さらに琉球の TOONUMANZYAI を含めて、これらがいずれも周辺地域であることが注目される。

NANMANDABUCU の類は、唱えごと・仏像・高僧など仏教と関係があると考えられる語形をまとめた。これらのうち、NANMANDABUCU・KANNANDABUCU・NAMAIDA・CUNMAIDA は真宗が盛んであるといわれる石川北部に集中的に分布するが、NAMAIDA はこのほか長崎にもみられる。DAIBUCU は島根北東部に集中しているほか兵庫北部にもみられるが、これはディアブツ・ダエブチ・ダエボチをまとめたものである。ODAIBUCCYA は DAIBUCU よ

りさらに東寄りの福井北部(5564.79)にある。KOOBO-ODAIISI は長野と山梨の県境付近に2地点みられるが、このうち5692.53の内容はコオボオサマであった。OKOYASUSAN(5694.79)はZINZYOKOの類としてまとめたKOYASUMIZINZO(3689.75, 4618.87)とともに、幼児の安泰を守る意の「子安」と関係があり、KOYASUMIZINZOは「子安地藏」の意であると考えられる。また、TANAGANOZUZUSAMA(3777.32)も「(田中の)地藏様」であろう。若手では地藏のことをこらよぶ所があるという。

NOTTANOTTAの類は、「肩車」をするときのうながしや命令のことばと関係があるかと思われるものをまとめた。TOKOSEI(7373.23)についてはよくわからないが、SIKKATOSEE(7363.59)に隣接しているので、一応ここにまとめてある。

OBUBINKO(8332.84)は149図にのせたBI(N)BI-(N)KOの中にある。OBUは「おんぶする」の意ではないかとも思われるが、64図によればこの地域では「おんぶする」はKARUである。

SARUKOの類はかなり多くの見出し語形があるが、これらはいずれも語頭にSARU、あるいはそれに音声的に近い形を含むものである。このような語形が「肩車」の意味で用いられるのは、あるいは猿まわしが猿を肩に乗せて歩く姿と関係があるかも知れない。SARUKOの類は青森から九州までの広い範囲に分布するが、特に福井・石川・新潟西部と東北の海岸部、さらに宮城の気仙沼付近にかけて帯状に分布することが注目され、この分布は、猿まわしそのものの伝播経路と関係があるかとも思われる。なお、SARUMAWASIの語形は青森・石川・五島の3地点にみられ、国の両端を含んで分布することが注目される。この類の中ではSARU(KO)BONBOの勢力が最も大きく、富山・石川にまとまって分布している。BONBOについては64図を合わせて見てほしい。SARUKIKKIは新潟西部に4地点みられるが、後半は猿の啼き声と関係があろうか。SARUKAKE(5585.09・6523.06)・SARUKAKKAI(7377.29)・SARUKENKE(5594.37)・SAKOKKEE(7268.87)・SAARIKYUUKYUU(5538.88)などの中にも同様の発想に基づくものがあるかも知れない。なお、MASIKO(2792.07)はSARUKOの類に含めなかったが、これも猿の意味であろう。SARUYAMANZYU(737.72)のMANZYUは、KINMAZYA(7382.93)など

MANMANZAIの類との関連も考えられる。

SIOSIO・SYOOSYO・SIOEの三つは、分布は互いかけ離れているが、語形の類似性から一つの類としてまとめた。これらが生まれる由来は明らかではないが、琉球(1242.22)にMAASUKONSORIの語形があって、これは「塩買いなさい」の意であるとの注があったので、SIO・SYOOなども「塩」の意であるかも知れない。「肩車」が塩売りや塩汲みの姿を連想させるのであろうか。

SISIUMAの類は語中にSISIの形を含むものをまとめた。これは「獅子」の意であって、獅子舞などの行事と関係があるのではないかと思われる。その意味では「猿まわし」や「万歳」と関係があると考えられる語形や、擬声語・擬態語の類の語形などと共通の基盤に立つ発想であるかも知れない。

SUSUKATAとSUSUGOとは三重にまとまって分布している。この地域はシとスの区別があるはずであるから、これらのSUSUは「獅子」とは無関係であろう。なお、SUSUGOのうち7504.27の内容は[su<sup>4</sup>zuko]であった。

TAKAUMAの類は語頭がTAKAまたはそれに類似する形である語形をまとめたものである。TAKAは「高」と考えられ、この類の語の分布は、大人が子をかかえて高くさしあげる、いわゆる「たかいたかい」の名称の分布とも関係があろう。この類の中ではTAKAUMAの勢力が最も大きく、新潟・千葉を結ぶ線以西から九州北西部にかけての各地に分布するほか、北海道にも1地点みられるが、この分布は149図にのせた語形のうち、後部分がUMA・NMAであるもの、および、赤を与えたウマ類の分布と密接な関係がある。また、TAKAKUMA・TAKAGURUMA・TAKAKKUBI・TAKATAKABONBO・DANDAKABONBOの各語形についても後部分が149図と関連するので、両図を合わせて見てほしい。なお、TAKAZINZYOO(3737.32)の後部分はZINZYOKOの類と密接な関係があると認められるので、両者に共通の形の符号を与えてある。

YOISYO(5508.19, 8300.80)・YOIYAKATA(553.9.16)・YOEOECINCIN(5605.70)は、語形に共通の要素があり、分布も比較的まとまっているので、これらを一つの類として扱った。YOISYOのうち、8300.80のものは他のものから離れて分布しているが、この内容

はヨイヤであった。これらの語形は肩車に乗せるときのかけ声からくるものであるろうか。

ZINZYOKOの類はかなり大きな勢力を示しており、東北の海岸沿いの地域にまとまって分布している。これらの語形の由来は不明であるが、先に述べたように、KOYASUMIZINZO(3689.75, 4618.87)の場合はZINZOを「地蔵」と意識しているのであろう。あるいは、149図にのせた宮崎のBIBINSYANKOなどと同じく、擬声語的なものであるかも知れない。なお、青森西北部に分布するNINNYOKO・NINGYOGAMEなどはZINZYOKOの変種とみられるが、一方「人形」に由来するものでもあろう。CIRIBONBOの類としてまとめたDEKUBONBOのDEKUは、「木偶」であるとも考えられ、そうであるとすれば、これも「人形」に関係のある語形といえる。

次に琉球に分布する語形のうち、主なものについて説明しよう。これらは凡例の後の部分に一括してアルファベット順に並べてある。

AAKANGWAACYUU(1251.98)のAAKANGWAAは『沖繩語辞典』によれば「赤ん坊」の意味である。GWAAは、本土のコなどに対応する指小辞である。CYUNDARAA(1261.32)・SYONDARAA(1260.89)は調査者の注によれば「京太郎」の意で、人形使いの一種らしい。『沖繩語辞典』によれば年の初めに家々の門に立ち、祝言を唱え、人形を舞わせなどした者であるという。「猿まわし」などの場合と同様に、人形をかついだ姿から肩車の意味にもなったのであろうか。

GANGAAYOSSA・GANKARAYOISA・KANDAMAYOSSAは八重山にまとまって分布する。-YOSSA・-YOISAは本土のYOISYOなどに通じるものかも知れない。

GARAGATAME(0238.55)は、ZIRYAKATAME(0246.48)やZIRYAA(0247.31)に隣接して奄美大島に分布する。これらのGATAME・KATAMEは宮古のKATAMII(2140.49)とともに「かつぎ」の意味であると考えられる。これについては65図～68図を参照されたい。

KINKIN(2074.69)は、宮崎のKENKEN(8325.56)や熊本のKYONKYON(7392.94)と語形が類似する。

MAAGAATAAとMAATAAGAATAAとは1169.84で併用されており、それぞれ、「馬+肩」と「股+肩」であるかも知れない。

MAASUDAKEE(1261.16)・MAASUKONSORI(1242.22)・MAASUUROORO(1167.01)・MAASYUDAKAA(1270.29)・MAASYUNKEERI(1213.76)・MAASYURAAKII(1270.26)のMAASU-・MAASU-・MAASYU-などは「塩」の意味であると考えられる。MAASUKONSORIが「塩買いなさい」の意味であること、また、このような語形が「肩車」の意味で用いられる理由については本上のSIOSIOの類の所ですでに述べた。~DAKEE・~DAKAAは「高」の意味であろうか。MAATAKADAAKAA(1260.78)も「馬」+「高々」の意味であるかも知れない。

MANKAKII(2150.17)、PITUNMA(2067.52)は、それぞれ「馬掛け」「人馬」である可能性がある。

TOOKURUU(1232.75)・TUNNUKURANMA(1231.72)・TOONUKAAGU(1271.20)・TOONUMANZYAI(1242.72)のTOO・TUNは「唐」の意味ではないかと思われる。TOONUKAAGUのKAAGUは、あるいは「香具(師)」に関係があるかも知れない。HARAMANKOI(0340.00)のHARA-も「から(唐)」の転であろうか。MANZYAIについてはすでに触れた。

以上にとりあげたもののほかに、種々の語形が琉球各地にみられるが、それぞれの分布はきわめて孤立的であり、また、その意味が未詳のものが多かった。

150図にのせた語形の分布について概観すると、それらはほぼ全国的に分布してはいるが、本土の太平洋岸や山陰などでは比較的分布がまばらであり、北奥から北陸、さらに九州北部から琉球にかけて带状に分布する傾向がみられる。149図についてみると、富山・石川・福井・岐阜の地域の空白部分が目立ち、これは、この地域に比較的孤立的な語形が集中していることを意味し、大勢力語の衝突による新語発生の現象を暗示するものとして注目される。

なお、この項目に関しては無回答の地点がかなりあり、「呼称なし」「名称なし」「不明」などと報告された地点が全国で40地点ほどあったが、特に、秋田北部や青森北西部ではその傾向が顕著であり、東北各地や九州の熊本・佐賀などに「肩車」にあたる特別の名詞形が認められない地点が多かったこととあわせ、注目すべき現象であると思われる。

全国各地で、小地域ごとの、関連事項を含めた綿密な調査が望ましいことを痛感する次第である。

日本言語地図③別冊

昭和43年3月©

国立国語研究所

東京都北区稻付西山町  
電話:(03)900-3111(代)

Introduction  
to  
The Linguistic Atlas of Japan

— Interpretation of the Maps —

Vol. 3

The National Language Research Institute

TOKYO

1968